

フォフォイのフォイ

Dacla

男がバイクの自損事故から目覚めると、そこは世界的な児童小説を基にした夢の世界だった。与えられた役割は、主人公の踏み台、闇の陣営に属するヘタレ一家のヘタレ息子。

よりよい環境を求めて男は動き出す。マルフォイ家のカネとコネ、それから大雑把な原作知識。主人公補正もチートもない彼に使える武器は、今は多くない。

※更新は5と0の付く日が基本ですが、しばらくは十日、二十日、三十日のみとなります。

目次

入学前

死日和	1
化けの皮一枚	20
化けの皮一枚	35
空の蟻	47
空の蟻	57
足元の不思議	70
足元の不思議	84
掘り起こしたもの	97
掘り起こしたもの	108
掘り起こしたもの	120

雪静か・ 1	131
雪静か・ 2	144
富を隠せよ・ 1	157
富を隠せよ・ 2	171
青に騒ぐ・ 1	184
青に騒ぐ・ 2	198
幕開け・ 1	212
幕開け・ 2	226
待っていました・ 1	240
待っていました・ 2	251
◇登場人物	266
番外篇…日本人の生活規範・ 1	273
番外篇…日本人の生活規範・ 2	291

一年生

ホグワーツ城はまだ遠く・ 1	305
ホグワーツ城はまだ遠く・ 2	320
ご馳走いっぱい大広間	335
へびの気持ち・ 1	349
へびの気持ち・ 2	365
初めての空抜けて・ 1	379
初めての空抜けて・ 2	394
初めての空抜けて・ 3	412

入学前

死日和

彼女は睨んでいた。青空に刺さる煉瓦の煙突を。

指揮棒のような「魔法使いの杖」を握る手にも力が籠もる。すでに二度、彼女は
その「魔法」に失敗している。もし三度目も失敗したら、すぐにその場を立ち退か
されてしまう。

煙突に向けて杖を振り、彼女は叫んだ。

「インセンディオ！」

煙突の先から勢いよく炎が吹き出した。

「おめでとうございます！ 素晴らしいです」

と、脇にいるアトラクションのスタッフが声を上げた。

三度目の正直で「魔法」を成功させた彼女が、得意げに振り返った。俺はその笑

顔をスマホの画面に納めた。

「撮ってくれた？」と彼女。

もちろん、とスマホを見せつつ、次の順番を待っていた小学生に場所を譲る。

大阪、ユニバーサル・スタジオ・ジャパン。映画『ハリー・ポッター』の世界を模したエリアは、この日も盛況だった。

連休を利用しての大阪旅行でUSJを訪れたのは、彼女たつての希望だった。大阪城と新世界くらいしか観光先を思いつかなかった俺も、異論は無かった。紳士のテーマパークこと飛田新地に行きたいとは、さすがに交際相手の女性には言えない。「見てるだけじゃつまらないでしょ。次のポイントは代わりにやってもいいよ」はい、と杖を差し出された。屋外型アトラクション「ワンド・マジック」専用の杖は、お値段四九〇〇円。高い。

「いいよ、俺は」

往来で棒を振って魔法ごっこをするのは、三十も間近の男には気恥ずかしい。

「だったら何か乗りたいの、ある？」と今度は園内マップが広げられた。

「フライング・ダイナソー乗りたい」

「ハリポタエリアで、何か乗りたいの、ある？」

「……何でもいいよ」

彼女は『ハリー・ポッター』シリーズの熱烈なファンだった。俺が映画第一作でリタイアしたと知るや、旅行前の予習と称して、原作小説と映画ブルーレイの全巻をまとめて押しつけてきた。

不遇な環境で育った少年ハリー・ポッターが、魔法使いのための学校、ホグワーツに入学してから経験する、ダークでシニカルでスリリングな青春物語。

世界的にも人気な物語だが、俺には今一つ主人公に感情移入できなかった。予習も、旅行出発日の前に早送りと流し読みで消化しただけだ。お陰で寝不足だ。

日中いっぱいUSJで過ごし、夜にはのぞみで東京に戻った。アパートに荷物を置いて、友人宅にバイクで駆けつける。

旅行帰りに慌ただしいことだが、仕方ない。友人からただならぬ様子の連絡を受けていた。なんでも、妻子が実家に帰っている間に相談に乗ってほしいということだった。

しかし直に話を聞いてみると、「妻が不倫しているのを知ってしまった。どうし

よう」という相談だった。

知るか。俺は独身だ。

気の利いたアドバイスが出来ない分も愚痴を聞き、友人宅を引き上げた頃には日付が変わっていた。

思ったよりも消耗したのか、バイクを転がしながら意識が途切れそうになった。一瞬眠りかけたと気付いた時には遅かった。

目の前に黄色い光。衝撃。

見えない巨人に体を吊り上げられ、振り回され、叩きつけられた。

痛みを感じる前に何もかも消えた。



目を開けると、柔らかな光が見えた。

レースのカーテン越しに差し込む日光が、白い天井を照らしている。肌に当たる布の感触が心地よい。

どうやら俺はバイク事故を起こして、病院に運び込まれたらしかった。最後に見たものから想像するに、交差点出口に設置されているライトか、その手前のクッ

シヨンドラムに衝突したのだろう。

誰も巻き込んでいませんように。

バイクはどうなった。

保険の書類はどこだ。

職場に連絡、は、状況を聞いてからにしよう。

———というか、今は何日の何時だ。

身を起こしてナースコールのボタンを探した。

そこは病室というより、老舗ホテルの客室に近い雰囲気の一部屋だった。ベッド横のサイドテーブルには水差しとグラス。磨き上げられた木の床の上の分厚い絨毯。木目まで黒光りした壁際のワードローブや書き物机。アンティークな柄の壁紙に掛かった、立派な額縁の洋画。

肝心のナースコールは見つからず、裸足のままベッドを下りて扉に向かった。痛みは無かった。事故でアスファルトに叩きつけられたはずなのに、怪我一つ無かったとは奇跡だ。ただし、感覚と動作のずれに違和感がある。

その時、扉が向こうから開いた。

ドアノブよりも背の低い、二足歩行の生き物がそこにいた。

大きな目と視線が合った。見開かれた目は顔の半分を占めるほど。無毛の頭から飛び出した耳が尖っているのもあいまって、チワワを連想した。人間だとしたら大変申し訳ないが、人間ではない醜い生き物に見えた。ヨードかゴラムか。目が大きいからゴラムだな。

俺が一步踏み出すと、相手は荷物を放り出して廊下に飛び退った。

「奥様、坊ちゃまがお目覚めになりましたよ。奥様！」

甲高い声を上げて、その生き物は一瞬で姿を消してしまった。

開いたままの扉から、俺も外に顔を出してみた。

長い廊下。やはり大きな建物のようなだった。そこかしこに俺のいる部屋と同じ木の扉が付いているから、ホテルじみた印象は変わらない。しかし非常口を示す緑色の表示や、非常ベルの赤いランプといった、公共施設にあるべきものは見当たらなかった。

俺は足元に落ちている服を拾った。せっかくアイロンが掛かっていたのに、ゴラムもどきが放り投げたせいで乱れてしまった。畳み直して、いつも服をしまっ

るワードローブの中の棚に収める。

「ん？」

他に収納家具は無いから、ワードローブに片付けるのはおかしくない。それでもなぜ俺は、そこが「服をしまう場所」だと確信できたのだろう。

自分を取り巻く環境に不審を覚えて頭を振ると、横に誰かがいた。

「うおっ」

気配もなく隣に立たれたことに驚くと、相手も同時に身じろいだ。よく見ればそれはワードローブの扉の裏に取り付けられた鏡だった。つまり隣にいたと思ったのは、鏡に映った俺自身だ。そのはずだが、鏡の中にいたのは見知らぬ白人の少年だった。

小学校中学年くらいだろう。淡い色の金髪に、薄い灰色の瞳。不細工ではないが、癩の強そうな、憎たらしい顔をしている。アラブ人の着る服のようなゆったりした白い寝間着を着ていて、肌の生白いもやしっ子ぶりが際立つ。

髭の感触がない自分の顎を撫でると、鏡の中の少年も尖りぎみの顎を触った。

俺の両親は日本人だ。祖父母も曾祖父母も、それ以前の代も、ずっと百姓をやっ

てきたような日本人だ。当然俺も黒い髪に黒い目のモンゴロイドなわけで、コーカソイドでございと主張するような外見ではない。そもそも子供に若返るわけがない。

しかし俺は、鏡に映る姿が今の自分だと理解することで、逆に落ち着いた。要するにこれは他人になった夢だ。現実の俺はきっと、バイク事故からまだ目を覚まさずに昏睡している。

夢の中で夢を見ていると自覚する状態を、明晰夢という。これまで何度か体験したことはある。夢の状況をコントロールできたことはないが、状況を楽しむことはできる。

——よし、夢だ。

まもなくして、一人の女性がガウンの裾を翻して部屋に飛び込んできた。やや陰があつて神経質そうだが、まず美人と言える金髪の白人女性だった。

女性は、俺を見るなり上から覆い被さるように抱きついてきた。

「ああ、目が覚めたのですね。良かった。あなたは丸一日ずっと眠っていたのですよ」

「何があったんですか」

俺は「母親」に尋ねた。その女性が少年の母親であるという認識（夢の中の設定というべきか）は、なんとなく浮かんでくる。たとえそれが無くても、女性が少年の額や頬に触れる時の仕草で分かる。

「覚えていないのね。あなたは昨日、杖を握った途端に卒倒したの。どこか痛いところは？ 気分はどう？ お母様に教えて」

「大丈夫です。苦しいので放して下さい」

少年の母は、息子を解放する代わりにベッドへ押しやった。

「顔色は良いようですが、先生が診て下さるまでまだ寝ていなさい。アビー！」

「はい、奥様」

女性の呼びかけに応じて、先ほどのゴラムもどきが現れた。

「すぐにカンフォラ先生をお呼びして。それからスープか何か、消化の良い物を持ってきてちょうだい。ああ、まずは紅茶かしらね」

「かしこまりました」

恭しく一礼した後、アビーは戸口近くの床を見回した。

「服ならしまったよ」

俺が告げるなり、アビーはワードローブに飛びついた。そして中の棚を見て叫んだ。

「何ということをして！ 坊ちゃま、なんということをなさるのです。アビーの仕事を奪われるなんて！」

その剣幕に思わず「ごめん」と謝ってしまう。相手の金切り声はますます甲高く耳障りになった。

「ハウスエルフに謝られた！ 奥様、坊ちゃまはご病気でいらっしやいます！」
「アビー。命じられたことを早くなさい。罰を受けたいの？」

女主人の冷ややかな声に、アビーは落ち着きを取り戻した。改めて一礼すると姿を消す。

女性は溜息を吐き、俺に目を向けた。

「主人たるもの、ハウスエルフの仕事を奪ってはいけませんよ。自分で服を片付けてしまったのは、彼らの存在意義を否定したに等しい行為です。あなたも理解していると思ったけれど」

「気を付けます」

女性や俺の意識が乗っている少年は主人で、アビーは使用人。階級や身分差という、現代日本では意識する機会のないものが、ここでは絶対だった。昔のヨーロッパの貴族みたいだな、と思った時に気付いた。

俺たちは最初から英語で会話していた。



夕食には、俺の意識が乗った少年とその両親の、家族三人が揃った。

この建物は富裕層向けの病院でもなければ、老舗のホテルでもない。少年の生家だった。日本のテレビに登場する「豪邸」などお呼びでないほどの屋敷であることは、食事前に探険して確認した。

例えるなら『ゴスフォード・パーク』や『日の名残り』の世界、『キングスマン』の本部。日が落ちてからの雰囲気は『ロッキー・ホラー・ショー』じみたところもある。要するに貴族の住むような邸宅だった。

その主人である男性も貴族的な雰囲気があった。

綺麗に撫でつけたプラチナブロンドの髪と、灰色の薄情そうな目。鏡の中に見つ

けた少年とよく似た顔立ちで、親子であることは明らかだった。

その冷たい目がこちらを――彼の息子をじっと見据えている。食事がしづらい。「それでカンフォラは何と？」

尋ねた父親に、母親が医者の見立てを伝える。

「体は健康そのもの。倒れたのは、初めて持った杖から魔力の反動を受けたことに對する過敏反応で、間違いないそうですわ」

そう、魔力だ。

日中に往診に来た中年男性は、指示棒のような物（この夢では「杖」と呼ばれるらしい）で少年の体を撫でた。体調を調べるにあたり、「杖で魔力の流れを探る」ためだそうだ。その後の問診で、てんかんや脳出血の可能性も疑っていたので、男性が単なるスピリチュアル系ペテン師だったとは言い切れない。付き添っていた少年の母親が平然としていたので、この夢ではそれが常識なのだろう。

だいたいこの家庭からして奇妙だった。

人間ではない生き物を使用人として使っているのもそうだし、屋敷には電化製品やコンセントが見当たらなかった。服装にしても、どこがどう変とは指摘できない

が、女性も男性も（そして寝間着から着替えさせられた俺も）時代錯誤な印象を受けた。それがこの屋敷では当たり前だということは、少年の「記憶」から読み取れた。

それなら時代劇の夢を見ているのかと、居間に置いてあった新聞（当然ながら英文だった）を見たら、日付は一九九〇年の六月。九〇年といたら、東西ドイツが統一した年とか、ソ連でゴルバチョフが大統領になった年とか、現代史的にはその辺りだったはず。日本ではバブル経済が崩壊する寸前だ。

なのに手元の新聞に掲載された男性の写真は、人物部分が身動きしているように見えた。その動きは滑らかで、シート状の液晶で動画をループ再生しているとしたかと思えなかった。

年代設定と技術水準がちぐはぐすぎる。

だが夢には夢の理屈がある。今のところ、無理にその理屈に逆らう気はない。夕食に出された鴨のコンフィが旨いので、逆らう理由もない。

「その過敏反応というのは一生続くのか」

「一過性の反応だそうで、杖に慣れてしまえば問題ないというお話でした。カン

フォラ先生も、次に杖を持たせる時だけは立ち会いたいそうです。そこで何もなければ、普通に魔法を使わせても大丈夫だと」

「魔法が使えないわけではないのだな」

父親はワインを口に運んで、深く息を吐いた。

「ならば良い。来年には学校に上がるというのに、マルフォイ家とブラック家の血を引く男児がスクイブだった、では洒落にならん」

聞き覚えのある単語に、俺は噎せそうになった。

日中から何度も呼ばれていた少年の「ドゥレイコウ」という響きの名前を、「ドレイク」だとばかり思い込んでいた。しかしそれがマルフォイという家名と結びつくなら話は別だ。カタカナ表記では「ドラコ」が正解だったのだ。

ドラコ・マルフォイ。すなわち『ハリー・ポッター』シリーズの登場人物。主人公ハリーの同期生で、何かとハリーに突っかかる小物の悪役。それが、この夢の中で俺に与えられた役割だった。映画を吹き替えで見たせいで、正しい発音を知らなかったのが勘違いの元だったな。

俺の意識が乗っている少年がドラコだとしたら、男性はその父親のルシウス・マ

ルフォイ、女性は母親のナルシッサ・マルフォイということになる。

どうでもいいことだが、この屋敷に電化製品が存在しない理由も判明した。『ハリー・ポッター』における魔法使いの暮らしが、そういうものだからだ。時代錯誤だと感じた服装は、いわゆる魔法使いの伝統的な服装、ローブだった。

もちろん屋敷の外に出れば、そこには普通に九〇年代のイギリスの社会が広がっているだろう。多くの人々に隠されているだけで、現代社会にも魔法や怪物は存在する。それが『ハリー・ポッター』の基本設定の一つだ。

「大丈夫か、ドラコ」

先ほどより和らいでいる男性の目を見返し、俺は慎重に質問を選んだ。

「父上、学校というのは、もしかしてホグワーツですか」

「そうだ。だがホグワーツが嫌なら他校でも構わん。ダームストラングはどうだ。少し遠いが、良い学校だぞ」

「私は反対です」

いきなり女性が会話に割り込んできた。

「ダームストラング校は海外です。遠すぎます。言葉も違いますし、食事が合わな

かったり苛められたりしたらどうするのですか」

「心配性だな、ナルシッサ。あそこの校長は知り合いだ。ドラコに目をかけてくれるように頼めばいい」

「毎年クリスマスカードをくれるカルカロフさんね。けれどホグワーツにだってセブルスがいるわ。私たちも卒業生だから学校の勝手は知っているし、何かあればすぐに駆けつけることもできます。安心ですよ」

「ホグワーツの校長はダンブルドアだ」と、男性は忌々しそうにナイフを動かした。「あの老いばれが校長である限り、良い教育環境とは言えん」

夫の反論を、妻は笑い飛ばした。

「それならあなたが理事か監査役になって、ドラコのために環境を整えて下さいな。今でさえクイディッチチームの面倒を見ていらっしやるのだから、不可能ではないでしょう。それとも、OBとして後輩の面倒を見る時間はあっても、息子のために使う時間はお持ちでないのかしら」

「チームの後援は卒業生としての援助範囲だ。学校運営まで関わりたくない」

「ですが国内の魔法使いのほとんどは、ホグワーツ出身ですよ。将来のことを考え

たら、ドラコには国内の学校に行かせるべきです」

男性は不意に俺のほうを向いた。「ドラコ。おまえはどうしたい」

俺は口の中の物を飲みこむ間に考えた。

二人の会話に登場した固有名詞からしても、この夢が『ハリー・ポッター』の物語を下敷きに行っていることは間違いない。

物語の大部分は、主人公が在学するホグワーツの校内で展開する。身の安全や心の平穏を求めるなら、物語の舞台から遠ざかるのも手だろう。

ただし、それは俺の役回りがドラコ・マルフォイではない場合の話。

原作では、父親のルシウスが主人公の宿敵ヴォルデモートの部下だったため、物語後半ではドラコも悪の手先として散々にこき使われる。

部下の面倒見が良いタイプのボスだったら、まだ良かった。だがヴォルデモートは、恐怖と暴力で支配するタイプの暴君だ。下手を打てば殺される、不興を買えば殺されるといふ危機感で従っていた部下が大半だった。もっとも、従わずに抵抗しても殺されるのだが。

そんな中、マルフォイ家の三人が最後まで五体満足に生き残れたのは、他のキャ

ラクターと比較しても奇跡だった。かつて裏切った主との縁を切ることができずに、パワハラを受けて萎縮していく父親。自分と家族の命を握られ、父親の代わりにヴォルデモートに顎で使われる息子。家族のためにヴォルデモートを欺き、結果的に主人公の逆転勝利のチャンスを作り出した母親。三人とも、いつ死んでもおかしくないポジションにいた。

おっと。物語の結末に思いを馳せるのは気が早いな。

とにかく、ドラコというキャラクターが物語と無縁でいることはできない。父のルシウスがボスと距離を置いたところで、母ナルシッサに、ヴォルデモートに心酔している姉がいるからだ。二人の息子である以上、どこにいてもヴォルデモートの影響を受ける。

それなら与えられた椅子を蹴っても仕方ない。この役どころを選んだのは、無意識とはいえ俺自身だ。だからこう答えた。

「ぼくもホグワーツがいいです」

どうせ夢なら、舞台上の特等席から楽しんでやろう。

B
a
t
h
o
r
y
≧
A
F
i
n
e
D
a
y
to
D
i
e
≧

化けの皮一枚・1

ある所にドラコという男の子がいました。

ドラコは、名家の当主である父と、同じく名家出身の母の間に生まれました。

そのため父の薫陶を受けて選民意識と加虐嗜好に染まりつつあり、母の溺愛を受けて甘ったれた傲慢さと狡猾さを身に着けつつありました。とは言え、まだ深刻なものではなく、「意地悪で嫌な感じの子」という程度でした。

ドラコには魔法の素質がありました。

驚くことではありません。両親ともに先祖代々ずっと魔法使いでしたから、その息子も魔法を使えて当然だと思われていました。

十歳の誕生日に、ドラコは両親から杖を贈られました。杖は魔法使いの意思を具現化するための大切な媒体、相棒です。

杖を使った魔法を学ぶのは、学校に入ってから。そしてドラコが学校へ入学するのは二夏も先でしたが、両親は魔法に親しむ機会を早めに与えたのでした。マグル

の家庭でも、就学前の子供に文字の書きかたや数の数えかたを覚えさせるのと同じです。ちなみにマグルとは、魔法を使えない、その知識のない者のことです。

『お誕生日おめでとう、ドラコ。今までお母様が使ってきた杖を譲りましょう。大切に使いなさい』

母の横で、父も穏やかな顔で息子を眺めています。

手渡された箱の中には、一本の杖がつつやと輝いていました。杖を振るって魔法を使う両親を見てきたドラコには、それが未来へ続く扉の鍵に見えました。

『これがぼくの物になるのですか？』

息子の確認を不満と取ったのか、父がやや不機嫌に言いました。

『学校に入学する時におまえに合った物を選んでやる。それまでその杖で練習しろ』

『父上、母上、ありがとうございます』

ドラコは父の機嫌をそれ以上損ねないように、急いで杖を箱から取り出しました。ところが杖を握りしめた途端、あつと叫んで気を失ってしまいました。

——そして翌日目を覚ました時には、中身が俺に成り代わっていましたとさ。

「ちゃんちゃん」

俺の眩きを、近くにいた母親が耳聴く拾った。

「何か言いましたか、ドラコ」

「いいえ、母上。何も」

ドラコ・マルフォイになった夢は、夢の中で一晚経ってもまだ続いていた。

喋ったり体を動かそうとする意識は俺のものだが、少年の肉体に蓄積された「経験」が自動的なフィルターとなって、ドラコらしい振る舞いには苦勞しない。とくに口から出るのが上流階級のイギリス英語なのはありがたい。俺自身のカタカナ発音のアメリカ英語だったらやばかった。ご都合主義万歳。

ちなみに俺自身のものと同等にはっきり掘り起こせる「知識」に比べると、「ドラコの記憶」はやけに淡かった。それこそ起きた途端に忘れてしまう夢のようだ。もっとも「記憶」に頼らなくても、取り繕うことは余裕だろう。原作知識と、四半世紀分を超えた人生経験と、「衝撃を受けて一日意識不明だったことによる記憶の混乱」という言い訳がある。

俺の前には、ドラコが母から譲り受けた魔法使いの杖が置かれている。手を伸ばして触ろうとしたら、母親に遠ざけられてしまった。

「いけませんよ。カンフォラ先生がいらっしゃるまで待ちなさい」

一人掛けのソファに座る父親が、ステッキを模した自分の杖の杖頭を撫でながら言う。

「そうだぞ、母上の言う通りにしろ。今度は倒れるだけでは済まないかも知れんぞ」
「ドラコを怖がらせるのは止して下さいな」

やがてカンフォラ氏が到着した。

前日にドラコ少年を診察したこの男性は、『ハリー・ポッター』原作で「癒者」と訳されるところのヒーラーである。マルフォイ家のホームヒーラーだそうで、つまりはこの家のかかりつけ医だ。

カンフォラは改めてドラコの体を診察して、少年の両親に（主に父親に向けて）説明した。前の晩にナルシッサが要約して夫に伝えたことと同じだ。

曰く、ドラコが倒れたのは、杖から受けた魔力の反動に、刺激に慣れない体が過敏反応してしまったため。一度も杖を握ったことのない子供が、初めて杖を握った時に稀に起こす反応である。魔力の豊富な子供や、魔法の感受性が強い子供に見られる反応で、杖との相性とは直接関係ない。新品の杖を軽く振っただけで魔力の反

応が溢れ出す現象と、原理は同じと考えられている。

そういう話だった。

「丸一日も眠り続けた症例は珍しいですが、後遺症は認められません。まずはドラコくんの肉体が魔力に慣れたか、一昨日と同じ杖で確認したいのですがよろしいですか」

両親はヒーラーの提案を了承した。

件の杖の元々の持ち主だった母親が、杖の調子確かめてからこちらに差し出してきた。

受け取っても異変は感じない。

三人の大人が固唾を飲んで見守る中、杖を軽く振ってみる。

やはり杖は、見た目通りのただの木の棒だった。映画のように火花が華やかに散ったり、二日前のドラコが受けたという衝撃をもう一度味わったり、そうした劇的なことは起きなかった。

ステッキに似た父親の杖、シンプルな棒のヒーラーの杖も触ってみたが、何も無い。

俺の左右で、両親が深く息を吐いた。

「良かった。ドラコも何ともないようですし、これで安心ね」

「確かに一過性の症状だったな。ドラコ、魔法を使ってみろ」

誰でも使える初歩の浮揚魔法とやらを、その場で教えられて試した。

何も起きなかった。

何度やっても、誰の杖で試しても同じだった。

USJで売られている「ワンド・マジック」が使えないほうの杖だな、という冗談は黙っておいた。とてもそんなことを口に出来る雰囲気ではない。

落胆する両親をカンフォラが慰めた。

「才能のある子でも最初から成功するとは限りません。ご子息がまた倒れなかったということ、とりあえずは良しとしましょう」

その言葉に頷いた二人だったが、彼が帰った後、血相を変えて俺に魔法を教え始めた。

「杖の構えかたはこう。それをこう動かす」

「呪文の唱えかたは合っています。恥ずかしがらずにはっきり発音しなさい」

二人の真剣さに飲まれて俺も本気で練習したが、それでも羽毛一つ浮かせられなかった。溜息で吹き飛ばしたほうが手っ取り早い。

虚しい努力を続ける俺の横で、父親と母親が言い合いを始めた。

「ひょっとして杖の相性が悪いのか」

「そんなはずありません。癖のない素直な杖ですよ。あなただって、ご自分の杖より私の杖のほうがドラコに使いやすいと仰ったでしょう」

「しかし私の息子がこんな初歩で躓くなどありえん。私が初めて杖を握った時には、難なく成功した魔法だぞ」

そうぼやくと、父親はこちらを見下ろした。

「おまえは本当に私の息子か」

その乾いた視線に身が竦んだ。投げかけられた言葉も辛うじて疑問形ではあったが、一切の温度がなかった。

ドラコ役を演じるのは簡単だと思っていたが、大間違いだった。父親は、息子の中にいる赤の他人に気付いている。単に確証がないからそう言わないだけだ。

愕然とする俺を抱き寄せ、母親が声を荒げた。

「聞き捨てなりませんわね。少し手間取ったくらいでその仰りようはあんまりです。この子は間違いないくあなたの子。誰が見たってそっくりな親子なのに、こんな時だけ他人扱いなんて卑怯です。ドラコだって可哀相に、こんな固まってしまつて。それとも私のほうに責任があると仰りたいの？ それなら結構です。ドラコは私人の子として、ブラック家を継ぐ男子として育てていきます」

妻の剣幕にルシウスはたじたじとなった。

「そういうつもりでは無かったんだ。悪かった、ナルシッサ。……ドラコも」

夫からの謝罪に、まだ鼻息は荒いもののナルシッサは矛を収めた。それから腕の中にいる息子の髪を撫でた。

「大丈夫ですよ。あなたはお母様とお父様の子。魔法だつてすぐに使えるようになりますからね」

どうだろうな。

俺は懐疑的だった。確かに原作のドラコは魔法を使えていたが、今ここにいるのは、中身が俺という別人だ。



「まあ。駄目だったとは意外ですね」

俺が魔法を使えなかったことを報告すると、グラブラ夫人は目を丸くした。

ドラコ少年は小学校に通っていない。

そもそも魔法使いの子供のための小学校が存在しない。ホグワーツ魔法魔術学校は中等教育にあたり、その手前の初等教育は家庭で行うのが一般的らしい。

経済的に余裕がある家は家庭教師を雇い、そうでなければ親が教える。裕福なマルフォイ家は複数の家庭教師を雇っていた。グラブラ夫人は、その中で最もドラコと付き合いが長い。ちなみに教わっているのは、いわゆる「国語」の範囲だ。他の科目は別の教師がついている。

魔法の基礎だけは両親が教える方針だったようだが、俺のせいで初めの一步から躓いてしまった。

「こつが掴めないだけで、スクイブではないでしょうが、ご両親もご心配でしょうね。ちょっと私の杖でも試してごらんなさい」

持たされた杖で魔法を試してみるが、やはり何も起きなかった。

夫人は「まあ入学まで一年もありますしね」と杖を取り上げて服にしまった。

「ミセス・グラブラ。世間的にはスクイブはどういう扱いを受けるのですか」

スクイブという言葉の意味は、原作知識として知っている。しかし登場するスクイブのキャラクターが少ないので、どういう目で見られるのかが、今一つ想像できない。そんな俺の質問に、夫人は困ったような微笑みを浮かべた。

「魔法界とは魔法使いの社会です。もちろん人魚や巨人など他の種族もいますが、基本的には魔法を使う者が中心となって作り上げてきた、魔法を前提としたコミュニティです。ところがスクイブは、魔法使いの両親の間に生まれた、先天的に魔法の素質がない者。喻えるなら、渡り鳥の群に生まれた、一羽だけ飛べない鳥です。呪具を駆使すれば魔法を使えないこともある程度はごまかせますが、生まれながらの落伍者ということは覆せません。ですから、魔法の存在を前提としていないマグル社会に移ったほうが、その人にとっては幸せかも知れませんね」

どうやら社会的弱者として見られているらしい。

「もし、ぼくがこのまま魔法を使えなかった場合、スクイブと判断されるのでしょうか」

「後天的に魔法を使えなくなる者もいるでしょうが、あなたがそうだと決まったわ

けではありません。さあ、授業を始めますよ」

その日の授業を終えた後、グラブラ夫人はドラコの母親と何かを相談していた。スクイブかも知れない生徒などごめんだ、という話か。それとも、スクイブだった時のために地元の小学校に転入させてみる、という話か。

二人の様子を廊下から窺っていると、書斎から父親が出てくるのが視界の端に入った。声を掛けられる前に走って部屋に逃げた。

彼の薄灰色の冷たい目で見下ろされると、居心地が悪くなる。こちらには、ドラコのふりをして、いることを彼に勘付かかっている引け目がある。できるだけ接触は避けていた。



ある夜、部屋で勉強していると母親がやってきた。

「ドラコ、少しいいかしら」

「どうぞ」

母親はベッドに腰掛け、隣を軽く叩いた。中一人分ほど空けて俺も座ると、小さく笑われた。

「ドラコは最近急に変わりましたね。大人びて、我が侘も言わなくなつて。杖を手にする前と後では別人だわ。一人前になろうとしているのだったら良いけれど、違うのでしょね。ハウスエルフへの態度さえ変わったもの。私の息子は、杖を持つて倒れた時に何を見たのかしら」

母親にも疑われていた。

誰だよ、余裕でごまかせるとか調子こいた奴は。

家に仕えるハウスエルフに普通に接したのがいけなかったか。

原作同様、この夢でもマルフォイ親子はハウスエルフのドビーをいたぶっていた。いつかドビーに刺されるか、それとも折檻の末にドビーが衰弱死するか鬱で自殺するのが早いか、という扱いだった。

しかし俺は自分の家のために働いてくれる人（正確には人間ではないが）を虐待したくなかった。なのでその点だけはドラコらしく振る舞うことを放棄し、「使用人にも気さくな坊ちゃん」となることにした。

それで疑念を招くことは想定内だ。俺は反論に掛かった。

「倒れた時のことは、正直まったく覚えておりません。ですが、その後で魔法を使

えないと分かってから色々と考えました。ぼくがスクイブだと確定して、母上たちに疎まれたらどうしようか。出来損ないは要らないと、家から追い出されたらどうするか。生きていくために働きたくとも、学歴のないスクイブを雇ってくれるところはあるのか」

母親は口元にそっと手を当てた。俺は言い訳を続ける。

「それを考えれば、ハウスエルフへの接しかたも変わります。もしかしたら彼らの下で働くことになるかも知れませんか。家を追い出されずに済んでも、魔法学校には行けません。魔法を諦めて地元のマグルと同じ学校に行くなら、これまでの勉強では不十分です。だからこの先どうなるかは分かりませんが、勉強だけはしておきたいのです。ぼくが変わったとしたら、そういうことでしようね」

半分は方便だ。勉強と称して部屋に引きこもっているのは、父親と顔を合わせる時間を減らすためだ。

「ドラコ……。一人でそんなことを悩んでいたの」

母親は息子に寄り添い、肩を抱いて引き寄せた。

「あなたはちゃんと魔法を使えます。覚えていないでしょうね。三歳になる前は、

杖無しで魔法を使っていたのよ。子供部屋の家具を宙に浮かせてきゃっきゃと笑っていました。すぐに自制を覚えさせたけれど、確かにあなたの身に魔力は宿っています。今はまだ魔法が成功しなくても、それは杖を与えた私たち親の責任。ドラコが気に病む必要はありません」

そう言うとき彼女は息子の額にキスを落とした。この様子なら俺への疑いは晴れたか、少なくとも保留になっただろう。

「ですが、父上がぼくをお疑いでしょう」

探りを入れてみる。母親は目を見開いた後、眉を顰めて息を吐いた。

「やはり気にしていたのね。本当に自分の息子か、とお父様が言ったことが。あれはお父様の本心ではありませんよ。むしろあなたに期待しているからこそです」

「そうでしょうか」

俺を見るルシウスの薄灰色の目は、いつも冷たい。氷もドライアイスも通り越して、いっそ液体窒素の温度だ。

「そうですよ。お父様も言い過ぎたと悔やんでおいでです。だからお父様を避けな
いであげて、一度じっくりお話ししなさい」

それは気が進まない。じっくり話したら最後、おまえは誰だと問い詰められる気がする。

母親は黙り込んだ息子をあやすように囁いてきた。

「たとえお父様が何を言おうと、ドラコはお母様が守ります。大丈夫、大丈夫ですよ。今度のホリデーで綺麗な景色を見て、のんびり過ごしましょう。きっと気分も晴れますよ」

毎夏、避暑を兼ねてマルフォイ家は旅行に出かける。今年は知人に招かれ、湖水地方で過ごすという話だった。

化けの皮一枚・2

ドラコ・マルフォイというキャラクターになった夢が始まって、体感時間で一ヶ月が過ぎた。

その間、一度も俺自身の肉体で目を覚ますことはなかった。こうなるともはや自覚した邯鄲の夢だ。

一月の間にあった変化といえば、ナルシッサを夢の中での母親として見ることに抵抗がなくなったこと。そして父親のルシウスから逃げ回るのが上手くなったくらいだ。

俺の正体に勘付いている彼をどうやったら誤魔化せるか、いい案が浮かばない。魔法が使えるようになったら、掌を返して「さすが我が息子」と言い出しそうだが、日々の練習の成果は出ていない。

もし原作のようにヴォルデモート派の復権があったら、と考えると更に気が重くなる。魔法の使えない俺はいびられた揚げ句、自殺に追い込まれるかも知れない。それならむしろ今の内に「おまえなんか息子じゃない」とマルフォイ家から追い出

されたほうが、平和な夢人生を送れそうだ。

そんな漠然とした不安を抱えつつ、夏を迎えた。

家庭教師の授業も休みに入り、マルフォイ家の三人は湖水地方に飛んだ。

俺も魔法での長距離移動を初めて体験した。

移動に使われたのは、原作でも登場した複合魔法だ。出発地点から姿を消す「姿晦まし」と、目的地点に到着する「姿現し」。二種類の魔法を組み合わせることから察するに、歪曲させた高次元空間なり亜空間なりを通るワープの一種だろう。

内臓が裏返るような素敵な余韻を味わいながら、俺はそう分析した。一時間連続でジェットコースターに乗り続けるよりも辛い跳躍だった。

お陰で目的地の地面を踏んだ途端、強烈な乗り物酔いに立っていられず、その場に蹲って胃の中の物を全て吐いてしまった。

頭上で両親が会話を交わしている。

「まったく、やわな奴だ。酔い止めは飲ませなかったのか」

「飲ませましたわ。昨夜寝るのが遅かったのかしら」

「立て。ここにいるとマグルの目に触れる」

父親は俺の腕を取って、強引に立たせた。

ワープ、もとい移動魔法の出口は藪に覆われた木立の中だったが、木立の向こうに人影がちらほら見えた。湖水地方は夏向きの観光地だ。人目が多いのは仕方ない。

俺は母上に手を引かれて、朽ち果てた二本の枯れ木の間を抜けた。

するとたちまち視界が開け、湖を背にした館が現れた。周囲の景色を邪魔しない、こじんまりした建物だった。

後ろを振り返ると、二本の枯れ木があったはずの開けた場所に、一對の門柱が立っているだけだった。藪も木立も遙かに遠い。観光客の姿は木立の更に向こうに遠のき、ほとんど見えなかった。

俺たちは一般人には意識もできず侵入もできない、ある種の結界の中に入っていた。ちなみにマルフォイ邸も同じ種類の魔法で外界から守られているので、ドラコとしては驚かない。

玄関のノッカーに触れるより早く、館から年配の男女が出てきた。二人とも俺たちと同じようなローブを着ていて、魔法界に属していることが分かる。

「皆様ようこそお越し下さいました。マルフォイ様、そしてナルシッサお嬢様！」
女性のほうがルシウスへの挨拶もおざなりに、その妻の両手を握り包んだ。

「遠いところをよくお運び頂きました。この館に本家の方を再びお迎えできるとは
光栄でございます」

「お嬢様は止して。私はもう嫁いだ人間よ」

と、母上は微笑んだ。

元々この館は、彼女の実家であるブラック家の別荘だった。それが遠縁にあたる
夫婦に払い下げられたのだという。

ブラック家はイギリス魔法界で名を知られた旧家だった。しかし本家筋で世間と
付き合いがある者は、今はもうナルシッサしか残っていない。そのため他家に嫁い
だにも関わらず、ブラック家ゆかりの貴婦人として招かれる機会が多い。つまりこ
の湖畔の館に住む夫婦にとって主賓はナルシッサであり、ルシウスとドラコはその
おまけに過ぎない。

館に通されると、大きく取られた窓から湖が間近に見えた。

「結構な景色だ」と、父親が感心したような声を上げた。その割に目は冷ややかで、

態度も淡泊だった。

館の主人は客の世辞にもニコニコ笑い、その立地を自慢した。

「そうでしょう。毎日見ている飽きませんよ。マグルもこの湖には近づけないので、静かなものです。ニジマスもいましてね。釣りをされるなら道具をお貸ししましょう」

「なるほど。気が向いたらそうさせてもらおう」

全くその気はなさそうだった。

俺は主人に話しかけた。

「湖では泳げますか？ 水着を持ってきたのですが」

「ドラコくんは泳げるんですか」

「教えた覚えはないが」と、父親の素っ気ない声。「水着など持っていたのか」

「綺麗な湖の近くに滞在すると聞いて、この前母上に買って頂きました。泳ぎを教わった覚えはぼくもありませんが、何とかなるでしょう」

薄灰色の目が俺を見下ろした。「吐いたばかりなのだから、今日は止めておけ」
そんな忠告が小学生男子に通用するかよ。

ティータイムの後、さっそく水着に着替えた。湖までは徒歩二十秒。

水に触れた途端、硬質な冷たさに心臓と玉が縮む。だが、こちとら小中学生の頃は川で泳いでいた海なし県育ち。冷水には耐性がある。すぐに慣れた。

ドラコの体は確かに泳ぎを知らなかったが、俺の意識で強引に動かしているうちに、ぎこちなさは消えた。途中、岸辺に現れたドラコの両親に手を振る程度の余裕はあった。

テニスコート四面ほどの湖を独り占めして泳ぎ回る。仰向けになれば、薄曇りの空が視界一杯に広がった。午後の太陽は雲の陰だ。

しばらくして水から上がると、父親がデッキチェアを持ち出して新聞を読んでいた。

「もう終わるか」と紙面から目を上げずに彼は言った。

「一休みです。母上は？」

「この夫婦と一緒に散歩をしている」

子供が一人で泳いでいるのだから、大人が見守るのは自然なことだ。しかしルシウスと二人きりにされるのは、俺としては避けたい。突然豹変して「息子を返せ」

と首を絞められたらかなわない。

休憩もそこそこに切り上げて、棧橋から助走を付けて飛び込んだ。

泳いでいると、不意に右足に激痛が走って硬直した。痛みを堪えながら岸边に戻ろうとしたら、今度は左足まで攣った。

——あ、やばい。

動かない両足が鉄の枷となって体を水中に沈めにかかる。冷静に力を抜いて浮こうとしても、鼻から水が入って体のほうがパニックになった。足を着こうにも底は深くて届かない。両腕で水面を叩き、もがく。俺の周りだけ湖が荒れ狂う。開いた口から湖が流れ込んでくる。湖に飲まれる。

溺れ死ぬ夢なんて見たくはなかった！

不意に腕を掴まれた。それを引っ張られたかと思うと、胴回りを何かに締め付けられた。ざばりと水音が聞こえ、顔が空気と再会した。反射的に激しく噎せる。

水を吐き出す俺の体は、誰かに抱えられたまま移動を始めた。抱えてくれている人の体温が、そのまま生の実感になった。

助かった。

水際に着いても両足は攣ったままだった。その場に崩れ落ちて咳き込んだ。助けてくれた人が地面に膝を突いて、背中をやや乱暴に撫でさすってくれた。

「大丈夫だ。ドラコ。もう大丈夫だ」

どうにか落ち着いて顔を上げると、傍らにいたのは父親だった。全身ずぶ濡れだ。乱れた髪からも重く濡れそぼった服からも、ぼたぼたと水滴が落ち続けている。先ほどまで着ていたローブもない。

「馬鹿者が。調子に乗るからだ」

と、父親は立ち上がった。その視線の先には、デッキチェア横の彼の杖。ひよいと指を動かしてそれを引き寄せると、父親は服と髪を乾かした。

ついで彼が目を向けたのは栈橋だった。湖に突き出した栈橋の端に、ローブが投げ捨てられている。裾が水面に触れて揺れていた。

それも手元に引き寄せて元の紳士然とした格好を取り戻すまで、俺は馬鹿面で眺めていた。

「何という顔をしている」

「いやあの……ありがとうございました」

礼を言うと、ドラコの父親はふんと鼻で笑った。

「子供を助けるのは親の務めだ。そんな意外そうな顔をしなくてもいい」

「どうして魔法を使わなかったのですか、ぼくを助ける時に」

生粋の魔法使いなのだから、栈橋を走って水に飛び込む必要はなかったはずだ。虚を突かれた表情で、父親は手の中の杖に目を向けた。そして「思いつかなかった」と苦笑を浮かべた。

「おまえとナルシッサを助けるためなら、火を噴くドラゴンの口に飛び込んでも構わん。どんな時でも、とは言い切れんが、手の届く範囲で助けてやる」

「ごめんなさい」

申し訳なさに俯いた俺を、父親の手がぎこちなく撫でた。

もしかしたら俺は勘違いしていたのかも知れない。目の前の男性の目が冷たいのは元々で、息子に対して疑問を抱いていなかったとしたら。母上の言う通り、ただの言葉の綾だったとしたら。そうしたら俺はなんと失礼な態度を取っていたことだろう。

「ぼくはあなたの息子ではありません」

手が止まった。

思わず出てしまった本音を、俺は慌てて取り繕う。

「その、ぼくは魔法が使えません。ドラコ・マルフォイなら出来て当然のはずのことが出来ないんです」

咳払いしてから、父親は口を開いた。

「馬鹿なことを言うな。おまえは私の息子だ。たとえ一生魔法が使えなろうが、それは変わらない。名家にもスクイブは生まれるし、スクイブの親から生まれる魔法使いもいる。第一おまえは、ドラコ・マルフォイにしか出来ないことを既に成し遂げているだろう」

はて。何だろう。

俺が瞬きすると、彼は軽く微笑んだ。

「私を父と呼び、ナルシッサを母と呼ぶ。私たちの息子にだけ許された行為だ」

彼は、妻同様、息子の中身を疑ってなどいなかった。俺がすべきだったのは、彼を警戒することではなく、息子として接することだったのだ。この夢の中では二人が俺の親なのだから。

彼は取り繕うようにローブの裾を払った。

「溺れたことは母上には黙っておいてやるから、今日はもう上がれ。明日も泳ぐつもりなのだろう？」

息子が溺れたことを過保護の傾向がある母上が知ったら、遊泳禁止を言い出すことは明らかだった。べつに俺は水が怖くなったわけではないから、明日以降ももちろん泳ぎたい。

少し考えてから俺は父上を見上げた。

「明日は二人で釣りをしませんか」

「……いいだろう」

父上は目を細めて笑った。

そうして翌日、二人で湖畔から釣り糸を垂らした。

後で聞いたところによると、湖水地方での釣りは有料ライセンス（入場料）を取る所が多いそうだ。館のプライベートレイクのようなこの湖では、そんなものは関係なく釣り放題だった。

釣果は、俺がブラウントラウト五匹にパーチ二匹。父上がブラウントラウトと

パーチを三匹ずつ、レインボートラウト一匹だった。二人とも初めてにしては上々だろう。アマゴやイワナといった俺自身の川釣りの経験は、この際ノーカウントだ。館の亭主にも誉められた。

ところがその次の日は揃ってボウズという情けないものだった。母上からは「ビギナーズラックでしたね」と非情な評価を受けた。

俺と父上は顔を見合わせて肩を竦めた。

In Flames ≪ Underneath My Skin ≫

空の蟻・1

芝生が足裏から離れていった。

跨っている筈が勢いよく飛び上がり、視界が一気に上昇する。

握った柄の角度を変えれば、筈は思うままに宙を滑った。

林の上を軽く流していると、屋敷からドラコの両親が出てくるのが見えた。俺はそちらへ飛んでいった。

二人の驚く顔が早く見たかった。



湖水地方への旅行を経て、ドラコの両親と家族でいることに抵抗はなくなった。今のところ二人も、息子の中身を疑う様子はない。今の状況を客観的に見ると、少年の体を生き霊が乗っ取ったようなものだが、これが夢であることを踏まえれば、何も奇妙な点はない。俺自身が物語の登場人物になったとしても、他人の人生を生きることはなかったとしても、深く悩む必要はない。

それはさておき、重大な問題が片付いていなかった。

魔法学校で主人公に張り合う役柄なのに、魔法が使えない問題だ。

ホームヒーラーのカンフォラ氏は、その原因を「杖を握って倒れた時のショックを体が覚えていて、魔法を使うことを無意識に避けているから」だと推測している。身に覚えのない恐怖が原因だと言われても、俺には対処のしようがない。

母上が魔法の使いかたを熱心に教えてくれているが、こつは掴めないままだ。一方、父上は「無理に覚えようとして覚えられるものでもないだろう」と長期戦の構えだ。ハウスエルフの態度は変わらない。ただ何となく、微妙に腫れ物扱いを受けている気がする。

八月中旬になると、魔法の練習は中断された。更に、俺はまだ魔法使いの杖を持ったことがないことにされた。

マルフォイ邸にクイディッチのスリザリンチームが滞在するからだ。

クイディッチは言わずと知れた『ハリー・ポッター』作中のスポーツ。この夢の中でも人気がある。ホグワーツでも学生の課外活動として取り組まれ、学生寮ごとに編成される四チームが競い合う。そして愛寮心を煽る寮対抗戦には、卒業後も関心を持ち続ける者が多い。

スリザリン寮出身の父上も、チームの後援活動の一環として、数年前から夏期合宿に屋敷を提供していた。なお、普通は学外でチームとして集まることはない。練習やメンバー選抜は新学期になってから始めるものだ。

そもそもクイディッチは広いコートで行われる空中競技だ。練習場所の確保が難しかった。箒で空を飛び回っても周囲に迷惑が掛からず、非魔法使いに目撃されない場所。それが一番の条件だ。

その点、マルフォイ邸の敷地は東京ドーム単位で数えられるほどに広い。芝生の庭の周辺には森が広がり、その敷地には非魔法使いの認識を逸らす「マグル除け」の魔法が掛かっている。空を飛ぶ姿を森の向こうから目撃されても、鳥と誤認されるだけ。十分なスペースのある練習場所としても、部屋数の多い合宿所としても最適だった。

若者たちは、大きな荷物と競技用箒を抱えてやって来た。それをマルフォイ家の三人は玄関ホールで迎えた。

「ようこそ」と、父上は後輩たちに鷹揚に挨拶した。

「今年もご好意に甘えさせてもらいます」キャプテンだろう。体格の良い男子学生

が代表して挨拶した。

彼以外の学生たちも想像より行儀が良かった。学生たちはキャプテンの配った部屋割り表に従い、静かに二階の客室に分かれていった。ミーティングをしたら、早速練習に入るそうだ。

階段の手すりに凭りかかっていた俺に、何人かは「久しぶり」と声を掛けてくれた。ホストファミリーの一員として、俺も愛想良く挨拶を返しておいた。

母上はというと、学生たちが消えた途端に無表情になった。本音では学生たちを受け入れたくないのだ。屋敷が汗臭く泥だらけになるのが嫌だそう。自宅を部活帰りのサッカー部の溜まり場にされることを喜ぶ女性はいないだろう。しかし父上の手前、我慢している。

父上が学生チームを後援するのは、愛寮心や学園内での人脈強化だけが理由ではない。マルフォイ家に対する世間のイメージが良くないので、それを回復するためには慈善活動や社会奉仕が不可欠なのだという。

イメージが良くない最大の理由は、ルシウス・マルフォイ自身がヴォルデモートの部下だった過去にあるだろう。ただしこれは原作知識による推測だ。「なぜ印象

が良くないのですか」と聞いたたら、「子供は知らなくていい」というお決まりの台詞で打ち切られた。

ミーティングが終わっただろう頃に、庭に出てみた。

芝生に人の影はあったが姿はない。

チームは空中を飛んでいた。かなりの高所だ。青空に点在した黒い影がちよこまかと動いて、蟻のようだ。

「おまえもあれくらい飛べたら良かったな」

と、俺は傍らの白孔雀に話しかけた。

この家では真っ白な孔雀を放し飼いにしている。初めて目にした時は、思わず二度見してしまったものだ。

白孔雀は俺を無視して地面を啄んでいた。羽根を持たない生き物が自分たちの領域を飛び回っていることなど、気にしていなかった。

しばらくすると母上と、ワゴンを押したハウスエルフがテラスに出てきた。ワゴンには水で覆われた幾つかの水差しと、沢山のグラス。運動部への差し入れだ。

「まあ、こんな暑い所で見ているのですか」と母上は声を上げた。「湖で真っ赤に

日焼けしてひいひい言っていたのに、もう忘れたの?」

「忘れましたね。夏は暑いものです」

「呆れた子ね」

「坊ちゃま、お飲み物をどうぞ」

会話の合間に、コビーがグラスを差し出してくれた。コビーはマルフォイ家に仕えるハウスエルフのまとめ役だ。普段は父上の身の回りの世話や、家全体の管理を統括している。いわば執事のポジションにいるが、料理人でもある。

夢の最初に俺と遭遇したアビーは、洗濯や母上の身の回りの世話を中心に行うメイド。原作にも登場するドビーは、その他雑多な仕事を請け負う下男という分担だ。その三人で、リゾートホテル並に広い屋敷の環境を維持しているのだから、大したものだ。

「このレモン水、塩を入れたんだな」

「お気に召しませんでしたか」

「いや、汗を掻いた人たちへの差し入れとしては正解だよ。あの人たちこそ、ずっと日向で動いているから」

練習を眩しそうに見上げていた母上が、

「ドラコもクイディッチに興味があるのですか」

と尋ねてきた。

「そうですね。今はクイディッチよりも、空を飛ぶこと自体に関心があります」

空を飛ぶ。いかにも夢らしい行為だ。箒に跨ると股間に全体重が掛かって痛そうだが、それでも空中を移動するのは楽しいだろう。

母上は俺の返事に相槌を打つと、「日向にいるのも程ほどにしなさいね」と言い置いて屋敷に戻っていった。

やがて学生たちは地上に休憩しに戻ってきた。レモン水をふるまいながら、ドラコの年齢でも不自然でない話題を振ってみた。

「チームに監督はいらっしゃらないのですか」

丸々とした体格の学生が答えてくれた。

「いるけど合宿には来ないよ。寮監が——ああ、分からないか——学校の先生が名前だけ貸してくれてるんだ。指導までしてくれるわけじゃないから、いつも自分たちだけで練習しているんだよ」

「他のチームも条件は同じだから、そこに文句を付ける訳にはいかないね」横から別の学生が話に加わった。「だから経験者が指導してくれるこの合宿は、貴重な機会なのさ」

「おまえ、おっさんたちにああだこうだ言われてうざいって、この前」

言いかけた丸っこい学生は、肩口を殴られて黙った。

合宿には、チームを引退した卒業直後の若者だけでなく、クイディッチに一家言を持つ二十代、三十代のOBも顔を出す。

「本当に、屋敷を貸してくれるマルフォイさんには感謝だよ。他の寮の連中に知られたら、スリザリンだけずるいって絶対に言われるな」

「言われる言われる。スネイプ教授が合宿に顔を出さないのだって、他寮に文句を言わせないための予防線だからな。あの人ああ見えて心配性だから」

「ああ、監督が関わってないから合宿じゃなくてただの自主トレだっていう、例の論法ね。いても役に立たないからいいけどさ」

「それ今度チクったろ。フリント、五点減点！」

「まじかよざけんなおまえ」

学生たちの会話は果てしなく脱線していった。いいなあ青春。

その後、彼らは合宿を有意義に過ごした。帰る時には、日焼けした顔を意気揚々と輝かせていた。



夏が過ぎると、再び家庭教師たちを相手にする日々が戻ってきた。

ある日、グラブラ夫人が一人の男性を連れてきた。男性は玄関ホールで夫人と分かれ、父上のいる書斎に案内されていた。

ロンドンから離れたウィルトシャー州の田舎屋敷でも、意外と来客は多い。この時の男性も、仕事のための口利きか投資を頼みに来たのだろうと思った。

男性が新たに雇われた家庭教師だと分かったのは、その翌週のことだ。

「ドラコ。今日からこちらの先生に飛行術を教われ」

「イースカラス・タービネイト。よろしく」

父上に紹介された彼は、堅苦しい雰囲気を放っていた。年の頃は二十代前半くらい。黒っぽい髪を短く刈り込み、体格の良さも相まって軍人めいている。カーキ色のローブは丈が短く、軍用のレインポンチョに見えた。後ろ手に構えている長物

が、小銃ではなく箒なのが不思議なくらいだ。

父上が書斎に引き上げると、タービネイトは庭に続くフランス窓に近づいた。

「早速始めよう。外へ」

壁際に用意してあった箒を取りに行こうとしたら、「まだいい」と言われた。

手ぶらでどうしろと。

困惑したが、口答えするのが怖かったので素直に従った。

庭に下りて、かなり屋敷から離れた所まで連れて行かれた。タービネイト軍曹はようやく立ち止まった。

「この辺りでいいか」

と呟き、自分の箒を振り回す。フォームは完全に野球の素振りである。風切り音が凄い。

——まさか、ケツバット。

強張った俺の顔を見て、軍曹はにやりと笑った。

空の蟻・2

強張った俺の顔を見て、軍曹はにやりと笑った。

「なーんてね。びっくりした？　俺がこれで殴っちゃうと思った？　そんなわけないじゃん。俺、ひ弱だからね。きみを殴ったりしたら俺のほうが骨折しちゃうから。それよりこれ脱いでもいいかな。いいよね。さっきから暑くてさ。ほらこれウールだよ、ウール。冬物の。何考えてんの、俺」

ぺらぺらと喋りながら彼はローブを脱いだ。それまでの厳つい態度と雰囲気が変わった。今はただのガタイのいい陽気な兄ちゃんだった。

「マルフォイさんに雇われないなら真面目にしたほうがいいって、ここを紹介してくれた人に言われてさあ。べつにいつも俺が不真面目なわけじゃないのよ。ないんだけど、ドラコくんが俺を怖がってるみたいだから、早めに素を出したほうがいいかなと思ったんだ。どうよ、さっきの俺の態度」

「……あ。えっと、適切だったと思います」

「イエー」と、タービネイトは拳を俺のほうに突き出してきた。

いきなりのカジュアルな挨拶に面食らったが、こちらも拳の指の甲をガツンと当てた。相手は少し目を見張ってから、にかりと笑った。

俺たちは早々に打ち解けた。タービネイト氏からは、愛称のイースで呼んでもいいと言われた。

彼の教えかたは要領が良かった。箒の扱いかた、正しい姿勢、やってはいけない事。子供にも理解できるように分かりやすく実演してくれた。

基本レクチャーの後、「それじゃちょっと飛んでみようか」と、イースは箒を持ち直した。

「待ってください。ぼくの箒がありません」屋敷に置いてきたままだ。

「なるほど。箒さえあれば、ドラコくんはすぐにでも飛べると」

杖があっても魔法を使えない今の俺には、答えられない問いだ。

イースは「ここに乗りな」と、箒の穂を叩いた。「いきなり一人で飛ばせるわけないって。タンデムしよう」

バイクの後ろに人を乗せたことは何度かあるが、箒の後ろに乗るのは初めてだ。箒を跨ぐ前に、幾つかの魔法を掛けられた。

まずは、高所から落下した時のために衝撃緩和の魔法は必須だという。次いで、風や埃から目を保護するために、盾の魔法を眼前に展開（プロテゴってこういう使いかただけ）。強風や騒音の中でも会話が出来る魔法は、ツーリングの時にあると便利なインカム代わりだ。

「このへんはご両親から教わって。魔法は時機を見て親から教えるって、マルフォイさんから言われてる」

他人から魔法を教わったところで、スクイブだと思われるだけだからな。

改めてイースが箒に跨った。前のほうに詰めてくれたので、パッセンジャー（タンドマー）の俺は穂の根本に位置取りすることができた。スカスカの穂先では体重に耐えられないのではと心配していたので良かった。

ベルトやバーのような掴まる所がないので、仕方なくイースの腰に手を回す。片手首をがっしりと握られたので、途中で落ちる可能性は低くなった。

困ったのは足の置き場だった。

穂の根本近くから伸びるステップはライダー用なので、俺が横取りするわけにはいかない。かと言って箒の両脇に足を投げ出しては、ライダーの腰を膝でグ

リップすることができずに安定性が悪い。

どうしようか考えていたら、イースがステップを蹴って角度を変えた。「地面から浮いたらここに足を置いて」と譲られた。

「イースはどうするんですか。これが無いと踏ん張りが利かないでしょう」

「平気平気。そんなスピード出さないし、昔の人は使ってなかった補助器具だから、無くても何とかなる」

ありがたく使わせてもらおう。

位置が決まると、飛行術のコーチは「それじゃしっかり掴まって」と言うなり地面を蹴った。

箒が浮いた。

それと同時に体重を感じなくなった。空に引きずり上げられるようで、慌ててライダーの胴体にしがみつく。

それからしばらくは、地上二メートルほどの高さを、飛行というより空中散歩のんびりさで飛んだ。

俺が慣れたのを確かめて、箒は高度と速度を上げた。

空に突っ込む。

風が耳元でバリバリと叫ぶ。

バイクで馴染みのある感覚に近い。体幹の使いかたも同じだ。

「どう？」と怒鳴る声が耳元で聞こえた。前からも千切れ飛んできた。

「最高です！」と怒鳴り返した。

イースはしばらくマルフォイ邸の敷地の上を流してくれた。高度が下がり始めた時には、思わず文句を言うくらいには楽しかった。

「もう少し飛びましようよ」

「駄目！ 寒い！ 俺もう限界！」

と叫ぶのを聞いた時には、ローブを脱いだからだが一瞬だけ呆れた。しかし彼はパッセンジャーの俺に、掴む所と視界を提供してくれたのだった。

地面に降り立つと同時に重力が戻ってきた。草を踏んだ足に、ずん、と体重がのし掛かる。

ローブを急いで纏うと、イースは飛行前に掛けた魔法を全て解除した。飛行中は杖を使わないのが彼のポリシーだという。

「時間的に今日のレッスンはここまでだね。どうだった」

「楽しかったです。本当に」

「そりゃ良かった。ドラコくん、体重移動が上手だね。センスあるよ。来週からはきみの箒を使って練習するよ。人に教えるのは初めてだから、分かりにくいところがあつたらすぐに言つてな」

こうして俺は飛行を教わり始めた。

俺自身と年が近いこともあり、イースとは気楽な友人関係になった。ほぼ地の態度で接していたら、「十歳のくせにおっさんくさい」と言われたが、「周りが大人ばかりだから」という理由で納得してくれた。

彼は学校卒業後、世界各地を放浪していたそうだ。イギリスに戻ってきて一年ほどぐうたら過ごし、いい加減働いてくれと母親に泣きつかれたのが今年のこと。母親の知人であるグラブラ夫人から、飛行の家庭教師を探している家があるを紹介され、応募したそうだ。

「面接の時、俺がダームストラング卒だと知ったらマルフォイさんが俄然食いついてきたよ。ドラコくんも行くの？」

「いや、ホグワーツのつもりだ」

「だよねえ。俺からも母校を薦めてくれって言われたけど、そっちのほうがいいよ」
息子をダームストラングに入れることを、父上はまだ諦めていなかった。しかし俺たちには全くその気がない。

「ちなみにどんなところなんだ、ダームストラングは。実践的に魔法を学ぶと聞いているが」

「うん。確かに、どんな魔法も体で覚えろって感じだったよ。あと女子が少ない。ブスばっか。でもどんなブスでもそれしかないと言え、可愛く見えてくるよ」
やはりホグワーツに行こうと思った。



レッスンも五回目を数えた日。初めてイースの補助無しで一人で飛ぶことになった。

まずは飛行用の各種魔法を掛けられた。

「これで箒から落ちて、きみが怪我をする確率は低くなった。あまり緊張しすぎないで、リラックスして。危ないと思ったら慣性と風には逆らわない。いいね」

「はい、コーチ」

箒に跨り、深呼吸。

上がれ、と念じると、上向きに落ちていく感覚と共に地面が離れていった。思ったより速い上昇。あっという間に芝生が遠ざかっていく。

飛んだ。

飛べた！

「イース、見ろ！ 飛んでいるぞ」

「ああ浮いてるな。飛べたって言えるのは前進してからだから」

家庭教師の冷静な指摘を受け、高度を保ったままゆっくりと前に進めた。

「どうだ。これなら飛べたと言っていいだろう」と地面で見守るイースに話しかけると、

「前を見る。バランスが崩れかけてる」と怒鳴られた。

少しだけあった恐怖も消えてきたので、少し上空に上がることにした。

芝生も、森も、屋敷の屋根も、青空も。秋の気配を帯びて色が柔らかい。

敷地の外の田園風景が見えた。何か光る物が地上を猛スピードで移動していく。

ハイウェイを走る車が陽光を反射しているのだった。

このまま遠くまで行きたくなかった。

「おい、ドラコくん。どこ行く。そっちはマグルに見つかるぞ」

うるさいな。

イースの視界から出るべく方向を変えた時、庭に出てくる人影が見えた。遠くて表情は見えなかったが、間違いなく俺のほうを見ていた。

俺は逃亡する考えを捨てて、そちらへ飛んでいった。

近づくにつれ、ドラコの両親の表情が見えてきた。二人とも驚いている。喜んで
いる。

「ドラコ！」と、母上が両腕を差し出してきた。

箒に乗ったままでは突っ込めない。手前でドリフト気味に取り回して着地しようとした。しかし摩擦が効かないせいとか、地上付近の空気の上を滑りすぎた。着地は失敗した。

地面に転がり落ちた俺のところに、両親が駆けつけてきた。

「ドラコ、一人で飛べたのね」

母上は息子をぎゅうぎゅうと抱き締めた。父上は庭を歩いてきたイースに「ドラコが一人で飛んだ！」と、見たままを言葉にした。

家庭教師は眉を僅かに上げて「ご子息に飛行を教えるのが私の仕事です」と、堅苦しい態度で応えた。

「それでも礼を言う」

父上はイースの手を取った。素直に謝意を示すのは珍しい。いつも偉そうな態度で他人に接している父上の姿しか、ドラコの「記憶」には無かった。

その日のレッスンはかなり早めに切り上げられ、イースは早々に帰った。「ご家族で存分に喜びを分かち合って下さい」と言っていたから、繰り返し礼を述べる両親の相手が面倒になったのだろう。

レッスンは早く終わった分、思わぬ空き時間ができた。

勉強も読書も手につかない。飛行の興奮がまだ醒めない。

気分を落ち着かせようと、いつまで経っても結果の出ない魔法の練習をすることにした。箒を浮かび上がらせた力が、羽毛も宙に引き上げてくれればいいのに。

杖を対象に向かって動かし、呪文を唱える。

羽毛はあっさりと浮き上がった。

「え」

何かの間違いではないかと、目に付いた他の物にも魔法を試してみる。いずれも成功した。

室内が軽いポルターガイスト状態になったところで、俺は現状を認めた。初めて箒で飛べた日に、初めて魔法に成功した。これは偶然ではないだろう。

魔法を成功させるには想像力——明確なイメージを描き出す力が必要だという。これまでの俺は、自分が魔法を使う姿が想像できなかった。子供のごっこ遊びをさせられているようで、夢の中だというのに白々しく感じていた。

空を飛んだ爽快感の余韻が、それを忘れさせてくれた。部屋で色々な家具を浮かせて、魔法を使う感覚も理解できた。

俺は杖を握ったまま、「父上！ 母上！」と階段を駆け下りた。

ドラコが魔法を使えるようになったと知った時の両親の喜びよりは、飛行の比ではなかった。

父上は息子の髪をわしわしと掻き乱してから、「今夜は祝杯だ！」と叫んでワイ

ンセラーに突撃していった。母上は「良かった、本当に良かった」と涙ぐんでいる。「あなたがスクイブでも私たちの息子だという気持ちに嘘はありませんが、魔法を使えてくれたほうが、ずっとずっと嬉しいわ。魔法が使えないなんて不憫すぎるもの。この先あなたが世間に冷たい目で見られながら苦労すると思うと、気が気でなかったんですからね」

大袈裟な、と笑い飛ばすことはできなかった。母上にとっては、息子が社会的弱者になるかどうかの瀬戸際だったのだ。無理に魔法を覚えようとしなくて良いと庇ってくれた父上も、内心では齒痒かっただろう。

「泣かないでください、母上。ご心配をお掛けしましたが、もう大丈夫です。きっと他の魔法もすぐに使えるようになります」

俺がそう胸を張ると、母上は小さく笑った。

「期待していますよ。気分転換になればと思って飛行を習わせたけれど、予想以上の成果だわ」

息子が魔法に苦戦していると分かった早い段階で、両親は飛行術を習わせることを検討したらしい。ろくに魔法を習得していなくても、魔力があれば専用の箒で空

を飛べる。それは原作のハリーが証明した通りだ。魔法の素質がない者にはそれも無理だが、ドラコに魔力があることは幼い時に判明していた。そして俺が飛行に興味があると言い、母上に相談されていたグラブラ夫人が適当な人材を連れてきてくれたのだった。

「これで安心してドラコを魔法学校に預けられるわ。ねえ、ルシウス」

「そうだな」

赤い目をして戻ってきた父上も頷いた。

ああ、そうか。

杖を介した魔法が使えるようになったので、ホグワーツ入学にあたっての心配は無くなったわけだ。

つまりドラコという役割を与えられた俺が、『ハリー・ポッター』という物語に登場するための条件は満たされた。

足元の不思議・1

俺は壁に向かって声を掛けた。

「おはようございます、お祖父様がた、お祖母様がた」

「おやルシウス。箒など持って、どこかに行くのかい」

年配者の言葉に軽く苦笑する。「いやだなあ。ぼくはドラコですよ。ルシウスは父上です」

「そうだったかね。子供の頃のルシウスにそっくりだよ」

「年を取ると記憶がいい加減になるのだ。許せよ、我らの子」

「氣にしております。皆様がお亡くなりになった後に生まれた子孫ですからね、ぼくは」

会話の相手は壁に掛かった肖像画だ。

この屋敷のホールには、先祖代々の肖像画がずらりと飾られている。仏間の鴨居に並んだ写真のようなものだ。マルフォイ家は歴史が長いので、全員を飾るには人数が多すぎる。そのため時代が近い人物の他は、多大な功績のあった当主などに絞

られていた。

そしてこの肖像画は、原作のホグワーツ校長室にあったものと同じく、描かれた人物の擬似人格と喋ることができた。日頃接する人間が限られている俺にとって、二次元の年寄りでも貴重な話し相手だ。

なお、彼らのことは全て「祖父ちゃん・祖母ちゃん」と呼んでいる。曾祖父だの高祖母だのと呼び分けるのが面倒だし、個人名はよく知らない。先方だってドラコの名前は碌に覚えていない。

「それより我らの子よ。箒に乗るなら庭に出よ。ここで飛び回ってはならん」

「分かっています。これから友人と遠乗りに行くので、皆様にご挨拶をと思ひまして」

俺が家の外に出たがっているのを察して、イースが近場のツーリングに誘ってくれた。軍人めいた態度と正論を駆使してドラコの両親を説得してくれた彼には、本当に感謝だ。両親も、息子が魔法を使えるようになった恩を感じている。彼が一緒ならばと外出を許してくれた。

肖像画の貴婦人が横に向かって呼びかけた。「アブラクサス、小さな冒険に出る

我らの子に支度金を」

それに応える老紳士は、ドラコの祖父に当たる人物だ。「それはこの子の親から与えましょう。ドラコや、父上を呼んできなさい」

「小遣いはもう頂きました。お気遣いありがとうございます」

今朝、朝食後に母上から小遣いを貰った時には驚いた。金額もさることながら、渡された紙幣にエリザベス女王の肖像が印刷されていたからだ。

イギリス魔法界では、非魔法界とは異なる独自通貨がある。ガリオン金貨、シッケル銀貨、クヌート銅貨。ところが渡された貨幣は、ポンドとペンスだった。魔法界の住人にとっては外貨も同然のそれを、母上は嫌そうに指先だけでつまんで超越した。

『マグルの世界ではガリオン金貨は使えないそうですからね。社会勉強のためにもマグルの金銭を知っておくべきだと、父上から預かりました』

さすが父上、話が分かる。と思ったものの、何かが釈然としなかった。

ホールで祖先たちと喋っていると、母上がやってきた。

「ドラコ。あの靴下は履いていますか」

「ええ、言われた通りに」

そう答えているのに、服の裾をまくって確かめられた。

それは一見ただの靴下だが、ポートキーの魔法が掛かっている。決められた時刻にこの靴下が肌に触れていれば、どこにしようとして、履いている人間はこの屋敷に召還される。門限厳守と誘拐防止のお守りだった。

「母上は心配しすぎです。近場に遊びに行くだけなのに」

「そうは言っても、何かあってからでは遅いのですよ」

まもなくイースが迎えに来た。

今日のために買ってもらったゴーグルを掛け、天狗の隠れ蓑、もとい透明マントを羽織る。これは原作でハリーが使っていた一品物とは違う。量産された、機能の劣る市販品だ。防護用の魔法はまだ習得していないので、母上に掛けてもらった。俺たちは社会勉強に出発した。ドラコにとっては「空からイギリスを見てみよう」とでも題すべき遠出だ。



快晴。かなり肌寒い。

屋敷の周囲に広がる森の向こうは田園地帯だ。

「ここから先はマグル除けの魔法は掛かっていないそうだ。森を抜けたら気を付けないよ」

声だけが耳に届く。

前を飛ぶイースも透明マントで光学ステルス中のため、その姿は目視できない。しかしはぐれる心配は無い。引力と斥力を魔法で操作して、互いの筭の間隔を一定距離で保つようにしてある。

空の青に全身を浸して飛んでいく。

足元に広がるコッツウォルズ地方は、秋の黄金色に輝いていた。

黄色く色づいた木立と、緑の丘が連なる丘陵地帯。その緑の丘で牧草を食む羊たち。敷地を区切る石垣の間のフットパス（小径）を歩く観光客の赤いデイパック。小川に反射した青空と日差しの欠片。

集落に入ると川沿いに石造りの道が現れる。小橋も石造りだ。黒ずんだ茅葺き屋根を次々に飛び越える。足元の国道では、フェデックスの運送トラックが観光バスを追い抜いていった。

「右手向こうに真っ直ぐな道があるだろ」と声が入ってきた。「あれはマグルの使う高速道路。ロンドンまで行くやつだ」

「ロンドンまで行くのか。聞いてないぞ」

驚いて聞くと、笑い声交じりに返ってきた。

「行かないよ。今日は近くを流すだけって約束したからね、きみのご両親と」

やがて俺たちは、こじんまりとした村に下り立った。早めの昼だ。

パブに入ると、店内の客の視線が訝しげに俺たちに集まった。

ごく普通の服装のはずなのに、と俺たちは互いの格好をもう一度確認した。うん。ただのジャージにサンダルのおにさんと、ジャージにスニーカーのお子さまだ。服はイースが事前を買ってきてくれた物で、俺から見ても違和感はない。揉め事の原因になりかねないサッカーチーム関連の品も身に付けていない。透明マントは外したし、服の上に着ていたローブはバッグにしまった。

とチェックしたところで、右手の箒に気が付いた。さすがに掃除道具を持ってパブに入る奴はいない。イースも同じ点に思い至ったらしく、周囲に聞こえるように大声を上げた。

「いくらチャリティウォーク中でも、休憩の時は箸を置いて大丈夫だぞ」

何だそれと思ったが、話を合わせる。

「だって下手な場所に置いて片付けられたら困りますよ。コーチだって持ったままじゃないですか」

周囲の人はそれで納得してくれたいらしい。俺たちへの注目は静かに解けていった。

俺はコーラを頼んだ。上空の秋風に晒されて体は冷えていたが、ビールを飲みたいた気分だった。せっかく本場のパブに来たのに、酒が飲めない子供の体が恨めしい。

「お茶じゃないんだ、坊ちゃん」

と、イースにはからかわれた。

「外でくらい別の物を飲ませてくれ。もっと強い物でもいい」

ぼやきながら向かいのビールにてくてく二本指を歩かせていくと、「あげないよ」とジョッキが遠ざけられた。

「きみに酒を飲ませたなんて知られたら、俺、首になっちゃう」

監督者の慌てた様子に俺は笑い、話題を変えた。

「ところでチャリティウォークって何だ」

「ああ、マグルが寄付金を募る時にやるパフォーマンスだよ。目標距離を歩ききったら、スポンサーになってもらった人から約束の金額を受け取れる。子供がやることが多いかな」

「へえ。イースは非魔法界のことにも明るいんだな」

「マグルと魔法使いが混在する町で育ったし、放浪中に色々な人と出会ったからね。俺から見たら、イギリスの魔法界は閉鎖的すぎるよ」

ちなみに、「魔法界」という言葉が示す地域は存在しない。マルフォイ邸の敷地のように「マグル除け」の魔法が掛かっている場所はあるけど、それが即ち魔法界ということにはならない。特定の場所ではなく、各地に隠れ住む魔法使いのネットワークやコミュニティを指す言葉だ。だから意味合いとして近いのは「業界」だ。部外者を拒む、閉鎖的な業界。

そう捉えれば、色々と歪んだ常識が罷り通っていた原作の魔法界も、特別なものではない。そんなムラ社会で育つドラコとしては堪ったものではないが。

「イースの言う閉鎖的って、たとえば純血主義のことか」

「俺なんかの考えを聞いてどうするの、ドラコくん」

俺は肩を竦めた。

「ぼくの周りの大人は純血ばかりだし、きっと考え方も似通っているだろう。だから逆にそれ以外の考え方をドラコ・マルフォイは知らない。それを閉鎖的とか、世界が狭いと言うんじゃないか。世界を見てきたイースの目には、イギリスの純血主義はどう映っているんだ。べつに親に言うつもりなんか無いから、教えてくれないか」

そこまで言えば、彼も警戒を緩めた。腕を組み、少し考えてから喋りだす。

「……あれが目指すところは要するに、ピラミッド型の階級社会だよな。長く続いている古い純血の血統が頂点に立ち、その次に普通の純血が来て、マグルから生まれた新しい多くの魔法使いが土台を支える。そんな感じ。反体制的なマグル生まれじゃなければ、多かれ少なかれ、皆持つてる感覚だと思うよ。昔あった、マグル生まれは悉く排除すべし、みたいな過激なのは論外だけどさ。初代がマグル生まれでも、魔法使いとして代を重ねれば自動的に純血になっていくわけだし、いくら代替わりしても階級が変わらないマグル社会のイギリスよりは柔軟かもな」

「なるほど」

言うまでもなく、「純血」とは魔法使いの男女の間に生まれた魔法使いのことであり、「マグル生まれ」とは非魔法使いの両親から生まれた、原作のハーマイオニーのような魔法使いのことだ。

原作では陋習として扱われていた純血主義だが、こうして聞くと意外に穏やかだった。

「俺の言う閉鎖的っていうのは、もっとこう、魔法界そのものが殻に閉じこもってるっていうか、そういう意味ね。十年くらい前までは、紛争で仕方ないかなと思える事情があったけど、今でも全然変わらねえもん」

「紛争って、『例の人』が起こしたやつか」

「そうそう。俺がダームストラングに行かされたのだって、避難の意味合いが強いんだよね。ドラコくんは覚えてないだろうけど、一昔前は血みどろの抗争を繰り広げててさ。あれ、もしかしてその頃まだ生まれてない？」

「いや、『例の人』が消えた時は一歳だった」

「それじゃハリー・ポッターと同一年だね」

俺は頷いた。

かつて、過激な純血至上主義を掲げ、イギリス魔法界に破壊と殺戮の嵐を呼び込んだ魔法使いがいた。ヴォルデモートと名乗っていたその魔法使いは、原作同様に、この夢の中でも名を呼ぶのを憚られている。九年前にポッター家を襲撃した際に、自らが放った死の呪文を返されて自滅したということになっているのも同じだ。

その際に生き残った男児が、ヴォルデモートを打ち倒した象徴的存在として偶像視されていることも。

「でもあの子も、今どこでどうしてるか分からないもんねえ。家を襲撃されて、報道通りに一人だけ無傷で済んだとも思えないし、結局死んじゃったかも知れない」「生きてるさ、きっと」と俺は呟いた。

「まあ元気に育ってるといいね。マグルの親戚に引き取られたって聞くけど、それ以上は分からないからさ。彼のことだけじゃなく、マグル側の情報を集めようとしても、中々難しいじゃない？俺が言ってる閉鎖的っていうのはそういうところ。マグルから入る情報をわざと遮断して、魔法界の伝統とやらを守ろうとしてる」

話が戻ってきた。

「食べ物や着る物だって、いつまで経っても古臭い。たとえばこれだって、魔法界ではパブの手作りメニューの塩味しか見たことがない」

彼は、カウンターで飲み物と一緒に買ってきた緑色のパッケージを、バリッと開けた。

「ドラコくんはパブとか来ないだろうから、食べたことないかな。クリスプス。スナックの定番だよ」

それがポテトチップスであることは、見れば分かる。「ソルトアンドビネガー味？」

「そう。美味しいよ」

「あ、本当だ」

スナックは体感時間で数ヶ月ぶりだ。初めて食べるフレーバーだが美味かった。酢の酸味がすっぱムーチョに似ている。ああ、この尖った塩味。脂ぎった揚げり。ポテチうめえ。

「いくつか買って帰ろうかな」

財布を掴んで立ち上がった俺を、「待て待て」とイースが引き留めた。

「スーパーマーケットという所で、マグルの食品を売ってる。そこでならもっとなんか色々選べるよ。味もメーカーも」

おお、と俺は唸った。地元のスーパーで買い物体験。正に社会勉強だ。

午後の予定を喋っている間に、フィッシュアンドチップスとバーガーアンドチップスが来た。そちらも美味かったが、ポテチの感動には負けた。

昼食後はロングリートの屋敷へ。サファリパークと巨大迷路を併設した、有名なマナーハウスだ。

さすがにここでは箒が邪魔なので、小型化して荷物にしまった。

子供騙しだと舐めていたサファリパークは、期待以上だった。入園料の元手はここだけで取れる。庭園に作られた迷路は、『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』に出てくる迷路の雰囲気味わえる。だが俺個人の感想としてはサファリのほうがいい。なお、マナーハウスの見学は見送った。よその屋敷をわざわざ見なくても、似たようなマルフォイ邸に住んでいる。

その後ウェイトローズという高級スーパーに寄って家への土産を買い、帰途に就いた。

イギリスは日本より緯度が高いので、秋冬の日没が早い。

足元に並ぶオレンジ色の街灯を視界の端に見下ろせば、滑走路を離陸した飛行機の気分だ。街灯がないと方角が分からない不安を除けば、夜間飛行も楽しい。

俺は見えないインカムに声を落とした。

「今日はありがとう、イース。着替えまで用意してもらって。この服、貰ってもいいかな、買い取るから」

耳元に声が響いた。

「もちろんあげるよ。きみのお父上に頼まれていた物だし。実は昼食代込みの特別手当てで、結構貰ってるんだよね。友達をツーリングに連れて行くだけで稼げるなんて、良いバイトだよ、本当」

「ぼくは金づるか」

「冗談だよ、半分。とにかくそのマグルの服はきみの物だ。今度またツーリングする時に着ればいいよ。今度はロンドンかな」

「そうだな」

俺は頷いた。

足元の不思議・2

一時間のフライトを経て、マルフォイ邸に到着。

空のツーリングは爽快な体験だった。反省点を言えば、万全だと思っていた防寒対策がまだまだ甘かったことくらいだ。とくに剥き出しの耳が千切れそうに痛い。俺を門まで送ると、イースは「早く熱いシャワーを浴びたい」と、箒から下りることなくそのまま自宅に飛んでいった。

遠乗りから帰ってきた息子を、マルフォイ夫妻は笑顔で迎えた。ホールのご先祖たちも、子孫の帰還にほっとした様子だった。

夕食の場で土産話をさせられ、暖炉の暖かく燃える居間に移動した後もそれは続いた。

家への土産として買ってきた紅茶とショートブレッドは、何の反感もなく受け入れられた。土産は無難なのが一番だ。

「あ、そうだ。父上、お小遣いありがとうございました」

「足りたか」

「はい。使った残りをお返ししたいので、後で書齋に伺ってもよろしいですか」
父上は俺の買ってきた物をちらりと見てから「いいだろう」と頷いた。



代々の当主が使っている書齋で、父上は机の前に陣取った。俺と父上を隔てるクルミ材の机の上には、ペン皿にインク壺、羽根ペン、銀のペーパーナイフ。それらを照らすランプ。隅に新聞。背後の本棚には、本以外にも怪しげな骨董品が並んでいる。

俺は余った小遣いを返した。茶封筒が無かったので紙に包んである。それを父上は無造作に机の引き出しに放り込んだ。

「小銭はそのまま取っておくかと思ったのだがな。マグルの金は触るのも嫌か」
「そういうつもりではありません。ぼくよりも父上のほうが使う機会があると思つて、お返しただけです」

息子に社会勉強をさせるなら、小遣いとして渡すのはガリオン金貨でも良かった。そうすれば通貨の両替から経験できたはずだ。その手間を省いたのは、日頃から手許にポンドがあり、日常的に使っているからだろうと考えた。

「ひょっとして父上は、非魔法界にお詳しいのではありませんか」

僅かな沈黙の後、机に置いてあった新聞がこちらに寄越された。

父上が毎朝読んでいるのは、政治経済をメインに扱う、地味でお堅い魔法界の高級紙『モイライ』だ。原作に登場する『日刊予言者新聞』は、派手なタイトルと写真で煽る、タブロイド寄りの大衆紙。

しかしここにある新聞は、そのどちらでもなかった。今日の日付のタイムズ紙だ。保守党の党首選でサッチャー首相が云々、と一面に出ている。え、サッチャーってこの時代もまだ政治家やってたの、と驚くべきはそこでなく。

「魔法界の新聞ではありませんよね。父上はマグル嫌いに通っているのに、よろしいんですか」

原作のルシウス・マルフォイは反マグル派の代表格だった。マグル最員のダンブルドアとは、その件でも反目しあっていた。この夢の中でも、父上が非魔法使いを蔑む発言をするのを何度か聞いている。『マグル生まれのせいで魔法界が荒む』とか、『マグル生まれに譲歩しても連中はつけ上がるだけだ』とか。だから非魔法界の物もなるべく遠ざけているだろうと思っていた。今朝までは。

父上は俺の思い込みを軽く冷笑した。

「混同するな、ドラコ。マグルとマグル生まれは別物だ。こちらに干渉しない者まで嫌っているわけではない。彼らが自分たちの社会で作り上げてきたものも、否定はしない。私が嫌いなのは、我々の先祖が作り上げてきた魔法の恩寵に与っているくせに、魔法界のルールや伝統は都合良く無視する、厚かましい新参者たちだ。連中が魔法界の人口を補っているのは確かだが、その増加し続ける割合も問題だ。数の多さを恃んで、マグル生まれに魔法界を好き勝手に変えられてはかなわん」

「マグル生まれの存在自体は、お認めになるんですね」

「忌々しいが仕方ないだろう。我々のような由緒ある家が魔法界を担っていくべきだが、純血だけでは人口を保てず、いずれ先細る」

そういえば、家庭教師が言っていた。マルフォイ家は外国の血を入れることで、家が断絶するのを防いできた。ドラコやルシウスの色素の薄い容姿は、北欧系の血を引いている証拠だそう。古い血脈を守るために新鮮な血統を受け入れる必要があると、父上が理解していて不思議はない。

「話を戻すと、私もマグルには関心がある。下品なウィーズリーとは動機が違うが

な。傾倒しすぎなければ、おまえもマグルの社会に興味を持って構わんぞ。誰が権力の座にあって、何を欲しているのか。権力者でなくてもいい。一般のマグルは何に魅力を感じ、求めているのか。それを知っておくのもマルフォイ家の当主の務めだ」

「務め？」

ぽかんと口を開けた俺に、父上は説明を始めた。

「マルフォイ家の富の基盤について、おまえもそろそろ知っておいてもいいだろうな。……千年前、フランスから渡ってきた初代当主のアルマンドは、征服王ウィリアム一世に協力した見返りに、この土地を手に入れた。それ以来、マルフォイ家はマグルの権力者に陰ながら『助言』と『助勢』を与え、土地や財宝、権利といった報酬を受け取ってきた」

「助言、ですか」

「マグルには不可能な、魔法的な支援だ。機密保持法ができて、魔法界がマグル社会から遠ざかってからのほうが、むしろ我が家の価値は上がったと言える」

国際機密保持法は、映画『メイインブラック』で宇宙人の存在を一般人から隠匿

している設定の、いわばハリポタ魔法バージョンだ。もし魔法を使うところを非魔法界の一般人に目撃されたら、目撃者の記憶を改竄してでも魔法の存在を隠さなければならぬ。

しかし、機密保持法によって非魔法界との接触を禁じられれば、マルフォイ家はむしろ痛手を被るのではないか。

「何事にも抜け道はある。マグルに直接魔法の存在を伝えるようなことは止めたが、接触は断っていない。要は、先方がこちらを魔法使いだと気付かなければいいのだ。水面下での取引は今も続いている。興味があればホールのご先祖たちにも聞いてみるといい」

俺の表情を見て、父上は僅かに口角を上げた。

「納得がいていないようだな。マグル無くして我が家の繁栄はありえない。蜜蜂がいなければ蜜を集めることはできないし、蜜蜂を嫌う養蜂家はいない」

宿主を見下す寄生虫の言い分だな、とは心の中で呟いた。

「ですが、父上は魔法界がマグルに接近することを快く思われていませんよね。時々『モイライ』を読みながらダンブルドア派の主張に文句を言われていますし、ご先

祖の中には反マグルの論陣を張った人もいます。それはなぜですか」

父上は俺の返した新聞の上で手を組んだ。

「かつて我が家がマグルの権力者と蜜月の関係であったことを覚えている者や、今も繋がりとあると疑っている者がいる。そうした者の目を逸らす必要がある。さすがに機密保持法を覆すことはできないからな。加えて言うならば、マグルに無知な者が多くなってくれたほうがいい。マグルに詳しい魔法使いが少なければ少ないほど、我が家の競争相手は減る」

「市場の独占ですか」

「社会科の勉強はしっかりやっているようだな」

ここまで話してくれる機会は滅多にないだろう。俺はついだとばかりに無邪気に言った。

「しかしそれが我が家の方針だとすると、父上が『例の人』派だったという噂はどこから出たんでしょうね。『例の人』とその支持者は、純粹な魔法族だけで完結したコミュニティを作り上げることが目的だったと、授業で教わりました。父上は、何と言いましたか、特に熱心な支持者だと疑われたこともあったとか。失礼な話で

すね。マルフォイ家とは全く違う考えかたに間違われるなんて」

憤慨してみせると、父上は苦笑した。

「誤解ではない」

「え？」

「おまえにはまだ話していなかったか。私はかつて『あの方』の許でデスイーターとして活動していた。つまり中心的信奉者のグループにいた」

「そうだったんですか」

知ってるけどね。

この夢の中でもルシウス・マルフォイがヴォルデモートの部下だった事実があるのかを確認したかった。血生臭いことに巻き込まれたくないので、接点のないことを願っていた。しかし残念なことに、彼らの関係は原作通りのままだったようだ。

「なぜですか？ 我が家の方針とはどのように折り合いを付けられたのですか」

父上の苦笑が歪む。組まれた手に僅かに力が籠もった。

「一言で言えば、私も若かった。あの方と出会い、その主張するところに心惹かれたのは、まだ学生の頃だった。しかし家を継いで物の見方が変わると、あの方の極

端な主張とやり方について行けなくなった。ナルシッサと結婚しておまえが生まれたのも大きい。あの方の目指すところに、私の未来はないと思ったのだ。

それでデスイーターから離脱しようと、魔法省に駆け込んだ。今思うとタイミン
グが良かったな。直前にポッター家の惨劇であの方が亡くなり、指導者を失った
者たちは混乱に陥って、私を追うどころではなかった。その後、多くの仲間がデス
イーターとして有罪判決を受けた。その一方で私は不起訴になった。しかし私を潔
白だと思っている者はいないだろう。保身のために転向したのだから、それも当然
だ」

「それは、何というか……」

若気の至りでカルトやアカに入信して幹部になったものの、足抜けするために公
安と取引した人の話を聞いた気分だ。

「昔の仲間に裏切り者だと恨まれたりしませんか」

「今も日の下を歩いている元仲間は、私と似たり寄ったりの転向者だ。心配ない。
怖いのは、今現在デスイーターとして服役している者たちだな。特赦か何かで出所
したら、恨みを晴らしにやって来るかもしれん。だが心配しなくていい。おまえと

母上の身くらい守ってやる」

「お願いしますよ、父上」原作でヴォルデモートが復活したら、すぐに全面服従したくせに。

俺の返事のおざなりさが伝わってしまったのか、父上は困り顔になった。

「その扉付きの棚を開けてみる」

指し示されたチェストを開けると、中にはファイルがぎっしりと並んでいた。

「私が不起訴になった時の記録と一緒に、デスイーターとそう疑われた者たちの裁判記録をまとめてある。私の昔の知り合いを警戒するつもりなら、見ておいて損はあるまい。ただし誰が本物だったのかは聞くな。有罪となった者の名前だけ分かればいいだろう。もちろん、その中に記してあることについては一切他言するな。書類もこの部屋から持ち出さな。それさえ守れば中を見てもいい」

俺は父上を振り返った。

「ぼくのような子供がよろしいのですか」

いくら何でも小学生に見せるべき物ではないだろう。そんな心配も込めての確認だった。しかし父上は面倒そうに手を振った。

「構わん。他人から適当なことを吹き込まれる前に、自分で客観的な資料に当たってみろ。母上の前で余計な疑問を口にしなかった分別があれば大丈夫だろう。おまえはきっと、おまえ自身が思っているよりも成長している。魔法を使えない間に十分に苦悩したお陰だな」

「そこまで買って頂けるなら、心して拝見します」

父上のいる時間なら翌日以降も書斎に入ることの許されたので、その日は引き上げた。



そうして日を改めて資料を引っ張り出していたら、見つけてしまった。

黒い表紙の日記帳。

中は真っさらで新品同様だったが、名前が記されていた。

——間違いない。

父上が席を外した隙に、急いでそれを廊下の隅に隠した。そして父上が戻ってきたから、何食わぬ顔で堂々と退室。廊下で日記帳を回収して自室に持ち帰った。日記帳は裁判記録ではないから、持ち出しても父上の言いつけを破ったことにはなら

ないだろう。しかし原作通りの代物なら、即座に取り上げられかねない危険物だ。警戒しながらペンを手に取る。

まずは、何も知らないふりで、各ページの隅に番号を振っていく。最終ページまで辿り着いた時、俺の書いていない文が中央に浮かび上がった。

『ナンバリングは完了ですね』

ページを遡って確かめてみれば、痕跡も残さず全ての番号が消えている。そこで適当な見開きに、今度は下手な落書きを描いてみた。蠟燭の立ったバースデーケーキの絵だ。蠟燭の数は十二本にした。

すると落書きが消え、隣のページに別の文が浮かび上がった。

『今日はあなたの誕生日ですか？ おめでとう』

『これは何だ』

俺が書き込むと、その問いを待ちかねたように新たな文が現れた。

『ぼくはトム・リドルの記憶です』

知っとるわ。映画で観たわ。

e
t
▽
D
a
r
k
T
r
a
n
q
u
i
l
l
i
t
y
▽
T
h
e
W
o
n
d
e
r
s
A
t
Y
o
u
r
F
e

掘り起こしたもの・1

古い日記帳に宿る記憶の悪意に、一人の少女が体を操られる。ハリポタシリーズ第二作『ハリー・ポッターと秘密の部屋』は、そんなホラーじみた話だ。

トム・リドルと名乗ったその記憶の正体は、まだ本名を使っていた若き日のヴォルデモート。後に魔法界をも手玉にする話術と魔法で、リドルの記憶は少女の精神を浸食していく。

そんな物騒な日記を少女に押しつけるのが、ルシウス・マルフォイ。彼はヴォルデモートに託された日記帳の処分に困っていた。その揚げ句、こっそりと他人の荷物に日記を忍ばせた。まさかそんな扱いをされるとは、ヴォルデモートも思わなかっただろう。予想していたら決して彼には預けなかったに違いない。日記帳に隠されていたのは、記憶だけではなかった。分霊箱の魔法で分割された、ヴォルデモート自身の魂の一部も密かに込められていたのだ。

原作終盤は、「イギリスに点在する分霊箱全てを破壊し尽くさないと、何度ラスボスを倒しても復活するよ」という設定に基づくイベントだった。その辺りは俺も

眠くてしっかり観ていない。

とにかく原作第二作にあたる時期までは、日記がこの屋敷にあるのは当然だった。俺は机に開いた日記帳を眺めた。よく思春期の頃の自意識が爆発した思い出を、他人に託す気になれたものだ。ヴォルデモートという人は、ある意味では確かに大人物だった。

ページに浮かんでいた『ぼくはトム・リドルの記憶です』という文が、ゆっくり消えていった。

深入りするのは危険だが、少しは試してみたい。俺はペンのインクを付け足した。『トム・リドルとはどのような人物か。自分は記憶であるとは、どのような意味か』書き込んだ文字のインクが紙に染みこんで消え、代わりに書いていない文字が湧いてきた。

『ぼくは、ホグワーツ魔法魔術学校に在学する学生です。正確には、その当時の多くの意識が日記に転写されたものです。実体はありません。日記帳を通してあなたと会話するだけの存在です。あなたが十二歳ならぼくのほうが年上ですから、色々と相談に乗れると思います。気軽に尋ねてください』

捲し立てるように、一気にそれだけの文章が浮かび上がった。相手が俺を十二歳だと予想しているのは、俺がケーキの上に十二本の蠟燭が乗った絵を描いたからだ。文字以外の情報も処理できることが分かった。

『そういう設定の架空の擬似人格か』

『本物のぼくは実在しています！ あなたからしたら大昔の人間なので、本体はもう死んでいるかも知れませんが』

『今が何年なのか知っているのか』

『分かりませんが、前回この日記帳に書き込まれた時点で、ぼくが生きた時代から随分経っていました。そちらは何年ですか。あなたの名前を教えてくださいませんか』

『知る目的』

『会話の糸口にしてくれて。あなたのことを何と呼べばいいか教えて下さい』
どうしようかな、と悩む間に文が浮かぶ。

『前にぼくと会話してくれたのは、ルシウス・マルフォイという若者でした。あなたは彼に近い人ではありませんか？』

俺は日記帳とペンを持って一階のホールに下りた。そして先祖たちの肖像画の中

の一枚に話しかけた。

「お祖父様、アブラクサスお祖父様！ お話があります」

ドラコの祖父は額縁の中から孫を見下ろした。尊大そうな薄灰色の目が、ルシウスとよく似ている。

「何か用か、ドラコ」

「お祖父様はトム・リドルという名前に、お心当たりはありませんか」

老人は記憶を手繰るように少し目線を漂わせた。やがて「ああ」と頷いた。

「私の若い頃だから半世紀は前になるが、そんな名前の後輩がいた。首席で卒業したのに、その経歴を活かせなかった残念な男として有名だった。それがどうした」
「不思議な日記帳を見つけました。擬似人格が与えられていて、会話をする事ができます。それがトム・リドルの学生時代の記憶だと名乗っています。筆談になりますが、少し昔話でもなさいませんか」

薄灰色の目が細められた。

「おまえはもうそれとやり取りしたのか」

「少しだけです。こちらの名前も、場所も時代も明かしていません。ですが昔父上

が名前を明かしてやり取りしたことがあるらしくて、ぼくもマルフォイ家の者だと疑われてはおります」

「名前は呪術において重要な要素だからな。その帳面に掛かった魔法の正体が分からない限り、おまえの情報になるべく与えてはいけないよ。私がどうにかごまかしてみよう」

「ありがとうございます」その言葉を待っていた。

ドラコの祖父とヴォルデモートが同年代という話は、USJで順番待ちしている時に、俺の彼女に聞かされていた。どんな詐欺師でも、昔の自分を知る第三者が詐欺の現場に居合わせたらやりにくいだろう。考えてみると、生前の性格をトレースした擬似人格という点で、肖像画とトム・リドルの日記は似たようなものだ。どんな会話をするやら。

俺はアブラカサス爺さまの口述したことを日記帳に書き込んだ。

『トム・リドル。ここにいる私の姿は見えるか』

『ああ！ 会話を続けてくれるのですね。残念ながら、あなたの姿を視覚で捉えることはできません。ぼくが受け取れる外界の情報は、日記帳のページに落ちるイ

ンクの模様だけです』

トムの返事を伝えると、爺さまは「よし」と頷いた。

『では、こちらのことを伝える前に一つ知りたい。以前に対話したという、ルシウス・マルフォイとの話題は何か』

『話らしい話もしていません。互いに名乗り合ったくらいで、突然「がらくた」と書き込まれて、それきりです。子供のおもちゃと思われたようですね』

「こんな邪悪な玩具があつてたまるか」と、爺さまは唇に笑みを浮かべた。

父上は、詳しいことをヴォルデモートから聞かされないまま日記帳を預かったようだ。偶然リドルと対話する機会があつても、その正体を理解しないまま、つまらない物だと興味を無くした。そして過去の思い出として棚にしまいこんだことすら忘れて、息子にその棚を開けさせた。流れとしてはそんなところか。

『日記帳に宿るミスター・リドルの設定は何歳か』

『設定と言われると悲しいですが、十六歳だと自覚しています』

『では特別功労賞で学校から表彰された頃か。あれは元スリザリン生として私も誇らしかった』

日記帳の中の人は明らかに動揺した。文字が乱れた。『あなたは誰ですか』

「お祖父様。あなたは誰だと日記の人が聞いています」

「ルシウス・マルフォイの縁者のアブラクサスだと答えなさい」

書き込むと、白いページにゆっくり文字が浮かんできた。

『ぼくより上の時代のスリザリンに、アブラクサス・マルフォイという人がいました。あなたと同じ名前ですね』

『その通り。同一人物である』

それから反応が返ってこなくなった。

「日記の人は何か考え込んでいるようですよ、お祖父様」

「ははは。混乱しおったな。それとも嘘だと判断したか。ルシウスから私の死を聞いていたのかも知れんな。ではこうしてやろう」

『正直に書こう。ルシウスとは私、アブラクサスの人格の一つだ。長らく体の主導権を争っていたが、ようやく主人格の私に統一することができた。ルシウスを名乗る私が何を書いたかは覚えていない。ゆえに仕切り直しておまえの時代の話でもしよう』

『ぼくはそちらの時代のことを知りたいのです』

『では卒業後のおまえが、いかに燻っていたかについて話そうか、ヴォルデモール』
すると風もないのに白いページがパラパラと捲られていった。最後にパターンと表紙が閉じて、日記帳は沈黙した。

嘘交じりとはいえ、衝撃発言を詰め込みすぎだ。一応確認しておこう。

「ヴォルデモールというのは、『例の人』の名前に似ていますね」

「似ているどころか、同じ名前だ。昔はそういう呼び方もされていた」

「では、トム・リドルという人は、『例の人』と繋がりがあるんですか」

後のリドルがヴォルデモートを名乗ることは、原作知識としてある。しかしそれを知る人物が、ダンブルドア以外にも現れるとは思わなかった。アブラクサスの肖像は力強く頷いた。

「間違いない。ヴォルデモールはトム・リドルのことだ。校内でも仲の良い者にそう呼ばせていると、別の後輩から聞いたことがある。詩人か役者気取りかと、そやつは笑っていた。その後魔法界を騒がせ始めた頃には、もう本名は名乗っていないかったし、私は知らんが、外見も随分と変わっていたようだ。その容姿の崩れぶり

が衝撃的だったのか、リドルの知り合いでヴォルデモールの正体を声高に言う者はいなかったな」

「正体が分かっていたのなら、止めようとはお考えにならなかったのですか。彼の、その、何と言いますか」

「彼の蛮行をかね」

俺の言い淀んだことをあっさり口にする、爺さまは苦く笑った。

「当初は、彼の主張を荒唐無稽だと笑い飛ばす者が多かった。出自も明らかでない男の誇大妄想だ、真面目に相手をするほうが馬鹿らしい。格式ある家ほど、そう考えた。しかし、気付けば彼とその同調者は手の付けられないほど勢力を拡大していた。敵対するのは家の存続に関わった。敵に回れば一族郎党皆殺しの憂き目に遭うかと思えば、静観するのが賢いやり方だった。それなのにルシウスの奴は……」

話が脱線しかけた。老人もそれに気付いた。

「まあ、済んだことだ。今は曲がりなりにも平和になった。ともあれ、これでその帳面はおまえとの対話を望まなくなったはずだ。すぐに父親に事情を話して——いや、元々ルシウスの持ち物か。それを父親に返してきなさい。その時に、私のとこ

ろまで来るよう伝えなさい。それは子供が触るには危険だ。対話する者から情報を引き出そうとする意図が感じられる」

俺は黒い日記帳を抱えて立ち上がった。

「あの、お祖父様……。実はこれは書斎から勝手に持ち出した物なのです。父上には黙っていてもえませんか。お願いです」

父上に知られても、言い逃れる自信はある。それが駄目なら日記帳のせいにしてしまえばいい。そもそもリドルの日記には、手にした者が心惹かれるような仕掛けがされている。原作のハリーもジニーも、それに引っ掛かっていた。

あれ、もしかして俺もそうだった？

「なぜ書斎に入った、ドラコ」

「忍び込んだわけではありません。父上から資料を見てもいいとお許しを得て、それでこの日記帳を見つけました」

一度は厳しくなった老人の眼光が和らいだ。

「それならおまえばかりを責めるわけにもいかんか。ドラコ、この祖父と約束できるか？ その帳面を元の場所に戻したら、二度と触らないと」

「約束します。あ、捨てるために触る可能性があるので、二度と書き込まないと誓います」

「条件を緩くしておって」

爺さまは苦笑した。そして「日記帳のことは話さないからルシウスを連れて来るように」と言った。

翌日には、トム・リドルの日記帳は裁判記録の詰まった棚から消えていた。「子供の手の届く所に危ない物を置くな」と爺さまに言われて、父上が移動させた。それで俺には保管場所が分からなくなってしまった。

惜しいことをした。

掘り起こしたもの・2

ある日、書齋から出てきたところを母上に捕まった。

「ドラコ、少し来なさい」

連れて行かれた先は母上の部屋だった。

ベージュと渋めの青をメインの色調とした、落ち着いた部屋だ。壁際には、大女優が使っていたようなドレッサーが、どんと構えている。そのドレッサーの前の椅子に座らされた。母上は向かいのベッドに腰を下ろした。

「ここ最近、お父様の書齋で何をコソコソやっているのです」

母上は背を伸ばし、真顔でこちらを見据えている。返答次第では説教コースだ。叱られるようなことはしていないので、こちらも堂々と答える。

「コソコソとは心外です。父上のお許しを得て、父上のいる時にお邪魔しているだけですよ」

「そう？ それで何をしているの」

「将来のために、書齋にある書類を見せてもらっています」

父上が集めたデスイーターの資料は、なかなか読み応えがあった。対象人数が多いので、公になっている裁判記録だけでも相当な量がある。どうやって手に入れたのか、魔法省の捜査資料であった。それに加えてヴォルデモートの時代を総括する新聞や雑誌の記事。それらを総合すれば、大体の事情は見えてくる。

——かつて、ヴォルデモートと名乗る魔法使いが彗星の如く現れた。彼の掲げた極端な選民思想は、それまでの魔法界に閉塞感を抱いていた人々を惹きつけた。

しかし社会を変えるほどの力はなく、彼とその支持者は、次第に過激な実力行使に訴えるようになっていった。その暴力に晒される立場の者や、治安を維持する者たちは、当然それに抵抗した。魔法界は二つに割れた。血生臭い抗争は、イギリス魔法界に嵐の時代をもたらした。

嵐を呼び込んだヴォルデモートを人々は恐れた。その名を口に出すことも憚られ、いつしか彼は「例の人」「件の男」、支持者からも「闇の帝王」と呼ばれるようになった。

その状況に終止符が打たれたのは、ハリー・ポッター一歳の時。ポッター家を自ら襲撃したヴォルデモートは、突然消息を絶った。それ以後、彼はいかなる活動も

表明もしていない。魔法省は彼の死を公式に宣言した。

ヴォルデモートの「死」後、信奉者たちの反応は三つに分かれた。徹底抗戦を叫んで過激な破壊活動に突き進んだ者。急激な情勢の変化を嗅ぎとり、それまでの仲間を売ってでも保身を図った者。状況についていけず、従うべき頭を失い、右往左往しているうちに逮捕されてしまった者。信奉者の中心グループ、デスイーターでさえそうだった。旗印を喪ったヴォルデモート派は、あつという間に瓦解した。確信犯の過激派と、要領の悪い有象無象は、今も一部が刑務所で服役中だ。

一部。当局に検挙された者のほとんどが釈放された。というのも末端の活動員まで有罪にすると、魔法界が機能不全に陥ってしまう恐れがあったのだ。「友人の友人はデスイーター」と言えるほど、大勢の者がヴォルデモート派に関わっていた。その影響で、本物のデスイーターだったルシウスも嫌疑不十分で釈放された。決して表舞台に上がらなかったのが功を奏したと言える。彼の担当は裏工作と資金調達だった。まして「助言」や「援助」だけで、責任を取らずに甘い汁を吸い続けてきたマルフォイ家の人間だ。裏工作に証拠を残すことはなかった。

こうして「限りなく黒に近い灰色」だったルシウスは、今も堂々と日の下を歩い

ている――。

というわけで、この夢の中の「過去の事実」は、概ね原作の設定を踏襲していると思われる。

「将来の……。学校に行く前に、家のことを勉強し始めたということかしら」

母上は小首を傾げた。

捜査記録によれば、ナルシッサは実姉や夫と違い、デスイーターにはならなかった。抗争にも積極的には関わらなかった。当時の捜査資料の、「彼女は自分のささやかな世界の平和にしか関心がない」という指摘は、おそらく正しい。だから父上も俺に資料を見せる件を、母上に伝えていないのだろう。

「それもありますが、魔法界の人の情報を仕入れています」

「ああ、紳士録ね。あまり書斎に長居して、お父様の邪魔をしてはいけませんよ」
「はーい」

母上はほっとした様子で俺の傍に寄り添った。

「そんなに急いで大人になろうとしなくていいのに。ドラコはまだ怖いのですか」
「怖い？」

「お母様はいつでもあなたの味方ですからね。たとえスクイブでも見捨てないと言ったでしょう。あなたが頑張るからお母様もついつい次の魔法を教えたくなりませんが、それが追い詰めているのなら、もう無理強いはいしないわ。立派な紳士になってくれたら、それは嬉しいけれど、無理して大人のふりをする必要はありませんよ」大人のふり、か。

「無理をしているつもりは無いのですが」

「そうかしら。杖が使えなかった時期に、お友達とも『気が合わなくなった』と遊ばなくなったでしょう。魔法使いでないことを知られたくないからだと思っていました。けれど杖が使えるようになってからも会わないまま。同じくらいの歳の子と遊ぶのに興味を無くしたみたい」

「テオとはまた遊んでいますよ」

「あの子は大人びていますからね」

「では、ぼくも大人びてきたということでは」

すると横から母上に抱き締められた。

「そうならなければいけない理由があるの？ お母様と一緒にのんびりするのは子供の

ままでいなさいな」

ああ、と俺は両手で顔を覆った。「……申し訳ありません」
上から髪を撫でる優しさに、しばらく顔向けできなかった。



家庭教師の授業がない時間に、庭に出た。

マルフォイ邸の敷地は、整備された庭園部分と、鬱蒼とした森林部分に分けられる。

夏に虫取りで歩き回ったのをきっかけに、俺は森にもよく足を運ぶようになった。クワガタが山ほど取れるが、カブトムシもセミも見つからない森だ。今、木々はすっかり葉を落とし、幹や枝を露わにしている。

木立の奥で何かが動いているのを見掛けた。敷地の周囲には侵入者除けの魔法を巡らせてあるから、迷い込むとしたら動物だ。しかしそこにいたのは獣ではなかった。

「やあ、ドビー」

原作にも登場するハウスエルフは、びっくりと肩を竦ませてから振り返った。

何をしているのかと尋ねると、手にしていた袋を広げて見せてくれた。麻袋の中には、蔓やら枝やら木の実やら。

「ごみ拾いか？」

「ドビーは、輪飾りの材料を集めていたのでございます」

と、彼は独特の言葉遣いで答えた。

「ああ、クリスマスリースか。おまえが作るのか」

「ドビーだけでなくアビーも作るのでございます。アビーが材料にあれこれ注文を付けるので、ドビーは色々沢山集めなければなりません」

「ふーん。手伝おうか」

「いいえ！ いいえ！ 坊ちゃまのお手を煩わせてはドビーが奥様にお叱りを受けます！ 坊ちゃまはご覧になるだけで、ええ、決して手が足りないということはありませんから、全てドビーめにお任せを！」

「あっそう。邪魔するつもりはないから、作業に戻っていいぞ」

ドビーは木の実拾いに戻った。

彼と普通に会話できるようになったのは、つい最近だ。以前は酷かった。すぐに

自傷行為に走り、話しかけても怯えてばかりで、まともな会話が成り立たなかった。原作でドビーがハリーの部屋に初めて現れた時の状態。それが常に続いていた感じだ。

それはドラコのせいだった。

この夢の、俺の意識が乗る前のドラコは、原作同様にドビーたちハウスエルフを虐めていた。両親はそれを止めるどころか、むしろ推奨する節さえあった。ハウスエルフを使い捨てる道具と見る家で育った母上と、自分が身内だと認めた者以外には冷淡で残酷な父上。そんな両親がハウスエルフを奴婢同然に扱うのを見てドラコは育った。お陰でハウスエルフには何をしても良いと勘違いした。

だが俺に同じ事は出来ない。悪感情を抱いていない使用人をいびって楽しむ趣味はない。彼らは仕事の手を抜くことも、何かを盗むことも、主人の陰口を叩くことも、待遇に不満を言うこともない。ひたすら熱心に家の仕事に勤しむだけだ。

原作通りのドラコを演じるなら、彼らを虐めるべきかも知れない。でも無理だった。俺自身も労働者だ。パワハラ反対。

「坊ちゃんはいつまでここにいらっしやいますか」

「邪魔だから向こうに行けって？」

「そ、そんなことは申しでないのです。お時間があります。お時間がありません。またドビーがハリー・ポッターの話を差し上げるのでございます」

彼はハリーを英雄視している。主人のルシウスに遠慮して、ヴォルデモートを斃したハリーに憧れていることは隠していたが、俺が吐かせた。それからたまに彼から「英雄ハリー・ポッター」の話を聞くことにしていた。弾丸トークに付き合うのは疲れるが、その甲斐あって俺への怯えも徐々に薄れてきた。と、思いたい。

「もしハリー・ポッターの身に危険が迫ったら、きっとおまえは我が家の仕事を放り出して駆けつけるんだろうな」

ハウスエルフは飛び上がった。「ハリー・ポッターが危ないのでございますか！」

「もしもの話さ。それくらい好きなんだろうと言ったんだ」

小さな手が麻袋の口をぎゅっと締めた。

「ドビーは、マルフォイ家に仕えるハウスエルフでございます。お許しもご命令もなく、他家へ飛ぶことはできないのでございます」

俺は笑った。原作では主人に背いて、無断でハリーの所に押しかけたじゃないか。

「おまえの忠誠心がこの家に無いことは分かっている。そうさせたのはぼくだな。おまえには本当に悪いことをした。母上も父上も相当酷いが、一番酷かったのは息子だ」

「そんな。お詫びの言葉は以前にも頂戴しました。だからそのことはもう、坊ちゃんま」

狼狽する相手に、謝るだけでは駄目かと、別のやり方を考える。

「そうだ。もしおまえがハリー・ポッターの所へ行きたくなったら、一度だけ、それをぼくの命令に従ったことにしていいいぞ。ぼくが服を与える訳にはいかないから、完全な自由にはしてやれないが」

ハウスエルフに服を与える。つまり永の暇を与えることが出来るのは、正式な主人である父上か、女主人の母上だ。

原作では、ハリーの小細工により、ルシウスが捨てた物をドビーが拾うという形で、マルフォイ家とドビーの契約は終了した。それまでは主家への隷属とハリーへの思いに板挟みになって、ドビーの行動は支離滅裂だった。映画を観た時は、かなり鬱陶しく感じたものだ。その時の悪印象が尾を引いて、後々までもドビーという

キャラクターには好意を持てなかった。

しかしこの夢の中では、ドビーは俺の世話をしてくれる、ありがたい存在だ。虐待を受けて萎縮していた彼には、俺のせいではないが申し訳なく思う。

「坊ちゃまはドビーめを追い払いたいと、そうお考えでございますか」

「そうじゃない。ドビーもコビーもアビーもいてくれないと困る。おまえたちがいないと、この屋敷は回らないだろう」一人くらい欠けても問題ないとは思うが。

ドビーは一度俯いてから顔を上げ、何かを言おうとした。

その時、「坊ちゃま！」と別の方角からハウスエルフの金切り声が飛んできた。アビーが宙を滑るように走ってきた。

「ドラコ坊ちゃまは、今すぐお屋敷にお戻りにならなければなりません。家庭教師がお見えでございます」

「ああ、もうそんな時間か」

「お急ぎになるのでございます。なぜドビーが坊ちゃまのご予定に気を配らなかったのか、アビーには不思議でなりません。弛んでおります。折檻されるべきでございます」

「返す言葉もございません」同僚の怒りに、ドビーは身を縮めている。

「怒らないでやってくれ、アビー。時間管理できないぼくが悪いんだから」

屋敷の方角に歩き出そうとしたら、ドビーに腕を掴まれた。

「せめてお部屋までお連れするのでございます」

彼は俺を連れていきなり「跳躍」した。

お陰で教師を待たせずに屋敷に戻ることはできた。だが跳躍酔いが治まるまで、授業の開始は遅れてしまったので意味はなかった。ドビーは自分で自分に折檻していた。

掘り起こしたもの・3

ある日、ドビーが俺宛に届いた手紙を部屋まで持ってきてくれた。差出人は父上の友人、セブルス・スネイプだった。

年賀状をやり取りするより気楽に、イギリスでは十二月に入るとクリスマスカードを送り合う。

ドラコ個人がカードをやり取りする相手は少ない。友人といっても家同士の付き合いの延長、情性の繋がりがほとんどだ。だから去年までは、親のカードに便乗して名前だけ載せてもらっていた。なお、実際にはそれも俺が夢を見始める前の設定に過ぎないが、面倒なので、この夢における「過去の事実」ということにしておく。

しかし今年は家庭教師以外の知り合いにも、ドラコ個人名義でカードを送った。物珍しさに買ってもらった魔法のクリスマスカードを、どうにか消費する必要があるからだ。開くと雪の幻が舞う仕掛けのあるカード。印刷されたサンタをタッチ操作して、イラストの靴下にプレゼントを届けるミニゲーム付きのカード。そういったカードに対する返事が、先方からも届き始めていた。

スネイプからのものは、エンボス加工しただけの素っ気ない白いカードに、「きみの入学が楽しみだ」と読みやすい字で書いてあった。こちらから「来年ホグワーツに入学します。よろしく先生」と書いて送ったから、その返事になる。

とりあえず暖炉のマントルピースの上に、他のカードと一緒に並べておいた。振り返るとドビーがまだいた。神妙な顔をしている。

「どうした」

「この前の、ドビーがハリー・ポッターの所へ行くのをお許し頂けるといってお話でございます。やはり坊ちゃまは、何か良くないことが起きるとお考えなのではございませんか」

「単に想像しただけだ。生き残った英雄が反ヴォル……、『例の人』の反対派に担ぎ上げられて、逆にそれを良く思わない人たちから個人攻撃される可能性があるなと思っただけさ。具体的に言うと、ハリー・ポッターが魔法界に帰還したらダンブルドアの人気取りに利用されて、ダンブルドアを嫌いなうちの父上に目を付けられるとか、ありそうな話だろう?」

「さようでございますね」ドビーは感心したように頷いた。「ですが、それを仰る

のなら、坊ちゃまも危ない目に遭われるかも知れないでございます」

俺は思わず自分を指差した。

ドラコが自業自得の痛い目に遭うのは原作のお約束。それが深刻な状況になるのは六年生、早く見積もっても五年生以降だ。その頃に大変なのはドラコだけではない。他の同年代のキャラクターも、精神的・肉体的に苦痛を味わうことが多くなってくる。しかし、そんな未来の話をドビーが知っているはずがない。

「なぜぼくが危険なんだ？」

「世間は、旦那様が『あの人』の手先だったことを覚えているのでございます。マルフォイ家が古い血筋であることも、純血主義を掲げていることも、広く知られているのでございます。奥様のご実家が純血至上主義だったこともです。純血主義は『あの人』の主張でもございました。ブラック家の本家が消えた今、両家の血を引く坊ちゃまが純血主義の新しい象徴と見られても、おかしくないでございます」

「待てよ。ブラック家の当主は、まだ生きているだろうが」

「世間的にはもう死んだも同然です。ハリー・ポッターが魔法界に戻ってきたら、『あの人』がいた頃を思い出す方々もいるでしょう。だから危険なのです。過去の

恨みを、『あの人』の代わりに坊ちゃまにぶつけようとする輩が現れるかも知れませんが、

さすがにそれは無い、と笑い飛ばしたかった。しかしヴォルデモート云々は擱くにしても、ルシウスへの恨みをその息子で晴らそうとする者はいるだろう。というか、原作にいたな。

「大人の都合で振り回されそうなお立場は、ハリー・ポッターもドラコ坊ちゃまも同じでございます。でしたらドビーめは、坊ちゃまをお守りすべきなのです」

「でもおまえは、ぼくに虐められていたじゃないか。ぼくを憎んでいるだろう。憎い相手を守りたくないだろう」

するとドビーは身を震わせ、近くの壁にふらりと近づいた。「……ドビーにはもっとお仕置きが必要です」

彼は壁に頭を一回打ちつけた。

「坊ちゃまが杖の魔法を覚えるのに苦労されていると聞いた時、ドビーは喜んでしまいました。今までドビーを厳しく折檻されたからだ、いい気味だと思ってしまったのです。ドビーは本当に悪い子なのです」

ごん、ごん、と彼は額を壁に打ち続けた。

「同じ頃から、坊ちゃまはドビーにお優しくして下さるようになりました。虐めて悪かったと謝って下さいました。ハリー・ポッターの話も笑って聞いて下さいました。なのにドビーはそれを、魔法が使えず急に肩身が狭くなったからだ、当然のことだと思ってしまうました。悪い子です。悪い、悪い子です」

「仕方ないだろう。それまでがそれまでだった。もうその話は止そう」

ドビーは急に振り返った。額に不気味に血が滲んでいる。

「いいえ！ お聞き下さい！ 坊ちゃまは魔法が使えるようになって、ハウスエルフにお優しいままです。お陰で『悪戯』にお付き合いさせられて、ドビーが仕事を失敗することも今はなくなりました。その分だけ奥様や旦那様に叱られる回数も減りました。お仕置きを受けることもなくなりました。それでもドビーは、ただほっとしておりました。

けれどこの前、坊ちゃまは、ドビーたちがいないと困ると仰いました。ハウスエルフの存在をお認め下さいました。その瞬間、ドビーは自分がいかに悪い子だったか解ったのです。以前の坊ちゃまは、ドビーたちのことをご存知なかっただけ。そ

れはお伝えできなかったドビーが悪いのです。

だからどうか、これからも坊ちゃまにお仕えすることをお許し下さい。坊ちゃまを良く思っていないと思われるのは、とても辛いお仕置きでございます」

そう言って、またガンガンと頭をぶつけ続けるので、俺は慌てて壁から引き剥がした。

「解った。解ったから止める、ドビー。壁が汚れる」

「はい、申し訳ありません」

ドビーはけろりとして抵抗しなかった。

「坊ちゃま」

「なんだ」

「ご心配がおりなら、それを取り除くお手伝いいたします。坊ちゃまは、何を恐れておいでですか」

「恐れる？」

「はい。それでハリー・ポッターが危ないなどという話をされたのでしょ」

いつまで続くかも分からない夢の中で、俺が恐れていること。それはこの夢が悪

夢に変わる事だ。痛みや苦痛や恐怖といった、一般的な意味での悪夢だけではない。ドラコの中身が本物ではないとマルフォイ家の人間に知られ、彼らを悲しませることも怖い。

ドラコ・マルフォイは家族に愛されている。

息子が将来正しい判断が出来るように、家の秘密や自分の過去の過ちを明かしてくれたルシウス。

息子精神と肉体のアンバランスさに気付き、愛情を注ぐことで安定させようとしてくれているナルシッサ。

闇の帝王と恐れられた男の影を挑発してでも、孫への注意を逸らしてくれたアブラクサス。

そんな彼らと体感時間で半年も暮らしているうちに、俺もマルフォイ家に情が湧いてきた。自分だけでなく、彼らが苦しんだり殺されたりするような事態は避けたかった。原作の流れに沿えば、ヴォルデモートの復活と共に、マルフォイ家は精神的・経済的・社会的に翻弄される羽目になる。

それが怖い。

「ああ、そうか」

「何かお気づきになったのでございますね」

だからトム・リドルの日記が手の届かない場所に移された時、残念に感じたのだ。物語の流れを変えられる機会が遠ざかったから。今思い出しても、惜しいことをした。

俺はドビーを見返した。彼の大きな目は、真っ直ぐにこちらを見上げていた。

いっそ彼と二人、ヴォルデモートの分霊箱を破壊して回ろうかと本気で考えた。原作でレギュラス・ブラックが試み、ハリーたちが実行したように。

「ドビー」

「はい」

「今、ぼくの胸の内にある問題を明かすことはできない」

「……はい」

その思いつきを成功させたところで、ヴォルデモートの復活自体は防げない。足りない物も多かった。まだ子供の行動範囲は狭く、活動資金もなく、頼れる伝手もない。今のドラコの力量では、魔法で保護された分霊箱を破壊することも不可能

だ。そもその問題として、日記帳以外の分霊箱の所在がうろ覚えだ。

試しに挙げてみると、

・リドルの思春期日記…この屋敷のどこか（父上が簡単に捨てられたとも思えない）

・ハリー・ポッター…ロンドン近郊のどこか（住んでいる町や通りの名前は忘れた）

・ペットのアナコンダ…知らない

・ペンダント…どこか海辺の洞窟にあったのは偽物なんだった？

・金のカップ…レストレンジ家がグリンゴッツ銀行に借りている金庫の中

我ながら酷い。

カップだけ詳しく覚えているのは、ベラトリックス・レストレンジの出番はしっかり等速で観たからだ。あのヘレナ・ボナム＝カーターが俺の伯母なんて、夢でも嬉しい。彼女の出演作では『ファイト・クラブ』『英国王のスピーチ』が好きだ。バートン作品は好きでも、その中でのヘレナはそれほど好きではない。『ビッグ・フィッシュ』はまあまあ好きだが。

話が脱線した。

分霊箱は他にもまだあったはずだが、今は思い出せない。こんな状況から、ドラコの平和な生活を確保しようというのも気が遠い話だ。

しかしヴォルデモートの復活に怯えて、鬱々としているよりは前向きだろう。復活そのものを邪魔して遅らせるというのも、一つの手だ。但し、やるからには秘密裏に、完璧に、やりおおせなければドラコの身が危うい。そこだけは気を付けなければならぬ。

こちらを見上げ続けているドビーに微笑みかける。

「だけどおまえのお陰で方向性は決まったよ。具体的にどうしたらいいかは、しばらく考えてみる。おまえにも仕事を頼むかも知れない」

「かしこまりましてございます」とハウスエルフは深々と頭を垂れた。「そのお仕事は何なのかドビーは存じませんが、その場合、旦那様や奥様にはお話し申し上げないほうがよろしゅうございますね」

「もちろん秘密だ」俺は頷いた。

「親には心配を掛けたくないし、この家の不利益になるようなこともするつもりは

ない。でも裏工作で目的を達成するなんて、いかにもマルフォイらしいやりかただろう？」

「お答えいたしかねるのでございます」

と、ドビーは困り顔で言った。

C a r c a s s ≪ E x h u m e
T o C o n s u m e ≪

雪静か・1

マルフォイ家の豪勢なクリスマスパーティーが新聞のネタにされるのは、魔法界冬の風物詩だ。

実態はほぼ業界交流会なので、特筆すべきことはない。それに魔法使いにとって重要なのは、クリスマスより冬至の祭祀だ。そちらは先日済ませた。

パーティーが終われば、翌日からは家族だけの静かな時間。居間の暖炉の前で父上は新聞をめくり、母上はパーティーの出席者リストと何か別のリストを突き合わせている。俺は両親から贈られたばかりの、新しい箒をいじっていた。

玄関のノッカーが響いた。

父上が立ち上がり、居間を滑り出していた。俺も後を追いかけた。玄関ホールで追いついた時には、父上が雪交じりの風から客を奪い入れるところだった。

客人は黒いローブに長めの黒髪の男性だった。ドラコの「記憶」に確かめるまでもない。セブルス・スネイプだ。

その黒い肩にうっすら積もる雪を、父上が手で払った。

「こんな日まで仕事をさせるなんて、ダンブルドアは人でなしだな。うちのパーティを欠席するのは奴の勝手だが、きみまで仕事に縛り付けるとは」

スネイプは苦笑交じりに弁解した。

「ダンブルドアのせいではありませんよ。休暇中も校内に残る寮生がいれば、寮監も残らざるを得ません」

「なんだと。ではその居残り連中のリストを超越せ。休みになったらさっさと子供を引き取れと、保護者どもに言ってやる。生徒の健やかな成長は、教師の心身が健康であってこそだぞ」

「お気持ちちは嬉しいのですが……」彼は、ホールの中央にいた俺に目を止めた。「久しぶりだな、ドラコ。背が伸びたか？」

俺も微笑みながら歩み寄った。

「メリークリスマス、セブルス小父さん。小父さんを待っている間に、二インチは伸びましたね」

スネイプは片眉を上げた。映画で彼を演じた時のアラン・リックマンに雰囲気がよく似ている。だが本人ではなかった。俺の器であるドラコもその両親も、映画で

観た顔と一致しなかったから、そうだとは思っていた。

でも残念だ。わりと好きだったな、リックマン。『ダイ・ハード』のテロリストに『ロビン・フッド』の悪代官、ついでに『ドグマ』の変な天使も。この分だとハーマイオニーはエマ・ワトソンではなく、俺の伯母はヘレナ・ボナム・カーターではない。彼女たちに会えないなんて、夢のない夢だ。名優たちに会わせろよ畜生。そんな俺の胸の内も知らず、父上が誇らしげに息子の肩を叩く。

「どうだセブルス。ドラコも随分と大人びてきただろう。うちに来るのは何ヶ月ぶりだ。え、一年？ そんなになるか。きみと飲むためにパーティに出さなかった、とっておきのワインがある。それともまずはホットウイスキーで温まるか」

「ルシウス。そんな所でいつまでも喋っていないで、部屋にご案内したらいいかが」
母上も居間から出てきた。

「いらっしやい、セブルス。ハッピークリスマス。ルシウスではないけれど、あなたもパーティに来てくれたら良かったのに」

「こんにちは、ナルシッサ。せっかくご招待頂いたのに申し訳ない」

「セブルスは仕事上がりにそのまま来てくれたのだぞ」

「あら。それなら尚更こんな所で立ち話させては可哀相じゃない」

学生時代からの知り合いだった三人は、打ち解けた雰囲気話している。

父上の資料には、スネイプの裁判記録はなかった。ダンブルドアの証言で早々にシロと判断されたからだ。しかし、これまでのところ原作の設定はそのまま過去の事実として、この夢に存在している。だとすれば、スネイプがデスイーターだったことも、愛する人のためにヴォルデモートを裏切り密かにダンブルドアの二重スパイになったことも、恐らくは事実だ。確かめる術はないが。

それから俺たちは、午後いっぱい飲み食いとお話を楽しんだ。イギリスでは、伝統的なクリスマスのディナーは二十五日の昼に食べるそうだ。

会話はスポーツ、政治、有名人のゴシップ、芸術と、多方面に飛んだ。スネイプが教授職を務め、ドラコが来年入学するとなれば、当然ホグワーツも話題に上がる。「ところで、今年のクイディッチはどうかね」

と、父上が機嫌良く尋ねた。卒業生に届いた季報で、寮対抗戦の初戦結果は知っている。それを承知のスネイプも、笑いを含んで答えた。

「グリフィンドールには順当に勝ちました」

「あそこに勝っても自慢にならない。連覇は狙えそうか」

「ええ。今年もスリザリンの立ち上がりは上々です。卒業生のご支援のお陰ですね。とくに資金面でも練習面でもお世話になっているこちらには、私からも改めてお礼を言わねばと思っていますところですよ」

選手から「いても役に立たない」と評された名ばかり監督でも、スネイプはスリザリンチームの監督者だった。

母上が手を振った。「よして、セブルス。あれはルシウスが趣味でやっていることよ」

ですが、と言いかけた後輩に、マルフォイ夫婦は澄ました顔で告げた。

「どうしてもというなら、来年ドラコをチームに入れてくれ。箒で飛べるようになった」

「そうね。この子、最近は遠乗りに出掛けているの。元気が有り余っているのよ」スネイプがこちらを向いた。「ドラコはクイディッチが好きなのか」

原作のドラコは夢中だったはずだ。

「好きですが、チームに入りたいかどうかは分かりません。ホグワーツのことをよ

く知らないのぞ」

それもそうか、と彼は静かに頷いた。

「いい機会だ。スネイプ教授に学校のことを聞いてみる。あの尊敬すべき偉大なダンブルドア校長のことな」

「聞いてどうするんです、父上」

「一日も早くこの世を引退できるように、おまえも祈ってやれ」

父上はダンブルドアを毛嫌いしている。一番の理由は、マルフォイ家が魔法省に影響を及ぼそうとする時に、鼻薬が効かない重鎮は目障りだということだろう。他にも、「口では魔法族以外の半端者（マグル生まれを含む）にも寛容なことを言って人気を取って、そのくせ本当は何もかも見下している偽善者」だからとか、「自分ば名誉欲に取り憑かれているのに、権力欲や出世欲を持った人間を馬鹿にする」とか、色々言っている。

しかし結局は、ダンブルドアがグリフィンボール派で、父上がスリザリン派だという、学園の問題だと思う。

イギリス魔法界では、若者が同世代で集団生活を送る場はホグワーツしかない。

入学までは家庭で過ごし、卒業すれば大半はそのまま社会人だ。校内での七年間は、入学時に割り振られた寮での生活が基本となる。当然、そこでの人間関係が後々の人生にまで影響する。

学校側も、寮ごとの点数制度を設けて、寮内の連帯感と、他寮への対抗心を煽る。一歩間違えれば恐怖の管理社会、ディストピア直行のやりかただが、学生を管理しやすいこの方法が改められたことはないという。

その結果、多感な時期に一つの価値観を植え付けられた若者たちは、社会に巣立ってもそれを引きずって生きていく。それがイギリス魔法界だった。



飲み食いにも飽きた頃、四人でプレゼントを交換しあった。

ドラコの両親からは、すでに新しい箒を貰っているので省略。スネイプからはフルカラーの鉱物図鑑を貰った。れっきとした魔法界の出版物なのに、非魔法界のものと見分けが付かない。掲載写真の対象が動かないからだ。これが動物図鑑だったら、獣たちが自由に歩き回る様子を定点観測できただろう。

俺からも枕ほどのサイズの袋を三人に渡した。中身は大したものではない。

スネイプが袋の中を覗いた。「クリスマス？」

「はい。クリスマスのはじめ合わせです」

客に続いて父上と母上も袋を開けた。

「ほう、初めて見るな」

「魔法界の物ではないのかしら」

白々しい反応だ。

イースとのツーリングでポテチの美味さを思い出した俺は、外出の度にちよくちよく非魔法界のスナックを買い込んでくるようになった。今では父上も母上も、すっかりスナックの味に慣れ親しんでいる。それでも人前では「マグル嫌い」の看板は、まだ下ろすつもりがないようだ。

「あら、本当に初めて見るわ。スイートチリに、ライムに、マーマイトですって」
「私のほうはブラックペッパー、ビーフ&オニオンと、ケチャップだったぞ」

「私とルシウスの分でも違うのね。セブルスは」

「えっ」

スネイプは戸惑った声を上げた。魔法界屈指の名家で、まさかポテチ品評会が始

まるとは思わなかっただろう。一家からの視線に促され、彼も詰め合わせ内容を確認した。

「ええと……。プローンカクテル、ハニー&マスタード、バーベキュー、ソルト&ビネガー。あとはレディソルト（塩味）です」

好みが分からなかったのも、スネイプの分は無難な味で揃えておいた。ちなみにソルト&ビネガーとレディソルトは、両親の袋にも入れている。家では定番の味だから無意識に省いたのだろうが、どうせ「初めて見るマグルの食べ物」を装うなら、その二種類も省略しないでよかった。

「色々な味があるのだな」

「海老味なら、ドラコが一回だけ買ってきてくれた短い棒のも美味しかったわね」
「あれは別物ですよ」

母上が言っているのは、イギリスで売られている偽物のかっぱえびせんのことだ。パッケージ裏を眺めていたスネイプが言った。

「マグルの製品ですな」

さっと表情を変えたのは母上だけだった。俺と視線を交わして、父上が何気なく

答える。

「先ほどドラコが遠乗りに出掛けると話しただろう。その折にマグルの店でちょっとした品を買ってくる。社会勉強だ。機械類と違って、食べ物なら使いかたが分からないということもない」

「なるほど」スネイプは目線を上げてこちらを見た。「遠乗りには一人で行くのか」「飛行術の先生に付き添ってもらっています。色々のご存知の方で、ぼくの行動がマグルに怪しまれないようフォローしてくれます」

「若いけれどしっかりした先生だね。ドラコも懐いているの」

「ほう。その先生は、クリスプスを食べた後のごみの処理について、何か言っていましたか」

ごみ。両親と俺は顔を見合わせた。

「ぼくはとくに何も聞いていません」

「他のごみと一緒に、ハウスエルフが屋敷の裏手で燃やしているはずよ。マグル趣味の包みが人目に触れる心配はないはずだけれど」

そうではなく、とスネイプは頭を振った。

「マグルの使う人工素材は、安易に燃やすと有毒ガスが発生する可能性があります」
「有毒ガス？」母上が口元に手を当てた。「そんな危険な物で食品を包装するなんて、マグルは何を考えているの」

「そのままの状態ではべつに有害ではありません。低温で燃やした時に生成される物質が問題なのです。ダイオキシン類というそうです。無色で無味無臭、しかも返しの呪文が存在しない。人を呪い、土地を呪い、自らも呪われる……。マグルの生んだ画期的な呪いですな」

「セブルス、要点だけ話せ」

父上に水を差されて、彼は一つ咳払いをした。

「要するに、焚き火程度の火力で、塩と油にまみれたクリスプスの袋を燃やすことはお勧めしません。屋敷周辺の大気と土壤が汚染されます」

確かに一時期は有害物質として騒がれたダイオキシンも、最近はあまり人体への危険性は聞かれない。燃やす量も微々たる物だ。心配するな、と言ってやりたかった。

「燃やした後に魔法で清めればいいのかしら。ああ、でも空気に散った分はどうし

ようもないわね」

「私としては、マグルの作った物はマグルのごみ箱に捨ててくるのがいいと思いますよ。それこそドラコがクリスプスを買に行くついでに」

ところが無難と思えた案に、父上が異を唱えた。

「わざわざ外へごみを捨てに行くのは優雅ではないな。高温が必要なら、フィエンドファイアで燃やし尽くせばいいだろう」

聞き覚えのない言葉だ。母上のほうを見ると、母上も首を横に振った。

「ドラコ、どうだ。新しい魔法を覚えてみるか」

「ルシウス！」とスネイプが鋭く咎めた。「ごみを燃やした後には、一気に冷やす必要もあったと思います」

「冷やす？」

「はい。燃やした後には冷却する段階でも、ダイオキシン類が発生する温度があったはずです。適当なことを言ってもいけないので、ホグワーツに戻って文献にあたってみます。ドラコにフィエンドファイアを教えるのは、それからにして下さい」

「たかが包装一つに面倒だな。まあいい、分かったら連絡しろ」

「はい」

父上の横柄な依頼にも、スネイプは律義に返した。

積もる話も一段落した頃。客人が、父上のコレクションに新しく加わった呪具を見たいと言い出した。父上は喜んで書齋に案内しようと立ち上がった。

「ああ、そうだ。ドラコ」と、スネイプは部屋を出る前に振り返った。「一昨日の新聞があったら、書齋に持ってきてくれないか」

「いいですよ。ハウスエルフに——」

「いや、きみに持ってきてもらいたい」

父上が僅かに眉を顰めたが、何も言わなかった。

俺は頷いた。「分かりました」

わざわざ別室に呼び出して、俺の正体を父上の前で暴く気か。対応策をあれこれ考えながら、『モイライ』を書齋に持っていた。

雪静か・2

書斎の扉は細く開いていた。

部屋に近づくと、中から「さて」と父上の大きな声が聞こえた。

「ドラコが来る前に、きみの秘密の話を聞こうか」

俺は仕方なく扉の脇に立ち止まった。

「うちの息子に関わることで、何か気になる点でもあるのか」

傲慢そうな物言いが鼻につく父上の声。それに応えるスネイプの声は、低く柔らかい。

「ドラコが親しくしているという、飛行の家庭教師のことです。マルフォイ家の跡継ぎにマグル製品を買わせるというのは、些か配慮に欠けているようなので」

俺は新聞を脇に挟んで腕を組んだ。ドラコの中身が怪しいという話ではないのか？

「以前のナルシッサなら、マグルの物など手も触れなかったでしょう。それを承知しているはずのドラコが、わざわざマグル製品を買ってくるというのも奇妙です。

二人はよほど家庭教師を信頼しているようですな。ルシウスはどう考えますか、その人物について」

「指導の場には立ち会っていないから、教えかたについては何とも言えん。教わっている本人に不満はないようだな。それに私もナルシッサも、彼には感謝している。彼が来てくれたお陰で、ドラコは悩み事の一つから解放された。それを考えれば恩人と呼んでもいいくらいだ。マグルの店で買い物をさせたくらいで、目くじらを立てる気にはなれん」

父上自身が、非魔法界を知れと推奨しているくらいだ。表向きはともかく、問題視すべきことはない。ルシウス・マルフォイをマグル嫌いだと思っている者からすれば、俺の、ドラコ・マルフォイの行動は無神経に映るだろうが。

やや間を置いてから、スネイプの声は遠慮がちに切り出した。

「マグル文化への傾倒。家と親への反抗心。いずれも思春期にはつきものです。ただドラコの立場を考えると、どこかで止めてやるべきでしょうな。子供が新しい世界に夢中になるのは当然ですが、そこにつけ込まれて思想的な誘導をされる恐れがあります」

「菓子を買ってきたくらいで大袈裟な」

「先ほどのプレゼントの件だけではありません。今年はクリスマスカードがドラコ個人から送られてきました。親離れの一環でしょうが、誰かの影響を受けたせい、という可能性もあるわけです」

父上が鼻で笑った。

「心配してくれるのはありがたいが、牽強付会が過ぎないか」

「根拠がまるで無いわけでもありません。私の学生時代の知り合いに、魔法界の歴史を背負う旧家に生まれながら、それを足蹴にした男がいます。マグルの格好をして、マグルの乗り物を乗り回して。今思えば、親に反抗するためにわざとそう振る舞っていた部分もあるでしょう。」

奴は今、アズカバン刑務所にいます。奴が死ねば喜ぶ人間が大勢いるという点で、これから一つ善行を積むことが確定しているのは羨ましい限りですな」

スネイプの言っているのが誰なのか、何となく分かった。

「その男は、何をして捕まったのかな」

「仲間のろくでなし連中を裏切りました。親友と呼んでいた男とその伴侶を敵に

売って死なせた揚げ句、追ってきた別の仲間と近くにいた大勢の人間を爆殺しました」

「控え目に言って極悪人だな。妻の親戚のことを悪く言いたくはないが」

名前こそ出ないが、やはりシリウス・ブラックのことだ。原作知識がなくても、ドラコ本人でも察しただろう。なにしろシリウスは母の従弟だ。

「ドラコなら奴のように道を誤ることはないでしょうが、気には掛けておいて下さい」

「善処しよう」

父上が少し声のトーンを変えた。

「それで話を戻すが、ドラコのお気に入りの家庭教師をいきなり遠ざけるわけにもいかん。今のところ、その家庭教師が何か示唆したという証拠はない」

スネイプの声が、ゆっくりと、考えながら応えた。

「では、とりあえず促すのはドラコ本人の自覚でしような。今のあの子の知り合いは身内ばかりです。よその人間と接触して、マルフォイ家が魔法界でどう見られているかを知るべきでしょう。知り合いが増えて友人が出来れば、それが子供にとつ

ては新しい世界の入口となります。相対的に特定の人物への依存度も下がるはずで
す。結論としては、同年代の子供達と交流する機会を設けて下さい」

「同年代など、学校に行けばいくらかでも交流できるだろう」

「それまでは知り合いも不要だと？ たとえ寮が違って、入学前からの友人が
いれば心強いですよ」

「そうか。まあ、今のドラコの友人は、限られているからな」

父上の相槌を最後に、部屋からは声がしなくなった。

話は終わるか。その場を退こうとした時、ドアが大きく開いてスネイプがぬつと
顔を出した。

「やあ、ドラコ」

「どうぞ。古新聞です」

「ありがとう」

彼はじっと俺を見下ろした。黒い、昏い目は、不思議と嫌な感じはしなかった。
「ドラコ。きみに親しい友人はいるか？」

俺は目の前の人物を指差してやった。すると彼は「私か？」と面食らった様子

で声を上げた。

彼の後ろで父上が笑い出した。「そうか。セブルスが友人か。それはいい」

スネイプも仕方なく苦笑した。



翌日、俺は真っ白な庭で雪だるま作りを始めた。

雪だるまの目鼻用にと、ドビーが人参や木の枝を持ってきてくれた。ボクシングデイだから仕事はしなくて良いと俺が言っても、笑って取り合わなかった。彼に言わせれば、「休みだから息をしなくていいと言われて、息を止めていられるか」ということだそうだ。

雪玉を大きくする作業も魔法で肩代わりしてくれようとしたが、それは断って屋敷に戻した。

それから少し経って、屋敷から来る人影が見えた。

白い景色から拒否されたような黒い瘦身。原作で「育ちすぎた蝙蝠」と称された、スネイプだった。雪面に触れているローブの裾が、濡れもせず軽やかに翻っている。防水呪文を使っているのだろう。その薄着ぶりに、長靴とコートで防寒してい

る俺のほうが馬鹿らしくなった。

「ナルシッサから伝言だ。お茶にするから適当なところで戻ってこいと」

「お客を伝言係に使うとは、母上も酷いですね」

「なに。私も人の家でやることなくてね」

「でもこれがね」俺は傍らの雪玉をぽんと撫でた。転がしている最中の雪玉は、まだまだ小さい。

「分かった。手伝ってやるから早く仕上げろ」

「魔法は使わないで下さいよ」

俺が言うと、彼はにやりと唇の端を引き上げた。

さすがに大人の力を借りると作業の進みが早い。まもなく雪だるまが——日本の二段重ねではなく欧米の三段スノーマンが——できあがった。

「さあ戻るぞ。あまり遅いとナルシッサに文句を言われる」

地面に放り出してあったマフラーと帽子が、雪を払ってから差し出された。

「セブルス小父さん。小父さんから見て、ぼくは変なことをやっているように見えますか」

クリスプスの詰め合わせは迂闊だったと、昨夜から反省している。

「奇矯とまでは断言できない。ただ私は普段きみより少し年上の子供を大勢見ているから、些細なことでも色々と考えてしまう。心配性だと人には笑われるがね。去年会った時と比べると、きみの様子が随分と違うから、何かあったのかと思ったんだ」

俺は少し考えて告げた。

「父上も母上も小父さんに話していないと思いますが、今年の誕生日に、母上の杖を貰いました。なのにいくら教えられても魔法が使えなくて、数ヶ月それで悩んでいました。スクイブだったら一人でどう生きていこう、非魔法使いの学校に転入させてもらおうかと、あれこれ考えました。その間にぼくの考え方も、ぼくを見る親の目も変わったのだと思います。」

飛行術の先生は、魔法を使えるようになったきつかけを下さった方です。ぼくも両親も先生にはとても感謝していますし、先生を警戒する理由はありません。小父さんも心配しないで下さい」

「そうか。それならいい」スネイプは屋敷のほうに目を向けた。「お父上もお母上

も、私にとっては大事な友人だ。もちろんきみも。友人が悲しんだり困ったりするようなことになってほしくないと思ったが、出過ぎたことだったな」

だが一つだけ、と彼は付け加えた。

「ドラコもこれから色々な種類の人間と出会うだろうが、全員が善人とは限らない。ルシウス・マルフォイの息子であることを少し意識したほうがいいだろう。今はご両親が守ってくれるだろうし、ホグワーツでは私もできる限り気を付けておくが、それでもだ」

そう言うのと、彼は屋敷に向かって歩き出した。

俺はまたしても考え違いをしていたようだ。

原作で、スネイプはこれ見よがしにドラコを鼻屑してみせる。ドラコというよりその背後のルシウスとの関係を良く見せようとするのは、血筋を重視するスリザリンの学生への睨みを利かせるため。ルシウスがスネイプの校内での立場を強化しようとするのも、ダンブルドアの力を削いで、自身の影響力を増すため。そうした打算に基づく友情だと思っていた。

だから原作後半で、ナルシッサに懇願されてドラコを助けるとスネイプが誓った

シーンは意外だった。その時点ではルシウスは発言力を失っていて、スネイプがマルフォイ家に手を貸すメリットはなかった。後々の展開を観て、その誓いが「いずれスネイプがやらなければならぬ汚れ仕事」と矛盾していないから平気だったのだろうか、と結論づけたものだ。

しかし、この夢で彼らの関係はもっと温かいものようだった。

仕事上がりにそのまま屋敷に来たというスネイプは、昨夜は居間のソファで爆睡していた（後で自分で起きて客室に上がっていった）。今朝、父上と母上が交わした会話を彼は知らないだろう。

『セブルスはかなり疲れているみたいね。ホグワーツのクリスマス休暇っていつまでかしら。遠慮しないでもう何泊かしていつてもらいましょう』

『きみからそう言ってくれるのはありがたいが、それはそれで、あいつも気疲れするだろう。普段は人に囲まれている分、たまには独りでゆっくりしたいと思うぞ。まあ、誘ってはみる』

『そうしてちょうだい。寮監のお仕事って忙しいんでしょ。前に会った時より痩せた気がするわ』

『ああ。よく続いているものだ。辞めたいなら一言そう言ってくれば、良い勤め先を用意してやるのにな。本人に辞める気がないから、ささやかな支援しかできない。しかしセブルスが痩せたとしたら、きみが以前、年齢の割に貫禄が付いたと言ったからじゃないのか』

『いやだわ。太ったという意味ではないのに』

彼らが打算抜きの友人であるなら、スネイプにも、俺のことは知られたくない。友人夫婦の息子の中身が赤の他人だと知ったら、普通は悩むだろう。悩んだ揚げ句、マルフォイ夫婦にドラコの真実を打ち明けられては困る。かと言って、二人に打ち明ける前によそに相談されるのは、もっと困る。

さくさくと雪を踏む黒い背中に呼びかけた。

「セブルス小父さん」

「ん」

「ダンブルドアは二十世紀で最も偉大な魔法使いだったと聞きますが、今でもそうですか」

「ああ。現役では最強と言ってもいいだろう。お父上には言うなよ。ルシウスはダ

ンブルドアをとても尊敬しているから」

「政敵としてね」

スネイプはやはりダンブルドアに近い。父上の感情などどうでもいいが、俺にとってダンブルドアは警戒すべき相手だった。

原作のダンブルドアは、対象者の意識の中の光景を垣間見る魔法、開心術を得意としていた。きっとこの夢の中でもそうだろう。もし俺に開心術を掛けたら、そこで『ハリー・ポッター』シリーズのワンシーンを視る可能性は十分にある。たとえば光景の中の登場人物が映画の配役のままでも、状況から「未来の出来事を知っている」「当事者しか知らない秘密を握っている」と解釈するかも知れない。それができただけの知恵を与えられた人物だ。

彼はハリーでさえ、ヴォルデモート打倒のための道具と割り切っていた。マルフォイ家の小倅に「未来」の記憶があると分かれば、遠慮無くそれを活用するだろう。しかもドラコはハリーと同学年で、デスイーター関係者。絶好の飛び道具だ。俺のことを知られたら最後、スネイプに続くダブルスパイとして使われかねない。一方、ヴォルデモートも開心術の強力な使い手だった。疑り深く、部下相手にも

容赦なく開心術を使う。復活した後にドラコと接触する機会も多い。俺の心が読まれたら、本当なら知り得ない情報を握っている危険人物として始末されるのは間違いない。

だから俺は、絶対にダンブルドアとヴォルデモートに疑われてはいけない。二人の腹心を同時に務めるスネイプにもだ。俺の相手は作中最強格の三人というわけだ。

「きついな」

思わず漏らした独り言にスネイプが振り返った。

「何か言ったか？」

「いいえ。何も」

両親の愛に護られたこの箱庭世界は、ドラコに優しい。しかし一步でも外へ踏み出せば、そこには厳しい社会が待っている。自分でどうにかしなくては。

富を隠せよ・1

まだ寒い曇りの日に、彼らはやって来た。

温室を再利用した作業小屋で孔雀と遊んでいたら、傍らで作業していたドビーが不意に顔を上げた。

「坊ちゃま。ただ今ドビーに急ぎの仕事が入りましてございます。坊ちゃまは、できればお屋敷にお戻りになるのでございます」

ハウスエルフにはある種のテレパシー能力があり、遠隔地からの要請にも応えることができるという。

小屋から出ようとした時、いきなり現れた荷物とぶつかりそうになった。

「おっと」

抱えた荷物の陰からコビーが顔だけ出した。

「真に申し訳ありません坊ちゃま。お怪我はございませんか。どうぞ本邸にお戻り下さい」

その間に、ドビーは作業小屋の床板を持ち上げ、荷物を抱えて床下に飛び込んだ。

アビーも荷物を運んできた。蟻が巢に餌を持ち帰るように、ハウスエルフ総出で書類や何かの袋を運び込んでくる。

屋敷に戻ると母上に呼び寄せられた。

「ああ、ドラコ。これから人が屋敷に入ってきますから、良い子にしているのですよ。何か尋ねられても答えてはいけません。分からない、知らない。それだけでいいですからね」

「人が来るとは前から聞いていましたが、何か問題でも？」

「問題？ ええ、お客人が増えただけです」

書斎から出てきた父上が、手の埃を払ってコビーを呼んだ。「あらかた片付けたな。連中を入れてやれ」

門に掛けられた魔法が一時的に解かれ、数人の魔法使いが玄関までやってきた。一人が前に出て、書類を差し出した。

「ルシウス・マルフォイさんですね。法執行部調査課の者です。先日ご連絡した通り、闇の魔術に関連した禁制品を不法に所持していないか、立ち入り調査に来ました。よろしいですか」

すわガサ入れかと思ったが、そこまで深刻な事態ではないらしく、父上の対応は落ち着いていた。

「べつにあなた方に隠す物は無いが、その男を入れるのは断る。なぜ貴様がここに、ウィーズリー。とうとう何とか局長のポストも追われたか」

父上は調査官の後方にいる男を、ドライアイスの視線で見やった。生え際がだいぶ後退した中年男性も、火の燦る目で眼鏡越しに父上を見返した。

おそらくこの男性が、ハリーの親友となるロン・ウィーズリーの父親だ。ルシウス・マルフォイがアーサー・ウィーズリーという男を嫌っていることは、俺も知っている。原作では子供たちの前で取っ組み合いの喧嘩までした二人は、この夢でも心温まる交流をしていた。

たとえば官僚の異動がガゼット（官報）に掲載される時期になると、父上は必ずウィーズリー氏の名前をチェックする。そして出世していないのを知って嘲笑い、「今年も変わらぬご活躍を」とメッセージを付けた豪華な花を先方の家に送りつける。

ウィーズリー氏のほうでも、デスイーターだった人間が死んだり不幸な目に遭う

度に、訃報欄の切り抜きと「同志がお気の毒に」というメモを添えて、保険のパンフレットを送りつけてくる。しかも公務員用の団体保険という、どう逆立ちしても父上が加入できないものをだ。

そんな具合に、お互い相手の神経を逆撫でするための手間は惜しまない。逆に仲が良いのかと疑う。

眼鏡の男性は苛立った声を上げた。

「部署は変わつとらん。応援だ。それとも私が来て何か不都合でもあるのか、マルフォイ」

「もちろんあるとも。貴様の手垢で調度品を汚されてはかなわない。金目の物を物色する気なら、十クヌートやるから帰ってくれないか」

「はっ！ 尻尾を現したな蛇野郎。贈賄の現行犯で捕まってしまう。デスライターにくせにいつまでも名士面できると思うな。いつか必ず報いを味わわせてやる」

不毛な言い合いに、先頭の調査官が咳払いで分け入った。

「マルフォイさん。ウィーズリー局長は確かに他部門の人間ですが、応援要員で来てもらっています。ご理解下さい。始まりが遅くなるほど調査時間も延びますよ」

「人手不足には同情するが、応援を頼む相手を間違えたのではないかね。こちらへ」
調査官とその部下は父上の後に付いていったが、ウィーズリー氏だけは勝手に屋敷を調べ始めた。

「母上」放っておいていいのかと問うと、抱き寄せられた。

「これまで立ち入り調査の日は、あなたの叔母様のところへ行かせていたものね。立ち入り調査は今回が初めてではないのですよ。デスイーターと間違われた後遺症のようなものですから、仕方ありません。我慢なさい」

ルシウス・マルフォイは転向者の中でも名を知られているほうだ。なおかつ純血の名家で資産家。世間への見せしめには最適だ。

後でこっそり書斎の様子を見に行くと、調査官たちはファイル類をじっくり検分していた。父上の横に見慣れぬ男性も同席し、父上の代わりにあれこれと調査官の質問に答えている。

「その少年、少しいいか」

振り返ると眼鏡の役人がいた。ドラコと顔を合わせるのは初めてのはずなのに、ウィーズリー氏は忌々しそうにこちらを見下ろしていた。

「父親と瓜二つだな。母親に似ればまだ良かったものを」

余計なお世話だよ。「ぼくに何かご用ですか」

ウィーズリー氏は腰を屈めて、俺と視線を合わせた。残っている頭髮は確かに赤毛だった。

「きみの父親は過去にとっても悪いことをして、未だにその罰を受けていない。だからいつまで経っても悪いままだ。父親が悪い奴なのは嫌だろう？ だから魔法省の調査に協力してほしい。持っていてはいけない物、よそこに言ってはいけない物がこの家のどこに隠してあるのか、教えてくれないか」

そう言われて思い浮かんだのは、作業小屋に何かを運び込むハウスエルフたちの姿。しかしそれが不法所持の危険物かと言われると、違う気がする。そもそもこの日に調査が行われることは事前に知らされていたようだし、直前に慌てて隠す理由はない。

「そういうのはよく分かりません」

「物分かりの悪い子だな。法令で禁じられた、闇の魔術に使う呪具だよ。マルフォイの息子が知らないわけないだろう」

決めつけられたことに文句を付けようと顔を上げると、相手と目が合った。青空のように澄んだ目だ。

「さあ、言ってごらん」

真っ直ぐにドラコの目を通して、真実を掴もうとしている。

嫌だ、と思った瞬間に視界が黒く覆われた。腕で顔を隠すよりも早かった。

「ウィーズリー、私の息子にレジリメンスを使うなら、おまえの首を飛ばしてやる」
真上から聞こえた父上の声にほっとした。ウィーズリーが苛立たしそうに答えていた。

「レジリメンスなど使つたらん。後ろ暗いところがあるから、そうやって常に人を疑う羽目になるんだ。私はただ目を合わせて話をしようとしただけだ。うちの息子たちともそうしている」

「ドラコはおまえの子ではない。杖も持たない他人の子供に勝手に術を掛けるなど、無礼もいいところだ。さすが血を裏切る家の人間。常識も何もあったものではないな」

父上の袖に覆われて視界は遮られたままだが、却ってその怒りが間近に伝わって

きた。声を掛けて腕を叩く。

「父上、ぼくは大丈夫です」

「ではこんな所にいないで、調査の邪魔にならないように母上と一緒にいろ」

「はい、すみません。失礼します」

俺は早々にその場を離れて母上のところ避難した。そこでレジリメンズが人の思考や記憶を覗く魔法だということを知った。つまり、開心術か。

ウィーズリーがその魔法を使ったという根拠はなかったし、実際に使っていないと思う。ただ、父上がそう疑うように、俺に開心術を使う人間がいてもおかしくないという状況が、急に現実味を持った。



調査官たちが帰った後の屋敷は、空き巣被害に遭ったようだった。犯人はもちろん、一人で家捜しを敢行したウィーズリー氏だ。なんとドラコの子供部屋さえ引っぱり返されていた。日本の警察も家宅搜索の後に現状復帰するのは義務ではないという。覚醒剤の不法所持を疑われて家宅搜索された友人の家の惨状を思い出して、まだましだと自分を慰めた。一緒に片付けてくれるハウスエルフもいる。

床に散乱したワークブックや辞書の中に、スネイプから貰った鉱石図鑑も混じっていた。乱暴に扱われたせいで、中ほどのページに折り目が付いてしまった。せっかくの贈り物だったのに。

おのれ、ウィーズリーのくそ親父。

役人の横暴を訴えようと、俺は図鑑を抱えて書斎に飛び込んだ。

「父上！」

「どうしたドラコ。貧乏人に何か盗まれたか」

書斎では、父上と、先ほども同席していた男性が椅子を向かい合わせにして話していた。

「あ、申し訳ありません。お客様がいらしたんですね。出直してきます」

「いや、いい。ちょうどいい機会だ」

父上はその壮年の男性に俺を紹介した。でっぷりと腹の出た穏やかそうな男性は、会計士ということだった。

「こちらのセラター氏は節税に長けた魔法使いだ。マグルの勅許会計士の資格も持っている。事務所とは一世紀以上の付き合いになるな。彼はいくつかの海外口座

と法人を使って、我が家の利益が最大限になるように手を貸してくれている」

それは魔法ではなく、マネーロンダリングというやつではないだろうか。

「ルシウス様にお褒め頂けるとは光栄ですな。しかし、そこまでご子息にお話しされて、よろしいのですか」

「構わない。いずれ伝えることだ」と言うと、父上は俺に向き直った。

「前に教えたと思うが、マルフォイ家の収入基盤はマグルとの取引にある。その利益の大部分はマグルのやり方に則ってオフショアで運用しているから、魔法省の連中は手を出せない。だが連中は、暮らしぶりの割に納税額が少なくと不満なのだ。それで今日は我が家の財政状況を調べに来た」

考えてみれば、魔法省という行政組織があるのだから、魔法界にも租税制度がないと困るだろう。

「闇の魔術品を探している人もいましたよ」

「奴は嫌がらせに來ただけ、奴を寄越した連中は体裁を取り繕いたいだけだ」
セラター氏がにこしながら会話に加わった。

「自慢ではありませんが、私が目を光らせている限り、マルフォイ家と関連法人の

会計処理は完璧です。本当は税務課の連中も、踏み込んで何も掴めないことは分かっているんです。だから調査が空振りでも失点の無いように、禁制品の取り締まりなどと上辺を取り繕ってやって来る。下手に勘繰られても困るので、帳簿類はちゃんと見せてやりますよ。ええ」

やっぱりマルサ案件だった。

「すると、屋敷を片付けていたのは何だったのですか」

「マグルとの直接の接触を示す品だ。調査にウィーズリーが来ることは予想外だったからな。奴は知識の浅いマグルかぶれだが、現物を見ればさすがに勘付くだろう。我が家がマグルと繋がりがあつたことを奴に知られるのは、色々と具合が悪い」

「……開心術を掛けられなくて良かったです」

俺が溜息を吐くと、父上とセラター氏は笑った。

ふと、以前から考えていたことを思い出した。会計士がいるならいい機会だ。

「父上、こんな時になんですが、毎月決まった額の小遣いを頂くことはできませんか」

「欲しい物は買ってやっているだろう」

「お二人の話を聞いて、将来の資産運用のために、今のうちにお金をコントロールすることに慣れておきたいと思ったのです」

「ほう」父上は不審そうに片眉を上げた。「私や母上に知られると不都合なことに使うのではないか？」

心外な、と俺は肩をそびやかしてみせた。

「息子の独立心を応援して頂けないのですか。だいたい誰かが一緒でないと外出もままならない身で、どうやって火遊びできるんです」

父上が疑っていることは、実は正しい。

ドビーとの対話を経て、俺はマルフォイ家がヴォルデモートの手駒にされるのを阻止したいと思うようになっていた。具体的に何をするかは決めていないが、いざという時は、すぐにタクシーを拾ってビジネスホテルに避難するくらいの資金は確保しておきたい。移動くらいは魔法でやれ？ 非常時に備えるなら、魔法が使えない状況も想定すべきだ。

横で聞いていた会計士が口を挟んだ。「ルシウス様。ドラコくんが加勢を期待しているようですので、私からも一言よろしいですか」

「当主より息子の味方をするのかね」と、父上は椅子に頬杖を突いてそっぽを向いた。

「私はお家の味方ですよ。ご子息に取り入って甘い汁を吸おうとする輩からお家を守るためにも、小遣い制度は有効だと私も思います。使える金額が限られていると分かれれば、妙な連中にすり寄られる面倒は減るでしょう。学校に入る前に自立心と金銭感覚を養っておくのもよろしいかと。加えて言うならば、ドラコくん用の口座を作っておけば、いざという時の資金の一時避難に使えます」

言い終えると、セラター氏はこちらに軽くウインクした。俺も会釈を返した。父上はまだ苦虫を噛み潰し続けている。

「口座の件は、許可してもいい。しかし、本当に自分で管理できるのか」

「できると思います。ご心配なら、ぼくが父上の後を継げるかどうかの試金石にでもなさって下さい」

「こんなにしっかり将来を見据えておいでのご子息だ。ご心配には及ばないでしょう」

たっぷりと沈黙を取った後、父上は重々しく言った。「……後で母上と相談しよ

う」

「ありがとうございます。父上、セクターさん」

「ドラコくん、もし小遣いの使い道に困ったら、いつでも私の事務所に来なさい。特別に無料でコンサルティングしてあげよう」

「くれぐれも息子に余計なことを吹き込まないでくれ。ところでドラコ、何か用があったのではないか」

図鑑の折れたページを見せて説明すると、父上は憤慨した。

富を隠せよ・2

飛行のレッスンは、年明け後もだらだらと続いている。学ぶためというより、ドラコの気分転換のために始めたことだ。止める理由はなかった。ドラコが魔法を使えるようになってからは、飛行時に便利な魔法も教わっている。

イースはそれなりに多様な魔法と、その応用方法を知っていた。たとえば冬に重宝するのが泡頭呪文。気泡で頭部を覆い、水中でも呼吸が出来るようにするのが、この魔法の本来の目的だ（新しい酸素の供給はどこから、なんてことは知らない）。それを箒乗りの一部は、頭部だけでなく体全体を空気の層で覆うように発展させて使う。冬のツーリングの厳しさは体験した者でないと分からないだろうが、寒風に体温を奪われないので、とても温かい。

しかし自分でやろうとすると難しかった。

「まあ、そんな簡単には覚えられないよね。他にドラコくんもできそうなのは……」
「飛行には関係ないけど、使いたい魔法ならある」

「へえ。どんなの？」

「閉心術。親には教わりたくない」

「そりゃまた面倒臭い」

家庭教師は腕を組み、しばらく考えた。

原作でも、ヴォルデモートの精神侵入に備えて、ハリーがスネイプに閉心術を教わっていた。たしかドラコ自身も閉心術を使っていたか、素質があると言われている。中身が俺でも、ドラコに習得するチャンスはあるはずだ。

ただし閉心術を覚えるには、まず開心術を受ける必要があった。少なくとも原作のハリーはそうしていた。俺がドラコの両親に閉心術を教わりたくないのは、それが理由だ。逆に家との縁が薄い他人になら、多少の事情が伝わっても構わないと思っている。

ところで今の、中に俺を抱えたドラコに開心術を掛けると、術者はいったい何を視るんだろうな。

「悪いけど俺からは教えられない。その手の分野は苦手なんだよね。もちろん親の干渉を受けたくないっていうのは分かるよ。俺も昔——」

「そういう思春期の問題じゃない」

俺が遮ったので、彼は口を閉ざして目を細めた。

「詳しくは話せない。秘密について知りたいなら、ぼくに開心術を掛けろ。だけどそれをしたら最後、イースはぼくに開心術を教えなければいけない。さあ、掛けろ」
「何その脅し。タービネイト先生は本当にそういう魔法が苦手なんだって。ぶっちゃけ責任も取りたくない。だいたいさあ、隠したいことがあるなら他にもやりようはあるでしょ」

「たとえば？」

「たとえば、そうだなあ」

イースが考えている間に、手持ち無沙汰な俺は箒を膝くらいの高さに浮かべて柄の部分に立った。目指すは桃白白だ。

「じゃあまずは開心術について整理しとこうか。意識に侵入してくる開心術を遮断するのが開心術だ。秘密や本心を守るのに最適と言われているね。だけど真実薬っていう自白剤を使われた場合、並大抵の開心術じゃ抵抗できない。薬だけじゃなく、開心術を使ってくる術者の技量次第でも開心術は役に立たない。乱暴に言うところ、きみが開心術を覚えても、大人の仕掛けてくる開心術には対抗できないと思うよ」

「というと、開心術や閉心術は、大人なら誰でも使える魔法なのかい」

「存在は知られてるけど、誰でも使えるわけじゃない。今度本屋に行ってみる？」

並んでる本を見てみれば、何となく分かるよ。だいたい他人の心に勝手に踏み込むなんて、その人の財布の中身や日記を勝手に見るくらい失礼じゃん」

「そうかも知れないが……」

開心術をそのレベルで語っていいのか。

「それ以外のドラコくん自身に対してのアプローチというと、忘却術もある。特定の話題のことを忘れてしまえば、きみにっては秘密なんて存在しなくなる。ただし何も知らない状態に戻るだけだから、自分でも気付かないでまた同じ秘密に触れて、元の木阿弥になることもある。諸刃の剣だね」

うーん、と俺は腕を組んだ。都合のいい記憶だけを消してもらうには、その部分を術者に説明する必要がある。自分で自分に忘却術を掛けるなら、術を習得するまでは無防備なままだ。

「三つ目は舌縛りの魔法。特定の話題や単語を喋れなくする魔法で、物理的に秘密を吐けないようにできる。開心術を使われたらおしまいだけど、真実薬を使って自

白させられそうな時には心強い盾になる」

先ほど言われるまで、開心術にだけ備えればいいと思っていた。しかし秘密を吐かせる方法は、ハリポタ世界の魔法だけに限らない。自白剤もあれば脅迫も拷問もある。俺なんて、暗い取調室に連れて行かれてカツ丼を見せられただけで、あること無いこと白状する自信がある。「決して折れない心」など持ち合わせていない。

「秘密をきみから引き出そうとする者へのアプローチも、当然考えられるね。たとえば忘却術でその話題を忘れさせればいい。不自然にその部分の記憶が抜け落ちたことに気付かれたら、却って秘密の存在が浮き彫りになっちゃうけどね。舌縛りの魔法を、自分ではなく相手に掛けるのも当然ありだ。犯罪だけど、服従の魔法で相手の行動を制限することもできる。だけど、合法であつても相手に魔法を掛ける方法はお勧めしない。危険だから」

「危険？」

たじろいだ拍子にバランスを崩した。押し出されて進みかけた筈を、イースが自分の筈で抑えて止める。

「自分と相手の力量次第では、他人に魔法を掛けてもそれを無効化されたり跳ね返

されたりする。きみの秘密を探ろうとするのは、子供と大人、どちらの可能性が高い？ もし大人だったら、魔法勝負は子供のきみには最初から不利なんだよ」

「ほほう」

受け取った箒の柄に顎を乗せた俺を、イースは不安げに見つめた。

「べつにドラコくんが弱いと言ってるわけじゃないからね。俺はきみの魔法の実力を知らないし、一般論で言ってるだけだから。世間一般の常識を喋ってるだけだから！」

「そんな念押ししなくても、無理はしないさ。他に対策はないかな」

「魔法を使わない前提なら、すぐに思いつくのは秘密を裏付ける証拠を隠滅することだね。それから秘密に関わった人間を、買収したり権力に物を言わせて口封じ。大人はやるけど、ドラコくんはそういうのはまだやらないでほしい」

中身はすでに薄汚れた大人なのに、気を遣わせて申し訳ない。ただ、ドラコ少年にはなるべく真っ当な道を歩んでほしいと、俺も思っている。そもそも本当の「秘密」は俺の意識そのものだ。証拠や証人は存在しない。

「ちょっと視点を変えて、建設的な方向で行こうか。やっておくべきことの一つ目

は、秘密を暴かれても問題にならないだけの味方を作っておくこと。味方がいれば庇ってもらえることもあるし、孤立無援にならないというのは、案外重要だよ。この場合の味方というのは、同じ弱味を持つ共犯者のことじゃない。外部に向けてきみの立場を弁護してくれる理解者だ」

彼は指を二本立てた。

「二つ目は、自分から秘密を明かしてしまうこと。他人に暴かれる前に自分から告白した秘密は、弱みになりにくい。もちろんそれで取り返しの付かない窮地に陥らないように気を付ける必要がある」

「打ち明ける相手を見極めるということかい」

「それと、予め足場を固めておくことだ。足場というのは法律改正かも知れないし、前例作りかも知れないし、ただの個人の信頼かも知れない。先に挙げた、味方作りも含まれるだろうね」

力のない子供に出来るのは、他者の信頼を勝ち得ることくらいだろう。

「三つ目は、隠したい事情の核心部分を陳腐化してしまうこと。どう言えればいいかな。たとえばそこに転がってる小石が、実はダイヤモンドの原石だった。というの

が、きみの知ってしまった秘密だとする。その秘密を守るために小石をしまい込むんじゃないくて、ハンマーで叩いて粉々にしたり、高温で燃やしたりして、原石としての価値を無くしてしまうんだ。さっき言った秘密の証拠や証人を消すというのは、小石の組成を調べた時の記録を消すことに当たるから、少し違うね」

「秘密の存在を示す証拠を消すんじゃないくて、秘密そのものの価値を無くすということか」

俺の場合で言うと、原作知識が役に立たないほど、この夢の世界が原作とかけ離れてしまえばいい。それで平和になれば万々歳。しかし原作ファンではないのでどこをどう変えたらどうなるか、さっぱり分からん。

「言うのは簡単だけど、やるのは難しそうだな」

俺が笑うと、イースは真顔で頷いた。

「そうだよ。簡単なのは秘密を親に打ち明けて、相談することだと思うよ」
それができれば苦労はしない。



後日、彼と一緒に本屋へ行った。

『これで安心！ 浮気がバレない閉心術』

『浮気を見抜くたった一つの冴えたやり方』

『開心術と閉心術 その攻防と相互補完の歴史』

『うちの子が反抗期シリーズ3 育児に使える開心術』

『プロが教える開心術と閉心術・ポケット版』

『閉心術士の落とし穴 失敗実話百選』

そんな題名がずらりと並んで、一大コーナーを形成していた。硬軟取り揃えてある辺り、世間的にもニーズは幅広いようだ。平積みされた本によれば、開心術と閉心術とは、現代社会に生きる全ての人間に必要な魔法だそうだ。

「助けてタービネイト先生。多すぎてどれを選ばいいかわかりません」

「とりあえずベストセラーにしとけば？ これ、定番らしいよ」

と適当に渡されたのは、『これで安心！ 浮気がバレない閉心術』だった。付き合ってくれた友人の手前、本は買ったが、これでヴォルデモートとダンブルドアに抵抗できるのか。甚だ心許ない。

不安だったので、閉心術をあてにしないで初心に返ることにした。つまり疑われるような行動は慎む。これに尽きる。

その後に入った箒屋では、店員を交えて定番箒の改造について盛り上がった。バイクほどカスタム出来るパーツは多くないが、それでも穂の材料の割合など、乗れ手が工夫できる部分はあるという。俺も手を加えたくなった。だがあしらわれた。新品を買ってもらったばかりの初心者、チューニングはまだ早いと。

「ホグワーツは改造箒の持ち込みは禁止だよ」

と店員に釘も刺された。それ以前に、一年生のうちは箒の持ち込み自体ができない。特別扱いはハリー・ポッターだけだ。

ダイアゴン横丁を出て薄暗いパブを抜けると、非魔法使いの世界。ローブの上からコートを着た俺たちは、とくに注目されることもなく通りを歩く。人目のないところで箒を原寸大に戻し、行きと同じく空の旅へ。

「あーカネ欲しい」

イースがばやいた。箒屋で、彼はオドメーターを何度か手にとって、結局買わずに棚に戻していた。

俺は恐縮した。今月から多額の小遣いを貰い始めたばかりだ。イギリスの小学生の小遣い相場は知らないが、くれる時に母上が「小役人の給料程度で足りるかしら」と心配そうに言っていた。それくらいマルフォイ家の金銭感覚は庶民とずれてゐる。そんな親の脛かじりに、金の話は居心地が悪い。

「ドラコくんの友達にさあ、箒に乗るための家庭教師が必要な金持ちの子、いない？」

「悪いな。そんな都合のいい友人はいない」

それはおいても、マルフォイ家での家庭教師も、ドラコがホグワーツに入学するまでには終わる仕事だ。他に働き口を探し始めたほうがいい。そう思ったのは、俺だけではなかった。

屋敷に着くと、父上がイースを書齋に招いた。珍しいこともあるものだ。実はその時、彼に別口の仕事を紹介したそうだ。それを知ったのは翌週。魔法省の臨時職員に採用されたと、本人から教えられた後だった。

「先方は、海外経験のある人材が欲しかったんだってさ。俺が条件にどんぴしゃだったみたいで、即決だったよ。給料もまあまあだし、臨時とはいえ数年は続く仕

事だから親も喜ぶし、マルフォイさんには本当に感謝だよ」

「就職おめでとう。どんな仕事だ」

「配属は国際協力部。数年後の国際イベントに向けての仕事だってよ。ワールドカップがあるから、それ絡みかな」

もっと喜ばいいのに、厳つい容貌の家庭教師は、済まなさそうに眉を下げていた。

「それでドラコくんには申し訳ないんだけど、役所のほうからなるべく早く来て欲しいと言われたんだ。だから……」

言葉を濁す相手の代わりに、俺から申し出た。

「ああ。タービネイト先生が合格だと認めてくれたら、ぼくも飛行術を習うのは終わりだな。父上たちもそれでいいと言っているんだろう?」

「俺の都合でごめんな」

「就職は大事だよ。でも今後も箒乗りの先輩としてツーリングに付き合ってくれたら嬉しい」

「それはもちろん。これから箒仲間としてよろしく」

俺たちは握手を交わした。

その次の週で飛行のレッスンは修了した。最後の夜はタービネイト氏の新しい門出を祝って、ささやかな夕食会が開かれた。イースの母親と紹介者のグラブラ夫人も招かれた。

客の帰りを見送った後、母上が俺の肩を抱いた。

「今度、お茶会を開きましょう。あなたと同じ年の子たちを招いて。庭のブルーベルが咲く頃なら、きつと皆喜んで見に来るわ。新しいお友達もできますよ」

そうですね、と俺は相槌を打った。子供相手なら、腹の探り合いや開心術を警戒する必要はないだろう。

K o r p i k l a a n i ♪ H i d e Y o u r R i c h e s ♪

青に騒ぐ・1

魔法界という狭い業界の中には、「聖二十八氏」という括りがある。非魔法使いの血を入れず、純血の魔法使いのみで血脈を保ち続けているという旧家を認定したものだ。数十年前に提唱された呼び方だが、概念自体はそれ以前からあった。魔法界の伝統や歴史に価値を置く者にとっては、意味のある区分だ。

ちなみにマルフォイ家は、現存する聖二十八氏の中で最も裕福な家の一つ、ということになっている。本当は魔法使いでない先祖もかなりいるが、表向きはうやむやにされている。

さて、その一人息子が同年代と交流するために、ウィルトシャーの屋敷に「ドラコのお友達に相応しい」子供たちが集まった。

——額から広がる衝撃。

鼻面めがけて俺が勢いよく頭を突き出すと、クラブ少年はよろめいた。反撃される前に相手の腰にタックルを仕掛けた。重い体をどうにか押し倒して馬乗りになる。そして拳を握って、……知り合いの顔を殴るのは躊躇われたから平手で頬を叩

いた。悲鳴が上がった。

二発目を当てる前に横から体当たりされた。艶やかな緑。光る青。交互に視界を支配する。頬骨の辺りに衝撃。真上に巨体。芝生のちくちくとした刺激。今日は快晴だ。

伸びてきた腕に顔横の地面を殴らせ、前腕に噛みつく。腕が怯んだ。その隙に尻を上げ、腹の上の巨体ごと体を振る。相手の体がころりと転がる。ゴイル少年だった。俺は相手の腕を掴んだままマウントを取り返す。

彼の胸倉を掴み、太い顎めがけて思いきり頭を突き出した。肉のクッションがあるせいか衝撃が小さい。もう一回。

そこでドラコの軽い体は突き飛ばされた。草が口に入った。

身を起こそうとすると、後ろから羽交い締めにされた。太い息が耳元に掛かる。その息の隙間から、「やれ、グレッグ」と、クラブが低く言った。ゴイルが口を押さえながら立ち上がった。

脇の下から両腕を固定されているので、正面から殴られることになっても避けようがない。後ろに頭突きしたくても相手は警戒していてチャンスがない。ゴイルが

でたために振り下ろしてくる拳は遠慮がなく、何発かは骨に沁みた。

俺は顔の両脇にあるクラブの太い手をしっかり掴んだ。地面を蹴った。逆上がりの補助板の要領で、正面のゴイルの体を蹴り付ける。腹。胸。最後に顎を蹴り上げて、勢い余って頭から芝生に落ちた。首が痛い。

起き上がろうと体を捻ると、足元に転がっているゴイルがいた。顎下から入った蹴りが効いたのか、立ち上がる気配がない。泣いていた。

クラブはまだ呆然としている。

「おい」

俺が呼びかけると、はっと我に返り怯えながらも殴りかかってきた。避けて、脛を思いきり蹴った。少年はその場にしゃがみ込み、泣き出した。こちらも貧弱な脛を使ったからやっぱり痛い。というか全身痛い。

「何か言うことは？」

尋ねてもクラブとゴイルは鼻水を垂らして泣き喚いているだけだ。俺も垂れていた涙を服の袖で拭い、それが鼻水ではなく鼻血だったことに気付いた。

断っておくが、ドラコの友人を拳で決める必要はない。母上が聖二十八氏の家の

夫人を中心に招いた、和やかな茶会になるはずだった。

——始まりは確かに穏やかだった。

「こんにちは、ミセス・マルフォイ。本日はお招きありがとうございます」

「お待ちしていたのよ、ミセス・パーキンソン。それにパンジーちゃん。可愛いドレスね。ねえ、ドラコ」

「そうですね」

茶会に招かれた名家の夫人とその子供が屋敷にやってくるのを、母上と俺でにこやかに出迎える。

「初めまして。ドラコです。今日は来てくれてありがとう、ミス・パーキンソン」
「パンジーでいいよ。あなたホグワーツに行くんでしょう？ そうしたら同級生だもの。仲良くしましょ」

「そうだね。よろしく」

パンジー・パーキンソンは、黒髪おかつぱの、なかなか勝ち気そうな子だった。容姿が犬のバグに似ていると原作では評されていたが、やや目が離れ気味なだけだ。まもなくブルストロード家の母娘も来て、親たちも娘たちもその場でそれぞれお

喋りを始めた。

「そういえばナルシッサさん。今日は息子さんと同年代の子をお持ちの方にお声掛けされたそうですけど、ザビニさんもお招待されたの？ あの方の今の名字はちょっと忘れてしまいましたけど、確か一人息子がいらっしやいましたよね」

客が声を潜めて尋ねるのに対し、母上は鷹揚に答えた。

「いいえ。皆様とはお話が合わないと思って、お呼びしておりません。裕福でいらっしやっても、育ちが違いますもの」

「色々とお忙しいでしょうね。ご主人がもう体調を崩されたと、風の噂で聞きましたよ」

「六人目ともなると要領がいいこと。こちらもお花を贈る準備をしておこうかしら」花と言っても病人への見舞いではなく、イギリスの葬式で香典代わりとなる献花の話だ。娘たちは自分たちの会話に夢中で聞いていないが、密やかであけすけな噂話にはらはらした。かといって、客への挨拶の場から逃げ出すこともできない。居心地の悪い場所で、俺はひたすら気配を薄くしていた。

そこへ新たな客が到着した。

よく似た二人の夫人が、これまたよく似た固太りの少年をそれぞれ伴っている。「こんにちは、ミセス・マルフォイ。ドラコくんがヴィンセントとまた遊んでくれて嬉しいわ」

「お招きありがとうございます、ナルシッサさん、ドラコくん。ほら、お久しぶりですってご挨拶なさい、グレゴリー」

母親に促されて、少年二人はのろのと、または渋々と挨拶した。

「二人とも久しぶり。元気だったかい」

俺が話しかけても、目も合わせないで菓子のある場所に行ってしまった。これが、原作ではドラコの取り巻きだった、ヴィンセント・クラブとグレゴリー・ゴイルだ。

この夢の世界でも幼い頃からドラコとは交流があり、俺も去年に一度、顔を合わせたことがある。その時はあれこれ喋りかけても反応が薄く、主体性のない無気力さが目に付いた。

彼らの父親は、ドラコの父親の学生時代からの取り巻きで、デスイーターとしても行動を共にしていた。それが息子たちにも影響していた。二人は、マルフォイの

息子の取り巻きになることを期待されていた。だからドラコと一緒にいても少しも楽しそうに見えなかった。

原作のドラコなら、気にせずガキ大将になったつもりで二人を引き回しただろう。しかし俺は「遊びたい気分でないなら無理しなくていいよ」と、二人と会うのを止めた。それなのに今更また呼びつけたことに不満を持たれたのかも知れない。

「嫌な感じの子たち」とパンジーが呟いた。

「まあそう言わないでくれ。親の付き合いもあるから」

その後まもなく客が揃い、母親たちは茶会、子供たちは広間で放し飼いになった。集団生活の経験が無いわりに、どの子もそこそこ社交的だった。しかしそんな中、クラブとゴイルはゲームにも参加せず、ひたすら菓子や軽食を食べ続けている。声を掛けても聞こえないふり。

「ちよつと、ドラコが話しかけてるのに何で無視してるの。さっきから感じ悪くない？」

と見かねたパンジーが声を荒げても、無視。

そのうち庭に出て遊ぼうという話になった。クラブとゴイルはそれも無視しよ

うとしたが、俺が「いいから皆で行こう。二人だけ残っていたら変に思われるぞ」と宥めすかして連れて行つた。庭でも、孔雀に群がる子供たちをよそに、二人だけは離れた所で立ち尽くしている。何が何でもこの家では楽しまないと決めているよ
うだ。

「なあきみたち。べつにぼくと仲良くしてくれとは言わないから、他の子と遊んだらどうだ」

そう話しかけると、二人は小さい目で睨んできた。

「楽しいか。新しい取り巻き候補を見せつけるのは」

「俺たちは取り巻きにはならない。おまえみたいな奴、家の力がなければ何も出来ないくせに」

「ぼくみたいな奴とは？」彼らの言いたいことは分かっているが、先を促した。

「細くて青白くて弱そうなくせに、女に囲まれて偉そうで。おまえ自身はちつとも偉くないんだからな。黒髪女がべつたりしてるのだって、おまえの家に取り入るためだろ」

と、ゴイルが意外に早口に捲し立てた。

「偉そうに振る舞っているつもりはなかったが、気に障ったのなら謝ろう。でもだからって、関係のない人を悪く言うのは良くないな」

「へえ、庇うんだ」

「おっぱいでも見せてもらったんじゃないか」

クラブが笑いながら突き出した拳が、俺の鳩尾を直撃した。軽く背を丸めた俺を見て、ゴイルも嘲笑った。

「ほら、弱い」

ドラコがもやしっ子であることは否定しない。代わりに言う。「彼女に謝ってくれ」

「は？　なんで？」

とクラブが耳に手を添えてみせ、ゴイルも言った。

「おっぱいじゃなくて、もっと凄い物見せてくれたって？」

二人はくぐもった声で笑った。

「……いい加減にしろ、坊やたち」

より近い場所にいたクラブの襟首を掴んで、思いきり頭突きした。

彼の上げた悲鳴に、孔雀の周りにいた何人かが振り返った。パンジーの驚いた顔もそこにあつた。



体格だけは立派な二人は、最終的には涙と鼻水で顔を汚して降参した。

やりすぎたかな、と冷静になった頭で反省した。体感時間でもう十ヶ月以上も「お行儀のいいお坊ちゃん」を演じてきて、ストレスが溜まっていたようだ。まさか自分から子供に喧嘩を売るとは思わなかった。

まあいいよね。こちらも同じ子供だし。ドラコの非力さでは殴っても大したことないし（頭突きについては棚上げで）。むしろ一番痛手を負っているのは俺だし。

頭の中で色々と言いつつ、周りを見た。

クラブとゴイルを除く子供たちは、俺たち三人を遠巻きに眺めている。思わぬ乱闘に戸惑った様子だった。マクミラン家の少年だけは、にやりと口角を上げて俺に親指を立ててみせた。少し離れた所では小さな女の子が、姉と思しき少女に抱き付いて泣きじゃくっていた。

俺は姉妹の前まで歩いていって、妹の後頭部に謝った。

「ごめんね怖がらせて。もう終わったよ」

「こっち来ないで」と姉が手で追い払う仕草をした。「妹はあなたの血を見て、痛そうだって怖がっているんだから」

「鼻血ならもう止まったよ」

「うわもう本当こっち来ないで。おでこ拭いて」

と、姉には追い払われた。

姉が嫌そうに差し出したハンカチで額を拭うと、血でべったりと汚れた。頭突きの時に齒に当たって切れたのか。

「もうこれは返せないな」

「純血の血なんだから、きちんと処分して」

「了解」それなら新しい代わりのハンカチを買って返そう。「ところで失礼だけど、きみの名前をもう一度聞いてもいいかい」

三組も四組もまとめて挨拶したので、恥ずかしながら確信が持てない。すると少女は露骨に顔をしかめた。

「呆れた。客の顔と名前も一致してないわけ？　こんな野蛮人が聖二十八氏の家

の子だなんて。信じられない」

「面目ない」

「べつにいいよ。私の名前なんて覚える価値もないでしょうよ、ええ。そのまま忘れて」

「ダフネ」と妹が泣きべそ顔を上げた。小学校低学年くらいだ。「お姉様はダフネっていうの」

ダフネというと、グリーン格拉斯家だ。「そうか。それではきみはアストリアだね。教えてくれてありがとう」

「だから汚い手で触らないでってば」

その時、屋敷から大勢の人が出てきた。

「小母様、こっち！ 早く！ ドラコが怪我しちゃう！」

と慌てるパンジーに先導されてきた母上は、俺を見て悲鳴を上げた。

「ああ、ドラコ、ドラコ。血が出ているじゃない。目もぶつけたの？ 霞んでいない？ 他に痛い所は？ 全部お母様に見せなさい。ああ可哀相に。それにして

も酷い格好だこと。すぐにお父様にも帰ってきて頂きましょうね。あの子たちにや

られたのでしょうか？」

振り返ると、クラブとゴイルも自分の母親に詰め寄られていた。

「マルフォイさんの息子さんに何やったの。あんたは力が強い割にぼーっとしているんだから、気を付けなきゃ駄目だといつも言っているでしょう」

「今すぐドラコくんに謝りなさい。いいから。え、齒を折られた？　これは前から抜けかかっていた子供の齒でしょうが。ごまかさないの！」

「ドラコ、よそ見をしない。何があつたのか説明できる？　どうしてあの子たちはあなたに乱暴したの」

三人の女性が各自の息子を叱り、息子たちのうち二人は泣きじゃくり、泣いていない一人も血だらけ。現場はなかなかの阿鼻叫喚ぶりだ。

——これは、思ったよりもやっちまったかな？　魔法使いの子供は取っ組み合いの喧嘩はしないのかな。いやいや、するだろう。俺たち三人の、正確にはその親の関係性がややこしくしているだけだ。その証拠に、他の客は心配そうな表情の下に好奇心を隠して、高みの見物を決め込んでいる。

俺は母上に放してもらい、大勢に向き直った。

「皆様、お騒がせして申し訳ありません。ぼくが普段あまりよその子と遊ぶ機会がないもので、ついつい熱中しすぎました。付き合ってくれたヴィンセントくんとグレゴリーくんは怪我をさせてしまったことは、本当に申し訳なく思っています。二人の怪我の責任は全てぼくにあります。これから二人の手当てをしなければなりませんので、しばらく席を外します。皆様はどうぞご歓談をお続け下さい。ヴィンセントくん、グレゴリーくん、一緒に来てくれるかい」

二人は立ち上がり、しっかりと自分の脚で歩き始めた。良かった、大した怪我はしていない。

「待ちなさいドラコ。あなただけでは」

「大丈夫です母上。屋敷にはドビーたちがいますから。ああそうだ。パンジー、人を呼びに行ってくれてありがとう」

屋敷に戻る前にそれだけ伝えようと、パンジーは顔を歪めて泣きそうになりながら、何度も頷いた。

青に騒ぐ・2

ハウスエルフたちが急いで怪我と身だしなみをなおしてくれたので、三人ともあつという間に良家の子息らしい姿を取り戻した。一番怪我が酷く、手当てに時間が掛かったのは、やはり俺だった。

先に手当てを終えて手持ち無沙汰な二人のためにも、冷たい牛乳を用意するよう、アビーに頼んだ。

「お茶もご用意できるのでございますよ」

「いや、冷たいのでいい。口の中が切れているんだ」怪我をした場所がずきずきと熱を持っている。

ハウスエルフが去り、後には所在なさそうにソファに座ったクラブとゴイルと、俺。

「歯を折ってしまって本当に済まない。治療費は出すからヒーラーに治してもらってくれ」

俺が謝ると、手の中で白い物をいじっていたクラブは、

「……べつに」

と、もごもご言いながら、それをポケットにしまった。

「ゴイルも済まなかったね」

「……いや」

こちらは俯いたきり、目を合わせてくれない。

アビーが牛乳を持ってきてくれた。客のためにパウンドケーキも一切れずつ添えてある。ラム酒を効かせた自家製のパウンドケーキは、マルフォイ家の定番お茶請けだ。

「どうぞ。お茶の時にケーキが出るはずだけど、もしかしたら二人ともこの後すぐ帰るかも知れないだろう。その前にこれだけでも食べていってくれ」

俺が勧めた途端、二人はすぐに皿へ手を伸ばした。

「食べながらでいいから聞いてくれ。さっき、きみたちのどちらかが、ぼくの取り巻きになんかならないって言っただろう。ああ、ゴイルね。こちらもそういう関係は望んでいない。でもぼくを傷付けようとして、関係のない他人を貶めるのは駄目

だ。きみたちの言ったことをパーキンソンさんが聞いたら傷付くだろう。それは許せない。ぼくが手を出したのはそれが理由だ」

クラブが小さい目を精一杯開いた。ゴイルの顎の動きも一瞬だけ止まった。しかし、彼らの口からは何も聞けなかった。残念だ。

三人で茶会の席に戻ると、クラブ夫人とゴイル夫人は息子を連れて早々に帰ってしまった。俺も母上に捕まえられて隣に座らせられた。完全に問題児の扱いだ。お陰で茶会のお開きまで、他の子供と接触できなかった。

そして客が帰ると母上が怒りを抑えなくなった。

「なんて酷いことをするのかしら、あのトロールたち！ 親も親よ、躰がなくないのよ。ルシウスが目を掛けてやった恩をこんな仇で返してきて。許せない」

クラブとゴイルが悪いと決めつけて、親に責任を取らせると息巻いている。ドラコを溺愛しているのが悪い方向に出た形だ。我が子にも非があった可能性を都合良く無視する、典型的なモンスターペアレント。これでは原作のドラコが小さな暴君になるのも無理はない。

「母上、ぼくも二人に手を出していますから、二人だけを責めるのは止めて下さい」

「でもドラコの怪我のほうが酷いでしょう。あんな、人に謝ることも出来ないトロールを庇わなくていいのよ。お茶会のお客様だって、ドラコが二人を庇ったと分かってるんですからね」

「すみません」

母上を宥めている間に、予定より早く父上がロンドンから戻ってきた。母上が事のあらましを伝えた後、俺のほうにも夕食前に書齋に来いという出頭命令が来た。「クラッブとゴイルの倅に殴られたと聞いたが、事実か」

父上は単刀直入に尋ねてきた。

「正確には殴り合いです」

「怪我は？」

「一見して分かる怪我は応急処置させましたが、家に帰ったらきちんと手当てするように伝えてあります。治療費はすみません、我が家持ちでもいいでしょうか」

「おまえの話だ。血だらけだったと聞いたぞ」

目の周りをなぞられ、痛みに瞬きした。痣ができたところだ。

「まだ痛みはありますが、もう大丈夫です」

「勝ったのは誰だ」

少し考えて「多分ぼくです」と答える。一番手傷を負ったものの、最後に立っていたのは俺だ。

父上は椅子に戻り、ゆっくりと息を吐いた。

「我が息子ながら、そこまで根性があるとは思わなかったな。理由は何だ」

「……二人の態度が気になって、理由を尋ねてもまともな答が返ってこないのに腹が立ち——」

「違うだろう、それは」と遮られた。「それだけで流血沙汰になるか。去年からクラップとゴイルの倅と距離を置いていることも気にはなっていたが、関係があるのか？ 母親には言いづらいことでも、男同士なら話せるだろう」

まあいいか、と肚を決めた。父親世代の関係が喧嘩の原因でもある。

「距離を置いたのは、義務感だけの付き合いから二人を解放してやろうと思ったからです。でもそのせいで、今日は二人とも最初から喧嘩腰でした。新しい取り巻き候補を見せつけていると思われるようです。誤解だと伝えても、二人はある女の子について邪推した発言をしました。それが彼女に失礼だったのと、ぼくの弱さを笑

われたのが腹に立って、ぼくがクラブを殴りました。そこからは泥仕合です。悪いことをしたとは思っていません。自分とその女の子の名誉を守ったつもりです」

「客の前では、全面的に自分に非があったと説明したそうだが」

「だって相手は茶会の客ですよ。さすがに手を出したぼくが悪いでしょう」

父上は冷笑した。

「なるほど。ところで、見ていた子供たちがドラコは悪くないと証言してくれたらしいぞ」

「ありがたいことですね」

俺は俯いたが、ほっとして口元が緩んでいたと思う。

喧嘩相手を庇って全てを自分の責任にすることで、却って同情を得られるとは思わなかった——と言えど嘘になる。パンジーの口添えもあったので、喧嘩の現場を見ていなかった客人たちも、俺の言葉を額面通りには受け取らないだろう。原作のドラコは、自分が受けた痛みを大袈裟に訴えることで同情を買おうとした。一方俺は、自分が貧乏くじを引くところを見せて同情を買おうとした。似たようなものだ。それに、俺が責任を取ろうとしたのを見てクラブとゴイルが謝る気になってく

れることも期待していた。こちらは上手く行かなかったが。

「まだ物足りないか」

「いいえ」

「ではクラッブとゴイルには——父親のほうだが——私から話を付けよう。息子たちの怪我については互いに一切不問となるだろう。家同士の付き合いもあって、母親連中は大事だと思い込んでいるが、所詮は子供の喧嘩だからな。騒ぐほうが馬鹿らしい」

良かった。ドラコの親が相手の親を威圧して、結果的に息子たちの恨みが深まるのが、一番面倒だった。

「ただし母上はおまえが怪我をしたことで、ひどく心が乱れている。しばらく行儀良くしていろ」

「そうします」

「これに懲りたら、次は人を呼ばれる前に片を付けるように。婦人の名誉を守ったことについてはよくやった。次からはもっと上手く立ち回れ」

「申し訳ありませんでした」

俺は一礼して退室した。

翌日になると、傷はうつすらと跡を残すだけになっていた。回復力を高める魔法薬を使ったお陰だ。息子の見た目から痛々しさが消えて、母上もようやく落ち着いた。

そこで家庭教師の授業の合間に、話をする時間を作ってもらった。まずはせっかく設けてもらった友人作りの機会を潰してしまったこと、二人も怪我させてしまったことを改めて謝る。それから、茶会の客の夫人たちに手紙を書いてもいいかと尋ねた。

「何の手紙です」

「せっかくお越し頂いたのに、喧嘩沙汰で台無しにしてしまった詫び状です」

母上は微かに眉を顰め、深い溜息と共にそれを開いた。

「あくまでも、あなたは自分が悪いというのね」

「はい」

「あまり二人を追い詰めないように、良い子にするのもほどほどになさい。実はクラブ家とゴイル家から、息子本人と一緒にお詫びに来たいと連絡が入っていま

す。いっそ二人とは仲直りしましたと、手紙に書き添えられたら素敵ね」

クラッブ家、ゴイル家は、裕福な聖二十八氏の家に逆らう気はない。マルフォイ家も跡取り息子が問題児だという評判が広がるのは避けたい。そうしてこの件は「子供同士の喧嘩」として手打ちになった。母親たちが出張ってくる前に終わらせていたら、もっと早くこの結果になっていただろう。その点は父上の言う通りだった。

その後屋敷にやって来た二人と謝り合ったが、目が合うことはなかった。クラッブもゴイルも言葉少なく、動きは鈍く、表情は乏しかった。思うところあって、同席していた母上たちに少し外してもらった。

さて、と俺は顎を撫でる。

「きみたちは、親に言われて仕方なく謝りに来たんだろう。親に押しつけられた付き合いなんか嫌だよな。でも子供の意見は通らない」

二人はふて腐れた表情で頷いた。もしここでまた疎遠になると、彼らは親から責められる。そしてドラコを恨む。今後ホグワーツでも顔を合わせるのに、そんな状況は好ましくない。

「ではまた一緒に遊ぼう。ただし、ぼくの機嫌が取りたいなら、卑屈にならずに堂々としていてくれ。ちゃんと自分の思っていることを口に出してくれ」

先日の、殴り合いになる前に彼らがぶつけてきた言葉。そこから察するに、二人とも本来はそんなに愚鈍ではないはずだ。けれど己を殺して親の言いつけに従い、自己主張を諦めてしまった結果が原作のどくの坊だったとしたら、不憫でならない。「ぼくたちが一緒に過ごしていれば、親はそれで満足だろう。そこで何をするかは、親の言いつけとか家の付き合いとか、余計なことを抜きにきみたち自身で考えてみてほしい。ゆっくりでいいから」

二人は戸惑った様子で顔を見合わせた。



茶会の出席者に手紙を書いていると、ドビーが部屋に来了。

「坊ちゃん、今よろしいですか。お手紙を書かれると聞いて参ったのでございます」
「代筆してくれるのか。助かる」

ドビーは「そうではございません」と、抱えていた大きな籠を床に置いた。ふわりと甘く清々しい香りが漂った。籠には、茎ごと摘まれた青紫の花がこんもりと

入っていた。

「それ、庭のやつか」

「はい。お庭のブルーベルでございます。ようやく咲きましてございます」

森に咲くブルーベルは、日本人にとつての桜と同じく、イギリス人が春の楽しみにしている花だ。その開花時期に合わせて母上が開いた茶会も、言ってみれば「庭の桜でお花見しませんか」という名目で誘ったようなもの。ただ残念ながら、茶会当日はまだ蕾だった。

「先日のお客様にお手紙をお送りするなら、この花も一緒にお届けしたら喜んで頂けると、ドビーめは思うのでございます」

手紙に花を添える。そんな平安貴族めいた発想はなかった。宛先は旧家の既婚女性ばかりだから、受けはいいかも知れない。

「いいね。だったら手紙の配達中に花が萎れたり散ったりしないようにしてくれるか。せっかくおまえが摘んできてくれたのに、途中で駄目になったら意味がない」
「かしこまりました」

ドビーはうきうきした様子で花を選び始めた。

俺は机に向き直った。

手紙の下書きは、母上による二度の修正を食らった上でようやく合格ラインに達した。あまりに完璧では親が書いたのと変わらないし、稚拙すぎてもドラコの教育レベルを疑われる。適度に子供らしい詫び状というのは、なかなか加減が難しかった。

やがて母上が様子を見に来た。息子の部屋の床に座り込んでいるハウスエルフに、眉が顰められる。その口から刺々しい言葉が飛び出す前に、俺は急いで説明した。

「母上、ドビーは手紙に添えてはどうかとブルーベルの花を摘んでくれたのです」

すかさずドビーも一輪差し出した。

母上は表情を和らげ、花を受け取った。「……悪くない考えね」

滅多にない女主人からの肯定的な言葉に、ドビーはぱっと顔を輝かせた。「ありがとうございます！ 奥様」

その後、開花したばかりの花を添えて送った手紙は、母親連中には概ね受け入れ

られたという話だった。子供たちから何通か返事も貰った。

その中の一通、パンジー・パーキンソンからの手紙には、自分のせいでもあるので怪我の見舞いに行きたいという一文があった。もしや、喧嘩前の俺たちのやり取りを聞いていたのか。「きみが責任を感じる必要はないよ」とでも伝えておこう。

ダフネ・グリーングラスからの手紙には、俺が送ったハンカチの礼が、事務的な文章で綴られていた。

手紙の内容に目を通した母上は、口角を緩く上げた。

「女の子からの返信。しかも二人も。ふふ、ドラコはお父様に似ているから女の子に人気があって当然よねえ」

「母上」

「ふふふ」

父上も手紙の返事が来たことを耳にすると、興味深そうに言った。

「おまえを気に掛けてくれた友人候補だ。大事にしろ」

「お嫁さん候補の可能性もありますよ、ルシウス」

「そうか。聖二十八氏の家の娘なら何の問題もないな。おまえの母上ほど素晴らし

い女性ではないかも知れないが、付き合いは続けておけ」

「父上。彼女たちは義理で返事を寄越しただけですから」

「どうかな、ふふふ」

両親はにやにやしている。ドラコへの評価を俺がむきになって否定するものでもないので、好きなようにさせておいた。

H a i l S p i r i t N o i r ≡ M a y h e m I n B l u e ≡

幕開け・1

セオドア・ノットは物静かな少年だった。

彼の父親は旧家の当主であり、起訴を免れた元デスイーター。言うなればルシウス・マルフォイの同類である。そのため同じ年に生まれた息子たちも、幼い頃から顔見知りだった。

母親を早くに亡くしたノットは、老父と二人暮らしをしている。そのせいか、甘やかされて育ったドラコよりかなり大人びていた。齒応えのない取り巻き候補とは違う、マイペースな少年を、ドラコも気に入っていたようだ。対等な友人と呼べる唯一の存在であったのかも知れない。

だからこの夢が始まってからしばらくは、俺はノットと会うことを避けていた。ドラコの人格が変化したことについて、大人は理屈で納得させられる。しかし子供の感覚を欺く自信はなかった。ちなみにクラブとゴイルを遠ざけたのは、単に不毛な時間を減らしたかったからで、警戒したからではない。

ところが秋口に、ノットから「自分が悪いことをしたなら謝るから、また一緒に

遊んでほしい」と手紙が来て後悔した。突然友人を取り上げられた少年の気持ちを、全く慮っていなかった。それで「きみは何も悪くない。色々あって性格が変わったと言われるが、それでも良ければまた遊ぼう」と返事を出して家に呼んだ。

相手にとっては数ヶ月ぶりの再会、俺にとっては初めての対面の時。ノットはしばらく俺を観察してから、手を差し出してきた。俺が手を握り返すと、彼はやや目を伏せて言った。

「性格や価値観が変わることも、たまにはあるよ」

以来、ドラコの変化を疑う言葉を彼の口から聞いたことがない。ノットの父親經由によると、母親が生きていた頃のセオドア少年は、泣き虫のきかん坊だったという。

余談だが、原作で彼の名前は「テオドール」だか「セオドール」と表記されていた気がするが、それを思い出した時には、既に「セオドア」として把握していたので、今後も彼のことはセオドアと呼ぶつもりだ。実際にドラコの口を借りて呼びかける時も、「シアドー」か「テオ」である。

それはさておき、茶会の席での喧嘩沙汰の件を知っても、彼は「やるな」の一言

で終わらせた。

「俺も見なかった」

例の茶会は、母上が付き合いのある夫人連中に声を掛けたものだったから、ノットは招かれていなかった。

「ごめん、次はテオも必ず呼ぶから」

「またお茶会か」

「いや、今度の名目はぼくの誕生日会」

するとノットは顔を顰めた。パーティや人の多い場所は苦手だという。

「そう言わずに来てくれよ。ぼくが暴れるのを警戒して誰も来ないかも知れない。その時は慰めてくれないか」

「面倒臭い」

そう言い捨ててからものの数秒で、彼は気を変えた。

「今ちょっと考えたけど、ドラコが殴り倒した二人も、そのパーティに来るのか」

「招待状は出す」

「家の付き合いを考えたなら、来る可能性はあるな」

ノットは思案深そうに顎を撫でた。

「そいつらが出席なら、俺も出る。向こうがおまえに仕返しするつもりでも、二対二なら牽制になるだろう」

「ありがとう、テオ」俺は屋敷の入口を一瞥した。「実は今日、二人が来るんだ。というかそこに来た」

親に連れられ現れた二人に手を振る。

隣でノットが「はあ？」と声を上げた。「今日は俺と遊ぶんじゃないのか」
「もちろんきみと遊ぶのが一番の目的だ。だけどまたあの二人と揉めたら困るな
と
思
っ
て、今日呼んだ。一応仲直りしたことにはなっているけど、本心はどうか分
か
ら
な
い
か
ら
な。どうせやるなら人目のない時に徹底的に——待つて。先に言わな
か
っ
た
の
は
悪
か
っ
た。ごめん。ごめんて。帰るなよテオ」

「服を引っ張るな馬鹿」

ドラコ一人を相手にするより第三者もいたほうがクラブとゴイルも気が楽だろ
うと、ノットを引き合わせることにしたのだ。同年代との人付き合いが少ないノッ
トにも、同い年の幼さを知るいい機会となるだろう。

俺たちが揉めている間に、クラブとゴイルは近くまでやって来た。ノットは一歩引いて腕を組んだ。

「やあ」と、俺は二人に明るく声を掛けた。「きみたちはノットと会ったことはあるかな。ない？ それじゃ一緒に遊ぶなら、彼にも挨拶してくれるか。ぼくの友人なんだ」

二人は互いに目配せをしてから、自己紹介した。

「初めまして。ヴィンセント・クラブです」

「グレゴリー・ゴイルです。よろしく」

「セオドア・ノット」名乗っただけで、彼は腕組みを解かない。「二人はドラコの友達なのか。それとも敵か」

冷ややかに相手を見定めるようなその視線。ドラコの周囲には、威圧的な目力の持ち主が多くないか。

クラブは差し出した手をさまよわせ、ゴイルは狼狽えて俺を振り返った。「簡単な質問だろう？」俺は二人の間に後ろから割り込んで、肉厚の肩をがっしり抱いた。「きみたちは思ったまま、答えればいい」

二人は俺の顔を見た後、こくりと頷いた。

「ドラコは友達だ」

「よし。それでいい」ぽんぽんと肩を叩くと、二人はほっと息を吐いた。

それから四人で箒に乗って遊んだ。

箒の本数は十分に足りた。クラブとゴイルには家にあるなら持参するよう予め連絡してあったし、マルフォイ家には二本ある。

少年たちは三人とも、ドラコがクリスマスに貰った新型箒に乗りたがった。順番に譲り合って使ううちに、三人の緊張や人見知りも解けて、打ち解けることができた。

頃合いを見て、クラブとゴイルに尋ねた。

「来月ぼくの誕生日会を開くつもりなんだが、きみたちも来てくれるかい」

「もちろん」

「ご馳走が楽しみ」

二人の即答を得て、今度はノットを振り返る。

「というわけで、きみも来てくれるな」

仕方ない、とノットも頷いた。



六月に子供向けのパーティを開くことを決めたのは母上だ。ドラコの誕生日会であると同時に、「今年ホグワーツに入学する子供たちの親睦会」という目的も添えられている。そうすれば面識のない相手でも招待できる、というのが母上の作戦だった。

無理に友人作りに励まなくてもと思うが、言い返すのは止めておいた。名家出身でプライドの高い彼女には、春の茶会にけちがついたのが許せないのだ。そうでなければ、これまで一度もやらなかった外向きの誕生日会を、いきなり開くはずがない。

ドラコの去年の誕生日は、両親に祝われて、贈られた魔法使いの杖を握って倒れたことで終わった。そこから始まった俺のこの夢も、体感時間で丸一年が経とうとしている。

ドラコの誕生日とは、ドラコ本人から俺に、この体の操縦席が明け渡された日。そう捉えている。

玄関のノッカーが鳴った。

最初に来た客は、父親に付き添われたノットだった。俺たちが挨拶をしている間に、外出支度をした父上がホールに出てきた。

「ではな、ドラコ。私はノットの父上と外出してくるから、今日は大人しくやれ」
「行つてらっしゃいませ」

父親たちは連れ立ってロンドンへ逃げていった。誕生日会と並行して母親連中の茶会があるため、この日父上の寛げる場所は屋敷にない。

ノット息子は素っ気ない紙袋を押しつけてきた。プレゼントだという紙袋の中身はノートだった。勉強で使う文房具は普通にありがたい。

「白孔雀は？」と、彼は辺りを見回した。

「孔雀一号と二号は庭にいるよ」

「前から言っているけど、その名前は変えろ。センスが悪い」

孔雀と遊んでくる、とノットは庭へ出ていった。これから大勢来るというのに、むしろ来ると分かっているからか、静かな場所に行く口実が欲しかったようだ。

やがてクラブとゴイルもやって来た。

「お誕生日おめでとう、ドラコくん。ヴィンセントもご挨拶して」とクラブ夫人が息子の背を押す。

「おめでとう」

「うちの子も呼んでくれてありがとうね。ほらグレゴリー、プレゼントを」ゴイル夫人も息子を促す。

「これ、食べて」

クラブの瓶詰めのクッキーと、ゴイルの瓶詰めのキャンディ。同じ瓶と包装からして、同じ店で申し合わせて買ったとみえる。

「二人とも今日はありがとう。クラブ夫人、ゴイル夫人もありがとうございます。先日のようなことは起こさないとお約束いたします」

夫人たちは、みんな仲良くね、と笑顔を浮かべた。俺は、ぼうっと立っている少年たちに部屋のほうを示した。

「向こうに軽食があるから、食べていていいぞ」

しかし前回の茶会と違い、二人は食べ物へ突進して行かなかった。

「どうかしたかい」

彼らはやおら俺の左右に位置取った。

「……ああ、仲直りしたところを他の子たちにも見せるんだね」

俺が言うと、二人はにやりと笑った。

その後に来た客たちが肯定的な反応を示したから、クラブとゴイルの目論見は成功したと言えるだろう。「舍弟にしたのか」というマクミラン少年の直球の質問には困ってしまったが。答えずにいると、彼は軽く頭を掻いた。

「まあ何でもいいけど、喧嘩は今日は止めろよ。もう取りなしてやらないぞ」

茶会の席で、ドラコだけが悪いのではないと大人に訴えた子たちがいたと、父上は言っていた。

「もしかしてきみが親たちに取りなしてくれたのか。ありがとう。お陰で叱られすぎずに済んだ」

アーニー・マクミランは軽く笑い、クラブに「痛かったか？」と尋ねた。クラブが何度も頷くので、俺は横から手の甲で叩いて止めた。

パンジー・パーキンソンが来た。ドラコ存在を見つけるなり、一直線に飛んできた。

「ドラコ！ お招きありがとう。怪我はもう大丈夫なの？」

「ああ。もうとつくに治ったよ」

「良かった。だって、ドラコは私のために二人に怒ってくれたんでしょう。そのお礼も言えてなかったから、ずっと気になっていたの。お見舞いに行きたいと手紙を出しても、要らないと言われてしまうし」

「本当にそんな大した怪我じゃなかったからね。ところで、やっぱりあの時ぼくたちのやり取りを聞いていたのかい」

俺の左右で二人が居心地悪そうに身じろいだ。

「ううん。直接は聞いていないけど、後で他の子が教えてくれたの。ありがとう、ドラコ」パンジーはそっとドラコの手を取って両手で包みこんだ。おや。「私、とっても嬉しかった」

うっとりこちらを見つめる顔は、ヒロインの役回りに酔っている。

「そんな重く受け取らないでほしい。ぼくが勝手に動いただけだから」

「ドラコがそう言うなら。というか、私も気にしていないけどね」パンジーはあっけらかんと言いつつ。そして母親に持たせていた包みを差し出した。「それより

お誕生日おめでとう。これどうぞ。何が好きか分からなかったから、私の好きな店の焼き菓子にしてみたの」

礼を言うと、パンジーは「後で一人で食べてね」とゴイルを押しつけて俺の横に陣取った。

間もなくやって来たミリセント・ブルストロードが、俺たちを見て大笑いした。俺の左腕にぶら下がるパンジーが、「何よ」と友人を睨む。

「いや、だってさ。あんたたち、あれよ。どこぞのお芝居の悪役みたい。羽振りが良くて悪知恵の働くボスに、やっぱり悪知恵の働くその愛人。ボディガード二人」
近くにいた他の少年たちが、それを聞いて爆笑した。

俺たちは顔を見合わせ、互いの微妙な表情を確認した。四人とも父親がデスィーターないしヴォルデモート派の協力者だったから、悪役というのはしっくり来る。「面白いじゃない」と、パンジーが明るく切り返した。

「ちなみにブルストロードさんはどんな役がいい？」と俺は尋ねた。

「私はマルフォイクさんと敵対する組織の女ボスがいいな。そしてこれは挨拶代わりのプレゼント」

彼女の寄越した包みに、マルフォイ組（仮）は色めき立った。

「ボス、敵からの贈り物なんて信用しちゃ駄目だ」

「開けた途端爆発するかも」

「食べ物だったら俺が毒味する」

警戒するふりをしながら開けると、中は立派な装丁の本だった。

招待した子たちには、母親を通じてプレゼントの用意は不要と伝えてあった。だから他の子は他愛ない菓子や文房具をくれた。ハードカバーの分厚い書籍となると、それらより遙かに高額なはずだ。

「ブルストロードさん。申し訳ないけど、さすがにこれは貰えないよ」

「ああ、気兼ねしないで。その本はあと三冊持っているから」

「どうしてそんなに？」と、パンジーが横から尋ねた。

「私、その作家のファンでね。発売日に一冊目を買ったの。その後に本屋でサイン会をやるって知って、列に並ぶために買ったのが一冊。会場で、本さえ買えば何回でも列に並べるって聞いて思わず買っちゃったのが二冊。さすがに何冊も同じのがあっても仕方ないから、機会があれば他の人にも読んでもらおうと思って」

「そういうことなら頂くよ。ありがとう。何という作家かな」

「ギルデロイ・ロックハート。面白いよ」

開きかけた本は、そっと包み直した。

幕開け・2

誤字報告ありがとうございます

いつの間にか戻ってきていたノットが、後ろから覗き込んできた。「本か」

「きみもマルフォイ組の人？」

ミリセントの問いに、ノットは不思議そうに首を傾げた。簡単な説明を聞くと、彼は顎を撫でた。

「だったら俺は、先代のボスの親友で、今のボスにも苦言できるオジキのポジションがいい」

渋い。

「そっちはっかり人が増えてずるいなあ。あ、ハンナちゃん。ブルストロード組に入らない？」

「いいよー。何のチーム分け？」

ミリセントの勧誘で女子が増えたのを見て、パンジーが「私もそっちがいいな」と俺の腕を放した。

「パンジーも寝返っちゃいなよ」

「そうしようっと。ごめんね、ドラコ」

場所を移したパンジーと手を繋ぐと、ミリセント組長はにやりと余裕の笑みを見せつけた。

「引き抜きてやつだ」とクラブが囁いた。

「やるか、ボス」とゴイルが腕まくりしてみせた。

俺は「去る者は追わない」と言っ、正面の少女たちから目を移す。「アーネストくん、マイケルくん。うちに来ないか。悪いようにはしない」

マクミランとコーナーのほうに手を差し出すと、

「うわあ、悪役っぽい」

「ぼくはフリーの殺し屋がいいなあ」

と、二人ともにここにこしながらやってきた。

するとブルストロード組も負けじと、デンテイトとサッカラムという少年たち

を、到着直後で事情の分かっているうちに引き込んだ。

そして勧誘と引き抜きと心変わりの応酬を経て、誕生日会に来た子供たちは二組に分かれた。せっかくなのでそのまま庭に出て、組の抗争を気取りながら地上クイディッチを楽しんだ。箒もなければ使うボールも一つだけ、実質的にはドッジボールだ。

数十分後、組長同士の一騎打ちの果てに、マルフォイ組はブルストロード組に敗れた。

「何やってんだよマルフォイ。負けんなよ」

「速攻でリタイアしたきみに言われたくないね」

「まあまあ男子諸君。見苦しいから喧嘩は止めなさい」

「ドラコ。喉渴いた」

「飲み物は室内だよ。皆、少し休憩しよう」

その後は『ザスーラ』や『ジュマンジ』に登場するボードゲームのような、VR双六とも呼ぶべき大人数用の魔法のゲームで遊んだ。茶会の時にも用意したゲームだが、今回は景品もあるため、場の雰囲気は格段に良い。クラブとゴイルも、軽

食を食べるのも忘れて興奮している。人見知りだったはずのノットも、笑いながら隣の子供と肩を叩き合っている。

入学前、彼らが無邪気に曖昧でいられる時代はもうすぐ終わろうとしていた。



昼食の席順は、ゲストに一枚ずつランプを引いてもらってその場で決めた。一応ホスト役を務める俺だけは、皆を見渡せるように、予め決まっていた端の席に着く。

全員のグラスがルビー色の液体に満たされるのを見計らい、自分のグラスを軽く掲げた。ゲストたちもグラスを手にした。

「今日はお集まりの皆さんが楽しんでくれたら嬉しい。乾杯」

「乾杯」

「ドラコくんの素敵な誕生日に」

「ありがとう」

グラスを一気に呷ったデントイトが「ワインじゃなかった！」と声を上げた。

「美味しい葡萄ジュースだろう。ワイナリーで作られたものだ。白もあるぞ」

「それもジュース？」

「当たり前じゃないか」未成年に酒を出せるか。親が同意していて家庭内であれば、五歳児でも飲酒が合法とされているイギリスは、頭がおかしいと思う。

食事が始まった。

「ここにいる子たちは、みんな今年ホグワーツに入学するの？」

「そうだよ。招待状に書いてあったじゃない」

無論、純血の家の子供を全員呼べたわけではない。たとえばネビル。レストレンジ家の身内がロングボトム家を招待するような図々しい真似はできない。ダフネには招待状を出したものの用事があると断られた。他にも、「死んでもマルフォイ家の敷居は跨がない」と思っているような家に招待状は出せなかった。ロンとか。

「そう言えば、あのハリー・ポッターも同じ学年らしいよ」

「知ってる！　うちの親も言ってた」

「誰でも知ってる魔法界の英雄なんて、凄いいね。どんな子なのか」

「やっぱり例の人を斃したっていうくらいだから、物凄く強いんじゃない」

「額に傷があるっていうけど、きつと他にも傷跡があるよ。傷だらけで筋肉もりも

りで、大人みたいにごついんだと思うよ」

その言葉に、白いスーツにマツチヨな疵面、花山薫のようなハリーを想像してしまった。

「今もイングラウンドにいるんだよね？ 全然今まで目撃談とか聞いたことないけど、海外に行ったわけじゃないよね」

「マグルの親戚に引き取られたって聞いたよ」

まだやるかい。名前だけが一人歩きしている有名人の話題で場が盛り上がる中、親族に元デスイーターを抱えた子供たちは、さりげなく黙っている。クラブとゴイルも喋らないが、二人は食べるのに忙しいだけだ。

俺が、

「まあ、もうすぐ会えるよ。あと二ヶ月もすれば新学期なんだから。逆にもう二ヶ月しか自由時間がないけど、みんなは何か予定はあるのかい」

と話題を変えると、パンジーがすかさず乗ってきた。

「ホリデーは、うちはエーゲ海。サントリーニ島に行くの」

「ギリシャなら行くも行ったことある。楽しかった」

と、コーナーが無邪気に相槌を打った。

「いいなあ海外。うちは去年と同じ、デヴォンだよ。ドラコくんは当然どこか海外でしょう？」

「いや、夏に海外は無いかな。うちは四月のうちに行ってきたから」

「どこ？」

「日本だよ」

子供たちはぼかんとしていた。日本産のアニメや漫画に接する機会のない魔法界の子供にとって、日本は縁のない極東の国だ。

半年ほど前に、次の旅行先の希望を聞かれて俺が日本と答えた時も、両親は驚いていた。それがそのまま通るとは、まさか俺も思わなかった。マルフォイ夫妻は息子に甘い。

「えーっと、何をしに行ったの」

「異文化体験さ。イギリスやヨーロッパとは全く違う文化と歴史を持つ島国だからね。ホグワーツで自分と違う価値観に出会う前のウォーミングアップとしては、もってこいの土地だった」

もちろん、俺が出しゃばって日本を案内したりはしない。英語が通じない国で不便のないよう、マルフォイ家の伝手で現地の魔法使いがアテンドとして雇われた。その人が夫婦ぐるみで細やかな対応をしてくれたため、父上も母上もストレスなく、桜の季節を楽しんでくれた。当初は五日間だった滞在予定を、二十日間に引き延ばしたほどだ。

旅行中は色々あったが、大きな収穫は、母上の非魔法使いを含む異文化への偏見が薄れたことだろう。魔法が無くても清潔、安全、秩序を持って生活をしている人々を目の当たりにして、カルチャーショックを受けていた。

少しそれとは異なるが、味覚面で受けた衝撃も大きかったようだ。買い込んできた料理本をハウスエルフに押しつけて、家でも和食を食べることを目論んでいる。手伝って怪しまれたくない俺にできるのは、陰からコピーの奮闘を応援することくらいだ。出汁の概念を、生粋のイギリス生まれイギリス育ちのハウスエルフが理解する日は、果たして来るのだろうか。板前修業に出してやるべきではないか。

ちなみに父上のほうは、旅行の前後でも大きな変化はない。元々、異文化のものは異文化として尊重する（そして異文化のままであってほしい）というスタンスだ。

強いて言えば、日本の刃物と文房具の質の良さに感心して、色々買い込んでいた。俺も便乗して、学校用にノートや諸々の文房具を買い溜めした。

「美味しいお菓子も多くてね。今日みんなに出しているのも、日本で買ってきた物が殆どだよ」

「そうなんだ。確かに美味しいのが多いね。上品な感じ」

「ね。うちに縁のない高級品か、マルフォイ家で作ったのかと思った」

「日本で買ってきた高級品でしょう」

「現地では普通のおやつだよ」と俺は笑って答えた。生地が脆かったり、甘さがくどすぎたり、出来が不均質な欧米の菓子に比べると、日本の菓子は遙かな高みにある。伊達に訪日旅行客が爆買いしていく人気アイテムではないことを、イギリス人になって理解した。

遠くの席でパンジーがしょんぼりしたのが見えたので、慌てて声を掛けた。

「パンジーがくれた焼き菓子は、きつともっと美味しいと思うよ。きみの気持ちが入っていると思うから」

「ドラコ……。ありがとう」

パンジーはにこりと笑った。マクミランが口笛を吹こうとして息だけが漏れ、向かいのハンナに「行儀が悪い」と睨まれた。

ランチの後は、家に呼んだプロのエンターティナーによる幻術を楽しんだり、別のゲームをして過ごした。

誕生日会らしくケーキも饗されたが、子供たちが手を付けることはなかった。後に知ったことだが、イギリスでは、誕生日会のケーキはその場で食べずに持ち帰ることが多いという。法事や茶席で出された菓子を持ち帰るのと同じだと思えばいい。

しかもケーキと名は付いていても、日本人の想像するものとは少し違う。表面を固める砂糖のコーティングは食欲を吹き飛ばす色彩のイラストで、中はパサパサのスポンジと甘いだけのクリーム。正直、美味しくないのも、食べないのは仕方ない。そのケーキと一緒にちよつとした土産を添えてゲストに渡すのが、持ち帰り用のパーティバッグ。これもイギリスの習慣だそう。土産の中身は、おまけのカードが魔法界の子供に大人気の蛙チョコレートと、パーティ中も好評だった日本の菓子の個包装、同じく日本で買ってきたメモ帳。更に男子には組み立てて飾れる恐竜型

の立体パズル、女子には母上のチョイスで可愛い形の石鹸を入れた。

帰る時の子供たちは、概ね満足の表情を浮かべていた。

ゲストが全員帰った後、茶会用の服から着替えてきた母上は居間のソファに身を預けた。

「今日はどうでした、ドラコ」

「皆に楽しんでもらえたようです。ありがとうございました、母上」

「皆さんと仲良くできた？」

「と、思います」

母上は柔らかに微笑んだ。

「誰が何のプレゼントをくれたか、控えているでしょうね。後でカードを送る時に、そのことについても触れておあげなさいね」

「はい」

パーティの後にホストから各ゲストに「来てくれてありがとう」というサンキューカードを送る。これもイギリスの習慣だ。原作中で誕生日会を開いた子供というと、ハリーの従兄のダドリー・ダーズリーがいる。仲の良い友人と娯楽施設（ダド

リーの場合は動物園）に出掛けるというアクティビティは、小学校高学年では、ごく普通の誕生日会のあり方だそう。彼も動物園で散々な目に遭った後、友人たちにサンキューカードを書いたのだろう。



ロンドンから帰ってきた父上が、夕食の場で切り出した。

「明日はダイアゴン横丁に行くぞ。誕生日も迎えたことだし、ドラコの杖を選んでやろう」

いま俺が使っているのは、一年前にドラコが貰った母上のお下がりだ。十一歳の誕生日にドラコに新品を贈るという話は、すっかり忘れていた。

「オリバンダーの店に行くなら、ついでにホグワーツの学用品も買いましょうか」

「え？ いっ来たんですか母上。ホグワーツの入学許可証なんて。ぼくはまだ見ていませんが」

母上は俺の慌てぶりに微笑んだ。

「もちろん入学許可証はまだですよ。それは七月に入ってから。でも教科書以外に必要な物なら、ある程度は分かっていますからね。横丁が混み始める前に、ローブ

の注文くらい済ませてしまいましょ」

ローブ！ 俺は口の裏の肉を噛んだ。

「母上。あの、ローブというのはホグワーツの制服の話ですよ。でしたらそれは、ホグワーツの入学を決定させてからでもよろしいのではありませんか」

「あなたは魔法が使えるのだから、もう決定しているに決まっているでしょう」

「ドラコ、もしやダームストラングに行きたいのか？ 今ならまだ間に合うぞ」

「ルシウスもいい加減お認めになって。ホグワーツに行きたいと、ドラコ自身が何度も言っているでしょう」

「それなら何が不満なのだ、ドラコ」

時期が違う。

原作に初めてドラコ・マルフォイが登場するのは、ハリーがホグワーツの制服を採寸するため仕立屋を訪れるシーンだ。その時期は、ハリーの誕生日の、七月の終わりか八月の頭。まだ六月の今ではない。

六月中にローブを仕立ててしまつては、ハリーの顔を拝む機会が当分無くなる。ここまで一年間を脇役として過ごさせておいて、肝心な主人公に会わせないと、

何という肩透かし。

と、苛立ちかけて思い直した。

ハリーが最初に出会う同年代の魔法使い、という役回りが消えれば、ドラコはハリーと縁の薄いその他大勢として、気楽にやっていけるかも知れない。少なくともダンブルドアの関心は引かずに済む。

「不満はありませんよ。ホグワーツ関係の用事は全部済ませてしまいましょ」
急に気の変わった息子に、父上と母上は不思議そうな顔をしていた。

Emperor ≡ Alsvartur ≡

マルフォイ一家の日本旅行（一回目）は、書き始めると長くなることが分かっていたので、本編には組み込めませんでした

待ってました・1

ホグワーツの制服購入には、ダイアゴン横丁にある「マダム・マルキンの店」が指定されている。

ふくよかな店主は、採寸の準備をしながら言った。

「今の時期でしたら、ご連絡頂ければ私どものほうがお屋敷に伺いましたのに」
マルフォイ家の買い物は、基本的に店の人間が屋敷までやってくる。服も、畳肩の仕立屋に来てもらって、デザインや生地を相談しながらオーダーメイドすることが多い。

店頭に並ぶローブを眺めながら、母上が言った。

「ローブを仕立てるだけならそうしていただけれど、他にも用事があったの。仕上がったら屋敷に届けてちょうだい」

店主が済まなさそうに手を止めた。

「申し訳ありません、奥様。新入生のローブの納品に関しては、来月中旬以降と決められているのでございますよ。制服の注文は入学承諾書を返送した後が原則だ、

という建前でホグワーツから言い渡されておりましてね。融通が利かないとは思いますが、指定店としてお仕事を頂いている身では、逆らうのも厳しいのが実情です。もちろんマルフォイ様のご注文品は、納品のできる時期になり次第お届けします。どうかご理解頂けないでしょうか」

「新学期に余裕を持って間に合うなら、べつに構わないわ」母上は意外に寛大だった。

採寸を終えると、銀行で父上と合流して、三人でオリバンダーの店に向かった。重い扉を開けると、薄暗い店内はぎっしりと積み上げられた木箱で埋まっていた。老人が、いかにも年季の入った作業台で木を削っていた。

老人はひょいと顔を上げた。「いらっしゃい」

どこにでもいそうな爺さんだ。ジョン・ハートといえば、『エレファント・マン』と『エイリアン』が有名だけど、『ルワンダの涙』もいいよね。

そんなどうでもいいことを考えている俺の肩を、父上が押した。

「息子に最高の杖を頼む」

声の端が僅かに硬い。

一年前、ドラコは魔法使いの杖を初めて握った瞬間に意識を失った。そして夢が始まった。その後、誰の杖を握っても二度と倒れたことはないが、今日は真っさらな新品が相手だ。再び同じ事が起きないかと、両親は心配している。念のためにホームヒーラーに相談して大丈夫だという見立てをもらっていても、安心できないのだ。

俺も二人のことを笑えなかった。もし一年前のようにこの体が倒れることがあれば、きっとそれがスイッチとなるだろう。つまり夢の終わり。

次に目を開けた時には、俺は病院のベッドの上にいて、全身ギブスで固められた状態かも知れない。もしくはこのドラコ少年の肉体の主導権が、俺からドラコ本人に戻る。

それならそれでいいと思った。

俺の意識を覆うこの肉体には、十歳の誕生日まで本来の主がいた。ということになっていく。その主の「知識」と「経験」のお陰で英語に苦労しないのだから、今でもこの体のどこかにドラコの精神は宿り続けているはずなのだ。

それともセミの抜け殻のように知識だけを残して、彼の精神はどこかに飛んで

いったのだろうか？ 考えても答は出ない。

——どうせ夢だしな。

考えるのを打ち切って、俺は一步前に出た。

ジョン・ハートに似たオリバンダー老人は、客の緊張を微笑ましい理由と勘違いしたようだ。にこりと笑った。

「初めてのお客様にもぴったりの杖を探し出してみせましょう。まずはこの辺りかな。軸材はブナノキ、芯はユニコーンのたてがみ。11。5インチ。どうぞお試しください」

「箱じゃなくて杖のほうを下さい」

「おや、これは失敬」

軽い冗談に、父上と母上は緊張を和らげた。

俺がその杖を握った途端、ひんやりした空気が生じたが、それきり何も起こらなかった。

「ドラコ、体は大丈夫？ 気分が悪くなったりしませんか」

「大丈夫です、母上」

息子が倒れた時に備えてすぐ後ろに立っていた父上が、一步遠ざかった。

それから何本か持たされて、サンザシの軸にユニコーンのたてがみを芯に使った物を勧められた。指先の延長のように手に馴染む。軽く振ってみると杖先から金や銀の火花が景気よく飛び散った。その余韻は良い匂いがした。構えた時のバランスもいい。原作のハリーのように難航することなく、すんなり決まった。

「では、こちらでよろしいですね」

「この店には、もっと大きな杖はありませんか」

老店主は軽く目を瞋った。「大きい？ 長い杖、ではなく？」

「ええ。こう、棍棒みたいに太くて、ぼくの背くらい長くてどっしりした杖です」

この世界では、魔法使いの杖は指揮者の指揮棒と大差ないサイズが主流だ。父上の特注の杖でさえ、ステッキサイズだ。しかし男魔法使いの杖と言ったら、ガンダルフが鈍器代わりに使っていたような、亀仙人が持っているような、巨大で無骨なタイプもあってほしい。

「そんな嵩張る大ききじゃあ、生活で使うには不便ですよ。あったかな。少々お待ち」

店主が店の奥に引っ込み、代わりに奥でガタガタと物を引っかき回す音がしてきた。

「ドラコはもしかしてオーディンに憧れているの？ あれは真似できる人ではありませんよ」

「まだまだ子供だ。少しくらい有名人の真似をしてみるくらい、いいだろう」

店主が埃まみれで戻ってきた。

「うちにある一番大きな杖はこれですね。5。2フィート。葡萄の古木をそのまま活かして、芯にはセストラルの尾毛を使っています」

これこれ。正に期待通りの、ごつごつと節くれだった杖。ドラコの背よりも高い杖を、両手で持ち上げてトンと床に突いてみた。車のクラクションに似たけたたましい音が、杖全体から鳴り出した。

「合いませんねえ！」

叫びつつ、オリバンダーは巨大な杖をもぎ取った。残念。

こうしてドラコに新しい杖が与えられた。

「誕生日プレゼント、ありがとうございます。父上、母上」

「あなただけの相棒ですよ。大切に下さい」

後で思い出したが、原作でドラコの杖はハリーに持っていかれ、ヴォルデモートに止めを刺すのに使われる。手許にある杖がそれかと思うと感慨深かった。



家庭教師との授業は、六月いっぱいまで続けられた。

これまでドラコが継続的に習っていた科目を挙げると、国語（英語）、算数、理科、社会、ラテン語、フランス語、音楽となる。理科と社会はイギリス魔法界の常識を扱うので、日本の学校で習った内容とは多少異なる。あくまでも多少だ。本質的な法則まで全くの別物というほどではない。普段からつい『やりなおし中学英語』とか『大人のための算数練習帳』といった題名に反応しがちな俺は、せめて夢の中だけでもしっかり復習させてもらった。

ホグワーツ入学前の最後の授業は、国語のグラブラ夫人だった。ドラコはこの老婦人に、五歳の頃から教わってきた。

「ここに来た家庭教師は、私を含め、できる限りのことをあなたに教えたつもりです。ホグワーツに行っても、弛まず勉強に励みなさい。あなたなら首席も狙えるで

しょう。その素質は十分にあります。純血の底力を見せつけてやるつもりで頑張るなさい。少なくとも勉強面で情けないことにならないように。せっかく私が教えたのですからね」

冗談めかした言い方に、俺は少し笑った。「いつそグラブラ夫人もホグワーツで教鞭を執られてみてはいかがです」彼女はドラコ以外にも何人も生徒を受け持っている。

「私の器量では一度に大勢みられませんよ。それにあそこは教育方針がねえ」

「何か問題でもあるのですか」

グラブラ夫人は口を噤んだが、思い直してこちらを真っ直ぐに見据えた。思わず俺も背筋を伸ばした。

「あなたがマルフォイ家の跡取りであり、同時にブラック家の直系にも近い以上、学校では色々と心ないことを言われるでしょう。しかし氣に病むことはありません。これはいつも教え子に最後に伝えることです。学校とは社会の縮図ですが、社会の全てではありません。学生の内は実感できないでしょうが、学校とは閉ざされた特殊な環境なのです。もしホグワーツでご両親に相談しにくい悩みがあったら、私

に手紙を書きなさい。あなたより以前に教えていた教え子たちが、上の学年に在学しています。その子たちを通じて助けてあげられるでしょう。そして他の教え子がホグワーツで困っている時は、逆にあなたが助けてあげて下さい。いいですね」

家庭教師からの教えに、俺は「はい」と返事をした。



家族旅行でセント・アイヴスに行っている間に、屋敷にはホグワーツの制服が届いていた。

試着してみると、ドラコの体格に合わせて仕立てられたはずのローブは大きすぎた。裾は引きずってしまうし、手はすっぽり袖の中だ。これから成長期だから、などと呑気に言える誤差ではない。

採寸したデータを間違えたか。注文者を取り違えたか。いずれにしても店に文句を言いに行く、と母上は鼻息荒く宣言した。

「ナルシッサ、きみ一人で大丈夫か。私も用事があるから、今週の水曜日でよければ、一緒にダイアゴン横丁に行ってやってもいいぞ」

「ありがたいルシウス。ぜひ一緒にいらして。一年生の教科書も買いたいし、私自

身の杖の調子もちょっと見てもらいたいの」

「だそうだ。ドラコ、三人で行くぞ」

今週水曜日と言えば、七月の最終日。もしかしたら物語の主人公を間近に見ることになるかも知れない。むしろ、原作通りにドラコとハリーがマダム・マルキンの店で出会うために、ローブの仕立てに間違いが起きたのではないか。そんなことを考えた。

だから母上がマダム・マルキンに苦情を伝える間も、そわそわと店の入口のほうを窺っていた。

店の落ち度であることは一目瞭然なので、店主も早々に謝った。

「申し訳ありません、奥様。採寸し直して、すぐにお渡しいたします」

「当たり前です。今すぐやって。ドラコ、まともなローブができるまで、ここで待たせてもらいなさい」

え、と俺と店主の口から同じ音が飛び出した。母上は優雅に小首を傾げた。

「べつに特別な素材や手の込んだデザインで頼んだつもりはないのだけれど。制服なら、発送前の似たようなサイズか予備があるでしょう。それを出しなさい。私は

オリバンダーの店に行ってきます」

母上は返事を待たずに店を出て行った。

店内には俺だけ残されてしまった。父上は書店で一年生の指定教材を注文しているから、この店には来ないだろう。仕方ないので、絶句している店主に話しかけた。「母はああ言いましたが、無理に今日中に仕立てなくてもいいですから。間違いの無いようにしてくれば結構です」

マルキンは気を取り直して微笑んだ。

「……気を遣ってくれてありがとうね。でも大丈夫ですよ。普段は外のお針子にお願いするので時間が掛かりますが、私が一から仕立てれば、数時間で完成できます。仮縫いも同時進行でいきましょう」

魔女が外注。妙な気分だったが、この時期に集中する注文を捌くには、下請けを使うのもやむを得ないか。

それから店員の手も借りて、フル稼働でローブを仕立てている時、ドアに取り付けられたベルが鳴った。

待っていました・2

仮縫いのローブを俺に当てながら、店主は入口のほうを振り向いた。

「ホグワーツですか。ええ、全部ここで揃いますよ。では採寸しましょうね。ヴェロニカ、お願い」

若い店員に声を掛け、マルキンは再び俺のローブに取りかかった。

店員の誘導で、新たな客が隣の台に立った。作業の邪魔をしないように、なるべく動かないよう、目だけでそちらを見る。ぼろぼろのスニーカーに、裾をまくった太すぎるジーンズ。首元の伸びきったTシャツ。奔放な黒い髪に眼鏡。

ハリーだ。

ハリー・ポッターだろう、おまえ。こっち向け！

念じたのが伝わったのか、隣の少年がこちらを振り向いた。眼鏡の奥の緑の瞳は、怯えた小動物のように昏かった。

映画の中でハリー役を演じた子役よりも痩せていて存在感が薄い、雰囲気はよく似ている。もしダニエル・ラドクリフ本人だったら、『スイス・アーミー・マン』

の死体役は良かったと伝えたいところだが、子役時代の相手には通じないだろう。他の出演映画は観ていないので、何も言えない。

さて、たしか原作では、この後ドラコが魔法界のことを捲し立ててハリーの反感を買う流れだった。その反感がきっかけで、彼はドラコの推すスリザリン寮を忌避して、正反対の気質のグリフィンドール寮を希望するようになる。

要するに、ハリーの気持ちをグリフィンドールに傾けさせるのが、物語序盤のドラコの役割だ。もし俺がここでハリーに友好的な態度を取ったら、どうなるだろう。彼がグリフィンドールではなくスリザリンを受け入れたら。

——いや、駄目だ。

ハリーがこの先の困難を乗り越え、ヴォルデモートを倒すには、ロンとハーマイオニーという親友が必要不可欠だった。それに血の繋がらない家族となるべきウィーズリー一家も。彼らは皆グリフィンドール寮の仲間だ。俺にその代わりは出来ない。だいたい、必要以上にハリーに近づいてダンブルドアの視界に入りたくない。

いっそ無視するというのもありだが、それではこの少年が可哀相だ。俺は、なる

べく緊張を悟られないように声を掛けた。

「やあ。きみもホグワーツかい」

「うん」 小さな返事が返ってきた。

「見たところマグル生まれのようだけど、ホグワーツのことはどれくらい知っているんだい」

「あんまり知らないんだ。魔法使いの学校っていうことくらいしか」

申し訳なさそうに細い声で言うので、不憫に感じてしまう。

「ぼくも大したことは知らないけど、新入生はまず四つの寮に分けられるそうだよ。勇猛さを尊ぶグリフィンドール、誠実さで知られるハッフルパフ、知識を求めるレイブンクローに、結果重視のスリザリン。言い換えると、無鉄砲、地味、頭でっかち、狡っからい」

「ひどい寮ばかりだね」眼鏡の少年は笑った。「どこに入るかは自分で決めるの？」

「学校側で適性を見て決めるが、本人の希望もある程度は聞いてくれるらしい。きみがマグル生まれなら、スリザリンは止めておいたほうがいいだろうな」

「あの、さっきも出てきたけど、マグル生まれって」

少年は首を振ろうとして、店員に「動かないで」と頭を押さえられた。その時に前髪の隙間から額の傷が見えた。

「マグルというのはさすがに聞いたことがあるだろう。魔法を使えない、魔法界の存在を知らされていない人たちのことだ。マグルの両親の間に生まれた魔法使いの一代目を、マグル生まれと呼ぶ。魔法使いの両親の間に生まれた二代目以降の魔法使いが、純血。魔法使いとマグルの間に生まれた子供が魔法使いであれば、半純血。親が魔法使いでも子供が魔法を使えなければ、子供のほうはスクイブと呼ばれる。呑みこめたかい」

「だったらぼくは純血だ。そういう意味なら」

「それならスリザリンでも肩身の狭い思いはしないだろうが、もしきみがぼくの想像している人物だとしたら、グリフィンドールをお勧めするね」

採寸を終えた少年は、「どうして？」とこちらに体ごと向いた。

俺は自分の額をトントンと指で叩いた。「さっき、きみのここに古い傷が見えた気がする」

少年ははっと髪の上から前頭部を押さえた。

「その反応。やはり予想通りだったみたいだね。きみのご両親は二人ともグリフィンドールの卒業生だったと、うちの親の知り合いから聞いたことがある。とくにきみのお父上のほうは首席だったそうだ。凄いね」

少年の瞳が若葉色に煌めいた。「父さんが？」

「うちの親とは学年も寮も違うし、詳しくは知らない。でもきみもご両親と同じ寮に行けば、もっと色々な話が聞けるんじゃないか」

「そっか……。そうだね。ありがとう」少年は初めよりもだいぶ力強い声で言った。

「ぼく、ハリー・ポッターっていうんだ」

「やはりそうか。ぼくはドラコ・マルフォイ」

彼がもじもじと指をいじって手を差し出すタイミングを計っているのには、気付かないふり。俺は入口のほうを振り返った。ショーウィンドウのガラスの向こうに、熊めいた巨漢が見える。

「見てみるよ。さっきから店内がチラチラ暗くなるといったら、あいつが覗き込んでいたんだ」

ハリーが嬉しそうに言った。「ハグリッドだよ」

「きみの付き添いか。両手に持っているのはソフトクリームかな。きみと食べようと思って待っているんじゃないか。溶ける前に行行ってやったほうがいい」

「う、うん」

注文書を書き終えたハリーは、またね、と俺に手を振って店を出ていった。一連のやり取りでグリフィンドールへ行く気になってくれたら、ありがたい。

それから間もなく、母上と父上が様子を見に来た。仕上がり時間がまだ先であることを確かめて、その間にダイアゴン横丁でランチを済ませることになった。

母上は潔癖なので、俺がイースと遊ぶ時に使うような小汚いパブには絶対に入らない。今回のランチに選んだ店もダイアゴン横丁では一番高級な、きちんとしたレストランだ。

料理を待っていると、窓の外を大きな人影が過ぎていった。ハグリッドだと思った。彼に付き添われたハリーが横を歩いていたから。少年の手には、真っ白な梟を入れた鳥籠が提げられていた。

プレゼントを貰えて良かったな。

食事中に、そういえば、と父上が切り出した。

「ドラコにも伝えておいたほうがいいだろうな。私は九月にホグワーツの理事に選出されることになった。普通の親より学校の情報は入ってくるから、あまり馬鹿なことをするな」

「そうなんですか。おめでとうございます」

「何がめでたいものか。押しつけられただけだ」

面倒そうに吐き捨てる父上の横で、母上は「名誉なことですよ」と微笑んでいる。「学校の理事って、何をするんですか」高校まで公立校だった人間には、学校の理事職と言えば、学園漫画の権力者というイメージしかない。

「学校運営全般の決定機関が理事会で、その構成員が理事だ。理事会では予算の承認や施設の運営、教育課程の決定などを行う。ホグワーツ内の人事権は校長が握っているが、校長の任命権は理事会にある。解任動議を可決できれば、ダンブルドアの肩書きを一つ整理してやれるわけだな」

ダンブルドアをホグワーツから追放することは、原作のルシウス・マルフォイが何度か試みている。この夢での父上もダンブルドアが嫌いだから、多分同じことを

狙うだろう。

「父上が理事になるのは、ぼくが入学するからですか」

「そうだな。私は保護者枠だ」

ホグワーツの理事の定数は十二名。うち、在校生の保護者から選出されるのが四名。ある程度年齢のいった卒業生から選出されるのが四名。学外の有識者、近隣住民として最寄りのホグズミード村の代表者、魔法省の関係部署からの参加で計四名、という構成なのだそう。魔法使いでない者は、保護者であってもお呼びでないらしい。

任期は四年なので、ドラコが四年生まではルシウス・マルフォイは理事を続けることになる。ただし任期満了できればの話だが。二年足らずで解任された原作のルシウスは、ドジを踏んだとしか言えなかった。

「張り切りすぎて妙なことをなさらないで下さいよ」

すると母上が吹き出しかけて急いで口元をナプキンで隠し、父上は思いきり顔を顰めた。

「まったくおまえは……子供と話している気がせんな」

「失礼を申し上げました」

と俺が謝ると、父上はしかめ面のまま手を振った。

「構わん」

「お父様は、ドラコが対等な話し相手になってくれて嬉しいのですよ」

のほほんとした母上の解説に父上は渋々頷いた。

「本来は学校卒業後に伝えるべきことも、つい今のドラコになら理解できるだろうと油断して口が緩くなる。だがホグワーツでは、あまり勉強や課外活動以外で鋭いところを見せるな。我が家を敵視する連中の警戒を招く」

そうか、ドラコの中身が俺ではなくドラコ自身だったら、まだマルフォイ家の裏の事情を知らない時期だったのか。それで無邪気な我が侘坊ちゃんは、マルフォイ家が裏表のない純血主義だと信じてホグワーツに行くのか。

「ほどほどに周りに合わせますよ」

それがいい、と両親は頷いた。



八月には、例年通りスリザリンのクイディッチチームが合宿に来た。

その最中に、クラブとゴイルとノットも遊びに来た。三人は箒に乗って遊びがったが、クイディッチの練習中に近くを飛ぶのは危険だ。宥めすかして、森のクワガタ捕りに誘った。三人とも初めは気乗りしなかったが、クワガタ相撲を教えると一緒に熱中した。

最強の一匹を求めて旅に出たゴイルが戻ってくるまで、俺とノットは木の根元で喋っていた。クラブも近くにいるが、掌のクワガタと見つめ合っている。

「ドラコは学校の準備はもう済んだのか」

「必要な物は一通り揃えたよ。テオはどうだ」

「使い魔の持ち込みを考え中。うちの犬を連れて行きたかったけど、そうしたら父さんが独りになるから、我慢する」

「それならフクロウはどうだい。うちは手紙のやり取り用に梟三号を連れて行くことになったよ」

「孔雀じゃないのか。だいたい何だ、梟三号って。孔雀が一号と二号だから、その次か」

「違うよ。梟一号と梟二号は家で使うから、三羽目がぼく用になったのさ」

「愛がないネーミングセンスだな」

俺は肩を竦めた。ピーコックワン、アウルスリー。偵察機みたいで格好良いと思うのだが。

こちらに背中を向けて座っているクラブにも話しかけた。

「ヴィンセントはホグワーツに何か連れて行くのか」

彼はのっそりと振り返った。「使い魔？……何も。俺もグレッグも、母さんたちに合わせておきなさいって言われた」

それが正解だろう。下手したら、ペットどころか自分自身の世話さえまともに出来なさそうなお子様たちだ。

「ペットの世話は大変だからな」

と、ノットも同じ事を考えたらしい。

「でもこいつなら大丈夫そう」とクラップはクワガタのつやつやした背を撫でた。

「そいつは下手すれば数ヶ月で寿命になるし、生きていても寒い所だと冬眠してしまう虫だぞ。ホグワーツはここよりずっと北で寒いんだ。すぐ死んでしまうよ」

「駄目か」

「駄目とは言っていない。ちゃんと最期まで世話をするならいいんじゃないか。親に相談してみろ」

飼いかたを教えるとクラブは真剣な表情で聞いていた。夕方帰る時にもクワガタを掴んだままだったから、少なくともホグワーツに行く日までは飼うつもりだろう。ちなみにクワガタバトルはゴイルが優勝した。

学生たちの合宿最終日の前夜には、OBを交えたパーティになった。

珍しいことにその場にはスネイプも顔を出した。在校生にもOBにも歓迎された辺り、スリザリン生に受けのいい教授である点は原作通りだ。

そのまま彼は屋敷に泊まっていき、翌日学生たちが引き上げるのをマルフォイ家の三人と一緒に見送った。

「今年はどうしたんですか、小父さん。セブルス小父さんは強化合宿には顔を出さないと、前に学生さんから聞きましたよ」

「それは……言っても構いませんか」とスネイプは父上の確認を取ってから答えてくれた。「ドラコにはまだ想像しにくいだろうが、ホグワーツでは家の権威が通用しない場合も多い。かといって、マルフォイという家名はあまりに有名すぎる。中

にはきみに悪意を向ける者もいるだろう。ただしそこで、教授である私がきみの後ろ盾だと思わせられれば、不要な揉め事は避けられる。少なくともスリザリン生は牽制できる」

「ああ。それで」

ドラコとスネイプは家ぐるみの親交がある。そうホグワーツの学生に知らしめるために、彼はマルフォイ邸に泊まったのだ。

「何というか、小父さんには色々のご配慮頂きまして」

と俺が頭を下げると、スネイプは鬱陶しそうな前髪を掻き上げつつ視線を外した。

「……今の話の後では言いにくいだが、学校では、私のことはスネイプ教授と呼びなさい。私もきみをマルフォイと呼ぶ。それが立場だ」

「分かりました。弁えます」

彼の黒い瞳は向かいのソファに向けられた。

「まあ、きみのお父上に誘われたという理由もあったし、私も届ける物もあったから、ちょうど良かった」

届け物とは、父上が読んでいる書類のことか。

俺たちの視線に気付いて、父上は短く書類を掲げた。「理事会の議事録だ」嫌がっていた割に真面目だな。

「今年は魔法界の有名人が入学する。低俗なマスコミが事あれかしと狙っているだろう」

「あなたもこれ幸いと、校長の足を引っ張るおつもりではないですか」

「とんでもない。学校運営に協力するだけだ。その結果がダンブルドアの退職だとしても、不可抗力というものだよ」

父上とスネイプの会話に、俺も口を挟む。

「有名人というのはハリー・ポッターのことですか。この前、ぼくの誕生日会でも話題になりました」

そうだ、と父上は頷いた。

「彼は十年前からやって来た、新しい我らの英雄だからな」

その皮肉っぽい語調に、スネイプが小さな苦笑を浮かべていた。

「おまえもハリー・ポッターのように有名になりたいか」

父上の揶揄に俺は全力で首を振った。横に。

俺は主人公になりたいわけではない。ハリーの役割を奪おうとは全く考えていない。それどころかドラコ・マルフォイの立場も返上して、早くこの長い夢から覚めたい。しかしそれが叶わないのであれば、せめてドラコの生活が平穏無事であってほしい。それだけだった。

Emperor
≪Ye Entrance
perium
≫

◇登場人物

ドラコ・マルフォイ

原作ではハリーたちに張り合ったり意地悪したりしていたスリザリン生。

本作は元々、時代逆行系の主人公が、「闇の帝王の復活」をブラックメタルバンドのエンペラーが活動再開することだと勘違いしてその復活を後押しし、復活後に自分の勘違いに気付いて事態收拾に奔走する話にするつもりだった。ところが復活どころかまだインナーサークル事件も起きてない時代だわ、そもそもノルウェーのバンドの復活にイギリス人がどうやって関わるんだわと作者が気付いて色々修正して今の形に。主人公もメタラーではなくなったものの、各話のタイトルがメタル系の楽曲に由来しているのはその頃の名残りである。なお、代わりにライトな映画ファンになったが、そのことが物語に関わってくることは多分ない。

ルシウス・マルフォイ

パパフォイ。原作では元デスイーターながら罪に問われず、社会的地位を保ち続けていた謎の手腕と、死の呪文を逸らすという謎の高等テクニックを披露した人。

本作ではヴォルデモートへの忠誠心がすでにないことや家の経済基盤、自身のスタンズなどについて息子に打ち明けているが、元デスイーターだった過去は変えられない。

ナルシッサ・マルフォイ

ママフォイ。原作では、鼻持ちならない高慢そうな奥さんから息子のためならヴォルデモートさえ欺くお母さんへとイメージが変わっていった人。

本作でも純血至上主義の面があるが、魔法を使えない時期の息子が「自分はハウスエルフ以下だ」と口にしたことから、生まれがどうの魔法の才能がどうの、という主張は控えるようになっていく。

アブラクサス・マルフォイ

ジジフォイ。故人。トム・リドルよりだいぶ上、むしろダンブルドアと同世代くらいだと思う。

ドビー

マルフォイ家に仕えるハウスエルフ。本作ではドラコに虐められなくなり、結果として仕事のミスが減ったので主人からも折檻を受ける回数も減り、精神的に安定

した。

コビー

マルフォイ家に仕えるハウスエルフ。あまり出番はない。

アビー

マルフォイ家に仕えるハウスエルフ。女性。

キンナモム・カンフォラ

マルフォイ家のホームドクターにあたるヒーラー。名前は楠の学名（*Cinnamomum Camphora*）から。純血の魔法使いはだいたい植物の学名由来の名前にしてみたが、良さそうな学名が尽きたらどうなるか分からない。名前案下さい。

サーカンドラ・グラブラ

ドラコの家庭教師である老婦人。本作の家庭教師は大学生のバイトではなく、個人教育という分野の専門職である。名前はセンリヨウの学名（*Sarcandra glabra*）から。

イースカラス・タービネイト

ドラコの友人でもある飛行の家庭教師。バイク乗りならぬ箒乗り。魔法省の臨時職員として働きだしてから、退職後に放浪することばかり考えている。名前は橡トチノキの学名(Aesculus turbinata)から。

ゼルコヴァ・セラター

マルフォイ家と契約している会計事務所の勅許会計士。つまりイギリスの公認会計士。名前はケヤキの学名(Zelkova serrata)から。

ヴィンセント・クラブ

ドラコの舍弟。ヴィンセントの愛称である「ヴィニー」の響きを、作者があまり好きではないので愛称では呼ばれない。

グレゴリー・ゴイル

ドラコの舍弟。グレッグという愛称はそこそこ好きなほうだ。

セオドア・ノット

ドラコの友人。なぜに翻訳版ではセオドル表記なのか。

パンジー・パーキンソン、ミリセント・ブルストロード、ダフネ・グリーングラスその他

聖二十八氏というのは、言うまでもなく「聖28一族」と同じものだが、アラビア数字と漢数字が並んで一単語を形成しているのが居心地が悪いので、勝手に変えさせてもらった。英語だと「Sacred went yeigh」だから氏でも家でも問題ないはず。

アーサー・ウィーズリー

子沢山の貧乏役人。ルシウスとは犬猿の仲であり、ルシウスと瓜二つなその息子にも好意的ではいられない。

セブルス・スネイプ

本作ではアラン・リックマンほどの茶目っ気が出せるか不明なところ。友人の息子に開心術を警戒されているとは夢にも思っていない。

アルバス・ダンブルドア

まだ会ったこともない主人公に警戒されているとは夢にも思っていない。

ヴォルデモート

原作の時期的には、そろそろクィレルにくつついてルーマニアからイギリスに移ってきた頃か。

トム・リドル（日記帳）

顔出しして本名でやり取りしていたSNSで、突然、過去に炎上したことのある自分の「超かっこいいアカウント名」を暴露されて、思わず相手をブロックした人。現在もマルフォイ邸のどこかに保管されている。

ハリー・ポッター

原作主人公。

◇Q & A

・未成年は学校以外で魔法を使っちゃいけないんじゃないの？

↓「未成年魔法使いの妥当な制限に関する法律」ですね。親が魔法族の場合は、家庭での魔法使用は黙認されています。また、本作のドラコは屋敷の外ではまだ自分で魔法を使っています。箒に乗るのに呪文は使いませんし、遠乗りの際の各種魔法はイースに掛けて貰っています。

↓そもそも原作で、入学前のハーマイオニーが色々な魔法を試してもお咎め無しでした。この辺りについては次の章で触れます。

・時々ページの後書きにある文字列は何？

↓タイトルの元ネタである曲名とアーティスト名です。

・ドラコと主人公の意識はどういう状態なの？

↓知らん

長らくお休みを頂きました、と言いたいところですが、四月からこっち、ちっとも執筆時間が確保できていません。六月さえ乗り切れば一息付けると思うのですが、続きをご希望の方には私の抱えている公私のタスクを20分の1だけプレゼント。ふるってご応募下さい。

番外篇…日本人の生活規範・1

投稿予約を入れるのを忘れていました。今後もしばらくは私事多忙のため、10日、20日、30日のゼロの付く日だけの投稿にします。ご了承下さい。

ガラスの自動ドアが左右に開くのもどかしく、俺はロビーに足を踏み出した。磨かれた石の床にはゴミ一つ落ちていない、オフィスビルのような機能的なロビー。ガラス壁の向こうに見える駐車場と、遠くのなだらかな山並み。天井から吊られた大型パネルには、「ようこそ日本へ」と次々に言語を切り替えて表示されている。

ああ、日本！

俺は帰ってきたぞ。

「ドラコ、一人でそんな遠くに行かないで。危ないですよ」

後ろから母上に呼び止められて、振り返る。

「日本は安全だと聞きますから、大丈夫ですよ」

「そうだとしても走るな。見苦しい」

と、トランクを載せたカートを引き連れている（押しているのでも、引いているのでもない）父上が冷たく言った。

春。

ドラコ・マルフォイになった夢で、俺は少年の両親と一緒に家族旅行で日本を訪れた。

まず到着したのは、世界各地の魔法使いや魔術師が入出国手続きするための「港」と呼ばれる専用施設だ。イギリス本国から租借地の香港までは、公式ルートとして整備されている「煙突ネットワーク」で移動、そこから日本国内の「港」へは、運び屋と呼ばれる現地業者の術で飛んだ。運び屋という感じがわしい感じがするが、香港⇨成田間をキャセイパシフィックで飛ぶ程度の感覚だ。現地当局の許可無く「姿眩まし」などの術で国境を越えることは国際法で禁止されているので、こうした業者に一切の手続きを任せるのが普通だった。

なお、「港」を管理するのは現地一帯の魔法使いを代表する行政組織だ。イギリ

スであれば魔法省、日本であれば神祇庁ということになる。

「今はサクラが見頃ですよ。良い旅を。イッテラッシャイ」

と、日本の入国審査官はにこやかにパスポートを返してくれた。もちろん、ライオンとユニコーンが王冠を守っている表紙の、正式なイギリスのパスポートだ。

入国手続きを終えた者と出国手続きを控える者が入り混じるはずのロビーは、意外に空いていた。

平成も終わる頃には訪日観光客も珍しくなくなるが、まだ九〇年代初めのこの時期は、その数はそう多くない。まして魔術的な方法での入国に厳しいと言われる日本へ、敢えて非魔法使いと異なる手段で入国する者は少なかった。

マルフォイ家は、母上が「マグルと一緒に鉄の棺桶に詰め込まれて空を飛ぶなんて！」と飛行機を嫌がったので、少数派となった。

ロビーの隅で「MALFOY」と書かれたボードを掲げる一組の男女がいた。俺たちが近づくと、二人して軽く会釈した。

「ミスターサトウか」

父上が話しかけると、男性のほうが嬉しそうに右手を差し出した。

「そうです。ルシウス様、ナルシツサ様、ドラコ様ですね。初めまして。皆様の旅のお手伝いを務めます、ハジメ・サトウです。こちらは妻のヒトミ」

「こんにちは。日本へようこそ」

と、女性も慣れた様子で会釈した。

ハジメ氏はビジネススーツ、ヒトミ夫人はニットとスカート。魔法使い向けの個人旅行専門の通訳兼ガイドということだったが、どこにも魔法使いらしい要素が見当たらない。杖を隠し持っている様子もなかった。

握手の後、サトウ氏は、

「両替はお済みですか。ガリオンから日本円への両替は都内でも難しいので、あのカウンターで済まされたほうがいいですよ」

とロビーを振り返った。父上は素っ気なく返した。

「多少は用意してきた。カードもある」

イギリス魔法界を遠く離れた旅行先でまで、保守派の純血主義者として振る舞う必要はないと判断したようだ。だから首を傾げたのはクレジットカードを知らない母上だけで、サトウ夫妻もあっさり聞き流した。

「それならお手持ちは大丈夫ですね。服はどうされますか。日本では、ただでさえ外国人の存在は目立ちますが、ヨーロッパの魔法使いの格好は特に目を引きます。お忍びでしたら着替えをお勧めしますよ」

「キモノを着るの？」と母上が声を上げた。

「いえいえ。私たちの着ているような、魔法使いではない人たちと同じ格好です。日本では魔法使いも普段は洋服で、装束は祭事か戦でしか纏いませんよ」

「マグルと同じ格好なんて」母上は眉を顰め、その後、殆ど聞こえない声量で「低俗だわ」と呟いた。

そもそもマルフォイ家の旅行準備に、「非魔法使いの服装一式」というのは入っていないから、着替えるにしてもどこかの店で買わなければならない。

「まあここで決めなくても、しばらく様子を見てからでも遅くありません。それより時間も限られていますので、手短に幾つか注意を」

サトウ氏は咳払いした。

「まず、日本でも機密保持法は遵守して、人前での魔法の行使は控えて下さい。もし魔法を目撃されても、すぐに相手の記憶を改竄したりせずに、にっこり笑って

イッツアマジックと言ってみて下さい。大抵の日本人はそれで引き下がります」

「日本では魔法の存在が公にされているのかね」

「この場合のマジックは、魔法ではなく手品のほうです。ほとんどの日本人は英語に苦手意識があるので、外国人に英語で話しかけてまで確かめる勇氣は無いんです」
「私たちの魔法を、マグルの真似事に貶めるといふの？」

母上の声が尖った。まあまあ、と宥めるようにサトウ夫人が両手を動かした。

「魔法を使わなければいいだけのことです。我々も大衆の前で力を使うことはありませんし、魔法使いが実在すると公言できる日本人はごく少数でしょう。暮らしぶりも非魔法使いと変わりませんしね」

父上は、「それできみたちも魔法使いと呼べるのかね」と尋ねた。

サトウ夫妻は慣れた様子で苦笑した。

「それはイエスともノーとも答えにくいですね。ウィザードやウィッチかと問われても、実は欧米の概念をそのまま日本に転用できるわけではありませんから。ですが世間の大多数の人間が認識できない力を認識し、干渉できるという意味では、魔法使いと捉えてもらって構いませんよ」

その他の細々とした注意事項は、普通の外国人観光客に向けたものと同じようなことばかりだった。

「ではそろそろ移動しましょうか。東京まで二時間ほど掛かりますので、先にお手洗いに行ってきて下さい。途中でコンビニにも寄れますが、ここのほうが広いですから」

「二時間も掛かるの？」と母上が神経質に聞き咎めた。「こういう移動手段なのか、聞いてもよろしいかしら」

「車です。自動車」

「マグルの乗り物じゃない！」

母上は声を抑えながら叫ぶという器用さを発揮した。

「奥様は車がお嫌いですか。この後も国内の移動は主に自動車と電車を利用する予定ですが、大丈夫ですか」

サトウ夫人が旅程表を見せようとしたが、それに目を通す前に母上は言う。

「他の移動手段に変えて。うちの息子は酔いやすい体質だから、マグルの乗り物なんて乗ったらきつと戻してしまうわ。日本には移動のための魔法はないの」

「でもせっかくの日本旅行ですから、日本でのやり方を体験して頂ければ——」

「ルシウス、帰りましょう」と、母上は父上の腕に縋った。「せめて香港に戻りましょう。ごちゃごちゃして汚い所でしたが、英語が通じるだけ我慢できます。私は、マグルと同じ暮らしぶりなんて体験は、自分も遠慮したいしドラコにも経験させるつもりはありません」

「しかし旅行というのは不便さも楽しむものだろう」

「私に不自由させないと結婚する時に仰ったのは、嘘だったのですか」

「そこまで大袈裟な話ではないだろう」

「私にはブラッック家最後の女としての誇りがあります。マグルに溶け込む気はありませんから」

俺は母上と父上の間に割り込んだ。

「母上、お気持ちちは判りますが、なにも今後の生活をマグル風にしろと言われたわけではありませんよ。ただの旅行です。第一ぼくらが使う乗り物は、馬車も列車もバスも、元はマグルが発明したものだと思っています。ぼくが跳躍酔いで酷いことになったのも、一年も前です。もしかしたら日本にはイギリスにない面白い乗り物

があつて、それを紹介してもらえらる機会だったらどうしますか。ぼくは乗りたいです。それにマグルの暮らしと言っても、イギリスと違って日本はまだ景気が良いです。それから、意外に快適かも知れません。母上がいつも気になさる清潔さでは、日本は世界でもトップレベルだそうですよ。お願いです母上、日本旅行を続けさせて下さい」

「ドラコ……」母上は眉を下げて、息子の髪を撫でた。「あなたは極東ならどこでもいいのではなくて、日本がいいのね？」

「はい」

本場の寿司とラーメンと鰻ととんかつと天ぷらと焼き肉としゃぶしゃぶを食べるまでは、この国を離れてなるものか。

俺が頷くと、母上は降参したという風に肩を竦め、父上を振り返った。父上も頷いた。母上は、客のやり取りを見守っていたアテンドの二人に向き直った。

「見苦しい所を見せましたね、ミスターサトウ、ミセスサトウ。旅を続けましょう」俺たちはようやく待合ロビーを出た。

「リムジンを回してきますね」と先に出ていったサトウ夫人が、ミニバンを建物前

に着けた。運転席と乗車席が分かれていたら、リムジンと呼んでも確かに間違いではない。

そう思いながら乗り込むと、中はミニバンどころかマイクロバスほども奥行きのある空間が広がっていた。進行方向を向くゆったりとした二人分の座席が後方に構え、中央部には四、五人が並んで掛けられそうな横向きのシートである。全てのシートは重厚感のある革張りで、ミニバーとモニタも横に付いていた。シャンパンクーラーにはボトルも冷えていた。内装は完全にキャデラックのリムジンだ。

バブルだなあ。

父上と母上が後ろの席に並んで座り、俺は横向きのシートを独り占めした。母上は「あまり趣味ではないわ」とまだ駄々をこねているが、眉間の皺は消えた。

父上が「日本ではマグルもこのような乗り物を使っているのかね」と前に尋ねた。全ての荷物を積み込んで助手席に乗り込んだサトウ氏が答えた。

「さすがに空間拡張の術を掛けています。日本では小回りの利く車のほうが便利ですが、お客様にはお寛ぎ頂きたいので。セルフサービスになります。飲み物もどうぞご自由に」

父上はシャンパンをクーラーから引き上げた。

「ナルシッサ、乾杯しよう」

「何に？」

「我が麗しの貴婦人が微笑みを取り戻してくれたことに」

「あら、私はまだ機嫌を直したつもりは無いのよ。あなたがもっと私をときめかせてくれたら、話は別ですけれど」

「それなら自信がある。何度だってきみを落としてみせよう」

「ふふ。乾杯」

勝手にやってろ。

俺は後ろのマルフォイ夫妻を放っておいて、車窓を眺めた。

とりたてて特徴のない、ごく普通の関東地方の風景だ。ヤマザキに「春のパンまつり」のポスターが貼られていたのを見て、春だなあと感じる。

「JA 共済」「マルフク」「この先道路工事につき迂回」「フロアレディ募集 スナック帆恵夢」「お食事処 わらべ」……

見掛ける看板はどれも日本語だ。俺の日本語の読解能力が消えていないことが分

かつて一安心。

イギリス人であるドラコ・マルフォイの経験を引き継いでいるお陰で、今の俺は英語話者として苦勞していない。逆に言えば、夢の中では母語でなくなった日本語に自信がなかった。ドビーを相手に日本語のスピーチとライティングを披露した時に、「さすが坊ちゃま、ラテン語がお上手でございますね！」と言われてからは、ますます自信がない。

しかし日本と接点のないドラコがいきなり日本語を喋り出しては不審がられる。それを恐れて他では日本語能力を試すことができずにいた。この旅行でその辺りを確かめることができるし、今後うっかり日本人じみたところが出て、「旅行で覚えたと白を切れる。」

シャンパングラスを手に、母上は少しリラックスした様子で前に尋ねた。

「香港から来る時に、私たちは東洋式の魔法で送ってもらったの。あなたがたはそういう魔法は使えないの？ 先ほども尋ねたけれど、自動車の他に移動手段は無いのかしら」

「えーと、ざっくり東洋式と言われても色々ありますね。どういった道具を使って

いましたか」

「白と黒の魔法陣の上に立たされたわ。担当者は袖の広い前開きのローブを着ていて、黄色い紙に蠟燭の火を移したの」

香港の「港」の出国室で、その転移は行われた。木の床に墨痕鮮やかに記されていたのは、太極と八卦を示す風水図。線香を捧げた祭壇の前で、道士の格好をした担当者が黄色いお札と、剣を一振り持っていた。

「ああ。タオイズムの術式ですね、それ」

タオイズム、つまり道教。せいぜい『靈元道士』と『ダブルビジョン』の映画ネタでしか知らない俺も、そうだろうと思っていた。

「道教は、今は台湾が本場の中華系の系統です。日本で主流の、シントー（神道）やイーサテリックブッディズム（密教）をベースにした系統とは異なりますね。もちろん日本にも誰かを招く、送る、という術はありますよ。肉体ごと転移させることは少ないですが」

俺は尋ねた。

「東洋の魔法には、いくつもの派閥があるということですか。欧米の魔法はほぼ一

本化されていますが」

「そうですね、統一されていません。元々、東洋という言葉で括られている範囲自体がいい加減ですからね。とりあえず中国では道教系と仏教系と回教系があって、その他に民族ごとの系統が文革後も健在だそうだし、韓国では土着の呪術が根強いらしいですね。そして日本では、神道と密教・修験道が融合したものが主流ですが、純粋な古神道を維持しているものや、まったく独立した系統も健在です。有名どころでは沖縄のユタやノロ、津軽のイタコやゴミソですかね。イヌガミツキの家系もあれば、山岳信仰を基本に発展した流派もあります。日本は魔法使いの力オスですよ」

ちょうどその時、学校の校庭と校舎の横を通り過ぎた。走り幅跳びをしている授業風景が見えた。

「そうすると日本には、規格化された共通の魔法を教える学校というのは無いんですか」

「ドラコは今年、ホグワーツ魔法魔術学校に入学するの」

と、後ろから母上が付けた。

「それは凄い。イギリスの hogwarts と言えば、世界的な名門校じゃないですか。日本にも魔法使いの学校はあるんですが、私塾に毛が生えたような小さいところですよ」

そこは通学制の学校だそうだが、在校生は少ないという。日本に魔法使いが少ないのではない。素質のある子供でも、学業自体は一般人と同じ小中高に通わせる親が多いからだそうだ。

「さっき言った通り、系統によって術式も思想も違うので、統一された教育システムで魔法を学ぶというのが、なかなか難しいのですよ。現に学校で教えていることは広く浅く。一人前になるなら結局は師について修行する必要がありますしね」

「そういういくつかの流派があるのに、皆が魔法使いを名乗っているんですか？」
サトウ氏は助手席からにやりと振り返った。

「鋭いですね。ウィッチ、ウィザードという英語に当て嵌まるマホウツカイという日本語は、あまり我々の実態を表しているとは言えません。流派によってはキトウシ、カンヌシ、オガミヤと、様々あります。対外呼称として一番使うのは、フシユクやフゲキですかね」

耳で聞いただけでは分からなかったが、それらが漢字で「巫祝」「巫覡」と表されることは後で知った。

「要するにシャーマンです。あなたがたヨーロッパの魔法使いもケルトのドルイドと縁が深いでしょう」

「ではマホウツカイというのは何ですか」

「マホウ、魔法のことですが、それを使う者という意味です」

「でも魔法という言葉もまた、私たちの使う術や道を言い表してはいないと、運転席からサトウ夫人が言った。

「そう。私たちの本分は、只人と違う力を揮うことではなく、この世界とイカイを繋ぐことですから」

「イカイ？」

「我々の暮らすこの世界を俗界と呼び、神々や霊といった、人ならざる者たちの世界のことを異界と呼びます。私たち巫祝はその二つの世界の接する境目に立ち、二つの世界の架け橋となることに意味があります」

「イカイは魔法界ではないんですね」

「違いますね。英語で魔法界と呼ぶのは、魔法使いの社会のことでしょう。日本ではその集団にあまり重きを置いていません。だから正確には、日本に魔法界はないんです。もちろん同じ系統に属していれば、その中でのヒエラルキーというのは存在しますよ。他系統との連絡会もあります」

ですが、とガイドは個人的感情を抑えた声で続けた。

「魔法使いでない人間から離れて、全く異なる独自のコミュニティの中だけで暮らすというのは、川の兩岸に掛かることを止めた橋のようなものです。あくまで私の考えですがね」

父上が「ほう」と気怠く聞こえる相槌を打った。二つの世界を繋ぐことに価値を見出す点で、マルフォイ家の生業は巫祝と似ているかも知れない。しかしその隣の母上は、はっきりと嫌悪の表情を浮かべていた。俺を見て、唇だけで訴えてきた。「日本の魔法使いとは仲良くなれそうにありませんわ」と。

時代考証のご指摘、ありがとうございます。デイリーヤマザキをヤマザキに訂正

しました。

番外篇.. 日本人の生活規範・2

ぞくりとするような色気を含んだ刀が、闇に浮かび上がっている。

「刀や弓は、邪気を断つ神聖なものとして、神事でも使われるんですよ。日本刀の場合はそれ自体がご神体として祀られることもあります。武器として使うよりも、身を護る物、己を映して心を研ぎ澄ませる物として扱われてきました」

ガイドの言葉に、イギリスから来た魔法使いは呟いた。

「……美しいな」

「ええ。観光客向けの土産物ではない、本物の刀剣です。イギリスにお持ち帰りされるなら、手続きは請け負いますよ」

「ふむ」

父上は顎を撫でた。日本土産を買うならぜひ爪切りや鋏のような刃物を、と勧められて鼻で笑った父上。それが今は、刀剣を扱う店に連れてこられて唸っている。俺は日本刀の美しさよりも、そこに付いた高級車並の値札に圧倒されていた。買うならサトウさんに最初に勧められた爪切りにしておこうや。いい爪切りは一生物だ

よ。

「その一振りと、向こうのをもらおうか」

こともなげに父上が言いだした。マルフォイ氏は、バブル経済の名残に真っ向勝負をしても平気な資産家だった。

そんな「ちょっとした」買い物後は鰻屋に入る。

タレの匂いに、若い胃袋がすかさず反応して鳴った。がつつり掻き込みたいので、親の金で遠慮無く特上を注文した。

「先ほどの話だが、刀を崇拜の対象にするというのは、どういう意味だね。人が作った物を人が拝むというのは、なかなか興味深い光景だが」

「正確には、刀に宿ったものを崇拜します。日本の古くからの考え方では、あらゆるものに霊が宿り、その霊は神格化する可能性があります。たとえばこのテーブルにも、あそこの招き猫も、私やあなたにも」

「冗談だろう」と父上は冷笑した。

「嘘ではないですよ。神社は日本全国津々浦々にありますが、色々なものが祀られています。山や滝、巨石や巨木のような自然物に、雷のような自然現象、古い鏡や

刀。そのもの自体を祀りつつ、そこから感じるものを通して自分と向き合うといいますか」

説明が難しいんですよ、とサトウ氏は茶を一口飲んだ。つられて俺も飲む。濃いめのほうじ茶だ。

「動物がご神体となっていていともありますよ。とくに多いのが蛇で、大神神社や諏訪神社のご祭神はそのものですし、出雲も龍蛇神と縁が深い。古い信仰ですよ、と父上は声を上げた。

「欧米では蛇信仰はグノーシスだけに残ったが、東洋では違うらしいな。本当だったか」

「ええ。脱皮して成長していくのは死と再生の象徴です。湿った場所に棲むために水神ともみられますし、稲作の盛んな地域では鼠害から稲を護る田神としても崇められました。あとは生命と繁殖の関係で、これに御利益があるとかですね」

サトウ氏は片腕を低い位置に置いたまま拳を突き上げた。女性が同席していないのだから、遠慮せずはっきり言えればいいものを。

まずは白焼きが来た。二人にも割り箸を渡してから、自分の分を食べ始めた。あ

あ、美味しい。この時代はまだそんなに高い金を出さずにしっかり食べることができたんだ。鰻が貴重食材になったのは地球温暖化のせいもあるが、乱獲の影響が大きい。マグロもそうだが、和食の美味さを世界に広めず日本人だけで独り占めできた良かったのに。ガイジンは肉でも食ってろ。

……もしかしてこれが、魔法を独占したがる魔法使いの気持ちか。

「ルシウスさん、その割れてるほうを両手で持って、左右に引き裂く感じで……そうそう。その持ち方で食べて下さい。ご祭神でなくても、日本の信仰の深い部分に蛇信仰が関わっています。注連縄という、神道で結界を示す螺旋状のロープは蛇の交尾を表したものですから、日本全国が蛇信仰の影響下にあると言ってもいいくらいです。もっと気軽に言えば蛇の抜け殻は金運アップですし、あ、これは弁財天からの連想か。インドでも中国でも、蛇身の女神がいますね」

「ふむ。私も妻も学校では蛇をシンボルとする寮にいたから、今も蛇神信仰が残っているというのは親しみが湧くな。ところでドラコ、随分と慣れた様子だが、箸の使い方はどこで覚えた」

「あちらの客の様子を真似ただけです」

他の客に責任を擦り付けて、俺は来たばかりの蒲焼きを堪能した。

美味しい。泣きそう。

タレの沁みた白飯も美味しい。マルフォイ邸の食事ではパンばかりだから、俺にとっては久しぶりの銀シャリだった。箸に苦戦していた父上も、れんげを貰って食事を楽しむことができた。

あ、そうだ。

「ところで母上は大丈夫でしょうか」

「大丈夫だろう。ミセスサトウが付いている」

「あの、ご機嫌のほうです」

俺が遠慮がちに言うと、サトウ氏も父上のほうを見た。

前夜、ホテルに着いた時に、疲れを理由に母上は翌日の観光をキャンセルしようとした。サトウ夫人が念のために付き添うことになったが、その後で母上は「魔法使いの誇りのないガイドと、マグルに紛れての日本旅行なんて無理！」と癪癪を起こした。

俺も父上もその後の説得に失敗した。そして今日はコネクティングルームの片側

に籠もった母上をホテルに残して、男だけで東京観光することになった、というわけだ。後で恨まれるかも知れないが、母上自身が「二人で行ってきてちょうだい」と言ったのだから仕方ない。

「ナルシッサにはブラックの誇りがある。それを傷付けられたと思ったからヒステリーを起こしたただけだ。日本で受けたサービスや日本人に、含むところがあるわけではないだろう」

「それなら奥様のことは、妻に任せておいて大丈夫だと思いますよ。ヒトミは海外の魔法使いをおもてなしする場所や体験を、色々と知っていますから」

サトウ氏の発言は嘘ではなかった。

都内観光をしてきた俺たちより遅く、母上は上機嫌でホテルに戻ってきた。

「あら、二人とも早かったのね。私はヒトミと買い物をしてきたの。カワイイ物が多くて、本当に困ったわ。ああ、愛らしい柄や精巧な小物、そういう物を愛でたい気持ちで日本語でカワイイと言うそうよ。もう本当にカワイイ物が沢山あって、道路も綺麗で、店員のサービスも行き届いていて。街並みの不格好さに目を瞑れば、日本も悪くない所ね」

朝、ホテルに置いてきた時の仏頂面からはえらい変わりようだ。俺と父上は思わず顔を見合わせた。

「ナルシッサ、随分と機嫌が良いようだが、何を買ったんだ」

「色々よ。扇子と、江戸切り子のグラスと、漆塗りのボンボニエールと、蒔絵のボックスと、インド産とは違ういい匂いのお香をカワイイ香炉と一緒に買って。ブローチは七宝焼きにしたわ。キモノ屋に行ったら水仙柄の友禅があって、生きている国の宝物？」と言うらしいのを思わず買ってしまったわ。あと千代紙と……」

延々と続くお買い上げリストを聞かなくても、部屋テーブルに置かれた品々を見れば、母上がジャポニズムに嵌ったのはよく分かる。ふと、伝統工芸品の桐箱に混じって置かれたぬいぐるみと目が合った。外国のセレブ女性にも人気だと言うから、もしかしたら母上も興味を持つかとは思っていた。

「ドラコもそれ、カワイイと思うでしょう。子猫ちゃん」

「はあ」

キティちゃんのぬいぐるみを抱えて少女のようにはしゃぐ妻を、父上がなんとも言えない目で見ている。とりあえず落ち着きたいのでお茶を淹れることにした。

「どうせなら緑茶にしてちょうだい、ドラコ。美味しい和三盆を買ってきたから」
本当に一体どうしたんだろう。

父上と一緒に母上を囲んで話を聞いてみた。

朝、母上はサトウ夫人に説得されて、時間を潰すために美術館に寄ったそうだ。「マグルの美術もどき」を眺めて建物を出た頃には日差しが強く、日傘が欲しくなった。そこで有楽町で気に入った日傘を買い、ついでにカフェに入ったり服を見たりしているうちに、財布をどこかに落としてしまった。

『ナルシッサさん、交番に届けましょう。きっと見つかりますから』

『マグルの警察ごときに何ができるの。財布が見つかるわけじゃない。多少はお金が入っているのよ』

人目のないホテルに戻ってから求めの魔法を使っても、手許に戻ってくるのは財布だけだろう。イギリスの感覚で母上はそう思い、中身は諦めた。

ところがサトウ夫人に慰められながらホテルに戻ると、フロントで「お客様のお忘れ物を預かっていると警察からお電話がありました」と伝言があった。急いで警察署に行けば、中身ごとそっくりそのまま、財布は母上の手許に戻ってきた。

普通のことだと俺は思ったが、母上にとってはそうではなかった。

「ここは今まで行っただの国よりも安全なの。道端のベンチにバッグを置いたまま席を外しても、全く置き引きに遭わないのよ」

「ナルシッサ、さすがにそれは油断しすぎだ」

傘と自転車を盗られたことのある俺も同感。

「分かっているわ。けれど試しに電車に乗っても皆静かに行儀良くしていて、時刻通りに運行されて、ちっともストレスがなかったの。どこに行っても騒がしくなくて、人混みを歩いても相手のほうがするっと避けてくれて、とても落ち着いていられたの。トイレもそう。探すのに苦労しない程度にあちこちにあって、どこも無料できれいな。トイレに関してはロンドンより圧倒的に東京のほうが上だわ」

潔癖症の気のある母上にとっては、観光先でのトイレ事情は重要なことだった。ちなみにイギリスの公衆トイレは、数十ペンスを払う有料のことが多い。

「私、マグルはこの国でも野蛮で低俗だと思っていただけけど、日本のマグルは何かが違う気がするの」

そしてその日本人が作り出す物にも関心が湧いた結果が、部屋に溢れる日本土産

というわけだった。

「何かが……何が違うのかしら」

母上はマグルを見下す言動を控えるようになった。

翌日の新幹線でも、父上は運行の正確さに、母上は出発前の清掃のスピードに感心していた。俺は久しぶりの駅弁を堪能していた。

京都の二日目は、少し家族だけで過ごしたいと父上が希望した。それに応えて、サトウ夫妻は英語の通じる店をいくつか教えてくれた。

JR 東海のCMのような春景色の中を、のんびりと歩いていく。周囲の一般観光客は風変わりな格好の俺たち三人を一瞥はするものの、基本的に無関心だった。

桜を望める喫茶店に入ると、父上はふと言った。

「ナルシッサは、日本の魔法使いの在りかたについてどう思う」

母上は水を少し口にしてから答えた。

「魔法界がなかったり、マグルと同じ社会に生きていることには今でも違和感がありますわ。でも、魔法を使わなくても十分に快適に過ごせるから、この国の魔法使

いは魔法界に拘らないのでしよう。人と人でないものを繋ぐのが彼らの務めだというのは、何となく分かった気がします。ハジメがあなたに居酒屋での楽しみ方を教えたり、ヒトミが私に箸の使い方を教えてくれたり。距離感さえ間違わなければ、互いに不愉快になることもない。そのためのガイド」

「距離感か。そうだな」

抹茶が来た。ドラコの子供舌には苦すぎた。ただのあんみつではなくてクリームあんみつにして正解だった。

「ヒトミが話してくれたのだけれど、古くからの日本人は、自然を征服するのではなく共存することで、自然災害の多い国土と付き合ってきたんですって。きっとその感覚が、魔法使いとマグルの距離感にも反映されているの。彼らは魔法界を作らず、マグルに混じって生きていく道を選んだ。そうしてマグルに迫害されず、呑み込まれず、今まで魔法使いとしての血脈を保ち続けて来れた。日本でも古い血というのは尊ばれるんですって。日本の魔法使いは術を使う時に祖霊の力も借りるから、それと繋がるためにも血と名前は大事なんだそうよ。伝統を蔑ろにしているわけではないのね」

「ナルシッサ。私の話も聞いてくれるか」

父上は、マルフォイ家の富が、非魔法使いに対するコンサルティング業と非魔法界での不動産投資で生み出されることを、母上に打ち明けた。

母上は、正直全てを理解してはいないようだったが、怒ったり泣き喚いたりするようなことはなかった。

「ルシウスが今からそのビジネスを始めようということなら、私は反対したでしょう。でも何世代も前から続いている家業だというなら、他家から嫁いだ私がとやかく言うことではありません」

「……ありがとう」

母上は窓の外に目をやった。

暗めの店内から見ると、ただの竹林が額縁の中の絵画のようだった。

「マグルは下等な生き物で、マグル生まれも純血より劣る存在。私は実家でそう教わりました。けれど、もしかしたら、そんな風に見下すほどマグルは下等でないかも知れない。この国の穏やかさや清潔さを見て、そう感じることはありません。確信できるだけの時間が足りなかったのが、残念だけれど」

今回の日本旅行は五日間の行程だった。もう一日しか残っていない。器の中には、あんこと溶けたバナアイスの混ざり合った液体しか残っていない。

「もう少し過ごしたかったか？」

「ええ、そうね」

「では滞在日数を延ばそう」

「あら」母上は瞬きした後、ゆっくりと笑った。「この国に来て、一番素敵な提案だわ」

母上の、そしてマルフォイ一家の旅が、ようやく始まろうとしていた。

……この初訪日では東京と京都を中心にしたオーソドックスな観光地を巡ったが、名所よりも父上と母上を喜ばせたのは、ごく普通の田舎の風景だった。

「今度来る時は、ガイドは付けずにカントリーサイドでのんびり過ごしてみようか」
「素敵ね。できれば温泉があるとところが嬉しいですわ」

そして年に一回のペースで日本を訪れることになった後に、思いも掛けない同行者を連れてくることになるのだが、それはまた別の話。

D a r k t h r o n e ≧ K a t h a r i a n L i f e C o d e ≧

日本旅行を書けと言われたから書いたものの、真面目に書いていくと旅行編だけで長編になるので、設定をばらまくだけで番外篇は終わり。

次回から一年生編。

一年生

ホグワーツ城はまだ遠く・1

本章では、ホグワーツをより普通の寄宿学校に近づけるため独自設定が色々と出てきますが、本筋には関わってこないもので、気になる方は読み流して下さい。

九月最初の平日の朝。

キングスクロス駅にある魔法使い専用のプラットフォームに、学生とその家族が詰めかけていた。ホグワーツの学生が一斉登下校するための特別列車、通称「ホグワーツ特急」の出発時刻に近い。

赤い蒸気機関車と、重厚感のある客車。『世界の車窓から』のテーマ曲を鼻歌で歌いながら列車を眺めていると、母上に手を引っ張られた。

「ドラコ、お母様の側に付いていらっしやい。はぐれたらどうするのです」

「大丈夫ですよ、母上。新宿駅や渋谷駅に比べたら迷いようもありません」

「あんな魔窟と一緒にしてはいけません」

先を歩いていた父上が、待ち合わせていたノット父子を見つけた。

ノットは俺の頭を見て笑い出した。「その髪型」

俺はオールバックにしたプラチナブロンドを撫でた。「似合うだろう」

今朝、顔を洗っている時にふと思い立って、髪を後ろに撫でつけてみた。すると鏡に映った姿は予想以上に生意気ボンボンのドラコ・マルフォイだった。涙が出るまで笑った後、そのまま固めて登校することにした。

そのうちにクラブとゴイルの二家族も合流した。俺やノットに比べると、カートに積まれた荷物の量がとんでもない二人民族大移動だ。

そのままではホームを塞いで邪魔なので、さっさと子供たちを率いて列車に乗ることにした。空いているコンパートメントに荷物を放り込み、通路側の窓から親を呼ぶ。

その後は旅立つ子と見送る親の別れの時間……かと思いきや、クラブとゴイルの母親たちは俺に狙いを定めた。

「ドラコくん、学校でもどうかうちのヴィンセントをお願いね」

「グレゴリーには、分らないことがあったら、ドラコくんに相談するように言っているから」

言われなくても子供たちを引率するつもりではいた。しかし息子を殴って泣かせた相手に正面から託すとは、夫人たちも肝が据わっている。

車内を振り返り、本人たちに確認した。「きみたちはそれでいいのか？」
二人は同時に頷いた。

「困ったらドラコと同じものを選べって言われた」

「そういうのが腰巾着なら、楽だからそれでいい」

「待て、それは思考停止だ」

「ドラコくんお願い。うちの子を見捨てないでやって」

「あ、はい」

「マダムにモテモテ」

後ろで余計なことを言うノットには肘鉄をかました。避けられた。

やがて発車ベルが鳴った。

出発後しばらくは世間話に興じたが、八月中も顔を合わせていた仲だ。新しい話題はあまりない。クラブが可愛がっていたクワガタは、家族に世話を任せてきたそう。車内の探険を提案してみると、クラブとゴイルが乗ってきた。隣の客車に移ると、トイレの前で見知った顔に会った。

「やあ、パンジー。久しぶり」

パンジー・パーキンソンは目を丸くした後、あたふたと笑顔を作った。

「ドラコ！　こんなすぐ会えると思わなかった。髪型変えたんだ。大人っぽいね。どうしよう。そう、良かったら私たちのコンパートメントに来ない？　ミリセントとダフネが――」

パンジーは列車の揺れに足を掬われ、俺の目の前でよろけた。

「おっと」

咄嗟に肩を掴んで支えようと、相手はぱっと頬を赤らめた。

「あ、ありがとう、ドラコ」

「いや。気を付けて」

「あ、あのね。さっきまでミリセントとダフネと、ドラコの誕生日会の話をしてい

たの。楽しかったねって話をしたら来なかったダフネが悔しがってた。一緒に乗っている子たちもドラコに興味があるみたいで、私から紹介するから、良かったら少しお喋りしていかない？」

後ろの二人から尻込みする気配を感じたので、言った。

「お誘いありがとう。でも先に車内を見てしまいたいから、その後でもいいかな」
「ええ、ええ！　もちろん。絶対来てね」

パンジーと別れた後、別の客車で監督生バッジを付けた男女とすれ違った。男子のほうが興奮気味に喋り、女子にあしらわれている。

「——だから本物だって。車内販売を覗いてたんだ」

「顔を知らないのに何で本物と言い切れるの。名札でも着けてたの」

「傷！　おでこに傷があった。絶対ハリー・ポッターだ」

「はいはい。いいから仕事やって」

ゴイルが俺の袖を引っ張った。クラブが「本物だって」と呟く。

「きみたちも見てみたいのか」

と尋ねると、二人は「へへへ」と笑った。

俺は監督生を追いかけて、「失礼」と声を掛けた。

振り返った女子監督生は、そこにいるのが新人生と気付くと視線を下げて微笑んだ。

「どうしたの。迷っちゃった？」

「お二人の話が耳に入ったのですが、車内にハリー・ポッターがいるのですか」と男子がぐっと乗り出してきた。

「そう！ あの魔法界の英雄だ。せっかく同期になるんだから仲良くしておいで」教えられたコンパートメントの扉をノックすると、中から「どうぞ」と声が掛かった。後ろの二人に目配せしてから扉を開ける。

「失礼するよ。ここにハリー・ポッターがいると——」

途中で「ドラコ！」と嬉しそうな声に遮られた。「また会えたね。入ってよ」眼鏡の少年、ハリーがにこにこしながら俺を手招きする。

個室には彼と赤毛の少年の二人きりだった。赤毛の少年は面白くなさそうだ。英雄を独り占めできなくなっただけでなく、自分より早い知り合いをハリーが親しげに呼び込んだ事実が気に入らないのだ。実に子供らしい。

しかしその膝の上の太ったねずみを見た瞬間、笑いは引っ込んだ。そういえば、ここにもヴォルデモートに繋がる存在がいた。

「ハリー、知り合い？」

と赤毛の少年はあからさまに不機嫌な顔で尋ねた。

「うん。制服を作る店で一緒になった。親と同じ寮が良いよって、父さんと母さんがグリフィンドールだったことも教えてくれたんだ」

「へええ」と、少年は俺の顔をじろじろ見た。「ハリーは闇の魔法使いを斃した英雄なんだから、グリフィンドールに決まってる。ぼくだって言えるよそんなことで、きみ誰」

「人に聞くなら自分から名乗るものだよ。その派手な赤毛、ウィーズリー家だろう。きみの父君には世話になったことがある」本を雑に扱われた恨みは忘れていない。「父さんに？ まあいいや、ぼくはロナルド・ウィーズリー。名乗ったぞ。きみは」

「ドラコ・マルフォイだ。こっちはクラブ。こっちはゴイル」

途端にロンは立ち上がって叫んだ。「マーリンの髭、くされマルフォイかよ！」

そして両家の確執など知る由もないハリーを背に庇い、俺に指を突きつけた。

「ハリー、こんな蛇野郎に近づいちゃ駄目だ。こいつの父親は例の人の手下だったんだ。きみの仇だ！」

「え、……え？」とハリーは戸惑った。

「前に会ったのだって偶然じゃないかも。何か悪いことを企んできみに近づいたんだ。きっとそうだ。こいつの家が毒蛇の巣だってことは魔法界中が知ってる。父さんだっていつも言ってるよ。変節漢、卑怯者、そういう奴らなんだよ！」

俺はロンに半歩近づいた。

「な、なんだよ。事実じゃんか」

戸惑う少年を見上げ（ロンはかなり背が高い）、俺はにこりと微笑んだ。

そして彼の顔めがけて思いきり額を打ち込んでやった。ごっ、と詰まった音と共にロンは後ろに仰け反り、ハリーの上に座り込んだ。

「出た！ ドラコの頭突き！」

「ドラコの石頭は俺たちが保証するぜ！」

なぜか喜ぶクラブとゴイル。

「失敬。きみが父と知り合いだと思わなくて、よく聞こうとしたらぶつかってしまった。事故だよ、事故。まさかきみも、親の受け売りで見ず知らずの他人を侮辱したわけではないだろうしね」

「なにを、この」

顔を赤くして立ち上がろうとするロンを、ハリーが後ろから抱きかかえるようにして止めた。

「やめて、ロン」

彼が食い止めてくれている間に、巨体二人をコンパートメントから出す。自分も出ていく前にハリーを振り返った。ドラコの薄灰色の目が、冷ややかに見えることを願う。

「……疑問に思っただろうから、先に答えておこう。ぼくが以前グリフィンドールを勧めたのは、きみと同じ寮になりたくないからだ。きみにはそのウィーズリーのような奴と連むのがお似合いだよ」

扉を閉める前にロンの嘲りが追いかけてきた。

「マルフォイがグリフィンドールに選ばれるはずないもんな！」

その通り。

周囲に疑われないよう、俺はドラコらしくスリザリンに行きたい。だからダンブルドアに監視されているハリーには、なるべく他の寮を希望してほしい。

先ほど再会した時の態度を見るに、ドラコと同じ寮になることをハリーはそれほど嫌がらなさそうだった。それでは困る。ロンにはしっかりハリーを囲い込んでもらわないと。

しかしクラブとゴイルには悪いことをした。

「済まなかったな。有名人と喋りたかったのはきみたちなのに、邪魔をして。ぼくがいなければウィーズリーの息子も落ち着くだろうから、出直すといい」

クラブは首を横に振った。「あの赤毛は嫌いだ」

ゴイルは「俺の父さんも転向者だ」と唸った。

俺は二人の肩を叩いて通路を戻り始めた。



道すがら、パンジーのところに顔を出していくことにする。女子グループとの接触を面倒がるクラブとゴイルは先に帰した。

しかしノックに応えた声は聞き覚えが無く、コンパートメントのドアを開けても見知らぬ顔が並んでいた。

「あ、失礼。間違えました」

ドアを閉めようとする中、中から押さえられた。

「待って待って。きみも新入生？ ネイティブ魔法界の人？ ちょっと入ってよ」と引きずりこまれた。

そのコンパートメント内にいた六人はいずれもドラコと同年代の少年で、Tシャツや半袖シャツ、ジーンズにスニーカーという格好だった。

「きみたちは非魔法界の出身かい」

俺が確認すると、彼らは堰を切ったように喋りだした。

「そうなんだ。きみのそれ、制服じゃなくて私服だよ。ネイティブの人だよ。俺たちホグワーツからの手紙を受け取って、初めて自分が魔法使いだって知った奴ばかりなんだ。なあ、ホグワーツってどんなところ？ 流されてここまで来ちゃったけど、校舎の所在地は地図にも載ってないし、普通の人間には見えないなんて言われたし、不安なんだ」

「普通の人に見えない魔法の入口のことは、ダイアゴン横丁やキングスクロス駅のホームで理解したけど、これに乗ってホグワーツに行けるのかな。本当は俺たち騙されて、海外に人身売買されるんじゃないよね。親から入学金と授業料を巻き上げる詐欺じゃないよね」

他の少年たちも縋り付く目で俺を見つめている。

「確かにぼくは魔法界の生まれだし、この列車に乗っていればホグワーツの近くに到着することも知っている。だけど、非魔法界からの入学者に対しては配慮があると聞いたよ。説明に来た人か、学用品を買う時に付き添ってくれた人には確認できなかったのかい」

「確かめようとはした。ぼくたち、同じ事務員に引率されて、一緒にダイアゴン横丁で買物をしたんだ。だからこうして一緒に個室にいるんだけどね。だけどその人に『大丈夫です』って言われたら、細かいことは別にいいかって気になっちゃったんだ」

「うちに説明に来た時もそう。最初はうちの親、胡散臭い詐欺師なんか追いついてやるって鼻息荒かったのに、説明の人が来た途端に、にこにこして魔法界のことを

受け入れちゃったんだ」

「うちもそうだった！ でもそれに気付いたのは俺だけだったよ。魔法使いになれるならと思って親には何も言わなかったけど、ちょっと怖かった」

あまりな話に頭がクラクラする。俺は言った。

「……おそらくそれは、疑いを消すための魔法、暗示と言ったほうが分かりやすいか、それを掛けられたんだ。機密保持法のせいで、魔法使いは非魔法界の人の記憶を操作することに抵抗がない。本当は証拠を示して論理的に説得すべきなのに、担当者手間を惜しんだんだろうな」

魔法に免疫のない相手を、煙に巻いて丸め込もうとする。そんな魔法使いが多いのは原作と同じだ。相手に知識がないのをいいことに、不利な条件で契約を結ばせようとする悪徳業者みたいなものだ。誠実には程遠い。

「でも、でもホグワーツ魔法魔術学校は実在していて、これに乗っていればそこに着くんですよね？」

「それは間違いない」

少年たちが肩の力を抜いたので、付け加えた。

「もっとも、ぼくも騙されている可能性もあるけどね」

「止めるよ、そういうの」と、隣に座っている少年に怒られた。

「ごめん、冗談だ。ぼくの両親はホグワーツの卒業生で、父は今年から理事に就任する。きみたちは詐欺に遭っていないし、誘拐されたわけでも人身売買に巻き込まれたわけでもない」

「それならいいや。気分変えてウノでもやろう。きみも一緒にどう」

誘われ、修学旅行気分で頷きかけたが、すんでのところで踏みとどまった。今の自分はドラコ・マルフォイだ。マグル生まれとの交流には慎重にならないと。

「ありがとう。でもこれから寄る所があるから、ゲームは遠慮させてもらうよ」

「あ、そうか。コンパートメントを間違えたただけだもんね。ごめんね、引き留めて」
「それじゃまた学校で」

少年たちが気を悪くした様子はなかったので安心した。

今は忙しくて頂いたご感想に返信することもできませんが、励みになっていま

す。
あ
り
が
と
う
ご
ざ
い
ま
す。
す。

ホグワーツ城はまだ遠く・2

ホグワーツ特急は、午後の田園風景の中を抜けていく。

コンパートメントの扉を開けると、今度こそ知った顔の少女が三人座っていた。パンジーがぱっと笑顔を見せた。「ドラコ！ 来てくれたんだ」

「あ、親分だあ。元気？」 朗らかに手を振ったのは、大柄のミリセント・ブルストロード。

「やだ、野蛮人」と顔を顰めたのは、見た目だけは大人しそうなダフネ・グリーングラス。

「親分どうしたの、その髪型」

かっちり固めたオールバックを撫でつけ、「紳士らしく決めてみた」と言ってみた。「似合うかな」

パンジーがすかさず「すごく格好良いよ！」と絶賛してくれた。

「気合いが入っているのは分かる」

「古臭い」

後の二人は正直な反応だった。

俺は半身だけ中に入った。

「挨拶が後回しになったけど久しぶり。皆元気そうだね」

「そんな廊下から覗き込んでないで、入りなよ」

「いや、ここの席の子が戻ってくるだろうから、ぼくはこのままでいいよ」

俺が言うと、微妙に白けた空気になった。

「確かに最初はいたけどね」

ね、と彼女たちは顔を見合わせた。

「その子たち、話してみたらマグル生まれだったの。だから席を移してもらって、今はいないの」と、ダフネが髪をいじりながら気怠げに教えてくれた。

「ほら、私たち三人とも家が聖二十八氏でしょ。新しく魔法界に来た人とは話が合わないから」と、パンジーが俺の反応を窺いつつ言葉を継ぐ。

「というより、新参者と仲良くなっても私たちには何の得もないからね。向こうは魔法界に溶け込みやすくなって得するだろうけど、それって私たちが利用されるだ

けだからさ」と、ミリセントは堂々と言い切った。

なるほど。これが彼女たちの純血主義か。それならウノに誘われた時に断らずに参加して、そのことを彼女たちに話してやれば面白かったな。

「残念だね。喋ってみたいらしい友達になれたかも知れないのに」

俺が何気なく言った言葉に、ダフネが噛みついた。

「あなたがそれを言うわけ？ あなたの『お喋り』ってどうせ殴り合いでしょう」

「ちよつとダフネ。ドラコはそんな乱暴者じゃないってば」

「それなら札束で頬を叩くような上品なお喋り？ 凄いわあ、グリーン格拉斯家にはそういう真似はできないわあ」

「何でダフネはそんなにマルフォイクンへの当たりが厳しいの」

と、ミリセントが苦笑しながら尋ねると、ダフネはつんと顎を上げた。

「妹を泣かした人間は、絶対に許さない」

それなら仕方ない。退散する時に、パンジーに「なんかごめんね」と謝られてしまった。



自分の所に戻ると、ちょうど軽食の車内販売に間に合った。午前中にロンドンを出発した列車は、日没後に目的地に到着する予定だ。どうしたって腹は減る。

余談だが、列車でホグワーツの全校生徒が移動するのには、理由がある。かつて各家庭の責任で登校させていた時代に、新学期に間に合わない生徒が大量発生して問題になったから——というのは表向き。

世界には、もっと苛酷な通学路を使う学生がいる。たとえば数百キロ離れた寄宿学校に徒歩で登校するため、新学期の始まる一週間前に一人で自宅を出発する中国自治区の子供。深い峡谷に渡された今にも切れそうなロープを橋代わりに伝って、山の上の小学校に毎日通うインドネシアの子供。

それに比べたら、長距離移動の手段をいくつも持つ魔法使いが、なにを甘えたことを言っているのか。ホグワーツの敷地が魔法での侵入を防ぐ障壁で囲われているから、というのも理由にならない。学校からほど近いホグズミード村には、魔術的な移動方法の規制は掛かっていない。ホグワーツ特急の発着駅もその村の手前だ。だから自宅からホグズミードに飛んで、そこから徒歩で学校に向かったほうが早いし、混雑も避けられる。列車というインフラを整備し続ける負担もなくなる。

俺は、列車を使う理由は「現実の世界からファンタジーの世界に読者を引き込む演出」という、メタフィクション的なものしかないと考えていた。ところがこの夢の中のスネイクによれば、列車移動は「家庭から離れたことを学生に自覚させるための舞台装置」なのだという。

全寮制の寄宿学校であるホグワーツにとって、生徒のホームシックと脱走を防ぐ手立ては重要な課題だ。だから「簡単には帰れない」という意識を学生に植え付けるために、敢えて面倒な手段と時間を掛けて登校させているのだという。

本当かどうかは知らない。しかしホグワーツに勤めている教授がそう言うのだから、まるきり嘘でもないだろう。

「なるほど。学校前に直接連れて行ってもらったほうが楽なのに、とは今日も思った」

と、ノットが言った。

「楽だろうけど、一人だけ待つのはいきつと目立つぞ。さっき監督生が名前を確認していったから、そこから漏れたら駅で名前をアナウンスされるかもな」

俺は口を付けただけの「かぼちゃジュース」を揺らしながら言った。原作でお馴

染みのアイテムなので買ってみたが、南瓜は煮付けが一番だと思う味だった。USJで俺の彼女が飲んでいたものと比べると……ノーコメントで。

ノットは顔を顰めた。「名前を呼ばれまくるのは嫌だな」

「父さんが言ってたんだけど」と、クラブが唐突に喋った。

「ヴィンセント、飲み込んでから喋れ」

「うん。父さんが言ってたんだけど、学校ではファーストネームじゃなくてラストネームで呼び合うのが格好良いんだって」

「うちもそんなこと言ってた」とゴイルも同調する。

ノットが「そんなの昔の話だろう」と首を傾げたが、俺は二人の希望を受け入れることにした。正直、彼らのことをヴィンセントやグレゴリーと呼ぶのは違和感が抜けない。

「クラブ。ゴイル。うん、馴染むな。テオはどうする？ ノットと呼ぼうか」

一応尋ねてみたが、「どうでもいい」と反応は薄かった。

列車はなおも北上し、次第に午後の日差しが傾いてきた。

まだ手許の明るい内に制服に着替えることにする。

ごそごそと荷物を開けたり服を脱いだりしていると、いきなりコンパートメントの扉が開いた。

「ぼくのヒキガエル見なかった？」

通路側の席で荷物を漁るクラブとゴイルに遮られ、声の主の姿は見えない。俺が「いや、見ていない」と答えると扉は閉まった。今のはいったい誰だったのかなあ。

それからの四人同時の着替えは難航した。

時折揺れる足元に、腕を伸ばせば壁か他人に当たると狭い個室。学生時代の、更衣室が無かったバイト先のことを思い出しながら、俺だけさっさと着替え終わる。

列車が大きくカーブを描き、バランスを崩しかけたゴイルが隣のクラブにぶつかった。服を脱ぎかけていたクラブは、扉によりかかるとで姿勢を保とうとした。

その時、前触れもなく扉が開いた。

よりかかる先を失ったクラブは、尻から通路に飛び出していった。パンツ一丁で。

「ちょっとあなたたきやあああ」

突然の訪問者は何か言いかけてそのまま押し潰された。

「いやだちょっと！ お尻！ どいてよ！ 重い！ お尻じゃまあああ」
クラップの尻の下で騒いでいるが、自業自得だ。

彼らを助け起こすのは一仕事だった。

ようやく下敷きから解放された訪問者は、ぼわっと広がった茶髪がモップのような少女だった。

「大丈夫かい」と手を貸して立たせると、彼女は非難がましい声を上げた。

「なんだって裸で飛び出してくるの。信じられない」

「制服に着替えていたんだ。服を脱ぐのは当たり前だろう。むしろ、ノックもせずにドアを開けたきみのほうが信じがたい。ぼくたちの着替えが見たかったのか？
きやー痴漢よー」

少女はぐっと黙り込んだ後、「それは失礼したわ」と取り澄まして謝った。

「ネビルのヒキガエルを探しているの。あなたたち、この辺りで蛙を見なかった？

」

「さっき別の子も探していた。同じ蛙か」

「ええ。逃げ出した蛙が二匹以上でなければね」

「手分けの仕方が下手だな」

「余計なお世話です。見かけたら教えてちょうだい」

居丈高に言うとな彼女は立ち去り、隣の扉の前に立った。どうするのかと見ていたら、今度はきちんとノックして、中の返事があってから開けていた。

「やればできるじゃないか」

こちらのコンパートメントでは、裸のままのクラブが、異性に体を見られただけでなく尻を殴られたとショックを受け、これまた半裸のゴイルが、げらげら笑い転げて場所を塞いでいた。ノットは座席の上で私服を畳むために、俺のトランクに勝手に腰掛けている。

四人とも着替えを終えて荷物をしまい直すまで、かなりの時間が掛かった。

「さっきの二人、蛙は見つかったかな」

俺が呟くと、ノットは「放っておけよ」と車窓を眺めながら応えた。クラブとゴイルも聞こえないふりでおやつを食べている。

「もう駅に着くまでやることもないし、暇潰しに見てくるよ」

すると二両先の客車で、やや背の低い少年が右往左往しているのを見つけた。彼は俺を見つけて、小走りにやってきた。

「ねえ、ヒキガエルを見なかった？」

声で先ほどコンパートメントを訪れた本人だと分かった。やや小太りで、いかにも気弱そうだった。これがもう一人の運命の少年か。

「まだ探しているのかい」

「あれ、もしかしてぼくもう聞いてた？ ごめんね、あっちこっち聞いて回ったから、誰に聞いたかもう分からなくなっちゃって……」

「車内にいることは間違いないんだな。だったら前の車両に監督生がいるから、その人たちに伝えに行こう。上級生なら魔法で蛙を見つけてくれるかも知れない」

少年は「そっか！」と声を上げた。

「きみ、親切だね。トレバー探しを手伝ってくれるの、きみが二人目だよ。みんな冷たいんだ」

「それは、挨拶も無しにコンパートメントに乗り込んできて、いきなり質問してい

きなり去っていくほうが悪いと思うね」

少年は、あっと小さく声を上げた。

最初に尋ね当てた女子監督生に事情を話すと、頼もしく請け負ってくれた。

「失せ物探しは魔法使いの基本だからね。すぐに見つけてあげる」

呪文に合わせて杖が振られ、やがてヒキガエルが宙を飛んできた。どこの壁にもぶつからずに来たようで、内臓ははみ出していなかった。

「トレバー！」飼い主は感極まって蛙を抱き締め、その背中に頬ずりした。

監督生に礼を述べて別れた後、蛙を抱えた少年は俺のほうを向いた。

「きみも本当にありがとう。お礼に何か困った時は力になりたいな。ぼく、頭も悪いし運動も苦手だし、得意なことも何もないけど、恩は忘れないよ」

「それなら、蛙を探していた女の子——きみの友達だと思うが、彼女に会ったら、ぼくらに悪気は無かったと伝えてくれると嬉しい」

「ぼくら？ 誰か何かしたの？」

「コンパートメントに乗り込まれた時、ちょうど着替え中だった友人のヒップアタックが彼女を押し潰した」

少年はぷっと吹き出した。

「そんなことでいいなら。ぼく、ネビル・ロングボトム。きみは？」

「ドラコ・マルフォイ」

そう名乗った時は、緊張した。

ネビルの両親はデスイーター残党の暴行を受けて廃人同然にされ、長い入院生活を余儀なくされている。一方ドラコは、元デスイーターの父が収監されることもなく、両親から愛情を注がれて何不自由なく育った。俺のせいではないが、ネビルに申し訳ないと思う。

何しろネビルの両親を痛めつけたデスイーターの一人、ベラトリクス・レストレンジは、ドラコの母方の伯母だ。つまりネビルは被害者の家族で、ドラコは加害者の身内という関係になる。

ところが予想に反し、ネビルはマルフォイという家名に反応らしきものを見せなかった。

「そう、よろしくね。あ、ハーマイオニーが来た」

後ろの客車からバタバタと駆け込んできたのは、髪の毛が爆発した、見覚えのあ

る少女だった。

「こんな前にいたの、ネビル。大変。トレバーを見つけたんだけど、捕まえる前にどこかに飛んでっちゃった！ 私追いかけてきて……あら、それってもしかして」と、彼女は少年の腕の中にいる蛙に目を留めた。

「うん。トレバーだよ。監督生に事情を話したら、求めの魔法で見つけてくれたんだ」

「なるほどね。監督生は盲点だったわ。P（プリフェクト）のバッジを付けている人は見掛けたのに、どうして思いつかなかったんだろう、私」

癖の強い髪を金田一耕助並にがしがし掻いて、彼女は悔しがった。

「ぼくもだよ。思いついたのは、こっちのドラコ。監督生に頼めばいいって教えてくれて、その専用個室まで付き合ってくれたんだ」

ネビルの紹介に、少女は感心したような目を俺に向けた。かと思うと、少し前に会ったことを思い出したのか、すぐに微妙に頬を歪めた。

「……もしかしてあなた」

「また会ったな。男の着替えを覗くのは止めてくれたかい」

「私だってそんなつもりじゃなかったし！ ネビル、何笑ってんのよ！」

「だって、ヒップアタックで下敷きって……」ネビルは横を向いて肩を小刻みに振るわせている。

「悪夢だった。あれは悪夢だったわ」

吐き捨てる少女に、俺は柔らかく言い返した。

「きみにとってはそうかも知れないが、下着姿を異性に見られた揚げ句、邪魔だの何だのと尻を叩かれたぼくの友人もひどく心を痛めている。もうお互い様ということで手を打ってくれないか」

クラップ本人はもう気にしていなかったが、ちょっとしたアクシデントにいつまでも拘られるのは鬱陶しい。

「ハーマイオニー。ぼくからもお願い」

と、ネビルが口添えしてくれた。

少女はわざとらしく溜息を吐いて、「分かった。もう忘れる。ネビルを手伝ってくれたあなたに免じて」と、右手を差し出した。

「ありがとう。ぼくはドラコ・マルフォイだ。ミス……」

「グレンジャー。ハーマイオニー・グリン・グレンジャー」

「義憤の女神の孫娘か。お手柔らかに、ミス・グレンジャー」

「ヘレネの娘と言わないでくれる人は珍しいわ」

俺たちの握手を横でニコニコしながら見ていたネビルとも、何となく流れて握手した。

それから二人とは、コンパートメントに戻りがてら少しだけ話をした。スリザリ
ン寮に入りたいと俺が言うと、「やっぱりね」という反応だった。二人ともマルフォ
イ家に関する一般的な知識を持っていた。

やがて列車は緩やかに速度を落としていった。ホグワーツ特急の終着駅が近い。

Dark throne Slotte i det fjerne

ご馳走いっぱい大広間

ホグズミード駅に列車が到着した頃には、すっかり日は沈んでいた。

「一年生はこっちだ！」

胸間声で呼びかける大男が、ホームの隅でランタンを掲げている。「イチチネンセイ」とは言っていないが、発音に特徴があった。

「クラップ、ゴイル。ちゃんというな？ はぐれてもいいけど、あのランタンは見失うなよ」と二人に注意していると、

「心配ならもうドラコが両手で繋いで連れて行けよ」とノットに言われた。

「それは逆に転んだら危ないから駄目だ」

「ああ、そう」

やがて、ランタンに先導されて新入生の集団が動き始めた。未舗装の細い下り道は中央が凹んで足を取られやすく、所々に木の根や瘤が飛び出している。先導の光が届く前方はまだいいが、列の後方は真っ暗な中を歩くに等しい。

灯りに近い位置に付けて良かったな、と思った時、少し前を歩いていた子が躓い

で転んだ。将棋倒しになる前に助け起こす。

「大丈夫かい」

「ごめん」

「いいから。止まらないで先に進むんだ」

土で掌とローブを汚したその子が可哀相だったが、そのまま行かせた。もし時間的に余裕があれば、入学式の前に手を洗う時間もあるだろう。

「三人も先に行ってくれ」と俺は言った。

「ドラ、マルフォイは？」

「ぼくはしばらくここにいます」

俺は杖先に光を灯して、子供が躓いた地面の窪みを照らした。せいぜい節電中のスマホ画面の明るさだが、無いよりはましだ。窪みはかなり深かった。

次々とやってくる後続の子供たちは、足元の灯りで窪みを回避してくれた。そして俺の前を通り過ぎた列の中から、ぽつぽつと自発的に蛍の光が生まれた。

列の最後尾に付いていくと、やがて夜空を映す青い水辺に辿り着いた。先着していた新入生たちはボートに乗り込んで待っている。巨体二人がぶんぶん手を振っ

て合図したので、俺も友人たちと再会することができた。

それから全てのボートが、漕ぎ手もないまま湖面を走り出した。夜風が心地良かったが、俺は腕を組んで前方を眺めていた。

「ド、マルフォイ、怒ってるのか」とクラップに聞かれた。

「まあね。きみたちにじゃないぞ。夜、明かりも無しに足元の悪い道を行列で歩かせて、よく今まで事故が起きなかったものだと思ってね。父上に手紙を書くよ。あの道を未整備のまま放置していたら、いつか子供が怪我をする」

学校の設備運営も理事の仕事だというから、父上に報告したら何か手を打ってくれるだろう。

クラップは首を傾げた。「歩くのはいいんだ」

「儀式みたいなものだからな。ほら、列車で話した、ホグワーツへの道のりを覚えて困難にしている説」

ノットだけが「ああ、なるほど」と理解してくれた。

原作でも、二年生以上は駅から馬車を使い、一年生より先に学校に着く。敢えて一年生にだけ徒歩とボートという遠回りの経路を使わせるのは、入学式の準備が整

うまでの時間稼ぎ、そして校舎までの道のりを錯覚させるためだろう。まして駅に到着したのは日没後だ。脱走防止のために、学校周辺の様子をあまり見せたくないからだと穿った見方をしてしまう。

「船着き場」

ゴイルが前方を指差した。

煌めきを纏った古城が、湖面に浮かび上がっている。その足元にボートは吸い寄せられていった。



狭く暗い控室でのすし詰めを経て通された広間は、輝いていた。

在校生が座る四列のテーブルは手前から奥へと続き、その突き当たり、広間の奥に教員席が並ぶ。各テーブルの上には夥しい数の明かりが吊され、磨き抜かれた食器に火の色が照り返す。

入口近くの頭上に、四旒の寮旗が掲げられていた。左から順に、深紅の炎に黄金の獅子が踊るグリフィンドール。濃い黄色の大地を黒い穴熊が踏みしめるハッフルパフ。青い大空にブロンズ色の大鷲が舞うレイブンクロー。そして、深い緑の波間

に銀の蛇を抱くスリザリン。

室内の熱気も届かない上空に天井は見えず、代わりに紺青の夜空に張り付いた星々が歌っている。

「腹減った」とクラッブ。

「減りすぎて死ぬ」とゴイル。

二人は絢爛たる広間の飾り付けにも、まるで感銘を受けた様子は無かった。それまで他の子供たちと同じようにぼかんと上を見上げていた俺は、苦笑して視線を前に戻した。

まもなく新入生の組み分けの儀式が始まった。

家名のアルファベット順に一人ずつ名前を呼ばれ、前方に置かれた椅子で在校生とご対面。その場で被らされる古ぼけた帽子が素質を判断して、所属寮が決定する。その後の人生をも左右する瞬間が、得体の知れない魔法の帽子に委ねられていた。やがて「マルフォイ、ドラコ！」と呼ばれた。

通路の行く手に置かれた椅子のすぐ近くに、校長のダンブルドアが座っている。白い長い髭。老眼鏡と思しき眼鏡。休日のサンタクロースのような、一見すると優

しげな老人だった。

俺は彼と目を合わせないよう、卓上で組まれた皺だらけの手を見つめて歩いた。閉心術をこの場で使うつもりはない。リスクは大きいが仕方ない。帽子は性格診断のために頭の中を覗き込んでくるはずだから、その判断にエラーが出かねない小細工はできない。もし衆目の前で「閉心術を解いてくれ」などと言われては一巻の終わりだ。まさかダンブルドアも、入学初日の子供にいきなり閉心術を掛けてはこないだろう。帽子の開心術をやり過ぎれば、とりあえずはそれでいい。帽子から校長に俺のことが伝えられても、ダンブルドアと相対した時に何を思えばいいかは決まっている。

「妹さんのことは知っている。あんたとグリンドバルドの青春時代も知っている」
これだ。

俺がダンブルドアの過去（設定）を握っている限り、そうそう先方も乱暴なことはしてこないだろう。

大丈夫、大丈夫だ。『これで安心！ 浮気がバレない閉心術』にも、「下手な小細工なら何もやらないで自然体でいるほうが無難です」と書いてあった。そして何

か一つの考えで頭をいっぱいにしてしまうのも手だと。だから俺はひたすら「スリザリンスリザリンお願いだからスリザリン親はスリザリン自分もスリザリンでないと死ぬ破滅したくないスリザリン」と念じ続けた。

椅子に座ると、帽子が髪に触れるより早く、「スリザリン！」と叫ばれた。被せられる前に手で受け止めて、急いでマクゴナガルに返した。すっかり吟味される前に寮が決まる家系で良かった。

同寮になった先輩たちが温かく迎えてくれた。その中には、クイディッチチームとして屋敷に合宿をしに来たことのある顔もいる。原作通りにドラコとしてスリザリンに入ることが出来て、まずは一安心。父上と母上も喜ぶだろう。

他の新生も、おおよそ原作と同じ寮に組み分けられたようだった。断定できないのは、俺が細かいところをよく覚えていないからだ。

そして有名な名前が呼ばれた。

「ポッター、ハリー！」

広間がさざめいた。

「本当にいたんだ」

「ちょっとそこ頭どけろよ。見えないんだけど」

魔法界を救った有名人を見たいという単純な興奮の他に、少し違う反応もあった。

「ちょっと痩せすぎてない？」

「マグルの親戚に育てられたって新聞で見たよ」

「じゃあそのマグルに迫害されたんだ。魔法使いだから。可哀相に」

声を潜めて同情する者もいた。

ハリーは、身を縮めていれば周囲の注目は逸れると思っていたようだった。ぎこちない様子で椅子に掛ける。その時にちらっとこちらに顔が向いたが、すぐに正面を向き直った。少年の頭に帽子が被せられる。

スリザリンは駄目。スリザリンは駄目。

俺はそう念じた。

張り詰めた沈黙。その緊張が途切れかけた数分後、やっと「グリフィンドール！
」と所属寮が確定した。広間の向こう側から大歓声が生まれた。よし。

選ばれなかった三寮は軽い落胆を示して、すぐに次の新入生に関心を移した。グリフィンドールだけは、英雄を獲得した喜びに長く沸いていた。

全ての新人生の組み分けが終わると、やっと食事が始まった。テーブルに並んだ大皿から、各自が好きに取り分けるスタイル。栄養管理も自己管理のうちというわけだ。

ローストビーフやラムチョップやローストチキンやポークソテー。肉が多い。山盛りのマッシュポテトにフライドポテトにベイクドポテトにシェパースパイ。芋も多い。

どれも量は十分にあつたが、味はそうでもなかった。不味くはないのだろうが、あくまでもイギリスの一般レベルだった。マルフォイ家の料理も大差ないが、ドラコにとっては家庭の味。毎日食べても平気な味として、舌が受け入れている。しかし日本旅行を経て味覚が日本人に戻ってしまうと、ホグワーツの料理は大して魅力のないものになってしまった。

形容しがたいソーセージのような物（別名イングリッシュソーセージ）を食べて悲しくなった時、向かいの上級生が声を上げた。スリザリンでは上級生と新人生がバランスよく混ざるように、席順が工夫されていた。

「上を見てごらん。ゴーストたちが挨拶に来たよ」

透き通った人影が壁をすり抜けて広間に現れた。しかし新入生たちは無感動だった。広間に入る前に、半透明の亡霊集団とすでに遭遇していたからだ。

一人の亡霊が強引にベンチの隣に割り込んできた。途端にそちら側の半身だけ『シックス・センス』ばりの冷気を感じて鳥肌が立つ。

「スリザリンへようこそ」と、その半透明の男性は血だらけの顔で言った。

「寮付きのゴースト、血みどろ男爵だよ」と、上級生は朗らかに紹介してくれた。俺はその銀色がかった亡霊に会釈した。

「初めまして。座ったままで失礼いたしますが、卿のお名前は父から聞いております。ルシウス・マルフォイの息子のドラコと申します。お会いできて光栄です」

「マルフォイか。代々スリザリンに縁のある者を迎えられると私も安心する。何しろ今のホグワーツは、どこの馬の骨とも知れぬ連中が闊歩する所になってしまった」血みどろ男爵は嘆いた。

亡霊たちが壁の向こうに去った後、斜め向かいのパンジーが「よく普通に話せるね」と囁いてきた。俺は頷いた。「少し寒かったけどね」

パンジーは視線を俺からずっと遠方へずらした。

「向こうでね、ハリー・ポッターの横の赤毛の男子が、ドラコが寒がるのを見て笑ってた。ハリー・ポッターもちらちら見てる。何かあったの？」

「少し列車で知り合ってたね」

視線と言えば、スリザリンの上級生からもたまに値踏みされているのを感じる。マルフォイの名はあまり良くない意味で有名なので、仕方のないことだ。パンジーはそちらへもガンを飛ばしていた。

あらかたの食事が済むと、校長から注意事項が伝えられた。例の「痛い死に方をしたくなければ四階右側の廊下に近づかないこと」、「禁じられた森に立ち入らないこと」などだ。

それから全校生徒で校歌を歌うことになったが、酷い歌詞だった。おまけに校長が言うような、「各自好きなメロディ、リズムで」の合唱など、結果は見えている。スリザリンとレイブンクローは白けた沈黙を保ち、ハッフルパフは申し訳程度に小声で済ませ、グリフィンドールは元氣いっぱい、賑やかだった。ホグワーツの現状が垣間見える、意義のある合唱だった。

晩餐会はそれでお開きとなり、新入生は各自の所属寮へ案内された。

「使用人じゃあるまいし、何で俺たちが地下なんだ」

階段を下りながら、黒人の少年が不平を鳴らした。

「城の中心に近いのはいいことだよ」と俺は慰めた。「塔の上の二寮より、地下のスリザリンとハッフルパフのほうが広間までのフロア移動が少ない。僅かな移動時間の差でも、七年もあればだいぶ違うだろう」

とくにこの学校にはエレベーターもエスカレーターもないはずなので、階数の差は確実に利いてくる。

「きみ、前向きでいいね」と、先頭の監督生が振り返った。黒髪を後ろで一つに束ねた、知的な雰囲気の少女だ。「地下と聞いて、良くないイメージを持った子もいるよね。でも寮に入れば印象は一変すると思う。皆、こちらに集まって」

監督生は石の扉の前に一年生を導いた。

全員がしっかりと聞き取れるように、合言葉が唱えられた(今日から二週間は「マーリンに続け」だそうだ)。すると扉が自動で開いた。

石扉をくぐると、そこにはラウンジのような空間が奥に長く伸びていた。

一足先に寮に着いていた上級生たちが奥に陣取り、新入生を待ち構えている。監

督生の男女もその前に移動し、俺たちと向き合った。

「ようこそ、スリザリンへ」

女子監督生のファレーイが寮の説明をしてくれた。デスイーターを多く輩出したことで知られるスリザリンの黒い噂や、忌避されがちな立ち位置。彼女はそれらを、新入生が負い目に感じないように一所懸命フォローした。更には、魔法界史上最も偉大な魔法使いの一人として知られるマリーリンが、スリザリン出身だったことを引き合いにして、誇りを持てと励ました。

男子監督生は、その間に「蛇寮の心得」というガイドダンス資料や部屋割り表を配った。

「さて、今日は緊張して疲れたでしょうから、一年生は解散。荷物は部屋に運んであるから、ゆっくり休んでね。二年生以上は全員残って下さい」

俺たちは在校生の間を抜けて、個室に続く階段を上がった。翌日からは、スリザリン生としての生活だ。

Dark throne
 本来は次回・次々回との三本セットだけど、
 かったから分けた（理由はそれだけ）。
 enhanced
 medical
 skog
 mj
 O'd

へびの気持ち・1

見慣れない暗緑色の中で目が醒めた。

カーテンに囲まれたベッドの上。馴染みのない部屋の匂い。やっと、俺自身の体が病院で覚醒したのだと思った。

緑色のカーテンを開けて、それが間違いだったと悟る。

俺の分を含めて天蓋付きベッドが四台。ベッド脇にはそれぞれ小さなワードローブと、ライティングビューロー（書棚の蓋を手前に倒すと机の天板になる家具）。荷解き途中のトランクが床に散在していて、明かり取りの窓からの光がなければ躓きそう。微かに水音が聞こえるのは、外壁に波を寄せる湖のせいだろう。

そこはスリザリン寮の一室。俺はまだ夢の中にいた。

一つ溜息を吐いてベッドを下りた。起床時間にはまだ大分早い。寝ている三人を起こさないよう、静かに荷物を片付ける。ちなみにドラコと同室になったのは、クラッブ、ゴイル、ノットの三人。スリザリンは伝統的に他の三寮より人数が少なく、原作ハリーの五人部屋に比べると余裕がある部屋割りだ。

片付けの後にシャワーを浴びてもまだ時間があったので、談話室に下りてみた。水中洞窟と錯覚した。

その印象は、削り痕も荒々しい石壁と、大きな窓から望む湖底の景色から受けるものだった。ホグワーツ城の土台部分にあるスリザリンの談話室は、城に面した湖の底に接している。今は、水を通り抜けてきた朝の光が、ゆらゆらと談話室に模様を描いていた。

「良い景色だろう、マルフォイ」

窓辺から振り返ると、夏合宿で屋敷に来たことのある上級生が微笑んでいた。

「おはようございます。えっと……」

「毎年会ってるのに、名前も覚えてもらえてないのか。ショックだな」

俺が「すみません」と恐縮すると、先方は「冗談だよ」と笑った。

「ほとんど接点もなかったし、印象薄くて当然だ。でももう同じ寮の仲間として覚えてくれよ。俺はテレンス・ヒッグス。七年生だ」

窓の外を、魚の群が腹を銀色に光らせ泳ぎ去っていった。

「ヒッグスさん、その窓ガラスの強度ってどれくらいなんですか」

「ん？ ああ、心配ないよ。何があっても割れないように魔法で強化してある。たまに夜もカーテンが開いたままになっていると、光に目が眩んだ大イカがぶつかったりするけどな」

「湖にイカですか？」

「そう。淡水でも生きてるイカちゃんだよ」

学校について色々と聞いているうちに、談話室に下りてくる生徒が増えてきた。そろそろ朝食の時間なので、クラブとゴイルを起こしに戻った。

いくら怒鳴っても揺すっても起きなかったのに、「朝食が無くなっても知らないぞ」と脅すとすぐに飛び起きた。それから三人に身支度をさせて、ネクタイに苦戦しているクラブを手伝い、スリッパで出ようとするゴイルに靴を履かせ、午前の授業の荷物を抱えて広間に向かった。

広間のテーブルから手を振り、「おはようドラコ！ 隣空いてるよ！」とパンジーが呼んでくれた。朝から元気でよろしい。

朝食は、昨夜と同じくテーブルの大皿から各自で盛り付けるスタイル。味は夕食よりは良かった。パンが美味しいので評価の星を一つ上げる。

不意に肩をつつかれたので振り返ると、前日に車中でウノに誘ってくれた少年が立っていた。彼と同じコンパートメントにいた六人の非魔法界出身者に、スリザリンに組み分けされた者はいなかった。

「詐欺にも人身売買にも遭わず、無事に入学できたようでは何より」

俺が言うと、レイブンクロー生となった少年は笑った。

「まだ騙されてる気分だよ。帽子が歌ったり、ドアノッカーが問答を挑んできたり、デイズニールランドみたいだ。本当に魔法界って面白いね。ところでさ――」

「マグル生まれが話しかけてくるな」

近くの席にいたスリザリンの上級生が、話を遮った。

「まったく、その厚かましさには感心するよ。面白いだ？ 物見遊山でホグワーツ

に来たなら、そのままマグルの世界に帰れ。こっちは背負ってるものが違うんだ」

「え、あの……」突然怒られて、少年は狼狽えた。「そんなつもりじゃ」

横からレイブンクローの上級生が口を挟んだ。

「いいよ、無視して。いつものスリザリンの純血主義だ。脳みその干からびた連中が誇れるのは、伝統しかないのさ」

「へえ。レイブンクローの誇る叡智ってのは大したものだ。その伝統が育んだ魔法の恩恵に与っていることも忘れてる。マルフォイ、こんな頭の悪い連中の相手をするには人生は短いぞ」

レイブンクローのテーブルから別の声が上がった。「はい来た。スリザリン名物、新入生の囲い込み。せいぜい仲間だけで固まってる、絶滅危惧種」

いつのまにか上級生同士の場外乱闘になっている。ウノの少年は巻き込まれる前にそそくさと逃げ出してしまったので、喋る機会を失ってしまった。

ひとしきりレイブンクローと嫌味の応酬をしたスリザリン生が、俺に笑いかけた。

「朝からマグル生まれに気安く話しかけられるなんて、不快な目に遭ったな、マルフォイ。同情するよ」

「はあ」

「おいおい、反マグル派急先鋒のマルフォイ家にしては、反応が鈍いぞ。もしかしてマグル鼯鼠か？」

「彼は列車の中で知り合った同期生なんです」

するとスリザリンのテーブルが白けた空気になった。

「……なるほど。マルフォイ家の坊ちゃん、生まれにはこだわらないんだ。なるほどなるほど」

にこやかなまま、上級生は頷く。遠くで、他の上級生たちもひそひそ話しながら俺のほうを眺めている。パンジーも眉を顰めて囁いてきた。

「付き合う相手は選びなさいよ。聖二十八氏の名を下げるような行為は慎んで、家で言われなかった？」

ドラコらしく言い繕うなら、どうしたらいいだろう。「生まれなんて関係ない、みんな仲良く！」などと主張したら浮いて目立つ。「幸いぼくは、ことさら純血を強調しなくてもいい家の生まれですから」と言うのは嫌味だ。とかく人の世は住みにくい。

そんなことを考えている間に、場の関心は他へ移っていった。まあいいか。

食後、スリザリンの一年生に集合が掛かった。

多くの学生は、朝食後に最初の授業に直行する。一方この日からの一週間、スリザリンの一年生は引率されて全員で教室に向かう。「迷子や遅刻は洗練されたスリザリンに相応しくない」という考えのもと、最初の一週間は上級生が次の教室に引

率してくれるそうだ。

廊下を進むスリザリンの集団に、他寮の学生たちが非友好的な視線を向けてくる。

「あいつら徒党を組んで……」

と、通りがかりに聞こえてきた。徒党ではなく、親鳥の後を付いていくひよこの行列だ。大目に見てほしい。

横に付いている親鳥の一羽に、ダフネが尋ねた。

「教室まで案内して頂けるのはありますが、皆さんが自分の授業に間に合わなくなりませんか。一週間も引率係をするのはご負担でしょう」

四年生だという女子学生は、ふふっと微笑んだ。

「心配してくれてありがとうね。引率はね、基本的に次のコマが空いているか、教室が近い人が引き受けるの。全員で話し合って調整したから、色々な学年が入れ替わりで担当するよ。だからそこまで負担じゃないの」

「じゃあ、来年は私たちも引率に回るんですか」

「そういうこと。順繰りにね」

さすが寮内の団結力を誇るだけのことはある。彼女たちの会話を耳にした後方の

六年生が、ふうっと息を吐いた。

「良い習慣だと思っただけで、他ではなぜかやってないんだよ。個人主義の驚寮や放任主義の獅子寮はともかく、穴熊寮でも長続きしなかったみたいだ。その点スリザリンは、上の者が下の者を導くという規律が行き届いている。昨日ファーレイも言っただけで、スリザリンは良い寮だよ」

目的の教室までひよこたちを送り届けると、上級生たちは手を振って去っていった。

さて、この夢でのホグワーツのカリキュラムは、原作とだいぶ様子が違っていた。まず必修科目が大幅に増えている。英語（国語）、数学、理科（天文学分野を除く）、社会（魔法史分野を除く）の四科目と、学期に一コマだけの保健の授業。何の変哲もない普通科目だから、原作にあったところで記述は省略されていただろう。選択科目になるが、美術と音楽の芸術科目もある。

面白そうなのは、マグル生まれの学生は必修、半純血の者も選択できる「魔法界事情」という科目だ。純血のドラコに履修資格は無いのが残念だ。

「ホグワーツって、魔法を教えるところじゃない。今更それ以外の勉強なんて、要

る？」

と、パンジーが苛立ちながら疑問を呈した。数学の小テストの後、彼女は機嫌が悪い。

基本的にどのクラスも寮を単位としているが、英語と数学だけは別だった。学年最初の小テストの結果で、レベル別の四クラスに再編されるそうだ。

魔法界の子供はホームエデュケーションで育つため、家庭環境によって習熟度合いは千差万別。非魔法界出身者も全員がプライマリースクール（小学校）出身ではないと、家庭教師に聞いた。幼い頃に無意識に発現させた魔法を精神疾患の症状と見なされ、病院や自宅での療育を余儀なくされた子供もいる。そうかと思えば、日常生活に何の支障もなく、名門校を目指してプレップスクール（進学準備校）で学んでいた子供もいる。それを全員まとめて教育しようというのだから、多少の考慮はあっていい。

「要るさ」と俺は答えた。「勉強できる時に勉強しておかないと、社会人になってから後悔するぞ。……って父上が」

俺とパンジーのやり取りに、ザビニが嘲笑った。組み分け後にスリザリン寮の入

口が地下にあることに文句を付けた、黒人の少年だ。

「純血がみんなマルフォイの取り巻きレベルだと困るもんな」

反応を示さない二人の代わりに俺はザビニを睨んだ。

「そんなことを言うもんじゃない。こいつらだってやれば出来る子なんだ」

なのに当人たちは「え……」と反応が鈍かった。もっと奮起しろよ。あんまり無気力だとおじさん、修造対応しちゃうぞ。

ちなみに魔法関係の科目は、ほぼ原作通りだ。ただし教員数は原作での印象よりかなり多い。理由は単純で、一科目一人では四寮七学年分の授業を捌けないからだ。週に一度かつ一コマだけ（「闇の魔術に対する防衛」や「飛行術」）ならともかく、二時限連続の授業や、週に二回以上の授業があるだけで、教師一人では破綻する。そこで原作には登場しない、その他大勢の教授たちも教鞭を執っていた。原作に登場する教授たち、言い換えると大広間でダンブルドアと同じ並びに席があるのは、各科目の主任教授という扱いだ。なんとなく味気ない気もする。しかしそこは、原作で過労死しそうだったスネイプやマクゴナガルの労働環境が改善されたと思つて、我慢しよう。

◇
初日の授業が終わった。

「ドラコ、これからどうする？」

「とりあえずスリザリン入りを親に報告したいな。校章入りの便箋でもないか、売店で探してみる。きみたちも行くか」

「行く」とクラブとゴイルが声を揃え、ノットも頷いた。

このホグワーツは校内に売店も備えていた。全寮制の学校なのに売店がなかったら、外出が制限されている者は困る。

売店の品揃えは意外にも豊富だった。雑誌や文房具、学用品の他にも、生活必需品、衣類、何かの工作材料、寮章入りの応援グッズなど。品揃えに比べて場所が足らず、混沌とした陳列になっていた。

店内の一角に、学生からの一言メッセージとそれに対する回答のカードが、壁を覆う蔦のように貼られていた。

「ひとこと…方眼紙タイプの羊皮紙が欲しい / スタッフより…秋から取り扱い開始します」

「ひとこと…単位下さい　／　スタッフより…売り物ではありません。担当教授にご相談下さい」

どこの学校でも学生生協はこんなものかと笑ってしまった。

しかし目当ての便箋はあっても、レジも店員も見当たらない。店内をうろうろしていたら、横から上級生に声を掛けられた。

「どうした少年」

「買いたい物があるのですが、支払い方法が分からなくて。よろしければ教えて頂けませんか」

「ああ。ここでは現金は使わないよ。品物を持ってこの売店から一步でも出ると、それで購入したと見なされて、代金は毎月まとめて実家に請求される」

自動決済かよ。

店を出た後、礼を言おうと上級生に向き直った。すると相手は俺の胸元を見て、露骨に嫌な顔をした。

「なんだ。蛇寮の奴か。親切にして損した」

そう言って舌打ちまでした上級生のネクタイは、グリフィンドールの赤だった。

その後書き上げた手紙を出しに、梟小屋に向かった。生徒が使い魔として連れ込んだ鳥は、普段はホグワーツ城の外の梟小屋で世話されているという。

天井の高い小屋には、大小種類様々な猛禽類がいた。鳥臭い小屋の入口から中を覗いていると、背後から「手紙を出すんか」と轟く声が降ってきた。

驚いて振り向くと、目の前にあったのはベルトのバックル。仰ぎ見てようやく巨大な男の髭面が見えた。ホグワーツの森番、ハグリッドだった。間近で見ると、やはり大きい。

「どうした。梟便を出すんだろ」

「あ、はい。そうです。家から連れてきたフクロウがこちらで世話されていると聞いて」

彼は俺を押しつけて小屋に入ると、「ふんふん。所属と名前は？」と大きな声を響かせた。

「スリザリン一年、ドラコ・マルフォイです」

彼は無表情になった。昨夜配られた「蛇寮の心得」にも、「ハグリッドは親グリフィンドールで反スリザリンなので余計な接触はしないが吉。ついでに奴の前でダ

ンブルドアの悪口を言うと怒る」と書いてあった。反ダンブルドア派のマルフォイに好印象を持っているはずがない。

それでも彼は俺のワシミミズクを連れてきてくれた。巨大なハグリッドが抱えていると、小型犬より大きい猛禽が、雀ほどの小ささに見えてくる。

「ほれ」

「ありがとう」

俺が受け取ると、ワシミミズクはやはり腕に持て余す大きさだった。足につけられたタグを確かめた。間違いなく列車内で書かされたドラコのタグだ。名を書いた時には白色だったのが、所属寮のシンボルカラーの緑色に変化していた。

「自分の飼っとる子の顔も覚えとらんのか」

嫌味は聞き流し、鳥の足に手紙を括り付ける。

「頼むぞ、梟三号」

宙に放り投げると、ワシミミズクは大きな翼を広げて南の空へ飛んでいった。やはり猛禽類は鳥小屋よりも空のほうが似合う。

「梟便を出す時以外は、フクロウを小屋から出しては駄目なんですか」

「駄目ってこたあ無え」

「たまに運動させてやりたいんですが、どこか良い場所を知りませんか」

ハグリッドは、あまり校舎に近くない所、たとえば森の手前ならいいと言った。
「森……」

たしか原作で、ドラコがハリーたちと一緒に肝試しに行って、馬の生き肝を食らう敵と遭遇する場所だ。生き肝ではなく生き血だったか？ どちらにしても遭いたくない。森にはあまり近寄りたくない。

「ほれ、ここからでも木のおてっぺんが見えるだろ。森の中に入るのは危険だけでも、手前をうろつくだけなら心配ねえ」

「分かりました。どうも」

会釈して小屋を去った。髭だらけの男は俺が小屋から離れるまで、しばらく見張っていた。

城に戻ってから、周囲に「うわ、スリザリン生だよ」と嫌そうな反応をされることが何度かあった。陰口を叩かれるから仲間で固まるのか、徒党を組んで威圧感を与えているから陰口を叩かれるのか。どちらが先か分からないが、スリザリンは

確かに他の三寮から孤立していた。

寮に戻ると、談話室の隅でクラップとゴイルが菓子を買っていた。

「それ、さっき売店で買ったやつだろう。もう食うのか。もうすぐ夕飯なんだから、程々にしておけよ」

「うん」

「甘い物は別腹」

食い物に執着する二人のいつもの姿に、なぜか安心してしまった。スリザリン生は、疲れる。

へびの気持ち・2

入学から数日経つと、新入生たちも集団生活というものが分かってきた。教室移動の最中に喋る余裕も出てくる。

「次のDADA（闇の魔術に対する防衛）って、どんな授業だろうな」

「さっき朝ご飯の時に先輩が教えてくれたけど、なんか臭いんだって」

「はあ？ 臭いって何が」

俺たちの後ろで少年たちがあれこと予想している。初めて主任と付く教授の担当講義。皆、期待していた。

「ドラコ、なんだか顔色悪いけど、大丈夫？ 保健室行く？」と隣を歩くパンジー

が心配してくれる。

「平気さ。初回の授業から休みたくない」と俺は答えた。一人だけ欠席して、教授の注意を引きたくない。

この科目を担当するクィレル教授の姿は、食事時に大広間で何度か見掛けている。頭に紫色のターバンを巻いていた。おそらくその下、彼の後頭部には原作と同

じくヴォルデモートのなれの果てが寄生しているのだろう。

後に肉体が復活してからの粘着質ないびり方からして、ヴォルデモートは自分を裏切ったルシウス・マルフォイに、相当な恨み辛みを抱いている。その息子に対して無関心・無頓着でいてくれる保証はない。俺は暴君の興味を惹かないよう、クィレルの前ではできるだけ存在感を消すつもりだった。

だが、それだけで大丈夫だろうか。

目的地に着いた。

うわあ、と誰かが呻いた。教室のドアを開ける前から、もうニンニクの匂いが漂っている。大抵のニンニク臭なら食欲を刺激されるクラブとゴイルが鼻を覆ったくらいなので、相当な物だ。

先輩は、「はいここがDADAの教室だ諸君の健闘を祈る」と一息で言ったかと思うと、足早に去っていった。

「よし、息を止めるしかないね！」

「一分も保たないよう」

「だったらせめて鼻じゃなくて口で呼吸しなよ。何もしないよりはマシでしょ」

女子たちがそんな会話をしながら、ニンニク臭の巣窟に足を踏み入れていった。俺は、覚悟を決めて閉心術を張った。杖も呪文も使わない、精神力に左右される魔法なので、何をしているかは一見しただけでは悟られないだろう。

入学するまでの間、本を頼りにこつこつ習得に励んできたつもりだ。しかし頭を覗かれても後腐れのない、ドライな知り合いがいなかったのも（イースは頼んでも閉心術を掛けてくれない）、習熟具合が判らない。閉心術の侵入を防いだ実績があつて、その時初めて閉心術というファイアウォールの機能はチェックできる。なのに俺はテストなしに、いきなりそれを本番に突っ込むわけで、怖い。『これで安心！ 浮気がバレない閉心術』が、ヴォルデモート対策にも役立つ本であることを祈るばかりだ。

俺はゴイルの後ろの席に座って、机の下で両手を組んだ。

ベルが鳴り、クィレルが教室に入ってきた。気弱そうな雰囲気の方は、今日もターバンをぐるぐると頭に巻いている。

彼は教室を見回すこともなく、俯きがちのまま授業を始めた。生徒への関心がな
いことは明らかだった。スリザリンはひそひそと、しかし堂々と耳打ちし合った。

「この先生、色々と素晴らしくて涙が出そうじゃない?」

「その涙、ニンニク臭のせいだよ」

「うちの姉さんが言うには、別の科目の教授だった一昨年はもっと普通の感じだったって」

「去年は?」

「去年一年は休暇取ってたらしいけど」

「じゃあもう一年休職してれば良かったのに」

俺はひそひそ話には加わらずにじっとしていた。

クイレルが教卓から離れずに生徒のほうを向いている（見てはいない）タイプだったのは、ありがたい。彼の後頭部が、そこに寄り憑いているヴォルデモートが、こちらを向く時間は短いほどいい。

と、一瞬クイレルが目を上げて教室内を見回した。俺は居眠り中のゴイルの背に身を隠した。

「み、皆さん、お、お、おし、お、お静かに」

教授が注意するとザビニがその吃音を真似し、女子生徒たちがぐくすくす笑った。

パンジーもその一人だったが、横の俺がにこりともせず身を固くしているのを見て、笑いを収めた。「本当に大丈夫？」と唇の動きだけで尋ねてくる。

俺は頷いた。効果があるかどうかとも分からない閉心術を張り続けるのは、なかなか集中を強いられる作業だった。

ベルが鳴る頃には、頭痛がし始めていた。

教室を出たスリザリン一年は、みんなで大きく深呼吸した。俺も大きく息を吐いた。

今日の段階では、クイレルはドラコの名前すら呼ばなかった。なんちゃって閉心術も気付かれなかったか、気付かれた上で見逃してもらえたのか、分からないままだ。勘付かれなかったと前向きに捉えて、次回の授業でも引き続き術を張ろうと思う。できれば一年間、目を付けられることなく終えたいものだ。

俺が閉心術を解いた（つもりになった）のは、階段を下りてDADAの教室から完全に死角になってからだった。



お待ちかねの金曜日がやってきた。

犬猿の仲とされるスリザリンとグリフィンドールの合同授業で、スネイプ主任教授の魔法薬学だ。

早めに教室に來たスリザリン生は、寮監の授業に「初回くらいやる気を見せよう」と、示し合わせて前方に席を取った。俺は教科書とノートと筆箱代わりのペントレーを机にセッティングした。

「ちよつと男子！」と、ダフネが眉を吊り上げて教室後方に怒鳴った。「最初くらい協力しなさいよ」

「なんでだよ」と、一番後ろの席に陣取ったブレース・ザビニが冷笑する。「あんたは女王陛下か。従わないと首を刎ねるって？」

その隣に座っているオリザ・グレイバーも引きずられるように笑った。

ダフネはくりりとこちらを向いた。「マルフォイ」

「ふおい」

「あの二人をどうにかして」

「いいじゃないか。好きな席に座る権利は彼らにもある」

ところがダフネだけでなく他の少女まで険しい顔を向けてきたので（女子集団の

威圧感たるや、俺は速やかに立ち上がった。

近づく、ザビニは腕を組んでふんぞり返り、俺を睨んだ。

「マグル生まれだけじゃなく女子にもいい顔したいのか。カネでもばらまけよ」
いやあね。成金は発想が賤しくて。

「オリザ、ブレーズ。今日のところは前に来ないか。そこに座っているとグリフィンドールに囲まれて、先生にもグリフィンドール生と間違われるぞ」

「あ、それは嫌だ」と、グレイバーはそそくさと荷物をまとめて友人にも促した。
「移ろう、ブレーズ」

ザビニは舌打ちして、嫌々席を立った。

「次回からは好きな所に座っても、女子も文句は言わないさ。ぼくもそうする。な、ブレーズ」

肩に手を掛けようとすると、腕ではね除けられた。

「馴れ馴れしく呼ぶな」

「それは失礼したね、ザビニ」

休み時間も終わる頃、ようやくグリフィンドール生が教室に到着し始めた。彼ら

に向けられるスリザリン生の視線は冷やややかだった。グリフィンドール生がこちらに向ける目もまた嫌悪を帯びていた。上級生が衝突しているのを散々間近で見ているうちに、いがみ合う習慣が身についてきたらしい。

やがてスネイプがベルの音と共にやって来た。教室のざわめきは、彼が口を開くとすぐに途絶えた。

「出欠を取る」

低く柔らかな声には、生徒を黙らせる力があつた。

スネイプは淡々と出席を確認していったが、グリフィンドールの途中で、わざとらしく声を高めた。

「——ああ、ハリー・ポッターか。我らの新しい名士だな」

その言い方が、夏に父上がうんざりしていた時とそっくりだった。思い出して失笑したが、それが静かな教室にずいぶんと響いた。

あ、今の笑いは感じが悪い。

慌ててハリーのほうを盗み見ると、彼の隣のロンがこちらを睨んでいた。ごめんごめん、今のは完全に俺が悪かった。手刀を立てるように片手で詫びたが、日本式

では通じないと気付いて、手を胸の上に置く。だがもう二人とも俺のほうを見ていなかった。

出欠確認の後、ハリーはスネイプの意地悪い質問攻めにあつた。他の生徒も矛先を向けられないよう、必死に存在感を殺している。例外は回答したくて堪らないハーマイオニーだけだ。

原作であつたシーンということしか覚えていない俺も、大人しくしていた。一応、教科書の索引を調べていると、後ろから指でつつかれた。

「なんとかの粉になんとかを煎じた物を入れると、って何になるんだ」と小声でク
ラップ。

声を潜めて俺は答える。「アスフォデルの球根の粉末に、煎じたニガヨモギを加えた物になるに決まっているだろう」

「じゃあベアー石を探すなら？」と、その隣のゴイルも聞いてきた。

「ベゾール石な。物が何なのか解らないと探しようがないから、とりあえず百科事典で探す」

「それじゃ最後のは？　なんとかフードとなんとかベーンの違い」

「綴りが違う」

なるほど、とクラブとゴイルは頷き、俺の横のノートには「おまえら馬鹿だろ」と呆れられた。そして俺たちは声を立てないようにして笑った。

弁解させてもらうと、スネイプの授業があまりに原作のままなので楽しくなっていた。案の定、ハリーはスネイプに難癖を付けられ減点された。

その後は、簡単だという魔法薬の調査実習。

教授は机の間を回って、嫌味をまぶした注意を分け隔てなく多くの者に与えた。ただ実習メインの授業にしては、生徒数が多すぎる。あまり監督の目が行き届かないだろうなと思った矢先、その事故は起きた。

教室の片隅で短い叫び声が上がった。悲鳴の後に、駆けつけたスネイプの「馬鹿者！」という怒鳴り声。クラブ・ゴイル組の調査を見てやっていた俺は、ノットと顔を見合わせた。

「何？」

「さあ」

様子を見てみると、泣いているネビル・ロングボトムに同級生が付き添って教室

を出ていった。

その後、「級友に注意喚起しなかった」という理由でハリーがとばっちりを受け、減点された。一方で、加点こそされなかったが、「ツノナメクジの茹で方が完璧だ」という些細なことで俺だけが誉められた。注意された生徒は多くても、誉められたのは俺だけだった。スネイプ教授はハリー・ポッターが嫌いで、ドラコ・マルフォイを鼻屑している。教室にいた者は、クラブやゴイルでさえそれを理解した。授業の後、グリフィンドール生はあつという間に教室から姿を消した。スリザリン生も、予想より厳しい授業に疲れた様子で出ていった。

俺は実習の片付けをしているスネイプに近づいた。「教授、片付けを手伝いますので、数分お時間頂けますか」

彼は手を動かしながら「では余った材料をケースに戻してくれ」と言った。ザビニが俺とすれ違いざま、「リンゴ磨き」と囁いていった。誰がゴマすり野郎だ。

調査で使わなかった分の生葉を揃えてケースに入れ、指示された棚に収める。スネイプは、実習の成果物という名の産廃をせっせと消し去っている。他に生徒がい

なくなった頃合いに、先方から話しかけてきた。

「ドラコ、学校はどうだ」

「今のところ楽しいですよ。食事が口に合わないのが憂鬱でしたが、家への手紙に書いたら、来週には調味料を送ってもらえるのでどうにかなりそうです」

醬油が届くのが待ち遠しい。早く来い来いキッコーマン（ヤマサかな）。

その他は、寮内のシャワールームもトイレも清潔で、ストレスはない。風呂に入りたいと思うこともあるが、バスタブに湯を張れるのは、監督生専用のバスルームだけだという。思わず監督生を目指したくなる話だ。

「それはさておき、セブルス小父さん」

「学校ではスネイプ教授と呼べ、マルフォイ」

「では教授にお願いしたいことが二点あります。一点目は、ぼくも他の生徒と同じように扱って下さい。小父さんがぼくを臍脛するのは、父上との繋がりを強調するためだと分かっています。ですが勉強熱心な生徒を差し置いて、ナメクジの茹で方くらいしか誉めどころのない自分が持ち上げられるのは、どうもね」

スネイプはふんと笑った。

「少し違うな。私がかきみに目を掛けるのは、きみのためだ。マルフォイ家の跡取り息子はマグル臍肩だと、一部の上級生に疑われているぞ」

「困りましたね」

肩を竦めてみせると、スネイプに叱られた。

「笑い事ではない。純血を尊ぶスリザリンで、純血主義を標榜しているマルフォイ家の後継者が、その純血主義を軽んじる。スリザリンの価値を純血に見出す者にとっては、アイデンティティを否定されたも同然の恐怖だ。その恐怖と怒りがきみに向いたら、どうなると思う」

「小父さんが助けてくれたのは分かりました」

依怙臍肩は、寮監お気に入り生徒に手出ししにくくなることを狙ったことだった。

「でもやっぱり特別扱いは気が引けるので、今後は勉強で頑張ります。どうせならもっとまともな事で褒められたいですよ」

「革のペントレーでも褒めてやろうか。あれはいいセンスだ」

「同意しますが、あれは、小父さんが誕生日に梟便で贈ってくれた品ですよ」

俺が笑うと、スネイクも「無論、知っている」と唇の端を引き上げた。

「お願いしたいもう一点は、実習の危険度についてです。子供が薬品を扱うには、このクラスは人数が多すぎます。合同授業ではなく逆に少人数制を敷くか、助手を付けることをご検討頂けませんか。あるいは、初回はもっと簡単なままごと程度の実習にすることはできないでしょうか。学生の分を出過ぎたお願いだとは分かっています。でも今日のようなことが度々起こると、ぼくたちも魔法薬学に対して苦手意識を持ちかねません」

「一年生から少人数制にしたいのは山々だが」と教授の顔が渋くなった。「カリキュラムは校長が承認している。校長か理事会に言ってくれ」

「分かりました。理事を通して訴えてみます」

ちょうど都合の良いことに、ドラコの父親は理事だ。俺の「パパに言いつけてやる」攻撃を受けてみる、ホグワーツ。

初めての空抜けて・1

誤字脱字のご指摘、ありがとうございます

入学後初めての週末、土曜の午前は杖の登録で丸々潰れた。

魔法省から来た役人が、新入生と杖の情報を紐づけた上で、その杖に反応型の魔法を付与していく。杖の至近距離で何らかの魔法が発生すると、その杖の位置情報が魔法省に通知されるというものだ。これはホグワーツ入学直後に施される処理で、成人する年の誕生日まで効果は持続するという。原作にあった、「未成年の魔法使い付近で魔法が使われると、その痕跡（匂い）が残る」という設定に当たる事務手続きだ。

同時に、杖の所持許可に関する手続きもさせられた。他人を害することもできる道具なのだから、公的機関に登録するのは自然な話だ。無許可で杖を持つ者もいるそうだが、善良な市民はだいたい身分証代わりに登録している。

「見た目はおんなじ」

登録した杖をじっくり眺めながらクラブが唸った。横でゴイルが杖を振るう。

「振り心地も」

「そうだな。でもこれでもう、魔法を使えるのは学校や家、成人した魔法使いと一緒の時だけになったからな。気を付けろよ」

と俺はクラブとゴイルに念を押した。

彼らを初めとした一年生の多くは、「今後もホグワーツで魔法を学ぶ人は、ここにサインして下さいね」というふわっとした説明を受けて、何となく同意書に署名しただけだ。しっかり理解していたのは、説明の場に法律書を持ち込んでメモを取っていた、ハーマイオニーくらいだろう。

「もう昼だ。腹減った」

「じゃあ少し早いけど食べに行くか」

ノットもまもなく登録を終え、四人で広間に足を向けた。休日のランチと洒落込んでいる者もいて、それなりに賑わっている。

午後をどう過ごすかと思っていると、隣の女子上級生たちの会話が耳に入った。

「うちのチーム、今年のメンバーはもうほぼ確定らしいけど、新人テストどうするんだろうね」

「一応やるんじゃない？ 控えは欲しいだろうし。試しに受けてみれば？」

「やだあ。怖いもん。ボール当たったら痛そうだし」

「だよねえ。クイディッチなんて観てるだけでいいわ」

「私も。髪ボサボサになるから絶対無理」

彼女たちの話題はあつという間に髪の手入れに移っていった。俺たちは「クイディッチ」の単語に顔を見合わせた。

「……名門チームのエースも、競技人生の始まりは学生クイディッチだ」

と、なぜか声を潜めてノットが言った。

「ドラコ、受けてみれば」とクラブが俺を見る。ゴイルも頷いた。

俺は手を振った。「自分の箒も持ち込めない一年坊が出る幕じゃないさ」やりた
いスポーツでもない。

「何で持ち込めないんだ」

「ぼくが知るか。先生に聞け」

すると横から、「来週から飛行の授業があるから、その先生に聞くといい」と、声が飛んできた。

昼食にやってきた上級生が、女子グループとは反対側の俺たちの横に腰掛けた。「さっき掲示板に張り出されてた。後で見てみな」

「ねえグラハム、今年もクイディッチのトライアウトやるの？」と女子グループの一人が、俺たちの後ろから彼に尋ねた。

「あるよ。きみたちも興味があるなら受けてくれよ」と、彼も俺たちの背中越しに彼女たちに答えた。「優秀な新人は常時募集中だ」

「応援専門ならやってあげてもいいけどね」

「ねー」

笑って断ると、少女たちはきやいきやい笑った。

グラハムと呼ばれた男子生徒は、じっと見ているクラブたちに、「ごめんな。一年生は選手になれないんだ」と済まなさそうに言った。



寮に戻ってみると、確かに談話室の掲示板に新しい連絡が貼られていた。第一学

年。飛行術クラス（必修）の開講。木曜日。そしてグリフィンドールとの合同授業だった。

掲示を眺めていると、同じく一年のマローンが隣に立った。

「マルフォイは飛んだことあるか」

「ああ。ヘリにぶつかりそうになったこともある」

一月ほど前、入学前最後のツーリングに出掛けた際のことだ。上空で警察のヘリに出くわした。するとパブで飲み過ぎたイースが、風車に立ち向かうドンキホーテよろしくヘリに突進していった。こちらは魔法で姿を消していて、ヘリ側に回避してもらうことはできない。ぶつかれば大惨事になる。咄嗟に俺がイースに並んで体ごと幅寄せして、どうにか難を逃れた。その時にヘリの足にあやうく接触しそうになった。後でイースには平謝りされたが、二度とあんな真似はしたくない。

「ヘリって、あの喧しい音がするマグルの乗り物だろ。何でぶつかりそうになるまで気付かなかったんだ」

友人が酔っ払ったせい、というのはあまり子供らしい理由ではない。「気付いていたさ。色々あったんだよ」

「ふーん。……まあ、ぼくも初乗りの時に停めかたが分からなくて、いつのまにかドーバー越えてて困ったけどさ」

マローンは言うことがいちいち大袈裟だった。

俺たちが掲示板前で喋っているの、寮に戻ってきた他の一年生も掲示を確認しに寄ってきた。

「授業で遊べるのか。やった」

「家の箒持ってきたかったな」

男子が心待ちにする一方で、女子の関心は低かった。

「あー箒だってー。気が重いよー」

「私、乗ったことないけど、絶対スカートめくれるよね。やだなあ」

授業があることを確認しただけで、彼女たちはさっさと去っていった。残るは男子ばかりなり。

一瞬、談話室に沈黙が満ちた。

「諸君、集合」

マローンの厳かな呼びかけと同時に、一年生男子は談話室の隅に集まった。

「女子のスカートって、めくれやすいのか」

口火を切ったのはデンティトだ。そそっかしいがその分フットワークが軽く、実習でも一番最初に動き始めることが多い。

「うちの姉さんが仕立てる時に見たけど、スカート単体だとそれなりに翻るよ。でもローブを着るとガードされるんだ」

無邪気に答えるのは、少し幼い感じのするサッカラム。四年生の姉がいる。

「翻りかたなんてスカート丈次第だ」

何ということか。知性ある発言はクラブだ。

「姉さんのは膝くらいだったかな」

「グリフィンドールは膝上丈の女子が多いよな。スリザリンは普通」

「いや、変わんないよ。ブルストロードがちよい長いくらいで、どっちも全体的には膝上だ」

「誰か箒、跨いでみる」

マローンの呼びかけに、リバニーから借りた長めの杖を箒に見立ててデンティトが跨いでみせる。

「見える？ 見えちゃう？」

とグレイバー。ザビニと連んでいること以外は目立つ点のない少年だが、今は友人を置き去りにしてウキウキしている。

デンテイトのローブの裾を持ち上げ、「向かい風だったら絶対見えるよ」とサッカラムが朗らかに言った。それを受けて、リバニーとノットの控え目コンビは、授業の場所と季節の風向きを調べ始めた。サッカラムはその間もぼっさぼっさと級友のローブの裾を振り、デンテイトから蹴られていた。

「前もいいけど、後ろは？」

グレイバーの問いに「後ろは駄目だ」とゴイルが厳しい顔で指摘し、「普通はローブと一緒に箒と尻の間に挟み込む」と補足したクラップと頷き合った。

授業でも見たことのない熱心さで、彼らは女子のスカートの中を自然に見るための検討会を始めた。

いつのまにか輪の外側にいた俺とザビニは、何となく呆れ顔を見合わせた。するとマローンがこちらに気が付いた。

「おいその二人。なに格好付けてんだ。チャンスなんだぞ。マルフォイは飛行が

得意だっというなら、知恵を貸せ」

「気が乗らないな」成人ならともかく、子供の下着なんて見ても仕方ない。

「なんだよ。パーキンソンので足りてるとでも……」

言いかけたマローンの口を、ゴイルがさっと塞いだ。春の茶会での出来事を知っている者も慌てて、「今のは無し！」と取り繕いながらこちらの様子を窺った。

俺は大袈裟に溜息を吐き、彼らの輪に参加した。こういう事は何をやるかよりも、皆でわいわい盛り上がることで自体に意味がある。

ザビニもグレイバーに引っ張られて、ふて腐れた顔で加わった。

俺は同級生を見回して言った。

「いいか。きみたちは肝心なことを忘れている。これは授業だ。生徒は皆同じ方向を向いて同じ動作をすることになる。飛行中に向かい合うような危険な真似は、教師が許さないだろう」

「つまり、前からは見られない？」

「そんな、ひどい！」

「だったらどうしろっというんだ！」

髪を掻き毟る少年たちに向かって、俺はドラコの顔でふふんと笑った。

「焦るな。初回は無いかも知れないが、飛ぶのが苦手な生徒を得意な生徒が補助する機会がきつと来る。女子は飛行に苦手意識があるものとして、ぼくたちがエスコートがてら補助に付く」

「ほうほう、それで」

相槌を受けて話を続ける。

「さりげなく箒を支えたりしてやる間に、女子のローブとスカートの後ろを、尻の下から引っ張り出してやる。その状態で飛んでもらえば——」

「後ろか下から拝めるってわけだな！」

「俺たちが覗くんじゃなくてアクシデントで見えちゃったもんは、女子だって怒れないよな」

「さすがマルフォイ、やることが汚い！」

少年たちからの拍手に、俺は「ありがとう」と片手で答えた。穴だらけの作戦だが、成功しなくても一体感が出ればそれでいい。そこへ「でも」と、グレイバーが情けない顔をして声を上げた。

「マルフォイのエスコートなら女子も素直に受けるだろうけど、俺は駄目だ。嫌がられる」

それで他の数人も諦めかけたのを見て、ザビニが鼻で笑った。顔のいい奴はこれだから嫌いだ。

俺はグレイバーの背をポンと叩いた。「誰がやったって不審がられるさ。いきなりならな。だから予め、スリザリンの男子は級友に飛行を楽しんでもらうためなら積極的に動く、というところを女子に見せておくんだ」

「手伝うから一緒に飛ぼうよ、楽しいよ、って？」とサッカラムが首を傾げた。

グレイバーが恐る恐る発言した。「あの、……そもそも実は俺、箒に乗ったことがないんだ」

ぼくも、トリバニーも呟いた。「女子をサポートするとか、よく考えたら無理かも」

「大丈夫。授業では学校の箒を使う、とあるから、先に良い箒を確保して女子に渡すだけでも印象は違うさ」

「女のご機嫌を取ってるだけじゃないか」とザビニが口を挟んだが、

「グリフィンドールの奴らに良い箒が渡らないってだけでもいいだろ」

と言われて不機嫌に黙り込んだ。

「初乗りなら、良い箒に乗りたいね」と俺が笑いかけると、リバーニーとグレイバーは安心した顔で頷いた。

サッカラムが「学校の箒は古くて癖の付いたやつが多いって、姉さんが言ってたよ」と披露すると、

「それじゃ早めに確保する意味は普通にあるな」とマローンが時間割を調べ始めた。ノットが言う。「前の教室から直接行っても、十分は掛かる。寮に荷物を置きに戻ると、十五分くらいは掛かる」

「飛行の授業なんて、一年だけなんだろう。だったら授業の直前じゃなくても、箒自体はもっと前から空いてそうだけど、どうかな」

「だったらちょっと行って、倉庫の鍵借りてくる」

言うなり駆け出そうとするデンティトを「待て待て」と皆で引き留めた。

「鍵を借りるなら当日でいいよ。それより学校のボロ箒の中から、マシなのを選べる奴はいるか」

マローンの呼びかけに、クラブとゴイルとノットがこちらを見た。

俺は控えめに指を上げた。「バランスの良し悪しなら分かんと思う。悪い箒は軸がぶれているんだ」イースと箒屋の店員にあれこれ教わった新人箒乗りの、俄知識が役に立つ時が来た。

「それじゃ箒選びはマルフォイに任せる。俺たちはどうしたらいい？」

いきなりの丸投げ。

「きみたちの好きなように動けばいいじゃないか」おじさんは青少年の自主性に任せたいよ。

「いや、作戦を考えたドラコが指揮を執れ」と、ノットが言う。

少年たちも皆こちらを見ている。

それでは、と俺は口を開いた。

「だったら当日、できれば一つ前の授業が始まるよりも前に、倉庫の鍵を確保してほしい。誰か真面目な奴とデンテイトと一緒に授業の準備をしたいと申し出れば、先生も不審がらずに鍵を貸してくれるだろう。他寮に邪魔されたり意地悪で鍵を取り上げられたりしないよう、気を付けてくれ。」

鍵を貸してくれてもくれなくても、飛行授業直前の休み時間が勝負だ。三つのチームに分かれよう。一つは倉庫に急行して箒を確保するチーム。二つ目はその護衛。三つ目はみんなの荷物と杖を預かるチームだ」

「一番目は分かるけど、二番目と三番目は何？」

「二つ目は護衛というか、不測の事態に備える遊軍かな。グラウンドに行くまでの間に、他寮やピースにちょっかいを出されるかも知れない。そのせいで箒を調達するチームが足止めを食らわないように、身を挺して守るチームだ。何事もなく倉庫まで行けたら、その後は箒選びを手伝ってほしい」

「三番目は何だよ」

「倉庫に直行した子たちの荷物を、教室に放置しておけないからね。飛行の授業は持ち物不要、荷物と杖は寮に置いてくること、と掲示にはある。だから他の二チームの分もまとめて、荷物を寮に運んでくれる兵站チームが欲しい。杖という、魔法使いの相棒を預かる大事な役目だ。一番重要なチームだから、人数は十分に欲しい。ぼくも箒選びに自信がある子がいたら役目を譲って、三番目のチームに入りたい」

少年たちは顔を見合わせた。

残念ながら地味な役目にドラコを回してくれることはなかったが、チーム分けは思ったよりすんなりと決まった。

調達チームは俺、他のチームでは危険だとみなされた華奢なサッカラム、このプロジェクトの言い出しっぺのマローン。護衛チームは斬り込み隊長気質のデンテイトと、体の大きなクラブとゴイル。兵站チームはリバニーとノットの堅実な二人が中心となって、斜に構えたザビニをグレイバーが引っ張る。

「あー、なんか楽しくなってきた！」

大声を上げたのはマローンだったが、それはスリザリン一年男子の思いを代弁したものだ。

ところが週明け早々、一同の期待は打ち砕かれた。デンテイトが「飛行の授業は、男子も女子もサポーターを履くんだってさ」と衝撃の情報を持ち込んだからだ。

初めての空抜けて・2

女子のローブの下を覗き見る野望を打ち砕かれても、男子スリザリン生はそう長くは落ち込まなかった。箒に乗ること自体が楽しい年頃だ。飛行の初授業の日は、より良い箒を確保するため、予定通り一斉に教室を飛び出した。

倉庫にあった箒は本数だけは充実していたが、どれも骨董品もいいところだった。高校の体育でテニスをやった時に、備品のラケットが木製で、自前のラケットを使っているテニス部との格差に皆が不満たらたらだったのを思い出す。

なるべく軸の真っ直ぐな物、浮き方に癖のない箒を選んで、横で待っている同級生に渡していく。女子の分だけでなく男子の分も選び終えたと、取り分けておいた一番癖の強そうな箒を手には倉庫を出た。

試しにそれに跨って浮かび上がってみる。反応の鈍い動き出しからの急発進もさることながら、浮く時に右斜め前に飛び出す癖がある。柄を押さえつけられどうにかなるかな。

こんなオンボロでも、やっぱり楽しいわ。

「なんだってそんな駄目箒を使うんだ、マルフォイ」と、マローンに聞かれた。「もう少しましなのがまだ残ってるだろ」

「今更飛行を習う必要はないから、これでいいさ」万が一飛行経験のない子に、このぼろ箒が渡ってしまったら可哀相だ。

グラウンドでは、クラブとゴイルがスリザリン生全員分の箒、二十本を綺麗に並べていた。

女子たちや荷物を寮に置いてきてくれたノットたちも、続々とグラウンドに集まってきた。

「私のために選んでくれたの？　ありがとうドラコ！」

と、パンジーが嬉しそうに声を弾ませた。

「ぼくだけじゃなくて男子みんなで準備したんだ。女子たちにも飛行を楽しんでもらおうと思ってね」

「そうなんだ。ありがとうねー」

ミリセントが周りに礼を言い、クラブが親指を立てた。向こうでは並べられた箒を触ろうとしたグリフィンドール生が、「自分で取ってこい」とゴイルに威嚇さ

れていた。

生徒が集まっているとところへ、やがて飛行クラスの担当、マダム・フーチがせかせかやって来た。髪を短く刈り込んだ中年女性で、ジャージ姿でなくても体育教師らしさが滲み出ている。

「もたもたしない！ 箒の横に立ちなさい！」

フーチ教官の指示に従い、一年生は慌てて箒の横に立った。

それからどうにか全員が箒を手許に浮かび上がらせることができるようになる
と、次は箒に跨るステップへと進んだ。飛行時の基本姿勢を取らされる。

足を地に付けたままの生徒たちの間を巡り、フーチは一人ずつ姿勢をチェックしていった。俺の時には「持ち方が全然違う」と、癖のある箒を抑えるために妙な持ち方をしているのを直された。ハリーとロンが俺を指差して笑っているのが視界に入る。この前の魔法薬学の授業では俺が笑ってしまったから、おあいこだ。

全員の姿勢を確認したフーチは、改めて生徒の横に立った。

「さあ、それでは私が笛を吹いたら地面を強く蹴る。箒をしっかりと……何ですか、あなた」

手を挙げていた俺は、許しを得て発言した。

「初心者が補助無しに一人でいきなり浮くのは、危険だと思います。安全のために緩衝魔法か減衰魔法を掛けて頂くか、生徒同士で補助したほうがいいと思います」
ドラコの杖が手許にあれば勝手にそうしているとところだ。しかし飛行実習中に落下して杖を折ったり杖のせいで怪我をしたら面倒だから置いてこい、という学校側の指示も正しい。その指示に従って杖を置いてきたので、今はフーチに頼むしかなかった。

「はっ！ スリザリンは卑怯な上に臆病なんだな」

グリフィンドールのほうから野次と嘲笑が聞こえた。俺の周囲が殺気立つ。ゴイルがぼきりと指の関節を鳴らした。

フーチは鋭い目つきで俺を見据えた。

「ミスター・マルフォイ。この授業を教えているのはあなたですか」

「いいえ」

「では余計なことを言って周囲を不安がらせない。心配しなくてもそれほど飛ばない筈です。大人しく指示に従いなさい」

「イエス、ママ」俺は警告したからな。

フーチは胸に提げていたホイッスルを構えた。「それではいきますよ」

「わああ！」

笛が鳴るよりも早く、グリフィンドールの集団から叫び声が上がって一人が宙に飛び出した。

「これが本当のフライングスタート」

「何言ってるんだ、おまえ」

俺の呟きを拾って、隣のノットが呆れた。

飛び出していったネビル・ロングボトムは、電柱くらいの高さまで昇った。地上からフーチが下りてきなさいと怒鳴っているが、本人だって上がりたくて上がったわけではない。すぐに箒と別れて地球の引力を選んだ。

「あ、落ちた」

フーチはネビルに駆け寄り、手首を押さえて泣いている彼を無理矢理立たせた。「これからこの子を医務室に連れて行きます。その間も動かないこと。箒もそのまま置いておくように。さもないと、クイディッチのクの字も言えないうちにホグ

ワーツから出ていってもらいます」

偉そうに言っているが、可哀相な初心者が飛び出してから落ちるまでの間、彼女は地上で右往左往してただけだ。地面に衝撃緩和の魔法を展開する余裕くらいはあったはずなのに。魔法が苦手なら、教師の手の届く所で一人ずつスタートさせる方法もあったのに。

フーチと気の毒なネビルが去った後、生徒たちはぶらぶらとその場で時間を潰し始めた。

ふと、先ほどまでは気が付かなかった、何か光る物を草の間に見つけた。それは内側が白く曇った大きめのビー玉で、拾い上げると薄ぼんやりと赤くなった。

「これ、誰かの落とし物か」

玉を掲げてみせると、「ネビルの思い出し玉だ」という声が聞こえた。

ああ、原作で出てきたやつか。中途半端なりマインド機能で、忘れていることがあると玉が赤くなるという。要するに、全ての記憶を表層意識に乗せていられる特異体質以外の普通の人間が持てば、だいたい赤くなる。俺も普段は忘れていることが山ほどある。現に、ドラコがネビルからこの玉を取り上げようとする原作エピソード

ソードのことも、今やっと思いついた。

「そんなガラクタ、捨てとけよマルフォイ」

「うーん」

これを返すのを口実にして、授業が終わったらネビルと話でもしよう。そう思つて玉をローブのポケットに突っ込もうとした時、「返せよ」と後ろから肩を掴まれた。振り返ると、ハリーとロンが硬い顔で立っていた。

「それはネビルの持ち物だ。返せ、マルフォイ」

と、ハリーは手を差し出した。

「壊してやれ」とスリザリンから野次が飛ぶ。蛇寮と獅子寮の間に緊張が走る。

俺はハリーに「なぜきみに渡す必要がある？」と尋ねた。

更に手が突き出された。「ネビルはぼくと同室なんだ。ぼくから返す」

「この授業が終わったら本人に返すさ」

「だったらぼくも一緒に行く」

困惑。ハリーがいたら、ネビルの前で素の態度も出せない。ダンブルドアの注意も引きかねない。そんな一瞬の逡巡を悪いほうに捉えられた。

「ほら見ろ。ちゃんと返す気なんかないんだ」

と、ロンが掴みかかってきた。

咄嗟に玉を抱え込み身を捻る。クラップとゴイルが突っ込んできて、ロンと俺の間に割って入る。反対側からハリーが手を伸ばし、俺の手とぶつかって玉が放り出された。すかさずキャッチしたクラップが、何を思ったのか思いきりそれを遠くへ投げた。

「あ」

玉が放物線を描く。

「あー」

思い出し玉はグラウンド脇の、高い杉の梢に引っ掛かった。スリザリン生から意地の悪い歓声がかかる。

「あーあ」

ロンが非難がましい声を上げた。はいはい、取りに行けばいいんだろう。

木登りで行ける高さではないので、箒でそこまで飛んでいった。葉の間に腕を伸ばし、細い枝に挟まっていたガラス玉を掴み取る。さて地上に戻ろうとすると、少

し離れた宙にハリーも来ていた。

「返せよマルフォイ」

ハリーはなぜか泣きそうに表情を歪めていた。俺が虐めているような錯覚に陥るが、冷静に考えると彼には何もしていない。

「どうしてそう突っかかってくるんだ」

「だってきみ、最初は親切だったのに……分かんないよ。なんでダドリーみたいな意地悪するんだよ！」

叫ぶなりハリーはこちらに突進してきた。

「落ち着け。おいこっち来るな！」

スピードも緩めず突っ込んでくる眼鏡。危険な距離に入られる前に、思わず上空へ逃げる。それでもハリーは追いかけてくる。ガラス玉を投げつける。ハリーは燕のように急転回してそちらを追った。

意地悪しているように見えるなら、それはきみに近づかれたくないからだよ、坊や。混乱させてごめんな。

俺が地上に戻ってくると、ノットに後ろを指差された。片手に玉を掴んだハリー

が、グリフィンドール生から歓声で迎えられるところだった。とくにロンが「凄いぞ、ハリー！」と大喜びしている。級友にもみくちやにされたハリーは、すっかり晴れ晴れした顔になっていた。

ノットがぼそりと言う。「おまえは英雄の活躍に貢献したわけだ」

俺も箒を置いて応えた。「否定はしない」

間もなくマクゴナガル教授が現れて、箒に跨っていたハリーを現行犯で連れて行った。生徒たちは、フーチの警告を思い出した。

「ポッターのやつ、先生に怒られるのかな」

「だから言ったじゃない。先生の言うことを聞かないと退学になるって」

説教がましいハーマイオニーの言葉に、場の空気は一気に白けた。ハリーの好プレーに喜んだ者は、恨みがましく俺を盗み見た。ハリーより先に飛んだ一人目も叱られるべきだと思ったのだろう。原作では、マクゴナガルがハリーを連れて行ったのは、クイディッチの才能を見出したからだ。説教を受けさせるためではない。

その後の生徒たちは、大人しくお喋りをしながらフーチの戻りを待った。



授業後、俺は医務室に直行した。

背もたれのない低いスツールに、ネビルが座っているのが目に入った。

「良かった、行き違いにならなくて」

言いながら近づく。手首を固定された少年は、警戒しながら俺を見上げた。

「え、あの……何？」

「怪我はどうだい」

「あ、えっと、手首の骨が折れてた」

空いていた別のスツールに腰掛け、ネビルと向かい合う。

「痛むか」

「そりゃあね」と彼は顔を顰めた。「魔法薬で明日には治るっていうけど。きみもどこか怪我したの？」

「いや、べつに」

「用がないならさっさと帰りなさい」と、校医のおばちゃん。

「すぐ終わります。ロングボトム、思い出し玉を落とさなかったか」

ローブを探ったネビルはあっと声を上げた。「どうしよう！ あれ、お祖母ちゃ

んが送ってくれたやつなのに」と、慌てふためき腰を浮かせたので、俺が肩を押さえつける。

「落ち着け。グラウンドで拾った。その後ポッターが自分か返すと言い張って持っていたから、寮に戻ったら彼から返してもらおうといい」

「……うん。そうする」

俺がいては居心地が悪そうだったので、もう切り上げることにする。

「それではお大事に」

腰を上げると、ネビルもつられたように顔を上げた。

「待って。待ってマルフォイ。もしかしてそれを言うために来たの？」

「ああ。ポッターはおそらく個人的な大ニュースで頭がいっぱいになって、落とした物のことは忘れているだろうから。ぼくがもう少し強くマダム・フーチに緩衝魔法を頼んでいれば、きみも怪我をせずに済んだかも知れない。それが悔やまれてね」

デスクのほうで、「あの人は生徒の安全に無頓着なのよねえ」と保険医がぼやいた。

「きみのせいじゃないよ」

と、ネビルは苦笑した。

「だってマルフォイの願いを却下したのはマダム・フーチで、臆病だって笑ったのはグリフィンドールなんだから」

「それ、寮内では言わないほうがいいぞ」

俺はもう一度「お大事に」と言って、医務室を出た。



「あ」

ゴイルの飲もうとしていたコーンポタージュに、フクロウの羽毛がふんわりと落ちた。けれどゴイルは動じることなく、そのままスープと一緒に掬って飲んだ。

「くそったれ！」

「どうした、ドラコ」

突然罵り声を上げ、テーブルを殴りつけた俺に、クラブとゴイルが怯えた。

鳥は嫌いではない。けれど、朝食の時間に料理の上を飛び回る梟便は大嫌いだった。ホグワーツでは、在学生宛の荷物や手紙は、梟便で直接宛先の生徒に届けられる。それはいいとしても、なぜ配達を朝の大広間でしなければならないのか。羽毛

と糞から皿を守りながら食べる朝食が、清々しいものだ。と学校側は本気で考えているのか。

ましてドラコ宛の梟便は三日と日を空けずに届く。その分だけ俺の周囲で羽毛が飛び散り、風切り音が耳に付く機会が増えるのだった。

「何でもない」

メール室か宅配ボックスのようなものを作ってもらえないか、父上に理事会に提案してもらおう。そうしよう。鳥インフルエンザが流行する前に、鳥が乱舞する食卓からは何としてもおさらばだ。

「ドラコが苛立っているのは、あれでしょう？」

と近くの席にいたパンジーは遠くを指差した。

フクロウ四羽がかりの細長い大荷物。それがハリーの元へ届けられる様子は、グリフィンホールに遠いテーブルからでも目立って見えた。

「そもそもどうしてポッターが普通に朝ご飯を食べてるわけ。処分はどうしたの？」と、パンジーは不愉快そうに呟き、

「ダンブルドアはグリフィンホール最上だって聞くし、英雄を退学に出来なかった

んでしようよ」とダフネが鼻で笑った。

「あんな三流教師の言いつけを破ったくらいで、退学になるわけないよね」と、ミリセントも平然と言う。

ハリーとロンは、包みに付いていた手紙を読んで喜んでいる。俺の隣のゴイルと向かいのクラップは、口を動かしながらもそれをじっと見ていた。二人はロンに対して良い感情を抱いていない。列車での初対面も良くなかったし、昨日も掴み合いになりかけた。仕方ない。

「あの荷物、何だろう」

「あいつら出ていく」

クラップが報告した通り、荷物を抱えてハリーとロンが広間を出て行った。

俺は紅茶を飲み干し、「行くぞ」と席を立った。昨日ハリーがマクゴナガル教授に連れて行かれた件を、ちょっとくらい確かめてこよう。原作のドラコをなぞって行動する分には、ハリーへの接触も問題ないだろう。

階段を登ろうとしていた二人の前を、クラップが塞いだ。戸惑い、立ち止まったところを後ろからゴイルが強引に包みを奪う。流れるような連係プレーだ。ゴイル

が包みを破ろうとしたところで俺は止めた。

「こら、人の物を勝手に開けない。こちらに渡せ」

包み紙の上から触ると、送られた荷物はやはり競技用の箒だった。どうやら原作通り、主人公ハリーは特別扱いされたらしい。

「一年生は箒の持ち込みは禁止だぞ」

言いながら返すと、ハリーは俺をじっと見据えながら包みを抱え込んだ。ロンが勝ち誇った笑いを浮かべた。

「ただの箒じゃないぞ。なんたってニンバス二〇〇〇だ」

「へえ。ウィーズリーが買ってやったのか。友人に最新型箒を買い与えられるなんて、さすがウィーズリーは大富豪だな」

一瞬絶句したロンは、それでも気を取り直して口を開き掛けた。

そこへ、横からフリットウィック教授がぬっと顔を出した。「きみたち、揉め事ではないだろうね」

「先生、ポッターが箒を持ち込みました」

と、俺は一生徒の告げ口らしくフリットウィックに訴えた。

「ああなるほど。そうらしいね。マクゴナガル先生が特別措置について話してくれ
たよ。ところでその箒は何型かね」

教授が味方だと知ったハリーが、表情を緩めて答えた。「ニンバス二〇〇〇です」
「マルフォイのお陰で貰えたんです」とロンも言い添えた。

ハリーは少しだけ迷ってから、友人の言葉に口角を上げた。

どうせドラコはハリーの踏み台ですよ。やや投げやりに思いながら、フリット
ウィックに尋ねる。

「教授もこの件についてご存知のようですが、その特別措置というのに関して一番
お詳しいのは、マクゴナガル教授でしょうか」

「ああ、そう聞いているよ」と、フリットウィックは全て分かっていると云わんば
かりのウイंकをハリーに送った。小さいおっさんのウイंकなんぞ、貰っても困
るだろうに。

「分かりました。では失礼します」

俺はクラブとゴイルの腕を掴んで、その場を立ち去った。

「ドラコ、あれで終わりか」

「まさか」

学校ぐるみで英雄を優遇するというのは、他の生徒にとってもハリーにとっても教育上よろしくない。せこい手を使わせてもらおう。

初めての空抜けて・3

放課後、スリザリン五年生のマーカス・フリントと一年生有志が、連れ立ってマクゴナガル教授を訪れた。

ハリーが箒を贈られたという噂を聞いた一年生が、「ポッターだけずるい！ 自分も箒を持ち込んでクイディッチしたい！」と上級生に訴えたのが昼のこと。それでクイディッチチームのキャプテンであるフリントも、新人獲得のためにグリフィンドールが動いたことを察した。

連覇を狙うスリザリンにとっては、他寮だけが有利になる要素は見過ぎせない。有名人だからといって一人だけが特別扱いされるのは如何なものかと、グリフィン・ドール寮監の許へ乗り込んだ。

「ハリー・ポッターが競技用の箒を学校に持ち込み、教授がそれが許可されたそうですね。彼は今月入学したばかりの一年生だと思っていたのですが、ぼくの勘違いだったのでしょうか」

と、フリントは切り出した。それに対してマクゴナガルは落ち着いていた。

「あなたの認識は間違っていないですよ。ポッターは一年生です」

「では、学則が変わって一年生も私物の箒を持ち込めるようになったということですね」

「残念ながら、一般の一年生に対しては認められていません」

それを聞いた一年生男子は口々に不平を鳴らした。グリフィンドール寮監は、ひよこたちの囁きには眉一つ動かさず、鉄面皮で答えた。

「特例ですが、ポッターはグリフィンドール代表チームに、シーカーとして迎えられることになりました。試合に出るのに箒が無くては始まりませんから、チームの予備の箒を貸し出すことになりました」

「新入生を引っ張り出すほど選手層の厚いグリフィンドールに幸いあれ。すると巷で聞く特例措置というのは、一年生をクイディッチの代表として認めることを指す、という理解でよろしいですか」

「ええ」

正解だと言われても、プリントは険しい顔つきを和らげようとしなかった。

「しかしマクゴナガル教授。今朝ポッターが荷物を受け取ったところを何人も目撃

していますが、とてもチームの備品を借り受けたようには見えませんでしたよ。外部から梟便で届いた物を、そのまま自室に持ち帰っているあたり、本人も自分の所有物と思っているようですね。安くはない競技用箒を買い与えられて当然。さすが世に知れた英雄ならではの考え方だ。でも全校挙げて彼をもてなせという連絡は、スリザリンには来ていないんですよ」

マクゴナガルはフリントには答えず、後ろの一年生たちに目を向けた。

「クイディッチをやりたい子がこんなにいることは、嬉しく思いますよ。しかしあなたがたの寮は選手層が厚いという点で、グリフィンドールとは事情が異なります。自前の箒があっても、今年は活躍の機会は無いでしょう。よって特例を設ける必要はありません。先輩たちを応援してあげなさい」

「話を逸らさないで下さいよ、教授。チームを勝たせるために箒を買い与えることが許されるなら、ぼくらもOBに掛け合って同じようにしますよ」

親やOBの財力では、グリフィンドール閣よりスリザリン閣のほうが圧倒的に上だ。マクゴナガルも溜息を吐いた。

「……分かりました。ポッターが使う箒には、チームの備品であることを示すシ―

ルでも貼っておきます。チームを引退した時には返却させましょう。誤解する生徒のないように、寮内にも周知しておきます」

「魔法界の英雄を接待しているのなら、そのままでも結構ですよ」

嫌味を最後に引き上げたプリントは、廊下に出てから「まあ、こんなところかな」と肩を竦めた。一年生たちは、もっと強気に出てくれても良かったのにと、恨みがましい目を上級生に向けた。

「そんな目で見るなよ。私物の箒を一年生が持ち込むことを特例として認めるって話なら、きみたちにもチャンスはあったけど。教授は、特例なのはあくまでも一年生が代表チームに入ることだと主張しているんだ。箒はそのおまけ。チームメンバーをどうするかなんて、そのチームの自由だ」

プリントは近くにいた少年の肩を叩いた。「というわけで解散だ、解散」

教授陣が容認している時点で、無理筋だということは一年生にも分かっている。少年たちは社会の理不尽を溜息でやり過ごして、とぼとぼと寮に戻っていった。

その日の夕食の場で、ハリーとロンが大広間をずんずん横切って俺のところに来てきた。

ハリーは朝に受け取ったばかりの箒を、ずいと俺の前に突き出した。「これ」

柄の上のほうに、銅色の薄いプレートが貼られている。はつきりと寮名と備品番号が読み取れる、真新しい備品ラベルだった。さすがマクゴナガル、仕事が速い。「クールなステッカーだな」と俺は感想を述べた。

「どこがだよ。なにこの『備品名・競技用箒』って。ぼくの箒なのにおかしいじゃないか」

「いや、それをぼくに言われても」

するとハリーの横でロンも声を荒げた。「おまえのせいだ。今朝のあれで羨ましくなったんだろう。それでマクゴナガル先生に難癖付けて、ハリーの箒を取り上げようとしたんだ！」

俺は眉を上げた。

「ぼくが？ マクゴナガル先生が、一生徒に過ぎないぼくの圧力に負けたと、ご自分で仰ったのか」

「言っていないけど、おまえの父親が理事だから、それで脅されたんだ。卑怯者」
どう言い返してやろうかと考えていると、「スリザリン生はマルフォイだけじゃ

ない」と、少し遠くの席からザビニが話に入ってきた。常に斜に構え、周囲を見下した態度の少年だ。自分から雑談に加わるようなこともあまりない。驚く俺を一瞥してから、ザビニはロンたちに言った。

「プリントさんがマクゴナガル先生に確認してくれたんだ。その箒は学校の備品を貸し出したんだと、先生が自分で認めた。ポッターの私物じゃない。だいたい、その場には俺もいた。マローンもグレイバーもデントイもクラブもゴイルもだ」
「そうだそうだ。マルフォイのせいにするのは逆恨みってやつだ、ウィーズリー。一つお利口になったな」と、マローンも野次った。

そう言えば、普段は仲が悪くても、外敵に対しては一致団結するのがスリザリンだった。

ただしロンの考えもあながち間違いいではない。最初のきっかけは確かに俺だ。ハリーが箒を持ち込んだという話を、憤懣やるかたなしといった態度で同級生に吹聴して回ったから。しかし話を聞いたその場でいきり立ち、「マルフォイ行け！ マクゴナガルに直訴して俺たちにも同じ事を認めさせろ！」と言いだしたのは、スリザリンの少年たちの意思だった。俺は右から左で上級生に話を持っていた。一

人でクレームを付けに行っても、門前払いされるのが目に見えている。話を持っていった先が、抗議する理由と説得力のあるクイディッチチームのキャプテンだったとしても、それはただの偶然だ。フリントがマクゴナガルと話している間、俺はその他大勢のうちの一人に徹して、目立たないようにしていた。だからザビニたちの言っていることも正しい。

ロンは髪のように顔を赤くした。

「うるさい！ 屁理屈ばかり言うなら、こっちにだって考えがある。言ってやれ、ハリー」

「あ、うん。えーとマルフォイ、そんなにぼくが気に入らないなら決闘しろ！」

ハリーは箒の柄の先を俺に向けた。穂のほうに背に当たったレイブンクローの生徒が「あ？」と不機嫌そうに振り返ったが、グリフィンドールとスリザリンのいざこざだと分かると、すぐに知らない振りをした。

「ポッター、箒を下げる。後ろの人に当たってる」

あ、すみません、とハリーは後ろのレイブンクロー生に謝った。

「四階のトロフィー室がお勧めだぞ」とノットが余計なことを言った。「蛇寮から

も獅子寮からも等距離。誰も来ない。二十四時間オープン」

箒を抱えたハリーは頷いた。

「それじゃ、そこにしよう。時間は今夜零時。ぼくの介添人はロンだ」

淀みなく話を進めるあたり、事前にシミュレーションしてきたのだろう。原作では、ドラコがハリーに決闘を申し込んでいた。わざと夜中に寮の外に呼び出して自分だけ行かず、相手だけに校則違反をさせるために。この夢でハリーから申し込んできたのは、つまりは箒の贈り物にケチを付けられた意趣返しか。

俺は言った。「それならばくの介添人または代理人にはフィルチ氏を希望する」
「えっ」

ハリーは動揺し、ロンは彼を支えながら小声で怒鳴った。

「ふざけるなよマルフォイ。管理人にチクる気かよ。卑怯だぞ。そこは普通、いつも連れてるデブ二人のどっちかだろ」

なるほど、と俺はデブ二人を振り返った。「きみたち、どちらか引き受けてくれるか」

クラップとゴイルはコイントスで決めようとした。だが途中でコインを落とし、

二人してテーブルの下に潜り込んだ。二人がごそごそしている間も、ハリーとロンは教員席のほうを気にしている。しかしスネイプがこちらを見ながら立ち上がった瞬間に、「もういいや」と見切りを付けた。

「連れて来るのはどっちでもいいから。今夜だぞ。忘れるなよ」

「しつこいぞウィーズリー」

「さっさと帰れ、ばーか」

スリザリン生の心温まる見送りを受けて、グリフィンドールの二人は去った。クラブとゴイルがテーブルの下から這い出てきたのはその後だった。

「無い」

「十クヌートがどこか行っただ」

俺は踏んでいたクヌート銅貨を二人に返した。

「これだろう。どうせ今夜は行かないから、もう決めなくていい」

「なんだ」

「なんで」

ほっとした様子で尋ねてくる二人の他にも、周囲が注目している。

「向こうの都合で勝手に言ってきたことだ。強引なデートのお誘いは好みじゃないね」俺は同級生のほうにも声を掛けた。「そうだ。ザビニ、庇ってくれてありがとう」

「……べつにマルフォイを庇いたかったんじゃない」

黒人の少年は嫌そうにそっぽを向いた。

その夜は宣言した通り、寮の消灯時間に合わせていつも通りに寝た。お陰で翌日、廊下ですれ違った時にハリーからは恨みの籠もった目で睨まれ、ロンからは「卑怯者」と罵られた。心外だ。

それはそれとして、ハリーだけは授業以外でも飛べる時間があって羨ましい。ホグワーツの構内では、グラウンド以外の場所で箒に乗ることが禁止されている。しかしフーチの授業だけでは却ってストレスが溜まってしまいそうだ。俺だって地上から離れたい。

ふと思いついた。



そこはピッチと呼ばれるグラウンドだった。芝生がところどころ禿げて、土が剥

き出しになっている。地上のコンディションはいいとは言えないが、ピッチで使うのは中空だ。宙に聳えるゴールの先には青い空。マルフォイ邸よりも秋が早い。

「あ、まじに来てる」

その声に振り返ると、夏合宿で挨拶したこともあるクイディッチの選手だった。練習用のユニフォームに着替えていた彼は、軽装の俺を見て言った。

「これから夕食前まで、スリザリンチームの練習時間だ」

「あの、フリントさんにはお話ししているんですが――」

「聞いている。これから練習だから話しかけないでくれ」

はい、と俺は引き下がった。

ハリーが選手に抜擢されたのを引き合いにして、俺もクイディッチの練習に参加させてくれと、フリントに頼み込んだのだった。

飛行のためにピッチの隅を貸して欲しいと頼んだ最初は、その場で却下された。そこからの粘りの交渉で、条件付きながらピッチの使用を許可してもらった。

名目上はチームの一員だが代表選手には選出されず、使う箒は学校の備品のボロ箒。当然対外試合も出られない。先方は、そんな扱いにマルフォイ家の坊ちゃんが

耐えられないと思って条件を出してきたのだろう。だがこちらは、飛行時間と場所が手に入ればそれで良かった。

「何なら道具の準備も片付けも、球拾いも声出しもやりますよ」と申し出たら、焦って「そこまでしなくていい」と断られた。

それからプリントと二人でスネイプに相談に行くと、「保護者の承諾が得られたら」とあっさりしたものだ。家に鼻便を飛ばせば、「学業に支障が出ない範囲で」と、これも許してくれた。無理を言われなくて良かった。

選手がピッチに集まると、プリントは改めて挨拶した。

「新学期からキャプテンになりました、マークス・プリントです。うるさいわグラハム、最初くらい真面目にやらせろ。えーと、これまでの優勝経験に倣い、スリザリンは今年もフィジカル重視のチーム作りをします。勝つだけなら今のメンバーで不足はありませんが、来週のトライアウトでいい新人が見つかるかもしれないと思います。新人も加えた新しいチームに慣れるまで、しばらくは体作りを中心にしていきます。俺たちの代で連勝記録を途切れさせないように、慢心せず、全力で敵を叩き潰しにいきましょう」

「おうっ」

野太い吠え声のような選手たちの応え。

プリントは満足そうに頷いてから、ちょいちょいと俺を手招きした。

「もう皆合宿で顔見知りだろうけど、一応紹介します。一年生のマルフォイクン。基礎練習だけ参加します。毎年お世話になっているマルフォイ家の子だから、余計な手伝いやスキップは考えないように。スネイプ先生にも言われています」
わざわざ釘を刺さなければならぬほど、選手たちの目は冷たかった。スネイプの危惧したように、マグル生まれに気を許しているドラコ・マルフォイを警戒している。その証拠に「あんな奴とっと帰らせろ」と誰かが言うのが聞こえた。

練習は、軽いランニングから始まった。

「マルフォイクンは走り慣れてないだろうから、適当に回ればいいよ」と言われたが、俺がコースを一周する間に選手たちは三周していた。そういえば、放課後によく上級生が建物の間を走っているのを見掛ける。こいつらか。

体が温まったところで柔軟体操。おっさんはラジオ体操でさえ体の硬さに泣くが、子供の体はしなやかで感動する。

その後は、クイディッチ用のボールの一種、クアッフルを使つてのスクエアパス、ランパス。箒に跨つて宙に浮きながらではあるものの、地上一メートルでは立つているのと変わらない。

筋トレを挟んだ後にポジションごとの練習が始まり、やっと自由飛行ができると思つたところを引き戻された。そしてピッチの隅で体幹を鍛えさせられた。フリントが言うには、

「箒に乗つて全体重を支えるのは、尻と太腿を中心にした下半身。上半身と下半身を繋ぐのが体幹だ。下半身と体幹を鍛えないと上半身が巧く使えない。スリザリンがコンタクト（接触）プレーが得意なのは、基本をしつかり鍛えているからだよ」ということだった。

選手になる気のないことは伝えたはずだが、故意に無視されているような気がする。しかし体力を付けて悪いことはないのです、素直にやっておいた。

一人でプランクをやらされている間、向こうではタックルバック相手に延々とタックルをしている若者たちが見えた。そもそもクイディッチは、コンタクト有りのスポーツではなかったような気がするが、勘違いだろうか。

その後クールダウンをして練習は終わり……と思いきや、その後が地獄だった。自分の箒を両手で捧げながらの集団ランニング。掛け声を叫びながら、時に「コール老王」を歌いながら、控え銃の姿勢で全員で走る。

腕がやばい。肩がやばい。肩が、肩が、肩が、ああもう駄目。

ついて行けなくなった俺は、微笑みデブと罵倒されてもいい覚悟で脱落した。シャーリーンならぬ古箒を放り出して地面にへたり込む。

「こらマルフォイ、地面に転がるならベビーベッドへ戻れ！」

「イエッサー！」

叫びながら思った。これ、何のスポーツだっけ。

Dimension Zero Through The Virgin Sky
実生活のスケジュールが破綻寸前で、書き溜めたストックも尽きそうなのでしばらくお休みします。ストレスどろどろな脳内から無理して文章絞り出しても、アン

チだヘイトだ言われるんじゃない。

追記（2019/09/11）..

しっかり食べてぐっすり寝た後に見直してみたら、なに喚いてんだ自分。我ながらやべえ。

精神的に追い詰められた時に出た本音として、見苦しいですがこのまま晒しておきます。

言葉不足だった部分を補足しますと、自分では原作の流れ・設定をそのままなぞっているつもりでアンチ・ヘイトだという指摘が増えるにつれ、「原作エピソードで駄目なら、オリジナル路線は何を書いても更に駄目なのでは？和解の前段階としての無理解や対立さえ嫌がられるのは、自分の感性か構成に問題があるのでは？」と悩むようになりました。その状態のまま迷走しても誰も得しない、一度立ち止まろう、という見切りが「やってられない」の本意です。

作品への批評は気兼ねなくお書き下さい（具体的な欠点の指摘は特にありがたいです）。

また作者のたわ言に対して様々な意見を頂いたお陰で、なぜ本作がアンチだと言

われているのか、ようやく認識できた気がします。思い返せば、ある原作設定に対してのアンチテーゼとして書き始めた本作は、そもそも最初からアンチ作品でした。ヘイトのつもりは今もありませんが、タグは付けることにしました。

ただやはり入学後を一から構成し直したいのと、執筆時間が取れないのと、実生活のストレスで潰れそうなのとで今は碌なものが書けないため、更新はしばらく休止します。トイレに行ったとでも思って、あまり待ち構えないで下されば幸いです。スッキリしたら戻ってきます。

フォフォイのフォイ

著者 Dacla

発行日 2019 年 9 月 11 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-
<https://syosetu.org/novel/179282/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。
